

京都府遺跡調査概報

第 51 冊

1. 国道9号バイパス関係遺跡
 - (1) 小谷17号墳
 - (2) 川向北1号墳・川向北遺跡
 - (3) 八木城跡・堂山窯跡
2. 第二京阪道路関係遺跡
 - (1) 内里八丁遺跡
 - (2) 口仲谷古墳群
3. 木津地区所在遺跡
 - (1) 瀬後谷遺跡
 - (2) 西山塚古墳とその周辺地区
 - (3) 西山遺跡
4. 名神高速道路関係遺跡
 - (1) 長岡京跡左京第241・267・268次
 - (2) 長岡京跡右京第368次
 - (3) 長岡京跡右京第349・367次

1 9 9 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや10年余を経過し、さらに新しい10年に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去10年をふりかえてみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、建設省近畿地方建設局、住宅・都市整備公団、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、小谷17号墳、川向北1号墳・川向北遺跡、八木城跡、堂山窯跡、内里八丁遺跡、口仲谷古墳群、瀬後谷遺跡、西山塚古墳、西山遺跡、長岡京跡左京第241・267・268次、長岡京跡右京第368次、長岡京跡右京第349次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしらかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・園部町教育委員会・八木町教育委員会・八幡市教育委員会・田辺町教育委員会・木津町教育委員会・向日市教育委員会・大山崎町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 国道9号バイパス関係遺跡 2. 第二京阪道路関係遺跡 3. 木津地区所在遺跡
4. 名神高速道路関係遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国道9号バイパス関係遺跡				
(1)小谷17号墳	船井郡八木町本郷	平3.5.21～ 7.29	建設省近畿 地方建設局	野島 永
(2)川向北1号墳・川向北遺跡	船井郡園部町小山東町	平3.5.6～ 8.9		柴 暁彦
(3)八木城跡・堂山窯跡	船井郡八木町本郷	平4.1.8～ 平4.3.6		引原茂治
2. 第二京阪道路関係遺跡				
(1)内里八丁遺跡	八幡市内里八丁	平3.4.16～ 平4.1.10	建設省近畿 地方建設局	竹原一彦
(2)口仲谷古墳群	綴喜郡田辺町口仲谷	平4.1.13～ 2.28		
3. 木津地区所在遺跡				
(1)瀬後谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂	平3.4.9～ 10.30	住宅・都市 整備公団	石井清司
(2)西山塚古墳とその周辺遺跡	相楽郡木津町大字市坂	平3.8.1～ 平4.1.18		伊賀高弘
(3)西山遺跡	相楽郡木津町大字市坂	平3.10.1～ 12.20		小山雅人 竹井治雄
4. 名神高速道路関係遺跡				
(1)長岡京跡左京第241・267・268次	向日市上植野町脇田 京都市南区	平3.4.9～ 12.20	日本道路公 団大阪建設 局	石尾政信 鍋田 勇
(2)長岡京跡右京第368次	乙訓郡大山崎町円明寺 乙訓郡大山崎町下植野	平3.4.15～ 平4.3.6		戸原和人 竹井治雄 黒坪一樹
(3)長岡京跡右京第349・367次	乙訓郡大山崎町円明寺	平3.4.8～ 平4.2.27		岩松 保 石尾政信

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1.	国道9号バイパス関係遺跡平成3年度発掘調査概要-----	1
	(1) 小谷17号墳-----	4
	(2) 川向北1号墳・川向北遺跡-----	24
	(3) 八木城跡・堂山窯跡-----	41
2.	第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要-----	51
	(1) 内里八丁遺跡-----	54
	(2) 口仲谷古墳群-----	63
3.	木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要-----	69
	(1) 瀬後谷遺跡-----	71
	(2) 西山塚古墳とその周辺地区-----	89
	(3) 西山遺跡-----	107
4.	名神高速道路関係遺跡発掘調査概要-----	121
	(1) 長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区-----	124
	(2) 長岡京跡右京第368次 下植野工区-----	150
	(3) 長岡京跡右京第349・367次 大山崎工区-----	167

挿 図 目 次

1. 国道9号バイパス関係遺跡

第1図	調査地周辺主要遺跡分布図	2
(1) 小谷17号墳		
第2図	小谷17号墳墳丘測量図	5
第3図	土層断面図	6
第4図	横穴式石室実測図	7
第5図	横穴式石室石材の岩石種	8
第6図	閉塞石実測図	9
第7図	横穴式石室内遺物出土状況図(平面図)	10
第8図	玉類及び刀子出土状況図	11
第9図	出土遺物実測図(1)	13
第10図	出土遺物実測図(2)	14
第11図	出土遺物実測図(3)	15
第12図	出土遺物実測図(4)	17
第13図	出土遺物実測図(5)	18
第14図	馬具(轡)復原図	19
第15図	出土遺物実測図(6)	19
第16図	遺物・棺台配置図	22
(2)川向北1号墳・川向北遺跡		
第17図	調査前地形測量図	24
第18図	調査後墳丘測量図	25
第19図	列石実測図	26
第20図	土層断面図	27
第21図	横穴式石室実測図	29
第22図	石室内遺物出土状況図	30
第23図	出土遺物実測図(1)	32
第24図	出土遺物実測図(2)	33

第25図	出土遺物実測図(3)	-----	34
第26図	出土遺物実測図(4)	-----	34
第27図	出土遺物実測図(5)	-----	35
第28図	下層遺構平面図	-----	36
第29図	竪穴式住居跡実測図	-----	37
第30図	出土遺物実測図(6)	-----	38
第31図	出土遺物実測図(7)	-----	39

(3) 八木城跡・堂山窯跡

第32図	トレンチ配置図	-----	42
第33図	1 トレンチ平面図	-----	43
第34図	1 トレンチ遺構実測図	-----	44
第35図	1 トレンチ南壁土層断面図	-----	45
第36図	4 トレンチ第3層検出遺構実測図	-----	46
第37図	4 トレンチ第4層検出遺構実測図	-----	47
第38図	4 トレンチ第4層石敷遺構断面図	-----	47
第39図	出土遺物実測図	-----	48

2. 第二京阪道路関係遺跡

第40図	調査地周辺遺跡分布図	-----	53
------	------------	-------	----

(1) 内里八丁遺跡

第41図	調査区配置図	-----	54
第42図	A地区第4遺構面平面図	-----	55
第43図	A種稲株痕跡	-----	56
第44図	B地区第1遺構面平面図	-----	57
第45図	B地区S B 06実測図	-----	58
第46図	出土遺物実測図(1)	-----	60
第47図	出土遺物実測図(2)	-----	61

(2) 口仲谷古墳群

第48図	口仲谷古墳群位置図	-----	63
第49図	口仲谷古墳群測量図(調査前)	-----	64
第50図	口仲谷5号墳墳丘測量図	-----	65
第51図	5号墳埋葬主体部実測図	-----	66

3. 木津地区所在遺跡

第52図	調査地位置図(周辺遺跡位置図)-----	70
(1)瀬後谷遺跡		
第53図	調査区配置図-----	72
第54図	遺構平面図-----	74
第55図	3号窯灰原堆積状況図-----	75
第56図	3号窯窯体(燃烧部)平面及び土層断面図-----	76
第57図	出土遺物実測図(1) - 軒丸瓦 - -----	78
第58図	出土遺物実測図(2) - 軒平瓦(1) - -----	79
第59図	出土遺物実測図(3) - 軒平瓦(2) - -----	80
第60図	出土遺物実測図(4) - 須恵器(1) - -----	82
第61図	出土遺物実測図(5) - 須恵器(2) - -----	83
第62図	出土遺物実測図(6) - 須恵器(3) - -----	84
第63図	出土遺物実測図(7) - 土製塔(1) - -----	85
第64図	出土遺物実測図(8) - 土製塔(2) - -----	86
(2)西山塚古墳とその周辺地区		
第65図	西山塚古墳・西山遺跡 調査区配置図-----	90
第66図	西山塚古墳平面図(内部主体配置図)-----	91
第67図	西山古墓実測図-----	92
第68図	西山古墓 鉄釘出土状態実測図-----	93
第69図	西山古墓 木棺内冠出土状態実測図-----	95
第70図	西山古墓 鉄板出土状態実測図-----	95
第71図	西山古墓 木棺・木槨構造復原図-----	96
第72図	S H9101実測図-----	97
第73図	S H9101出土遺物実測図-----	97
第74図	S H9115実測図-----	98
第75図	S H9115出土遺物実測図-----	99
第76図	西山古墓 出土遺物実測図 - 鉄釘 - -----	101
(3)西山遺跡		
第77図	西山遺跡A地点遺構配置図-----	107
第78図	掘立柱建物跡S B01実測図-----	108
第79図	溝S X01実測図-----	109

第80図	溝 S X02実測図	109
第81図	溝 S X02 家形埴輪出土状況図	110
第82図	祭祀遺構 S X03(点線内は赤色顔料の分布範囲)	111
第83図	祭祀遺構 S X03断面実測図	112
第84図	西山遺跡出土遺物実測図(1) - 弥生土器・古式土師器	112
第85図	西山遺跡出土遺物実測図(2) - 家形埴輪	113
第86図	西山遺跡出土遺物実測図(3) - 勾玉	114
第87図	西山遺跡出土遺物実測図(4) - 管玉・白玉	115
第88図	西山遺跡出土遺物実測図(5) - 有孔円板	116
第89図	西山遺跡出土遺物実測図(6) - 奈良時代土師器	117

4. 名神高速道路関係遺跡

第90図	調査地区位置図	122
------	---------	-----

(1)長岡京跡左京第241・267・268次

第91図	向日工区 調査トレンチ配置図	124
第92図	向日工区 4BL. 第16トレンチ 遺構平面図及び東壁土層断面図	126
第93図	向日工区 4BL. 第16トレンチ 出土遺物実測図(1)	128
第94図	向日工区 4BL. 第16トレンチ 出土遺物実測図(2)	129
第95図	向日工区 4BL. 第17-1トレンチ・5BL. 第17-2トレンチ 遺構平面図	132
第96図	向日工区 4BL. 第17-1トレンチ 東・西壁土層断面図	133
第97図	向日工区 4BL. 第17-1トレンチ 出土遺物実測図	133
第98図	向日工区 11BL. 第22トレンチ 遺構平面図	134
第99図	向日工区 11BL. 第22トレンチ 二条条間大路北側溝 S D26703実測図	135
第100図	向日工区 11BL. 第22トレンチ 出土遺物実測図 土器・木簡・木器	136
第101図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 遺構平面図	137
第102図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 北部・西壁断面図	138
第103図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 井戸 S E 26706実測図	139
第104図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 掘立柱建物跡 S B 26704実測図	139
第105図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 条坊割付図	140
第106図	向日工区 12BL. 第13トレンチ S D26707・08・10・11実測図	141
第107図	向日工区 12BL. 第13トレンチ S D26708・09、S D26712～S D26715実測図	142
第108図	向日工区 12BL. 第13トレンチ 出土遺物実測図(1) 井戸 S E 26706	144

第109図	向日工区	12BL. 第13トレンチ	出土遺物実測図(2)		
			土器(長岡京期の溝)	-----	146
第110図	向日工区	12BL. 第13トレンチ	出土遺物実測図(3)	包含層	-----147
第111図	向日工区	12BL. 第13トレンチ	出土遺物実測図(4)	木製品	-----148
第112図	向日工区	12BL. 第13トレンチ	出土遺物実測図(5)	石器	-----148

(2)長岡京跡右京第368次

第113図	下植野工区	調査トレンチ配置図	-----		150
第114図	下植野工区	B地区	遺構平面図	-----	151
第115図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(1)	S K 36841	-----155
第116図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(2)	(平安時代)	-----155
第117図	下植野工区	B地区	竪穴式住居跡 S H 36835(上)		
			S H 36843実測図(下)	-----	156
第118図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(3)	S H 36835・43	-----157
第119図	下植野工区	B地区	祭祀遺構 S X 36820実測図及び出土遺物実測図(4)		--158
第120図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(5)	S X 36820(玉類)	-----159
第121図	下植野工区	B地区	祭祀遺構 S X 36822実測図及び出土遺物実測図(6)		--160
第122図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(7)	S X 36844	-----161
第123図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(8)	-----	162
第124図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(9)	S R 35707	-----162
第125図	下植野工区	B地区	出土遺物実測図(10)	S D 36848	-----163
第126図	下植野工区	C-3地区	遺構平面図	-----	164
第127図	下植野工区	D地区	遺構平面図	-----	165
第128図	下植野工区	E-2地区	遺構平面図	-----	166

(3)長岡京跡右京第349・367次

第129図	大山崎工区	調査地位置図	-----		167
第130図	大山崎工区	調査トレンチ配置図	-----		168
第131図	大山崎工区	C-2地区	遺構平面図	-----	169
第132図	大山崎工区	C-2地区	西国街道西側溝 S D 349111土層断面図	-----	170
第133図	大山崎工区	C-2地区	出土遺物実測図(1)	土器	-----171
第134図	大山崎工区	C-2地区	出土遺物実測図(2)	S E 349112井戸側	-----172
第135図	大山崎工区	C-3a地区	遺構平面図	-----	174
第136図	大山崎工区	C-3a地区	井戸跡 S E 36714実測図	-----	175

第137図	大山崎工区	C-3a地区	出土遺物実測図(1)	土器	-----	176
第138図	大山崎工区	C-3a地区	出土遺物実測図(2)	S E 36714井戸側	-----	177
第139図	大山崎工区	C-3b地区	遺構平面図		-----	178
第140図	大山崎工区	C-3b地区	南壁土層断面図		-----	179
第141図	大山崎工区	D-2地区	遺構平面図		-----	180
第142図	大山崎工区	D-2地区	北壁土層断面図		-----	181
第143図	大山崎工区	E地区	遺構平面図		-----	182

付 表 目 次

1. 国道9号バイパス関係遺跡						
付表1	平成3年度調査地一覧表	-----	1			
(1)小谷17号墳						
付表2	土器及び玉類計測表(1)	-----	20			
付表3	土器及び玉類計測表(2)	-----	20			
付表4	出土遺物一覧表	-----	21			
(2)川向北1号墳・川向北遺跡						
付表5	出土遺物法量表	-----	39			
3. 木津地区所在遺跡						
(2)西山塚古墳とその周辺地区						
付表6	主要な8・9世紀の木棺墓一覧表(注13論文をもとに加筆して作成)	-----	103			
付表7	鉄板出土遺跡一覧表	-----	105			
4. 名神高速道路関係遺跡						
付表8	調査地一覧表	-----	121			

図 版 目 次

1. 国道9号バイパス関係遺跡

(1)小谷17号墳

- 図版第1 (1)調査前墳丘(南から) (2)石室石材検出状況(南から)
- 図版第2 (1)石室石材検出状況(東から) (2)調査再開時状況(東から)
- 図版第3 (1)遺物出土状況(東から) (2)遺物出土状況(南から)
- 図版第4 (1)石室北東区遺物出土状況(南から)
(2)石室北東区玉類出土状況(南から)
- 図版第5 (1)石室南東区遺物出土状況(北から)
(2)石室南西区遺物出土状況(北から)
- 図版第6 (1)石室北東区馬具出土状況(南から) (2)墳丘全景(南から)
- 図版第7 (1)墳丘断割状況(東から) (2)閉塞石検出状況(南から)
- 図版第8 (1)玄室前壁(南から) (2)玄室奥壁(北から) 石室石積み状況
(3)玄室東壁(西から) (4)羨道から玄室をのぞむ
- 図版第9 (1)墳丘西側南壁盛り土状況 (2)墳丘東側南壁盛り土状況
- 図版第10 (1)墳丘北側東壁盛り土状況 (2)墳丘南側西壁盛り土状況
- 図版第11 出土遺物(1)
- 図版第12 出土遺物(2)
- 図版第13 出土遺物(3)
- 図版第14 出土遺物(4)
- 図版第15 出土遺物(5)
- 図版第16 出土遺物(6)
- 図版第17 出土遺物(7)

(2)川向北1号墳・川向北遺跡

- 図版第18 (1)墳丘全景(西から) (2)墳丘全景(南から)
- 図版第19 (1)袖部遺物出土状況(北から) (2)袖部遺物出土状況(北西から)
- 図版第20 (1)下層遺構検出状況(南西から) (2)竪穴式住居跡S H01(北から)
- 図版第21 川向北1号墳 出土遺物(1)

- 図版第22 川向北1号墳 出土遺物(2)
 図版第23 川向北1号墳 出土遺物(3)
 図版第24 川向北1号墳 出土遺物(4)
 図版第25 (1)川向北1号墳・川向北遺跡 出土鉄製品 (2)川向北遺跡 出土石製品
 図版第26 (1)川向北遺跡 出土遺物(土器) (2)川向北遺跡 出土遺物(石器)

(3)八木城跡・堂山窯跡

- 図版第27 (1)1トレンチ近景(北西から) (2)4トレンチ溝1(北東から)
 図版第28 (1)第4層遺構全景(北から) (2)10トレンチ近景(北東から)

2. 第二京阪道路関係遺跡

(1)内里八丁遺跡

- 図版第29 (1)A地区第3遺構面(南から) (2)A地区第4遺構面(東南から)
 図版第30 (1)A地区第4遺構面(西北から) (2)西南部下層水田跡(東から)
 図版第31 (1)上層水田面に残る稲株痕跡 (2)稲株移植列
 図版第32 (1)上層水田稲株痕跡 (2)同稲株痕跡断面
 図版第33 (1)稲株痕跡 (2)A種稲株痕跡断面
 図版第34 (1)足跡 (2)遺物出土状況
 図版第35 (1)B地区第1遺構面(南から) (2)S B01(南から)

(2)口仲谷古墳群

- 図版第36 (1)口仲谷古墳群遠景(西から) (2)調査前風景(東から)
 図版第37 (1)5号墳全景(北から) (2)5号墳埋葬主体部(南から)
 図版第38 (1)5号墳陸橋部(東から) (2)7号墳全景(西から)

3. 木津地区所在遺跡

(1)瀬後谷遺跡

- 図版第39 (1)調査地遠景(北から) (2)調査地全景(北東から)
 図版第40 (1)3号窯窯体内堆積状態(南から) (2)3号窯完掘状態(北から)
 図版第41 (1)3号窯窯体内遺物出土状態(南から)
 (2)3号窯前庭部遺物出土状態(南から)
 図版第42 (1)4・5号窯灰原 遺物出土状態(南から)
 (2)4号窯灰原 土製塔出土状態(南から)
 図版第43 (1)2号窯灰原 遺物出土状態(北から)
 (2)2号窯灰原 遺物出土状態(南から)
 図版第44 出土遺物(1)

図版第45 出土遺物(2)

図版第46 出土遺物(3)

図版第47 出土遺物(4)

(2)西山塚古墳とその周辺地区

図版第48 (1)調査地遠景(航空写真 北西から)

(2)調査地全景(航空写真 北から)

図版第49 (1)西山古墳 木槨検出状態(北から)

(2)西山古墳 木棺内埋土除去状態(北から)

図版第50 (1)西山古墳 木槨掘削状態(縦棧掘削前 北から)

(2)西山古墳 木槨完掘状態(北から)

図版第51 (1)西山古墳 木槨縦棧(南短側)検出状態(北から)

(2)西山古墳 棺・槨の復原状態(左下は鉄板埋納土坑 北から)

図版第52 (1)S X 9124 鉄板出土状態(北西から)

(2)S X 9124 鉄板出土状態(西から)

図版第53 (1)S B 9101検出状態(西から) (2)S B 9115全景(北から)

図版第54 (1)西山古墳 冠出土状態(東から) (2)西山古墳 出土鉄釘

図版第55 (1)西山古墳 出土冠断片(裏面) (2)西山古墳 出土冠断片(表面)

図版第56 (1)西山古墳 出土時の上側の鉄板(接合面)

(2)西山古墳 出土時の下側の鉄板(接合面)

(3)西山古墳 出土時の上側の鉄板のX線写真

(4)西山古墳 出土時の下側の鉄板のX線写真

(3)西山遺跡

図版第57 (1)調査前全景(南から) (2)トレンチ全景(南から)

図版第58 (1)掘立柱建物跡S B 01(東から) (2)溝S X 01(北から)

図版第59 (1)溝S X 02(南から) (2)S X 02溝内、家形埴輪(北から)

図版第60 (1)祭祀遺構S X 03玉類(北から) (2)祭祀遺構S X 03完掘状況(東から)

4. 名神高速道路関係遺跡

(1)長岡京跡左京第241・267・268次

図版第61 (1)4BL. 第16tr. S D 26803・26804(北東から)

(2)4BL. 第16tr. S D 26801・26803土層断面図(北西から)

図版第62 (1)4BL. 第16tr. S D 26801(北西から)

(2)4BL. 第16tr. S D 26802(西から)

- (3)4BL. 第16tr. S D26804(西から)
 (4)4BL. 第16tr. S D26805(南から)
- 図版第63 4BL. 第16tr. 出土遺物
- 図版第64 (1)4BL. 第17-1tr. 上層全景・中世素掘り溝群(北方から)
 (2)4BL. 第17-1tr. 中層土坑 S K26701(南方から)
 (3)4BL. 第17-1tr. 下層全景・旧流路跡(北方から)
 (4)4BL. 第17-1tr. 下層・旧流路跡東壁断面
- 図版第65 (1)5BL. 第17-2tr. 上層全景・中世素掘り溝群(南方から)
 (2)5BL. 第17-2tr. 上層全景・中世素掘り溝群(北方から)
 (3)5BL. 第17-2tr. 中層及び断割(南方から)
 (4)5BL. 第17-2tr. 北側断割東壁断面
- 図版第66 (1)11BL. 第22tr. 上層全景・中世素掘り溝群(南西から)
 (2)11BL. 第22tr. 中世素掘り溝群及び断割(北東から)
 (3)11BL. 第22tr. 二条条間大路北側溝 S D26703(南から)
 (4)11BL. 第22tr. 二条条間大路北側溝 S D26703(東から)
- 図版第67 (1)12BL. 第13tr. 上層中世素掘り溝群(北東から)
 (2)12BL. 第13tr. 上層中世素掘り溝群(東から)
 (3)12BL. 第13tr. 井戸 S E26706(南から)
 (4)12BL. 第13tr. 北端湿地状堆積の倒木(北東から)
- 図版第68 (1)12BL. 第13tr. 掘立柱建物跡 S B26704
 (2)12BL. 第13tr. 溝 S D26705・井戸跡 S E26706
- 図版第69 (1)12BL. 第13tr. 溝 S D26707 (2)12BL. 第13tr. 溝 S D26710・11
- 図版第70 (1)12BL. 第13tr. 溝 S D26708・12・13
 (2)12BL. 第13tr. 溝 S D26712・13・14・15
- 図版第71 (1)12BL. 第13tr. 溝 S D26709・柵列跡 S A26716・溝 S D26717
 (2)12BL. 第13tr. 柵列跡 S A26716・溝 S D26717・18・19
- 図版第72 11BL. 第22tr. ・12BL. 第13tr. 出土遺物(1)
- 図版第73 12BL. 第13tr. 出土遺物(2)
- (2)長岡京跡右京第368次
- 図版第74 (1)下植野工区全景(西から) (2)B地区中層遺構全景(南西から)
- 図版第75 (1)B地区 上層検出建物跡群(北から)
 (2)B地区 下層検出建物跡群(南から)

- 図版第76 (1) B地区 S X 36820遺物出土状況(北から)
 (2) B地区 S X 36822遺物出土状況(南東から)
- 図版第77 (1) B地区 S H 36835全景(南から)
 (2) B地区 S X 36844土器出土状況(南から)
- 図版第78 B地区出土遺物(1) S X 36820内出土
- 図版第79 B地区出土遺物(2) S X 36822内出土
- 図版第80 B地区出土遺物(3)
- 図版第81 (1) C-1地区全景(南西から) (2) C-3地区全景(南西から)
- 図版第82 (1) D地区全景(北東から) (2) E地区全景(北東から)
- (3)長岡京跡右京第349・367次
- 図版第83 (1) C-2地区全景(東から) (2) C-2地区全景(西から)
- 図版第84 (1) C-2地区 S D 349111(西国街道西側溝)全景(南から)
 (2) C-2地区 S D 349111(西国街道西側溝)内杭列検出状況(北東から)
- 図版第85 (1) C-2地区 S E 349112検出状況(北から)
 (2) C-2地区 S E 349112全景(東から)
- 図版第86 (1) C-3a地区全景(東から) (2) C-3a地区 S E 36714全景(西から)
- 図版第87 (1) C-3a地区 S H 36717・S D 36715検出状況(北西から)
 (2) C-3a地区 S H 36717内カマド検出状況(南東から)
- 図版第88 C-2、C-3a地区出土遺物
- 図版第89 (1) C-3b地区全景(東から) (2) D-2地区全景(南から)
- 図版第90 (1) E地区全景(北東から) (2) E地区 S E 36741全景(西から)

1. 国道9号バイパス関係遺跡 平成3年度発掘調査概要

はじめに

本調査概要は、国道9号バイパス(京都縦貫道)建設に伴い、平成3年度に実施した発掘調査に関するものである。発掘調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続的に実施しているもので、調査に係る経費は、全額建設省の負担によるものである。調査の対象となる遺跡のリストアップと取り扱いについては、京都府教育委員会、建設省、当センターの三者の間で協議を重ね、平成3年度当初の段階で確定の上、建設省と当センターとの間で委託契約を締結した。その後、平成3年度内において若干の変更を行い、最終的には以下の調査業務を行った。すなわち、八木町本郷所在の小谷17号墳、園部町小山東所在の川向北1号墳の古墳2基の全面発掘と、八木町本郷所在の八木城跡・堂山窯跡の2遺跡の試掘調査、ならびに亀岡市千代川町所在の千代川遺跡の整理・正報告書刊行業務と八木町八木嶋所在の八木嶋遺跡の整理業務を実施した。なお、川向北1号墳の下層から、弥生時代後期の集落遺跡－川向北遺跡－を新規に発見し、調査した。

発掘調査は、当センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員鶴島三壽・柴暁彦・野島 永が担当して実施した。調査を実施するにあたり、建設省、京都府教育委員会、八木町教育委員会、八木町建設課、園部町教育委員会、園部町総務課の各機関及び地元関係各位などから多大なご協力があった^(注1)。記して感謝したい。なお、本概要の作成にあたっては、各遺跡の調査担当者が執筆し、文末に記名した。

(奥村清一郎)

付表1 平成3年度調査地一覧表

遺跡名	調査期間	調査面積
小谷17号墳	平成3年5月21日～平成3年7月29日	130m ²
川向北1号墳・川向北遺跡	平成3年5月6日～平成3年8月9日	350m ²
八木城跡・堂山窯跡	平成4年1月8日～平成4年3月6日	720m ²



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|-----------------|------------|---------------|
| 1. 小谷17号墳 | 2. 川向北1号墳・川向北遺跡 | 3. 八木城跡調査地 | 4. 堂山窯跡 |
| 5. 黒田古墳 | 6. 園部垣内古墳 | 7. 中畷古墳 | 8. 小桜古墳群・園部城跡 |
| 9. 天神山古墳群 | 10. 温井古墳群 | 11. 八木嶋遺跡 | 12. 坊田古墳群 |
| | | 13. 拝田16号墳 | 14. 八木城跡 |

位置と環境

丹波山地の東側を水源とする大堰川は、園部町・八木町・亀岡市などを経て、京都盆地に入り、桂川―淀川となり大阪湾へと流れる。この大堰川の中流域には小盆地が開けている。園部盆地・亀岡盆地と通称される。この両盆地周辺は、口丹波・南丹波とも称される。

今回調査を行った遺跡のうち、船井郡園部町小山東町に所在する川向北1号墳は、園部川の東側に張り出した小尾根上に位置する。横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳である。園部町内の古墳時代頃の遺跡としては、まず黒田古墳があげられる。前方後円形の墳墓で、墳丘から庄内式土器が出土しており、これを墳丘墓とするか古墳とするか、議論の分かれるところである。前期古墳としては、前方後円墳の園部垣内古墳、前方後方墳の中畷古墳がある。中期古墳としては、園部城本丸跡(現、京都府立園部高校)から周溝の一部が検出された小桜1・2号墳がある。方墳と考えられる。古墳時代後期には、小規模な群集墳が各所に形成される。木棺直葬の温井古墳群や横穴式石室をもつ園部天神山古墳群などが調査されている。なお、園部天神山古墳群は、川向北1号墳とは園部川をへだてた西岸に対置している。

船井郡八木町本郷に所在する小谷17号墳は、八木町南端部の亀岡市との境となる丘陵の北側谷部に位置している。この丘陵には、多くの古墳がある。丘陵北側の八木町側には、この古墳を含む小谷古墳群や内山古墳群、南側の亀岡市側には、南丹波地域では最古式と考えられる横穴式石室を内部主体とする前方後円墳の拝田16号墳を含む拝田古墳群などがある。八木町内では、古墳の調査例が少なく、その様相は不明と言ってよい状態である。前期古墳については全く不明である。中期古墳としては、神吉地区に所在する方墳の塚本古墳があげられる。後期古墳では、坊田古墳群の一部が調査されている。この坊田古墳群では、方墳で横穴式石室を内部主体とする1号墳の存在が目される。なお、小谷17号墳は、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳であるが、その石室形態は、上記園部天神山古墳群の1・2号墳と類似する。拝田16号墳の石室とは形態が異なるが、これらも、南丹地域では古式に属する横穴式石室と考えられる。

八木城跡は、船井郡八木町本郷の集落の西側に位置する城山一帯を範囲とする城跡である。室町時代の丹波守護代である内藤氏の居城として知られている。調査地点は、城山の東麓部の、大手口と考えられているところの周辺地である。広狭さまざまなテラス状の地形がところどころに見られ、八木城最先端の防御施設や、家臣等の居住地などの存在が考えられる場所である。また、福井県の一乗谷朝倉氏遺跡を参照すれば、城主の館跡が存在する可能性も充分考えられる地点である。なお、堂山窯跡は、今回の調査地の北西端部に想定されている。

(引原茂治)

(1) 小谷17号墳

1. 調査の経過

小谷17号墳は、平成元年度の調査によって横穴式石室をもつ小規模な古墳であることが判明しており、石室の天井石の抜き取りなどで墳丘の削平が著しいものの、^(注2) 玄室内の遺物の遺存状況は良好なものであった。

前回の調査によって設定された任意の墳丘断割ラインを修正し、調査再開時の石室内埋土上面で玄室前壁と奥壁の中心点を結んだ石室主軸のラインと石室内主軸の中心から直角方向に東西のラインを設定した。主軸ラインを南北方向とみなし、四分割した玄室内の各区をそれぞれ南西区・南東区、北西区、北東区として、玄室内の遺物検出に努めた。また、墳丘部分については主軸ラインとそれに直交する東西ライン、及び羨道部中心軸を墳丘に伸ばしたラインで断割を行い、墳丘築造過程の追究を行った。墳丘東側では地山を削りだして整形していたため墓壙内裏込め土の除去を行い、同時に壁体の石材の積み上げの状況を観察した。

なお、石室石材及び玉類の材質鑑定には京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に御指導いただいた。また、鉄製品のX線写真撮影には(財)向日市埋蔵文化財センター長の山中章氏に御協力いただいた。記して感謝したい。

2. 墳丘

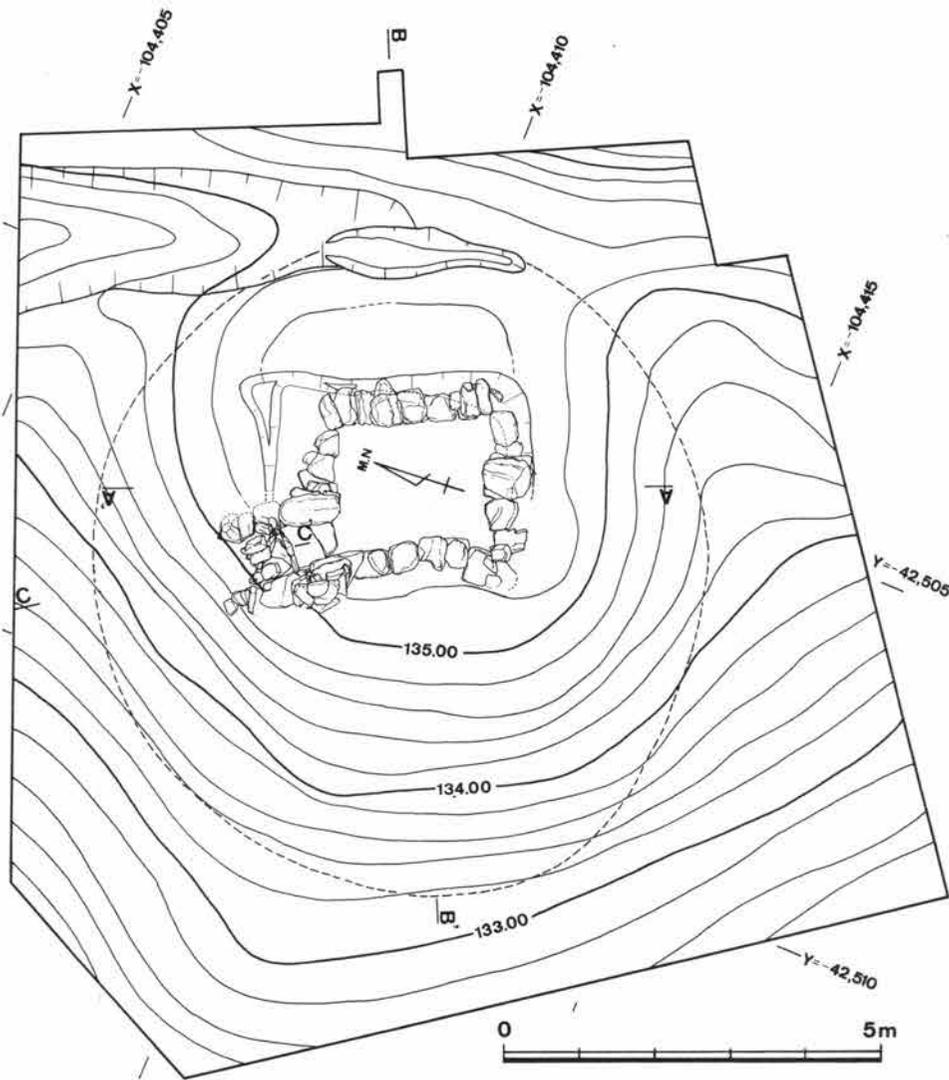
小谷17号墳の墳丘は丘陵端の斜面に造られており、墳丘を区画する溝が墳丘東側、墳端部分に長さ2.50m・幅50cmほど検出された。溝の北半分は現代の林道のために削り込まれている。この溝以外には墳丘と自然の地形を画する溝及び列石等は検出されず、墳丘裾と考えられる明瞭な傾斜変換点を見いだすことは困難であった。このため、墳丘盛り土の堆積状況からすれば、直径約9mほどの円墳と考えられる。

墳丘は、はじめにほぼ16°の勾配をもつ斜面の尾根側(東側)の地山を断面「L」字状に削り出し、谷側(西側)には第1次盛り土を石室内床面とほぼ同じ標高134.4mの高さまで盛る。石室の構築とともに東側半分では石室の壁体を支えるようにして裏込め土を充填させ、西側半分では墳丘をほぼ水平に盛る築造過程が考えられる。墳丘の大部分は褐色の砂質土層であるが、一部の土層には青灰色の固い地山土を利用しており、墓壙築造工程での築造単位がある程度推定できる。つまり、床面までの土盛り作業、青灰色地山土を利用したの

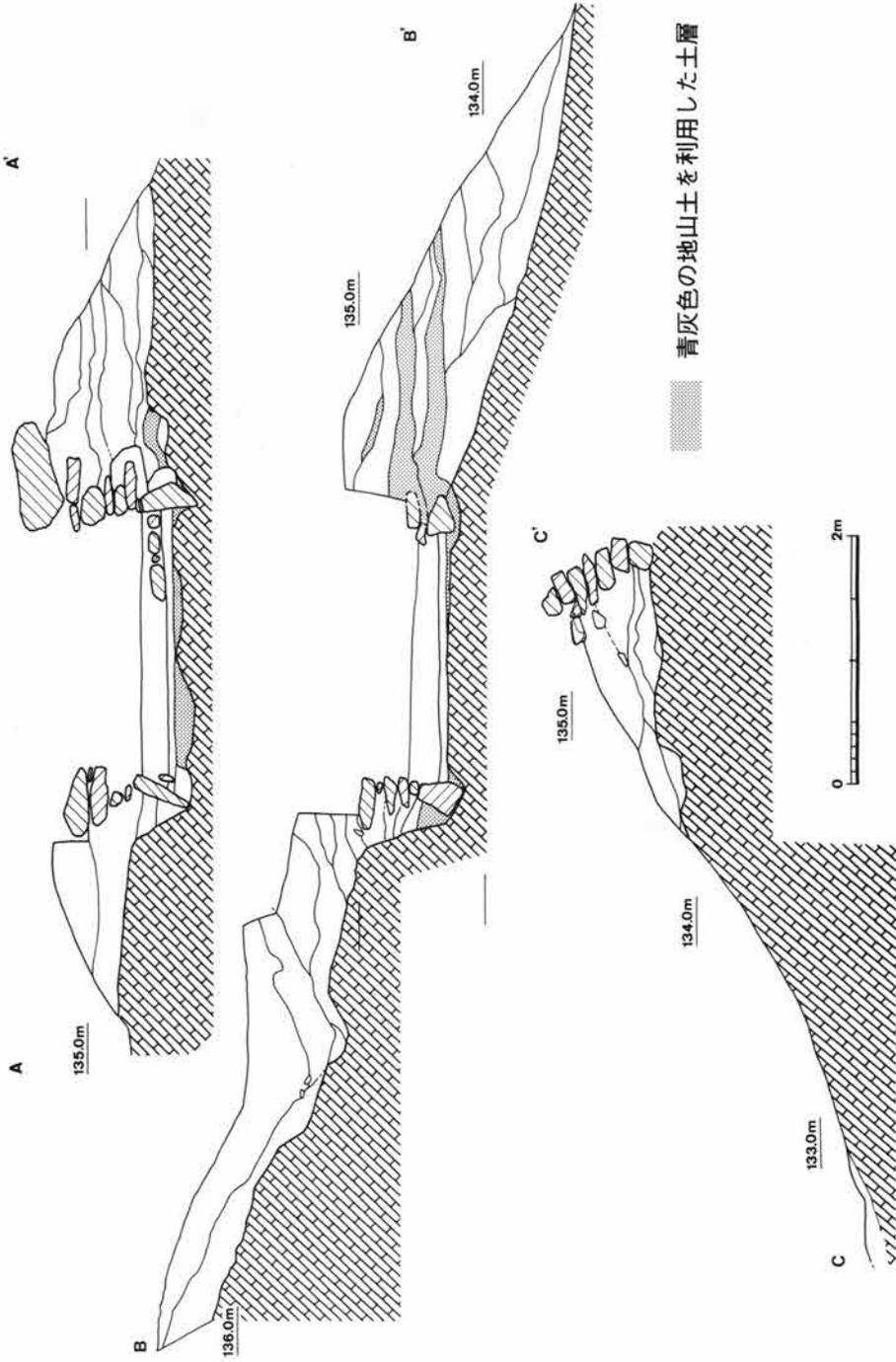
平坦な土盛り作業、石室上半部を覆う褐色砂質系の盛り土とに分けられる(第3図)。また急な勾配の斜面に立地しているため墳丘中心よりやや東側に石室がよる(第2図)。

3. 石室

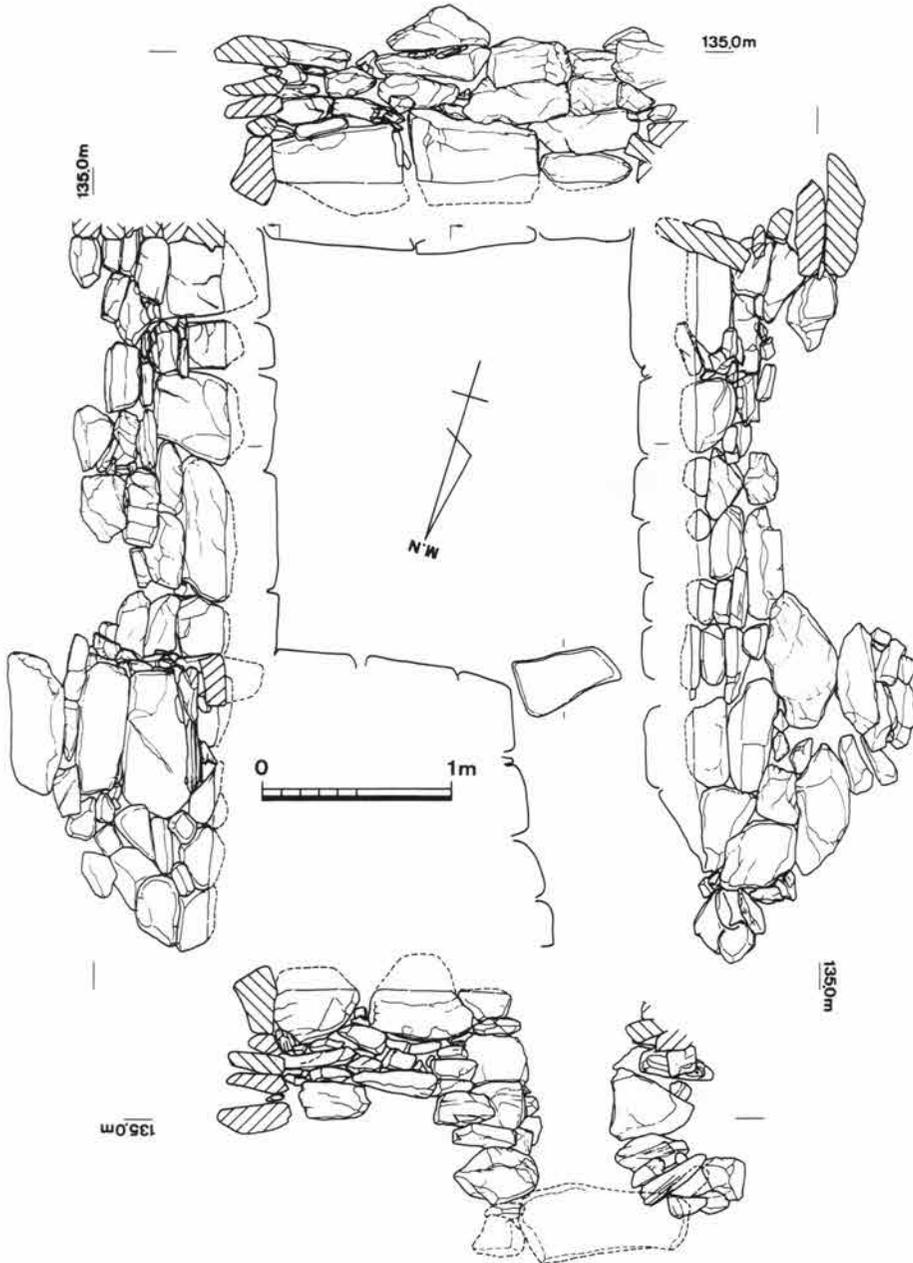
北北西に開口する右片袖式横穴式石室を内部主体としている。玄室は南北の長さ約2.1mを測る。石室の石材が後世に転用されたため、石室上半部では原位置を保つものがない。天井石は、わずかにまぐさ石が玄門部分に遺存していた。石室下半部分は、一部の石材にクラックの入るものがあるが、遺存状況のよいものであった。玄室は長さ約2.1m・幅1.9m、



第2図 小谷17号墳墳丘測量図



第3図 土層断面図

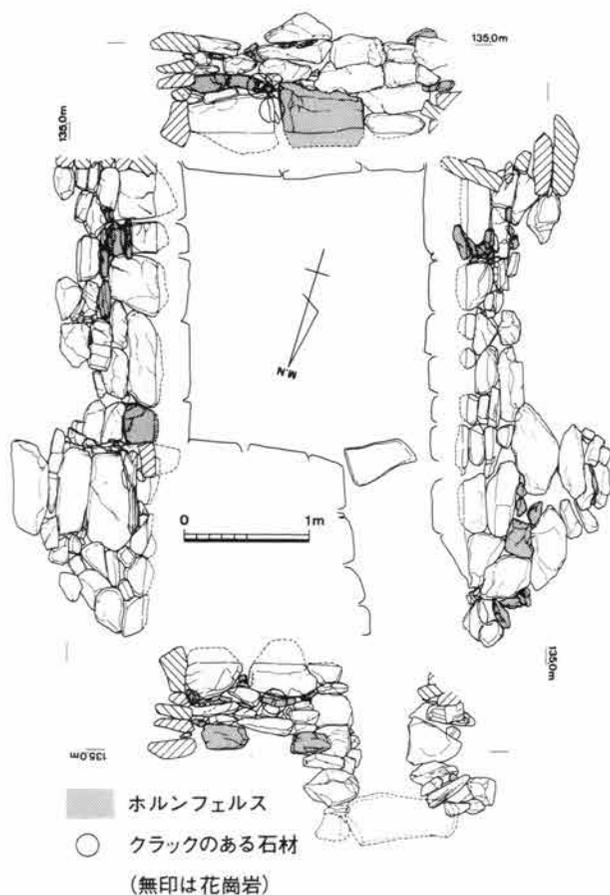


第4図 横穴式石室実測図

玄室比(玄室長/玄室幅)は約1.1で、床面平面形態は正方形に近いプランをもつ。羨道部分は、玄室主軸よりやや西に振れて付設される。玄室前壁の壁体部分は、地山を削り込んだ掘形内に基底石を都合3列立て並べ、石室最下段を構成する。二段目からは順次平らな板石材を持ち送り気味に小口積みする。その際、目地が通る部分があり、石積み2段目にはホルンフェルスの板石を使用している。石室東壁は石材平坦面を立てて、5列に並べており(横面積み)、2段目からやや厚めの板石状の石材を小口積みしている。遺存した壁体から復原される壁体下半部の積み方は東側部分を初めに、順次奥壁部分、前壁を構築していく、最後に西側壁体部分を西側墳丘盛り土作業を併行させながら構築している。また、玄門には他の壁体よりも大きめの石材を使用している(第4図)。

石材はほとんど花崗岩が使用されているが、閉塞石の大部分と石室内の一部にはホルンフェルスが使用されている。ホルンフェルスは加工が花崗岩より容易であるため、一部では壁体2段目の目地の通る部分に板石を使用し、壁体の小さな空隙部分を充填するように

積み込まれている(第5・6図)。また、奥壁と前壁の二段目中央に積み込まれたホルンフェルス板石は上段の石材の重量によりクラックが生じていた。石室天井部を含む上部構造は、過去の石材採取のため除去されており、調査時点ではその上部形態を把握する材料がない。前回の調査によると、当初、天井石の抜き取られた状況は小形の竪穴系の石室のように見られたことからすれば、やや穹窿状に持ち送りを有していたと思われるが断定はできない。



第5図 横穴式石室石材の岩石種

北西区及び南西区の床

面では棺台と推定されるホルンフェルス及び一部花崗岩石材が配置されており(第7図中央図)、石室西側に南北方向の石室主軸に沿って木棺を設置したものと考えられる。一方、玄室東側では棺台と考えられる花崗岩石材は北東区に集積された状態で検出されており、西側のものの前段階の棺台と考えられる。

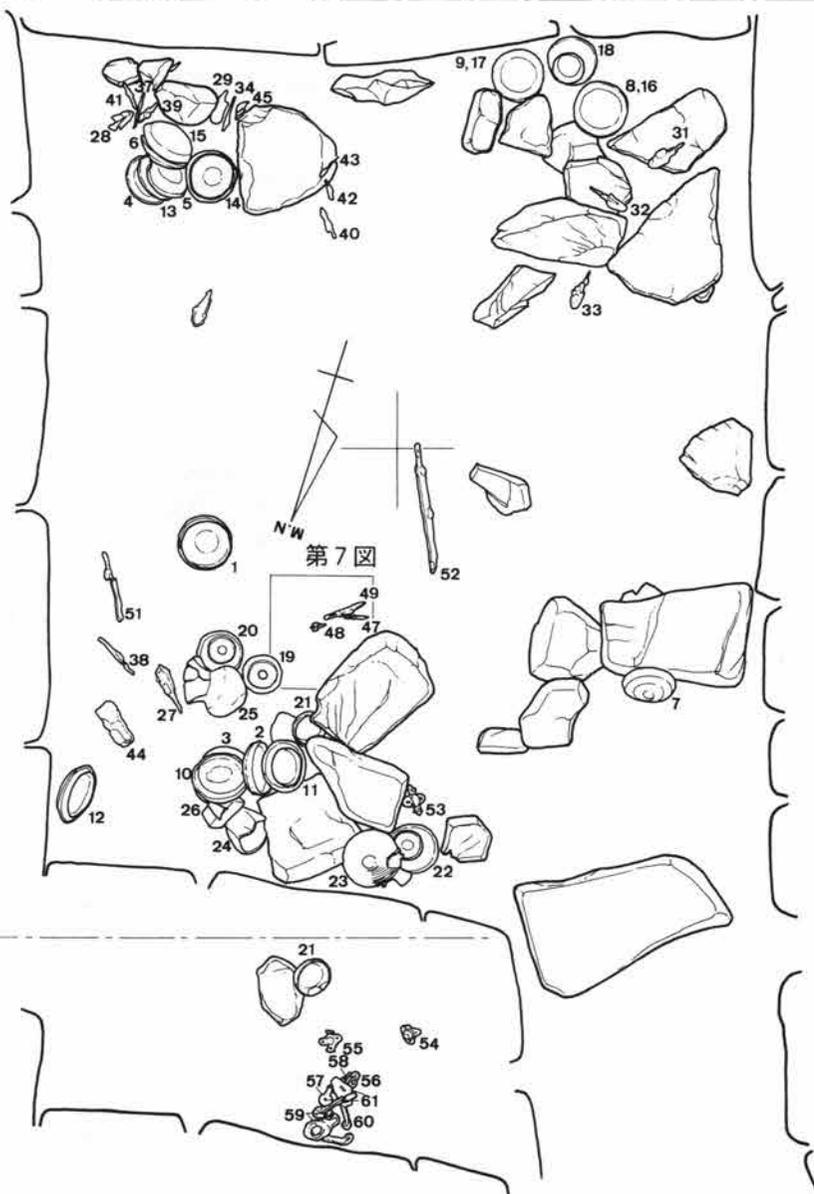
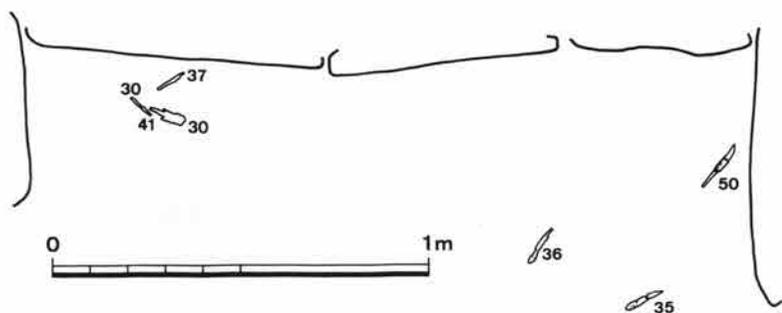
羨道部は石室主軸に対して約10度ほど西側に振っている。梱石は羨道部がやや西側に振れているのに対応してやや斜めに配置されている。なお、梱石の底面は初葬時床面(第1次床面)にはほぼ対応するレベルにある。

閉塞石は、梱石から約40cm北側に離れており、基底石底面から1.1mほどまで残存していた。前回の調査によって確認されたまぐさ石(第4図点線部分)の高さからすれば、閉塞石はその大部分が残存していたと推定される。石材は、基底部分に2石を置き、一段ずつ羨道部側に向かって斜め方向に小口積みに積みあげて、石室側の壁面をそろえることをある程度意識していると思われる(第6図)。前述したように、

石室石材には花崗岩を主体として使用しているのに対して、閉塞石の大部分はホルンフェルスが使用されている。基底石の東側もホルンフェルスであることから、途中から積み直されたのではなく、最終の埋葬時点で基底部分から再構築されたとみる方が妥当であり、意識的に石室構築時とは異なる石材を使用して閉塞したものと考えられる。なお、羨道部床面は玄室内にむけてやや低くスロープを形成していたものと考えられる。玄室初葬時床面よりも羨道部床面の方がわずかに高くなっている。



第6図 閉塞石実測図



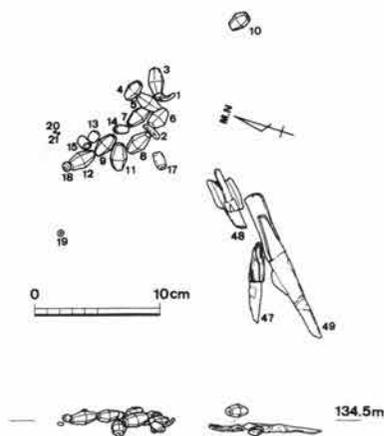
第7図 横穴式石室内遺物出土状況図(平面図)
(下に分割した図は初葬時床面の遺物出土状況図)

4. 遺物出土状況

石室内部は、先述したように、天井部分が後世の石材の抜き取りにより攪乱されていたが、石室内の埋土は肌目の細かい褐色砂質土の単一層であった。したがって、最終埋葬時の床面には攪乱が及んでいないものと判断できた。玄室主軸とそれに直交する東西ラインによって4分割の地区割りを行い、十字にあぜを残しつつ床面副葬品の検出に努めた。その際、断面観察では木棺などの痕跡は検出できなかった。

玄室床面からは、棺台と考えられる石材のほか土器(須恵器・土師器)・鉄器(武器・農具・馬具)・装身具などの副葬品の出土をみた。これらの遺物のほとんどは、追葬時床面(第2次床面)から出土しており(第7図中央図)、一部南西区・南東区の棺台の下から鉄鏃や刀子などの鉄器が出土している(第7図上)。また、玄室右袖部前壁寄りで、初葬時床面から馬具が一塊になって出土している(第7図下)。

追葬時床面の北西区では、棺台石材の集積部分に遺物も集積されており、その周辺にも玉類(第8図)や鉄鏃・鉄斧・刀子などが散在して検出された。玉類の検出時のレベル差はほとんどないため、装身されていたかどうかは別にしても、副葬時の原位置から移動されたものとは考えられない。しかし、須恵器杯身・杯蓋は検出時のレベル差が著しく、床面よりも若干浮いた状態のものもあり(第7図1・2・10・11・12など)、木棺などの有機質や棺台石材などとともに集積されたものと想定される。南西区では、棺台と考えられる人頭大の花崗岩の東側の床面に接して須恵器杯蓋3点と杯身2点が重ねられており(第7図4・5・6・13・15)、その西側に杯身(14)が添えられていた。出土状況は杯蓋(4)、杯身(反転状態(13))、杯蓋(5)、杯蓋(反転状態(6))、杯身(反転状態(15))の順で重なっている。このため身と蓋を意識して配置したとは考えられず、初葬時以降に集積された可能性が高く、同時期に副葬されたものとみてさしつかえない。また、棺台の東側に連なる花崗岩の小礫の間から鉄鏃や鉄鏃等が散乱して検出された。南西区では杯身・杯蓋がセットになったもの2点(第7図8・16・9・17)と短頸の直口壺(第7図18)が追葬時床面に接して検出され、棺台上面からは3点のほぼ同大の鉄鏃(第7図31・32・33)が検出された。北東区では、棺台部分の北側で杯蓋1点(第7図7)と玄室中央部分に北西区の遺物群に伴うと考えられる鉄刀が、追葬時床面からやや浮いた状態で切先を北側にむけて検出された。



第8図 玉類及び刀子出土状況図

5. 出土遺物

出土遺物は、大別して土器(須恵器・土師器)、鉄器(武器・農工具・馬具)、装身具(玉類)がある。須恵器は蓋杯、直口壺、有蓋高杯、提瓶があり、ほとんどが完形品で25個体出土している。土師器には小形の把手付碗と長頸壺が1点ずつ出土している。武器には鉄鏃と鉄刀があり、鉄鏃は18本、鉄刀は一振り出土している。農工具には鉄斧1点、鉄鎌1点、刀子6点があり、馬具は面繫の部分(辻金具・鉸具・轡)が出土している。装身具は玉類のみであるが、勾玉・切子玉・棗玉・丸玉・小玉などの種類がある。

a. 土器

須恵器(第9図1~22、第10図23)

杯蓋 口縁部径及び口縁部と天井部の境の形状、ヘラ削りの範囲などを基準として次の3類に分類できる。Ⅰ類(1~3)は口縁部径が14cm以上で、器高が4cmを超える。天井部がやや平坦であり、天井部と口縁部の境が明瞭で突出する稜を持つ。ヘラ削りの範囲が天井部の3分の2以上を占める。Ⅱ類(4~8)は天井部がやや丸くなり、天井部と口縁部の境にわずかな屈曲を持つもので屈曲部に稜の入るもの(4~6)と口縁端部に段を持ち、天井部のヘラ削りの範囲が狭くなるもの(7・8)に細分できる。Ⅲ類(9)は天井部が丸くなり、天井部と口縁部の境の稜がなくなる。

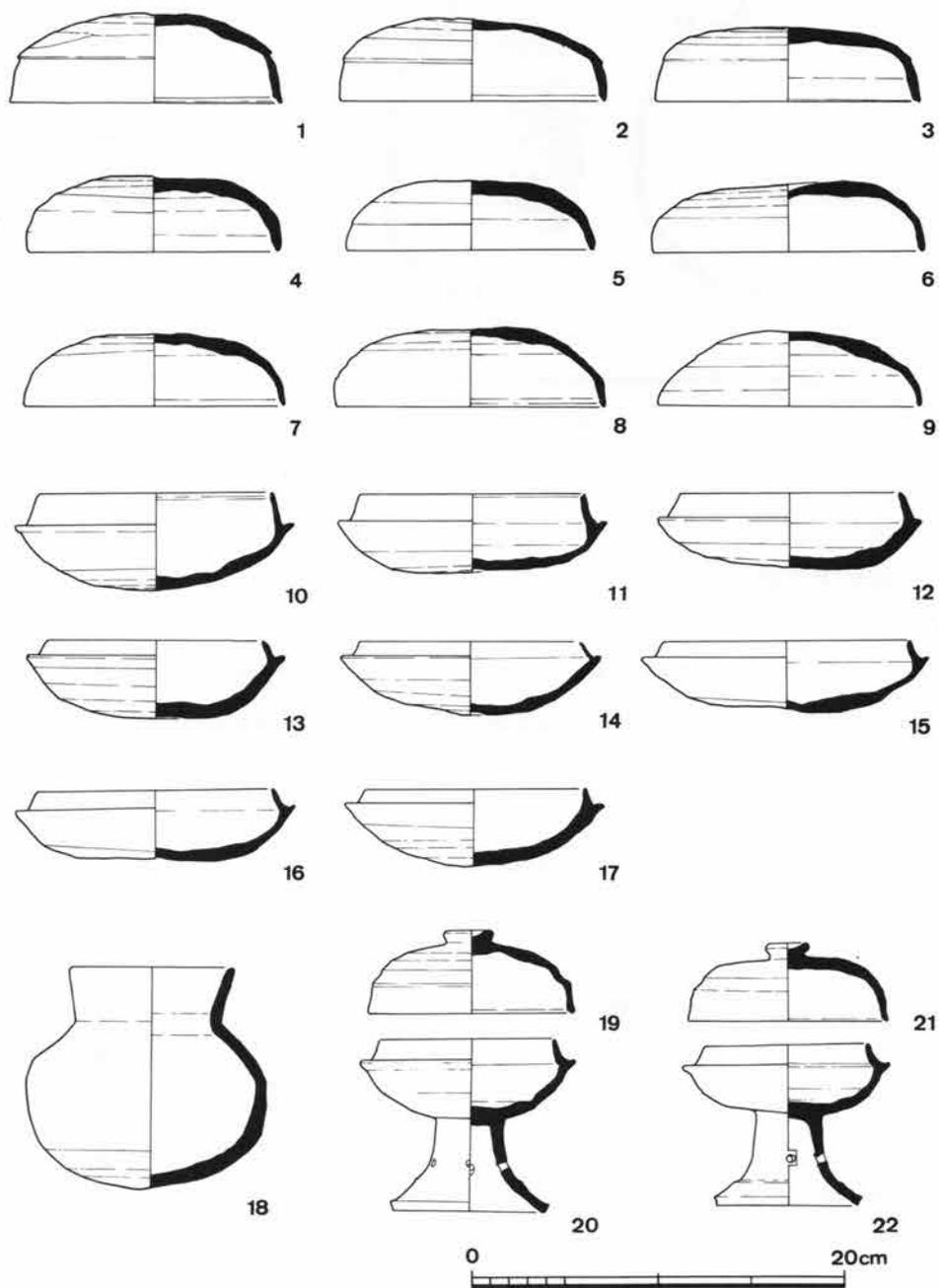
杯身 口縁部の立ち上がりの細部形態と器形から3類に分類すると、Ⅰ類(10・11)は口縁端部に段を有し、受け部の端部も比較的鋭い。Ⅱ類(12~16)は口縁部立ち上がり内傾し、やや短くなる。器壁が厚く、ヘラ削りの範囲が広いもの(12~14)と器壁が薄く、ヘラ削りの範囲が狭いもの(15・16)に細分できる。Ⅲ類(17)は口縁部立ち上がりほぼまっすぐで短く、器形が丸くなる。

時期的にはⅠ類からⅢ類への変遷が考えられ、Ⅰ類がTK10、Ⅲ類がTK209にほぼ該当する。

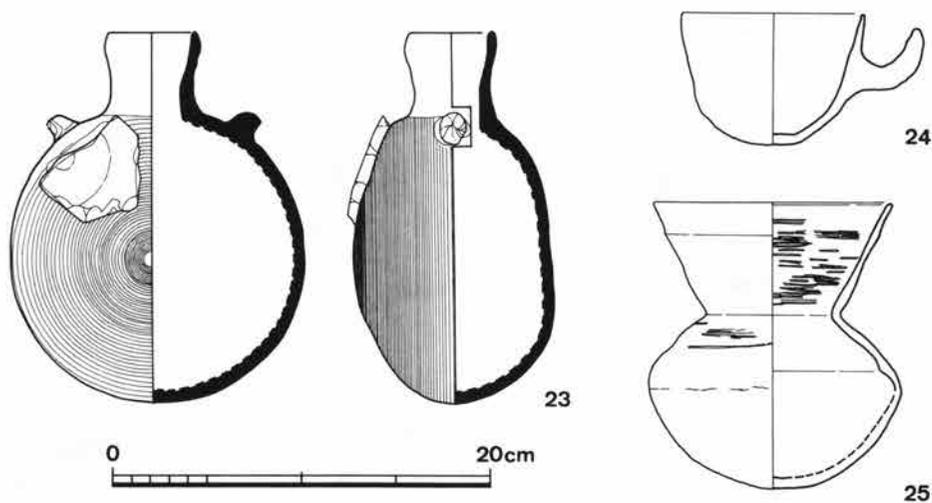
直口壺(18)は、口頸部が外反して真直に立ち上がる。肩部の屈曲は弱く、底部がやや突出する。底部外面は回転ヘラ削りである。

有蓋高杯(19~22)は、19と20及び21と22がともにセットで出土した。杯部は外面に2分の1ほどヘラ削りを行う。脚部4方向に径4mmほどの円形の透かしを穿ち、その下側で痕跡的に一段屈曲する脚部を持つ。南丹波地域では同様な端脚で小円形の透かしを持つ高杯が出土しており、医王谷3号墳出土例^(注3)は小谷17号墳出土のものよりも脚部が短く、明瞭に屈曲する点で先行するものといえる。

提瓶(23)の頸部はやや外反し、端部で内湾して立ち上がる。平面形は円形に近く、ていねいなカキ目調整を行う。被蓋部分は完形のため明確ではない。把手はわずかに下方に曲



第9図 出土遺物実測図(1)



第10図 出土遺物実測図(2)

げられるもので、北東区出土の須恵器群の中では後出的な要素を持つ。他の須恵器の底部片が融着している。

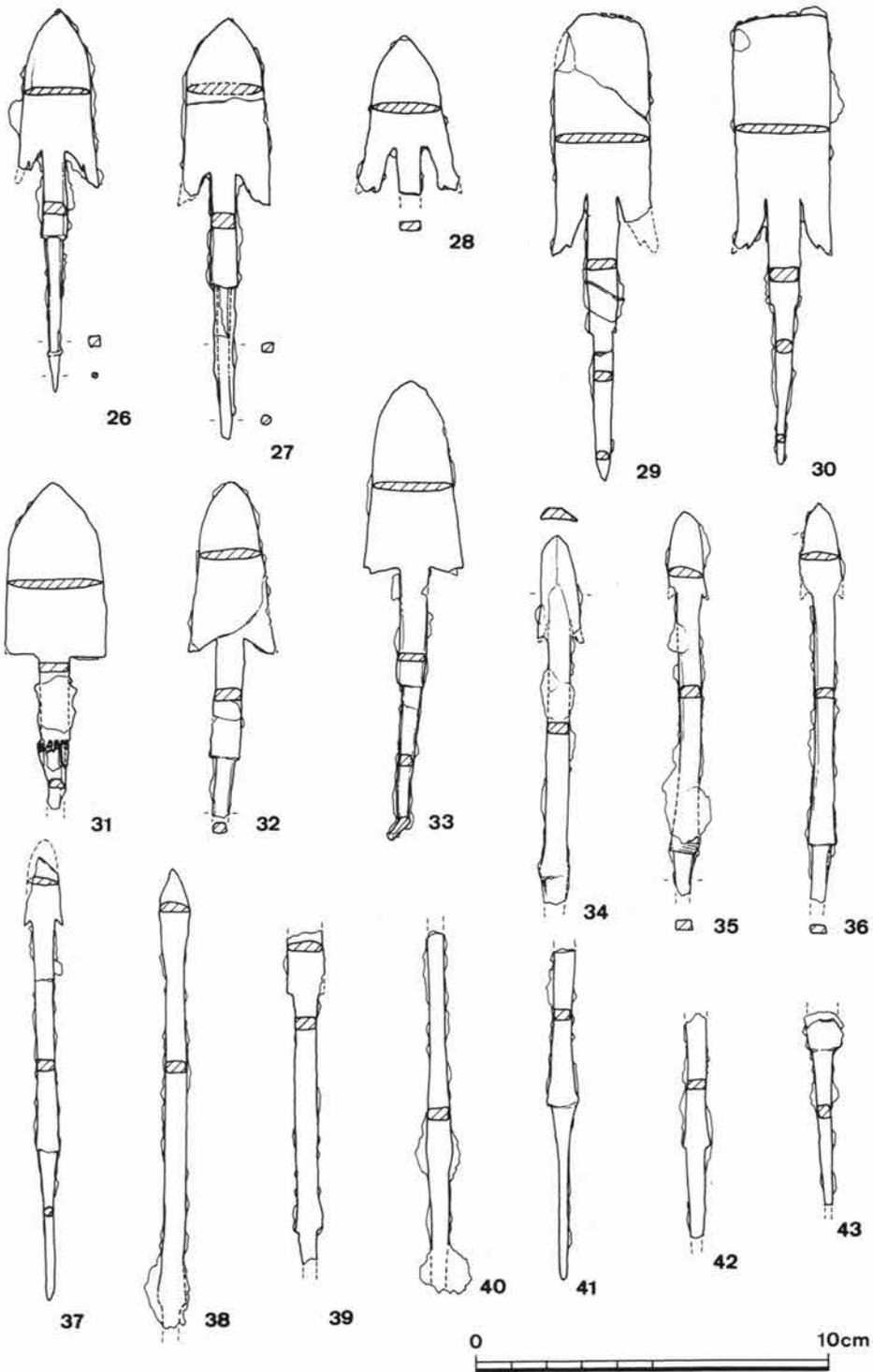
土師器(第10図24・25)

把手付碗は、把手部を接合するための指頭圧痕が把手部内面に遺存する。摩滅のため調整痕は不明である。長頸壺は口径12.6cm・器高15.2cm・胴部最大径13.5cmを測る。口頸部は強く外反して直線的にのび、胴部は算盤玉状に膨れている。清水眞一氏のI期に属するものと思われる。^(注4)

b. 鉄製品

武器(鉄鏃(第11図26～43)・鉄刀(第12図52))

鉄鏃は、18本が出土している。出土位置は、北東区(26・27・38)、南東区(28～30・34・37・39～43)、南西区(31～33・35・36)に分かれるが、南西区の棺台下から出土した長頸鏃(35・36)は、棺台の上面から出土した広根の鉄鏃に伴うものではなく、むしろ南東区の長頸鏃の一群と同一時期に副葬されたものとみなすことができる。鏃身の形態は、広根のものと長頸のものに大別される。広根のものは、筧被がほぼ真直であり、長頸鏃は筧被が幅広に終わり、茎部分に続くものである。両者とも、筧被の断面形は方形である。広根鏃は鏃身形態から分類でき、重ね腸挟を持つ三角形式(26・27・28・32・33)、及び重ね腸挟を持つ方頭形式(29・30)、腸挟を持たない五角形式(30)がある。腸挟三角形式には腸挟の深さによって形態が異なっている。北東区(26・27)、南東区(29・30)、南西区(32・33)でそれぞれ同様な形態の広根鏃が2点ずつ出土している。長頸鏃には腸挟を持た



第11図 出土遺物実測図(3)

ない三角形式(38)と腸袂を持つ三角形式(34~37)とがあり、明瞭な片切刃造りのもの(34)がある。

鉄刀は全長35.9cm・莖長8.9cmを測る。莖には鑷が遺存しており、端部近くに目釘穴が1孔穿たれている。背闊を有し、背の厚さは8mmを測る。

農工具(鉄斧(第12図44)・鉄鎌(第12図45)・刀子(第12図46~51))

鉄斧は、全長11.3cm・刃部幅4.6cmの無肩の袋部を持つものである。袋部は密着しており、袋部内側は刃部からなだらかに厚さを減じている。木柄の遺存はみとめられない。古瀬清秀氏の分類によればB2類になり、小形の縦斧の機能が考えられる。^(註5)

鉄鎌は、全長14.5cmの曲刃鎌である。着柄部に木柄の痕跡は認められなかったが、着柄部分の折返しと直線部分の刃線の交差角度は100~110°ほどになる。なお、闊部付近で銹膨れにより切断される。

刀子は、計6点出土している。46は、玄室北西区埋土内から出土した。片側が刃部を形成しているように見え、鑷があることから刀子とした。すべて背闊を有し、鹿角装である。47~49は、北東区の玉類の出土付近のものである(第8図)。47は、莖部と鹿角の間に木質が遺存しており、鹿角の内側に木柄を装着していたものと思われる。50は、南西区棺台下から出土した。柄の部分の遺存は認められない。51は、現存長20.5cmの刀子で切先が欠損している。莖部端には紐状の有機質痕が認められる。

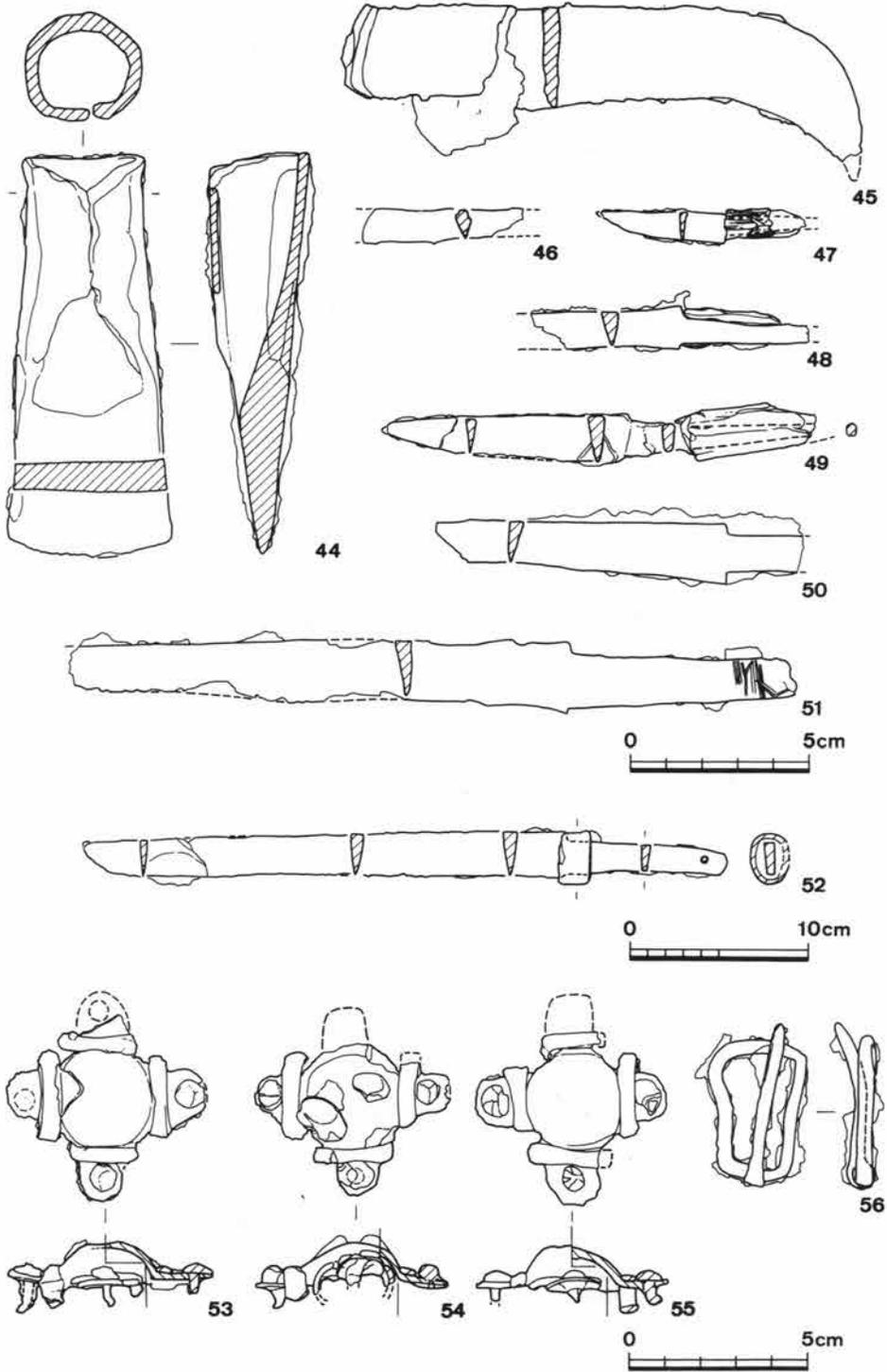
馬具(辻金具(第12図53~55)・鉸具(第12図56・第13図58)・轡(第13図57・59~61))

馬具の内訳は、轡1点、辻金具3点、鉸具2点である。これらはすべて袖部近くの初葬時床面で一塊になっており、同一の馬装を構成したとみなせる。

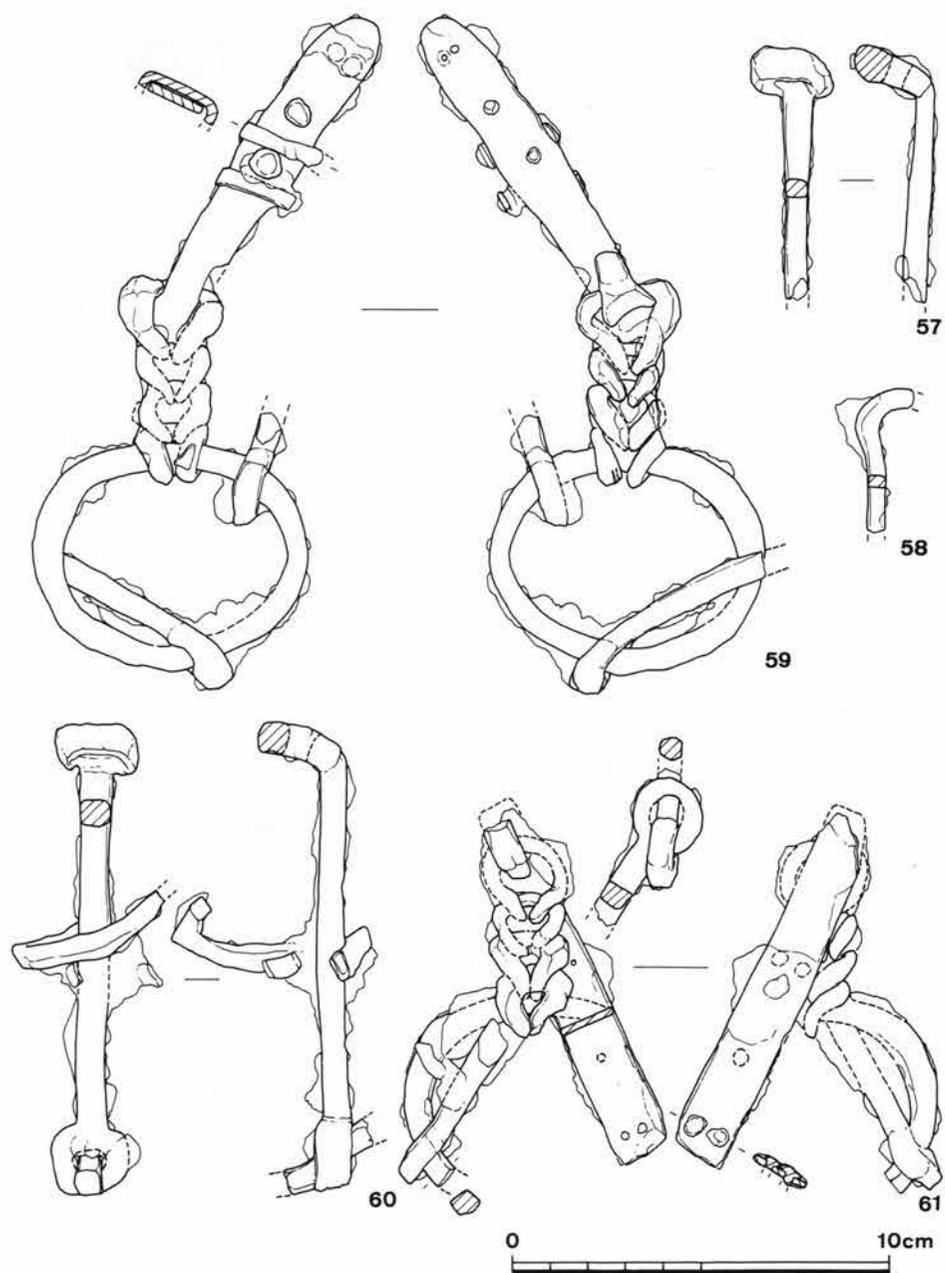
轡は鉄製素環鏡板付轡である。鏡板に銜と引手を別個に結合する。鏡板は、6~8mm四方の鉄棒を曲げた7.4cm×6.0cmの楕円形の環を兵庫鎖と釣金具とで垂下する組み合わせ式立開を持つものである。兵庫鎖は径4mmの輪金を4連絡させたもので、最上部の輪金は他のものよりもやや大きい。釣金具の形態は左右で異なる。第14図右側のものは、隅角を落とした頭部に上から2・1・1の3段の鉸構成をとり、3個の責金具を持つのに対して左側のものは、隅角を落とした頭部に2・1・2の3段の鉸構成を持つ。これは銹化のため明確ではないが2個の責金具しかなかったものと思われる。

両者はまた全長も2cmほどの差があり、馬面にあわせて改作したか、形態的に後出する2・1・1の鉸構成の釣金具を2・1・2の鉸構成釣金具の破損後に補修したかのいずれかの状況が想定できる。銜は、全長約16cmに復原できる。引手は、単線造りの「く」の字引手で、完形の左側のものは全長12.4cmである。

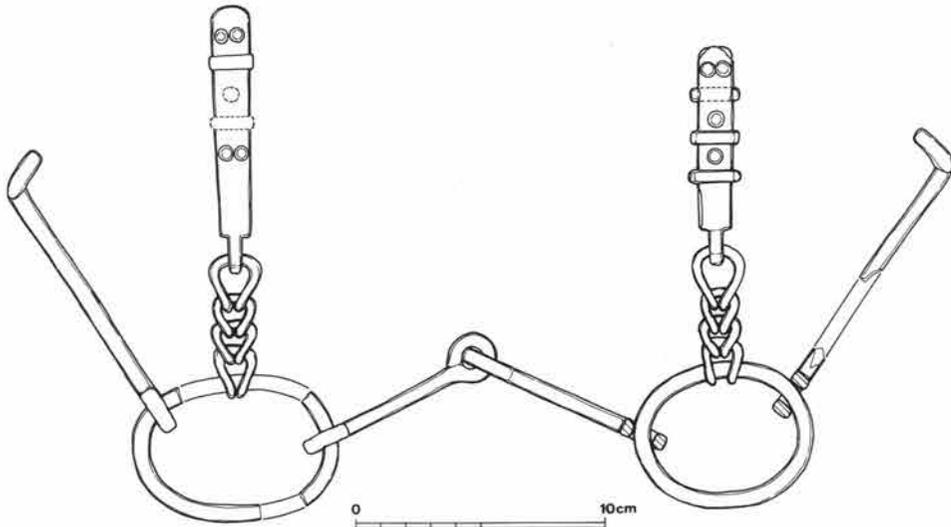
なお、皮革の遺存は認められなかった。



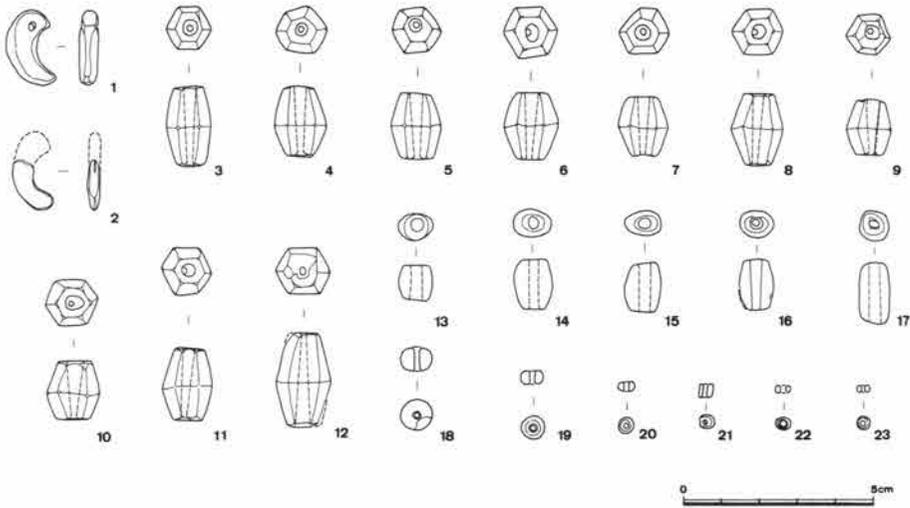
第12図 出土遺物実測図(4)



第13図 出土遺物実測図(5)



第14図 馬具(轡)復原図



第15図 出土遺物実測図(6)

辻金具は3点とも同型式で、半球形の鉢部に、頭部の隅角を落とした4脚を直交させる。脚は、無節の責金具と銚によって革帯に固定する。

鉸具は2点出土しており、うち1点は破片である。径0.4cmの鉄棒を「U」字形に曲げ、基部に刺金を巻き付ける。三繫のいずれかに装着したものである。

付表2 土器及び玉類計測表(1)

土器 (単位はcm、*は残存長、土器は小数点第2位、玉類は第3位を四捨五入)

番号	口径	器高	備考	番号	口径	器高	備考
1	14.9	4.7	淡青灰色	14	11.90	4.0	淡灰色
2	14.4	4.4	淡青灰色	15	13.25	3.9	青灰色
3	14.3	4.0	濃灰色	16	12.70	4.0	淡青灰色
4	13.8	4.1	淡灰色	17	12.00	4.1	濃青灰色
5	13.3	3.8	淡青灰色	18	8.70	12.1	青灰色
6	14.6	3.3	淡青灰色	19	11.00	4.6	淡青灰色
7	14.1	3.9	淡青灰色	20	9.50	9.4	淡青灰色
8	14.5	4.4	淡灰色	21	10.60	4.3	淡青灰色
9	14.3	4.0	淡青灰色	22	8.70	8.8	淡青灰色
10	12.8	5.3	淡青灰色	23	4.55	19.7	淡青灰色
11	12.3	4.3	濃灰色	24	12.60	15.2	明橙褐色
12	11.9	4.0	淡青灰色	25	9.55	7.0	明橙褐色
13	11.5	4.3	淡灰色				

付表3 土器及び玉類計測表(2)

玉類

NO	全長	幅(厚さ)	備考		全長	幅	備考
1	1.94	0.49	白灰色	13	0.94	0.72×0.86	暗褐色
2	*1.37	0.34	白色	14	1.32	0.76×0.95	暗褐色
3	2.05		半透明	15	1.29	0.69×0.94	暗赤褐色
4	1.87		半透明	16	1.3	0.76×0.85	暗赤褐色
5	1.71		半透明	17	1.54	0.72×0.81	濁暗赤褐色
6	1.77		半透明	18	0.69	0.78	赤橙色
7	1.54		半透明	19	0.35	0.58	緑青色
8	1.89		半透明	20	0.23	0.46	濃緑青色
9	1.5		半透明	21	0.39	0.36	濃緑色
10	1.57		半透明	22	0.2	0.34×0.39	黄緑色
11	1.94		半透明	23	0.18	0.34	緑青色
12	2.48		半透明				

c. 装身具

玉類(勾玉(第15図1・2)・水晶製切子玉(3~12)・琥珀製棗玉(13~17)・玉髓製丸玉(18)・ガラス製小玉類(19~23))

勾玉は2点出土した。材質は不明であるが灰白色を呈し、砂糖菓子のようにもろい。1点は頭部が欠損した。水晶製の切子玉には全長1.5cmのものから2.48cmのものまでである。いずれも半透明である。琥珀製の棗玉も風化が激しい。全長0.9cmから1.65cmのものである。13・14は、鈍い黄褐色と暗褐色の細かい縞模様であり、15~17は、鈍い暗赤褐色に変

色している。玉髓製の丸玉である。暗い赤橙色で縞目模様は認められない。ガラス製の丸玉・小玉には色調に違いが認められる。19・20は、濃緑青色で粒状の細かい気泡が認められる。21は不透明の黄緑色で、22も不透明の濁った黄緑色を呈する。23は、透明感の強い青色で気泡が認められる。玉類はその出土状態から一連の装身具であった可能性が高く、二つの勾玉の間に切子玉を一つはさみ、外側に切子玉、さらに棗玉、丸玉・小玉を配置していたと復原できる。玉類すべてが一連のものとして、環にして使用するならば、全周28cm・直径8.9cmになる。

(野島 永)

6. まとめ

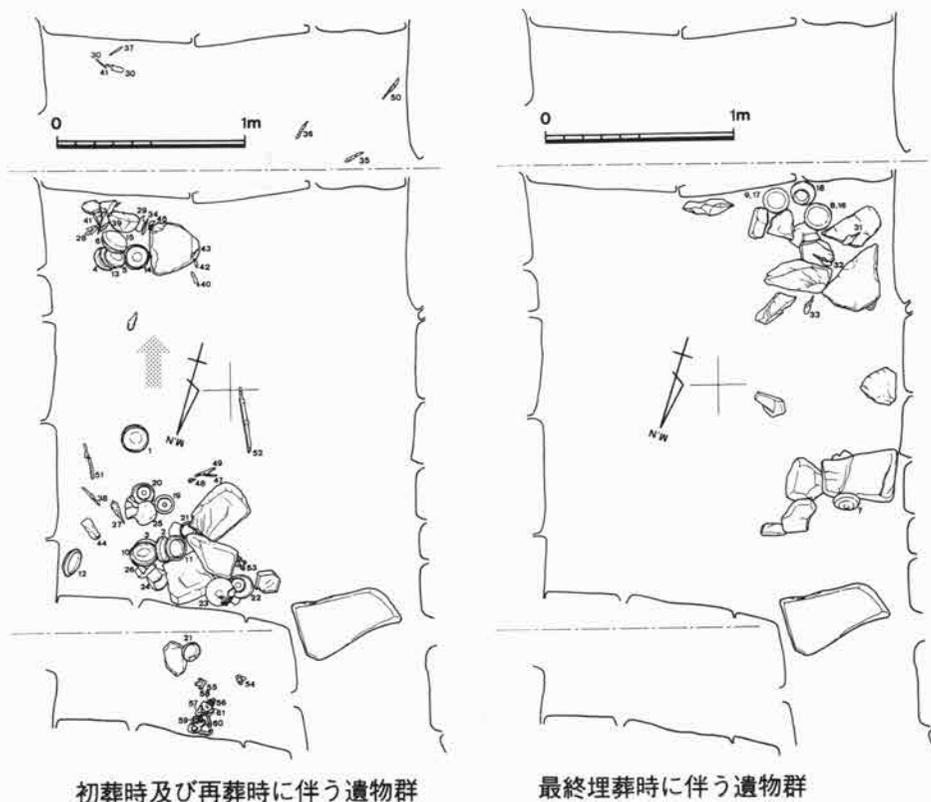
葬送回数を副葬された須恵器蓋杯の個数及び形態から考えてみる。まず、北東区の集積された遺物群内の須恵器杯身・杯蓋6点のうち5点はI類に属する。陶邑編年TK10に対応するもので、玄室内の須恵器では相対的にもっとも古いものである。

次に、南東区で重ねられて検出された杯身・蓋6点は、II類に属し、初葬に続く時期のものとして判断できる。最終埋葬に伴って前段階に副葬された遺物が片付けられたと思われる、これらの南東区の遺物群は1回目の追葬時(再葬時)に伴うものと考えられる。最後に、南西区の杯身・杯蓋のセット2組と短頸壺、及び南西区のホルンフェルス石材と同じ棺台を構成すると考えられる北西区の花崗岩石材の北辺で検出された杯蓋(7)は、片付けられたものとは考え難く、葬送時の原位置を保っていると思われる。玄室西側の棺台と考えられる石材は杯蓋(7)に接した北側のもの以外、ほとんどがホルンフェルス石材であり、閉塞石の石材選択と一致する点からも最終埋葬時に伴うものとしてできる。このため、南西区棺台下から出土した鉄鏃(35・36)及び刀子(50)は最終埋葬以前のものであり、再葬時に属する可能性が高い。いずれにせよ、以上のことから、この玄室には最低3回の入棺と葬送が想定される(第16図)。

また、このことから、杯身・杯蓋は他の副葬品とは関係なく、1回の葬送について計5、6点であり、1回の葬送に消費される杯身・杯蓋が副葬品の多寡に関係なく、杯蓋と杯身

付表4 出土遺物一覧表

器種	須 恵 器				土師器	武 器		農 工 具			馬具	装身具
	杯蓋身	高 杯	提 瓶	直口壺		鉄刀	鉄鏃	鉄斧	鉄鎌	刀子		
初葬時	6	2	1		2	1	3	1		5	有	有
再葬時	6						12~		1	1		
最終葬時	5						3					
合計	17	2	1	1	2	1	18	1	1	6	有	有



第16図 遺物・棺台配置図

は3つのセットであったと推定でき、継続した葬送儀礼によるものであろう。

初葬時副葬品としては、須恵器杯身・蓋・有蓋高杯や土師器長頸壺などのほかに、鉄鎌・鉄刀などの武器及び鉄斧・刀子などの工具、轡など面繫を中心とした馬具や装身具などバラエティに富んだ構成を想定することができる。2回の追葬時の副葬品はそれに比べて貧弱であり、須恵器杯身・蓋のほかには長頸壺と長頸鎌を中心とした鉄鎌や鉄鎌などに留まるものであった(附表4)。

遺物のうち、初葬時に副葬された馬具について若干私見を述べてみたい。鉄製素環鏡板付轡については、小野山節、山ノ井清人、花谷 浩、岡安光彦、坂本美夫、荒川^(註6)史ら各氏の研究がある。その基本的な変遷観は、組み合わせ立開を持ち、引手・銜・鏡板を別個に結合するものが5世紀後半に出現するが、6世紀後半には、鏡板に長方形立開を鍛接し、銜の端環に引手を絡ませるものへと統一されるという。また、引手は概して2条線のもの、あるいは引手壺組み合わせのものが古く、単線で端環を「く」の字に曲げたものは新しくなるという。以上の研究成果をふまえるならば、小谷17号墳の轡の製作時期は他の初葬時副葬遺物が示している6世紀前半の年代幅(520～550年)の中に収まるものとしてさしつか

えない。丹波地域では綾部市安国寺平山古墳^(注7)に鉄製素環鏡板付轡が出土しており、同様に兵庫鎖立聞を持つが、鏡板が円形で兵庫鎖と鏡板の間に遊環を介在させている点でこれも小谷17号墳例とは異なる。素環鏡板の形態と立聞の対応関係を重視すれば、安国寺平山古墳出土例は群馬県恵下古墳出土例^(注8)にその系譜がたどれ、小谷17号墳出土例は岡山県中宮1号墳例^(注9)にその初現的形態を見ることができる。両者は、6世紀前半代にその型式組列の交替を生じる。安国寺平山古墳出土例は引手壺を持ち、兵庫鎖を5連絡させることから小谷17号墳出土例に先行することが指摘できる。

次に、石室平面プランについて考えてみたい。先述したように、小谷17号墳は玄室比が1：1の正方形に近い右片袖の横穴式石室である。森下浩行氏^(注10)は、このような玄室比が1：5前後に属する略方形に近い右片袖の横穴式石室は、その多くが穹窿状に持ち送る天井を有しており、これらの石室の祖型を百済の熊津期の石室に求めている。具体的には宋山里古墳群を指摘しており、おもに畿内の小形古墳の横穴式石室として継続するものとされる。しかし、小谷17号墳では玄室最下段基底石に平坦な石を立てて使用している点や、羨道部分がわずかに斜面を形成する点など、祖型とされる百済の石室にはない属性を有することからも、畿内中枢部で採用された右片袖・略方形プランの小形横穴式石室の一類型が畿内周辺部に波及した形態であり、6世紀前半段階のものとして把握することができる。

小谷17号墳の位置する南丹波地域では6世紀前半に亀岡市拝田16号墳^(注11)や医王谷3号墳^(注12)、園部町天神山2号墳^(注13)などが築造される。これらの横穴式石室の形態は小谷17号墳の右片袖、略方形のものとは異なる。拝田16号墳は亀岡市鹿谷古墳と同様に石棚を有し、基底石から板石材で構築する両袖式のものであり、医王谷3号墳は基底石に腰石を配し、礎床を持つ両袖式のものである。園部天神山2号墳は詳細が不明であるが、南丹波地域では導入期の横穴式石室に斉一性がなく、多様な石室形態で登場するといえそうである。このような現象は、畿内周縁地域の初期横穴式石室の特徴である。このような多系列の石室形態の混在状況の背景には、この地域の在地首長による階層的支配が強力ではなく、新来の文化要素の受容が迅速に進展しなかったことを示唆していよう。

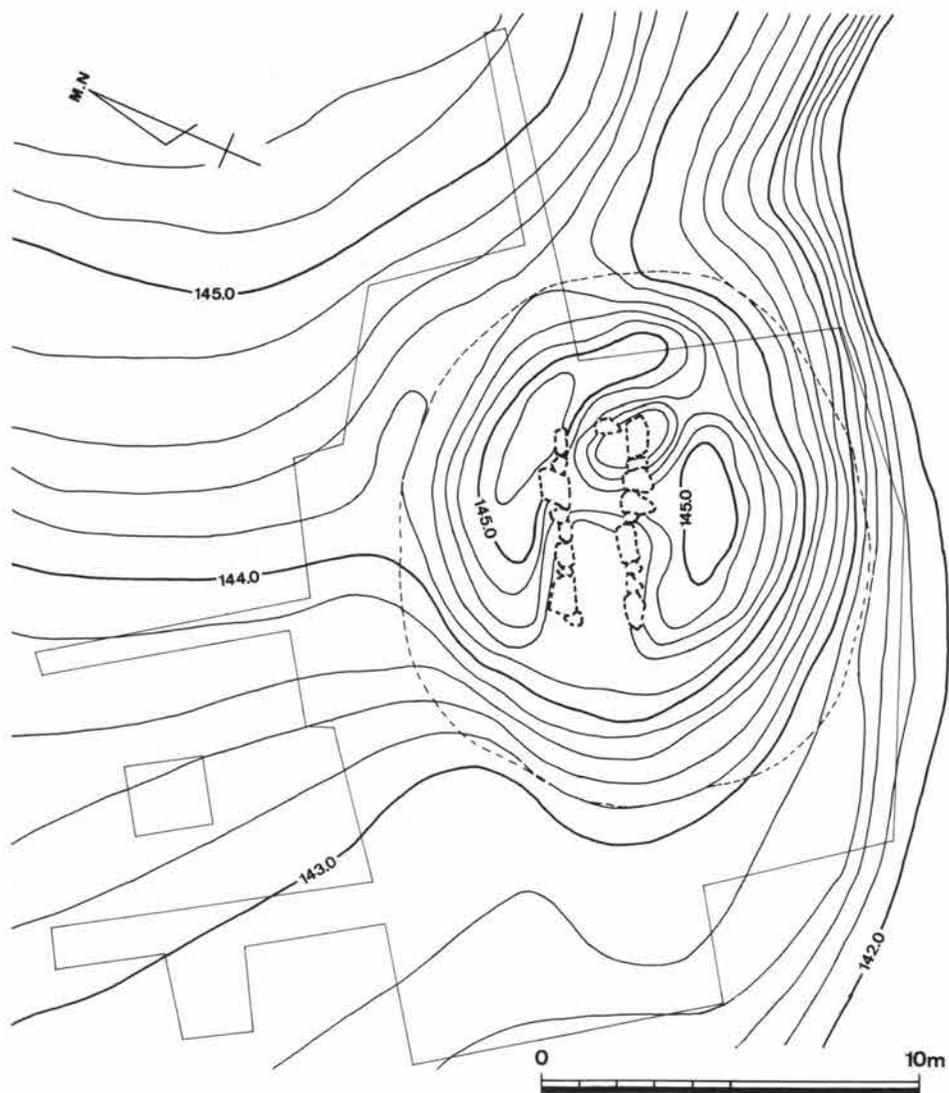
(野島 永・河野一隆)

(2) 川向北1号墳・川向北遺跡

①川向北1号墳

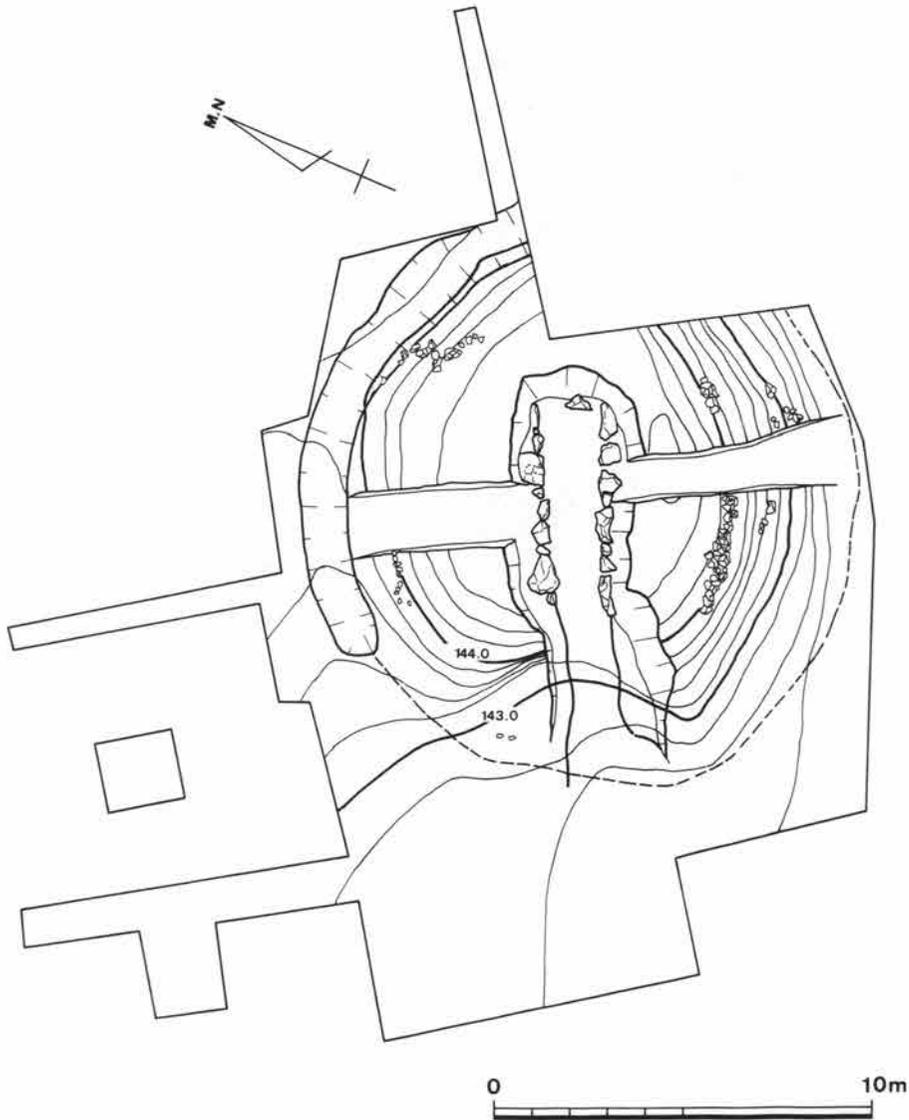
1. 墳丘(第17・18図)

この古墳は西側に派生する幅広の尾根の先端部に位置している。また、この尾根上には基部に向って2基の古墳、川向北2号墳・3号墳が存在している。古墳の立地する尾根は



第17図 調査前地形測量図

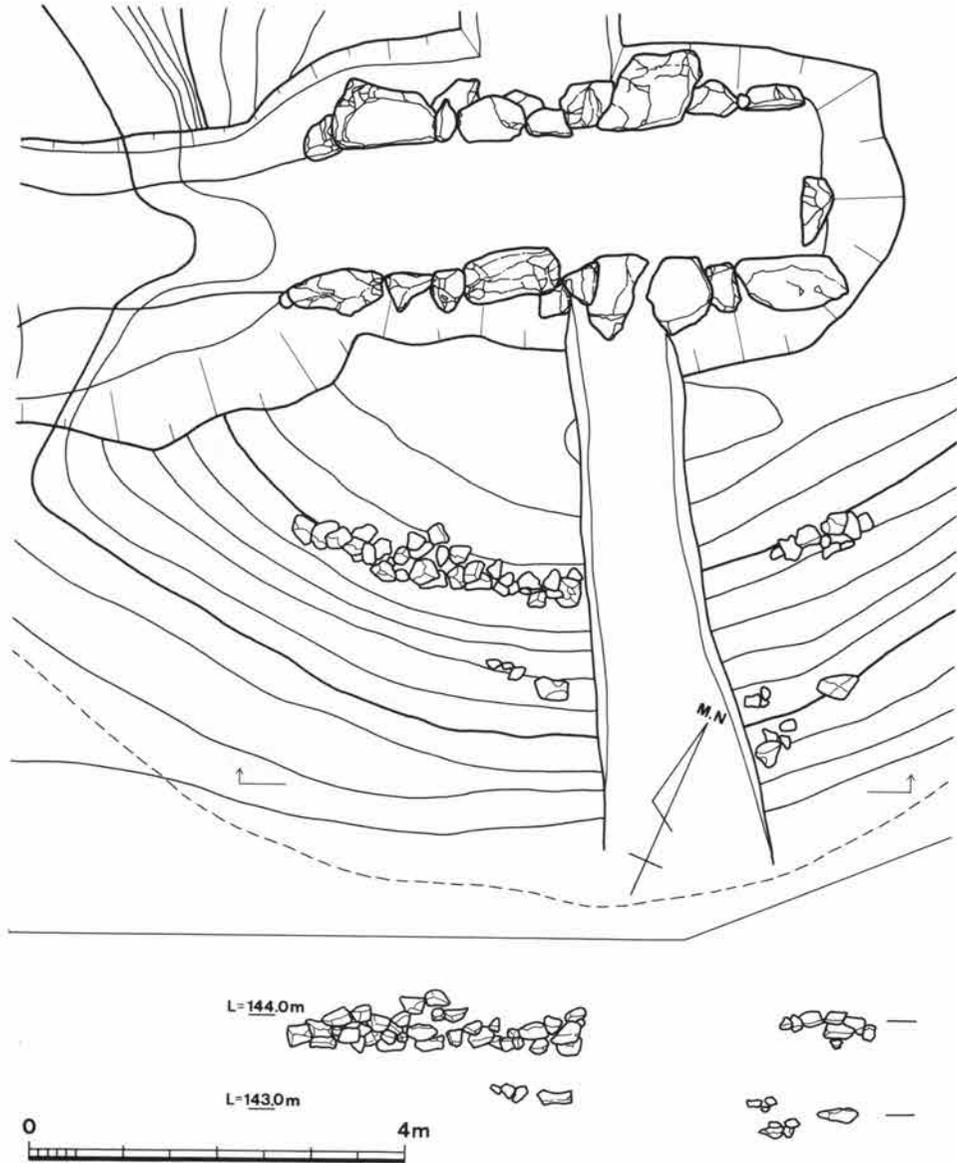
墳丘の西北側は緩斜面が広がるが、南東側は狭い谷筋に面しており、急斜面をなしている。墳丘は後世の石材の採掘等で中央部が大きく窪んでいた。墳丘の規模は地形測量の結果、南北約14m・東西約15mの円墳であることが判明した。調査を進めていく過程で墳丘表土及び墳丘流出土を除去していくと、墳丘には外護列石が設けられていることが判明した。また墳丘の北東側、すなわち尾根末端側は尾根と古墳とを区画する溝が掘削されていた。石室の構築にあたっては地山を「コ」字形に掘り込んで石材据え付けのための掘形を設けている。そして側壁の基底石を据え付け、裏込めをしたのち盛り土により墳丘を築く。こ



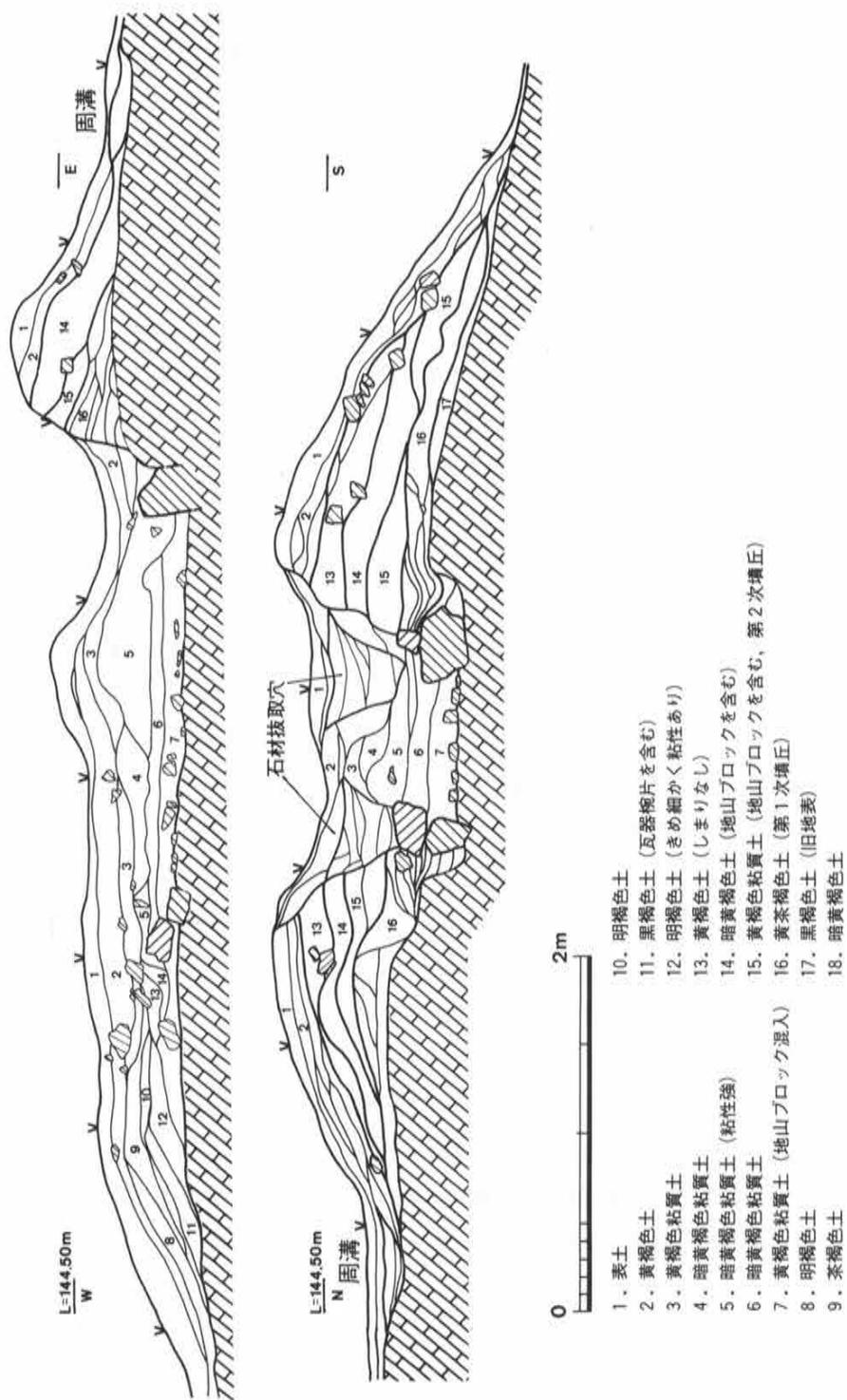
第18図 調査後墳丘測量図

れを仮に第1次墳丘とする。盛り土は墳丘断割の土層観察より黄褐色混礫土と暗茶褐色の有機質土からなる。その構築した墳丘面を利用して石材を引き上げ、側壁2段目の石材を据える。さらに盛り土をして第2次墳丘を構築する。墳丘築造には以上のような作業手順を順次繰り返していくと思われる。墳丘の現存高は表土面から床面まで約1.6mを測る。

列石は墳丘の表土及び流失土を除去した段階で検出した(第19図)。この列石は墳丘の標高約143m付近と約144m付近をめぐり、南西側から南東側にかけての一部が2列となって



第19図 列石実測図



- 1. 表土
- 2. 黄褐色土
- 3. 黄褐色粘質土
- 4. 暗黄褐色粘質土 (粘性強)
- 5. 暗黄褐色粘質土 (粘性強)
- 6. 暗黄褐色粘質土 (地山ブロック混入)
- 7. 黄褐色粘質土 (地山ブロック混入)
- 8. 明褐色土
- 9. 茶褐色土
- 10. 明褐色土
- 11. 黒褐色土 (瓦器破片を含む)
- 12. 明褐色土 (きめ細かく粘性あり)
- 13. 黄褐色土 (しまりなし)
- 14. 暗黄褐色土 (地山ブロックを含む)
- 15. 黄褐色粘質土 (地山ブロックを含む, 第2次墳丘)
- 16. 黄茶褐色土 (第1次墳丘)
- 17. 黒褐色土 (旧地表)
- 18. 暗黄褐色土

第20図 土層断面図

いた。しかし、確認できたのは墳丘面のごく一部分であり、列石が墳丘周囲すべてをめぐ
る状況はうかがえなかった。列石が比較的良好に残存していたのは墳丘南側の1列目であ
り、最高3段に積まれていた。列石に使用されていた礫は人頭大の河川礫及び角礫である。
列石は盛り土中に埋め込まれており、裏込めは見られなかった。墳丘を平面的に概観して、
列石が南側で顕著であるのは、旧地形において南側の標高が低く、北側と高さを均一にす
るのに多量の盛り土を必要としたため、盛り土の流出防止のため念入りに構築されたと考
えられる。

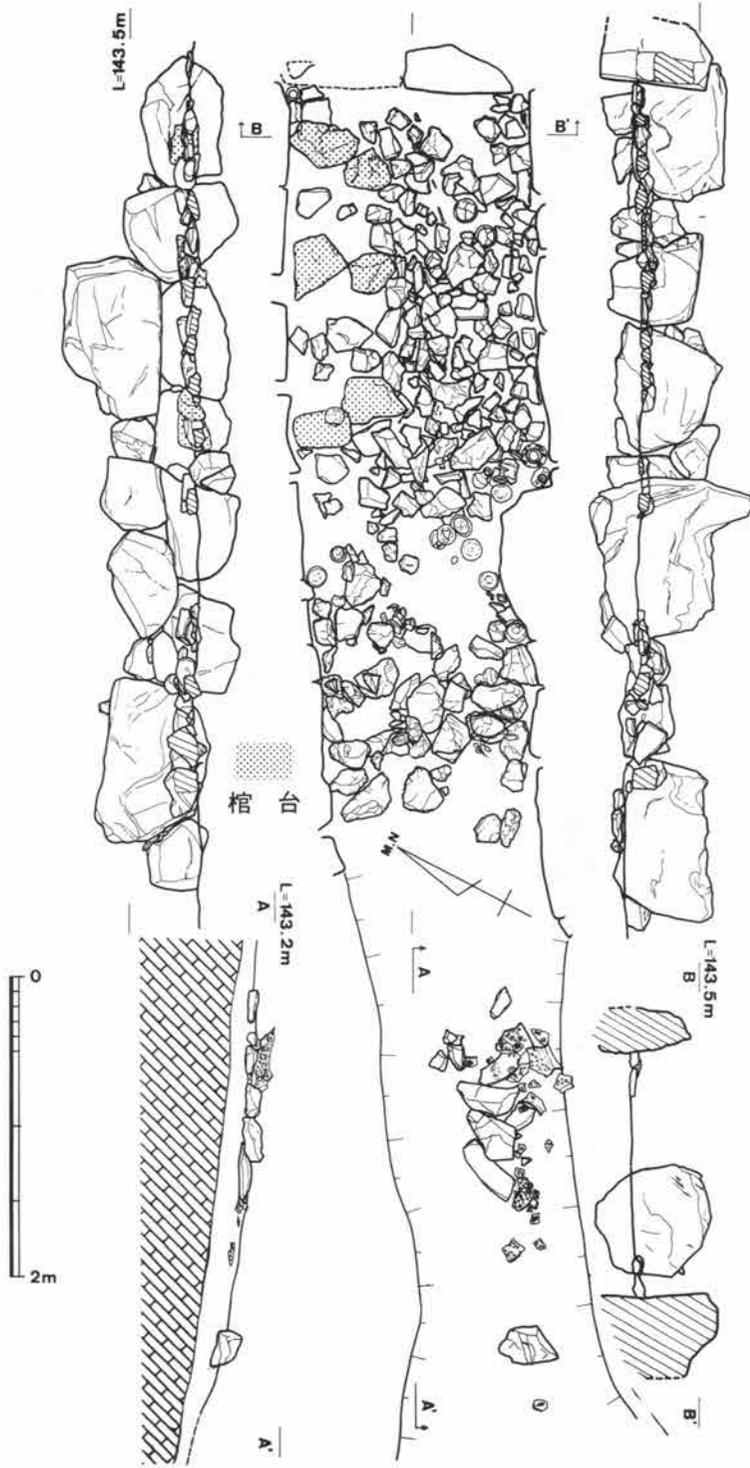
周溝は墳丘北側の墳裾部分に沿って検出した。幅約1.5m・深さ約0.3mを測り、断面皿状
を呈する素掘りの溝である。この溝は尾根と古墳を区画するもので墳丘裾を半周すると思
われる。しかし一部は調査地外へ延びるため範囲は確認できなかった。溝裡土中には墳丘
から転落したと思われる礫が見られたほかは出土遺物はなかった。

2. 石室(第21図)

この古墳の内部主体は南西に開口する横穴式石室で主軸の方位をN-65°-Eにとる。石
室は長方形の玄室と羨道部、墓道部からなる。奥壁側より見て、左側に袖石をもつ片袖式
石室である。石室石材は古墳の立地する付近の沢筋などから運搬したと思われる砂岩・チ
ャート・ホルンフェルスなどである。石室の全長は、奥壁から墓道部まで約9.6m、玄室長
約2.8m、玄室幅は奥壁部で約1.4m、袖部で約1.6mを測る。羨道長は約3m、墓道部長は約
3.8mである。玄門幅、羨門幅はそれぞれ約1.3mある。現存する側壁の高さは最も高い部分
で床面から約0.7mを測る。

石室は調査前から墳頂部が大きく窪んでおり、石の抜き取りが予想された。調査の結果、
石室石材の裏込めの礫などが石室内に散乱していたものの、基底石は奥壁の1石を除いて、
ほぼ残存していた。また床面の敷石、棺台も比較的良好に残っていた。

石室は、旧地形の起伏を削平し、平坦面を確保する。その後、石材据え付けのための掘
り込みをし、基底石を据えた後、裏込めに小礫・土を充填する。2段目以上の石組は、盛
り土工法による墳丘の築成と並行して行い、天井石架構の後、最終的な盛り土を行ったと
推測される。床面の構築は、墳丘構築と側壁石材の据え付け作業のどの段階で行われたか
は明白ではない。また、墓道部の掘り込みもこれらの作業工程に伴って行われたと思われる。
玄室の基底石は大きさも形もさまざまであるが、2段目に積まれている石材と比較し
て大型石材を使用している。そして奥壁、側壁とも面を巧みにそろえて積まれていた。奥
壁の基底石は2石から構成されたとされるが、1石は抜き取られていた。奥壁の残存高
0.56mを測る。玄室右側壁は基本的に5石の大型の基底石で構成され、隙間は小振の礫で



第21図 横穴式石室実測図

充填していた。側壁の最大残存高は0.88mを測る。一方、玄室左側壁は袖石を含め、4石から構築されていた。残存高は0.76mを測る。玄室の長さとの比率はほぼ2:1となる。

床面は、地山面を平坦に削平した後、地山掘削土を再利用し整地していた。その上に石敷及び棺台を設けていた。石敷は奥壁側より見て左側に限定され、右側は棺台の礫が置かれただけで石敷を伴わない。石敷は、大人の拳大から子供の頭大の角礫及び亜円礫を粗雑にバラまいたもので、礫床というには程遠い印象を受ける。棺台は人頭大ほどの亜円礫6石を用いていた。礫はほぼ上面の高さをそろえていた。棺台の上に置く棺の規模は、長さ

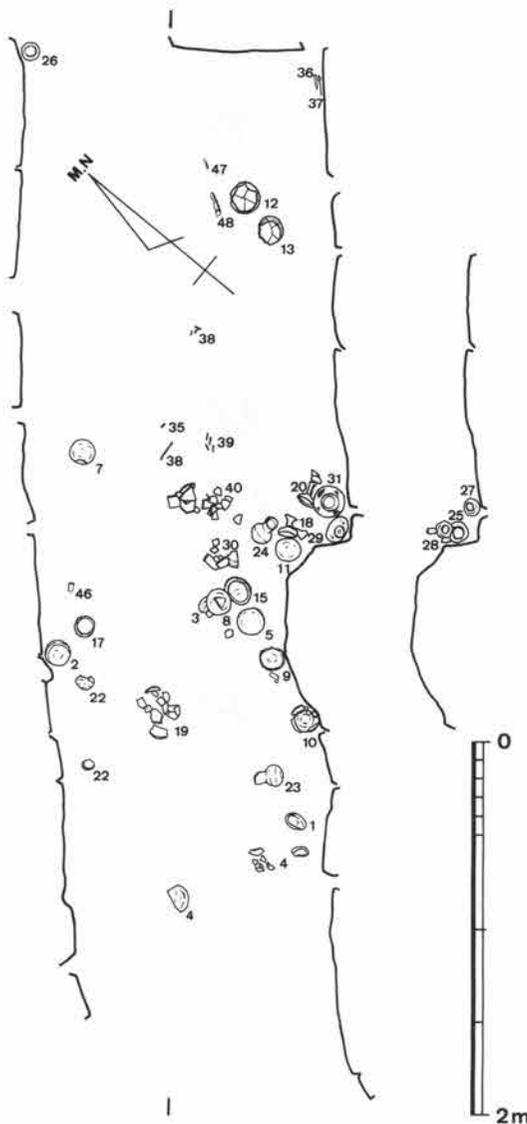
約2.0m・幅約0.5mを想定できる。棺台の礫の隙間は整地面が露出していた。

羨道部では閉塞石の残骸と思われる石積みを確認した。これらの石材の間では須恵器が出土したことから、閉塞石は追葬などに伴い、移動させられていることがうかがえた。

墓道は地山面を掘削した浅い溝状の落ち込みで、羨道部から墳丘裾に続く。幅は羨門部で約1.4mあり、そこからやや南に振りながら末広がりになり、徐々に浅くなり終息する。

3. 遺物出土状況(第22図)

遺物の出土位置は玄室内、羨道部、及び墓道部に大別できる。玄室内の出土遺物のほとんどは礫床部分に集中していた。これは右側壁側に棺台が設置されており、棺が安置されていたためと思われる。ただし須恵器杯蓋7のみが棺台の上で出土したが、



第22図 石室内遺物出土状況図

追葬に伴う二次的な移動と思われる。土器は袖石部分にまとまり、高杯(18・20)・甕31・提瓶29は埋葬時の現位置を保っていると思われる。しかし、これらの袖石部分の須恵器を取り上げ、さらに埋土を除去すると、床面に密着する状態で土師器の高杯27・28と小型丸底壺25がやはり現位置を保った状態で出土した。これらの須恵器と土師器は埋納の時間差が考えられるが、初葬時に土師器のみを埋納したとは考えにくい。これらの土師器に伴う遺物の特定はむずかしい。今後の検討課題である。また玄室奥壁寄りでは須恵器杯身2点(12・13)と鉄鏃36・37、刀子48が出土した。鉄鏃36・37は左側壁に沿って出土した。奥壁と右側壁の隅部分では土師器の小型丸底壺26・25が出土した。これらの土師器の出土位置が袖部と右側壁隅部分に限定されていることから、何らかの意味をもつものと思われる。一方、鉄製品は玄室内に散乱した状態で検出された。中には完形品に近い状態で出土した個体もあったが、大半は破損した状態で出土した。玉類は碧玉製管玉が2点出土した。35は34付近で出土したが、床面から10cmほど浮いた堆積土中から見つかった。羨道部からは、須恵器の杯蓋1～5・8、杯身15、高杯19、長頸壺22・23などのほか、鉄鎌46が出土した。土器は大小の破片となって散乱しており、追葬に伴う遺物の移動が考えられる。墓道埋土上面では須恵器の大甕が割れた状態で出土し、破片は墳丘裾まで及んでいた。当初は羨門部付近に据え置かれていたものと推定される。

4. 出土遺物(第23～27図)

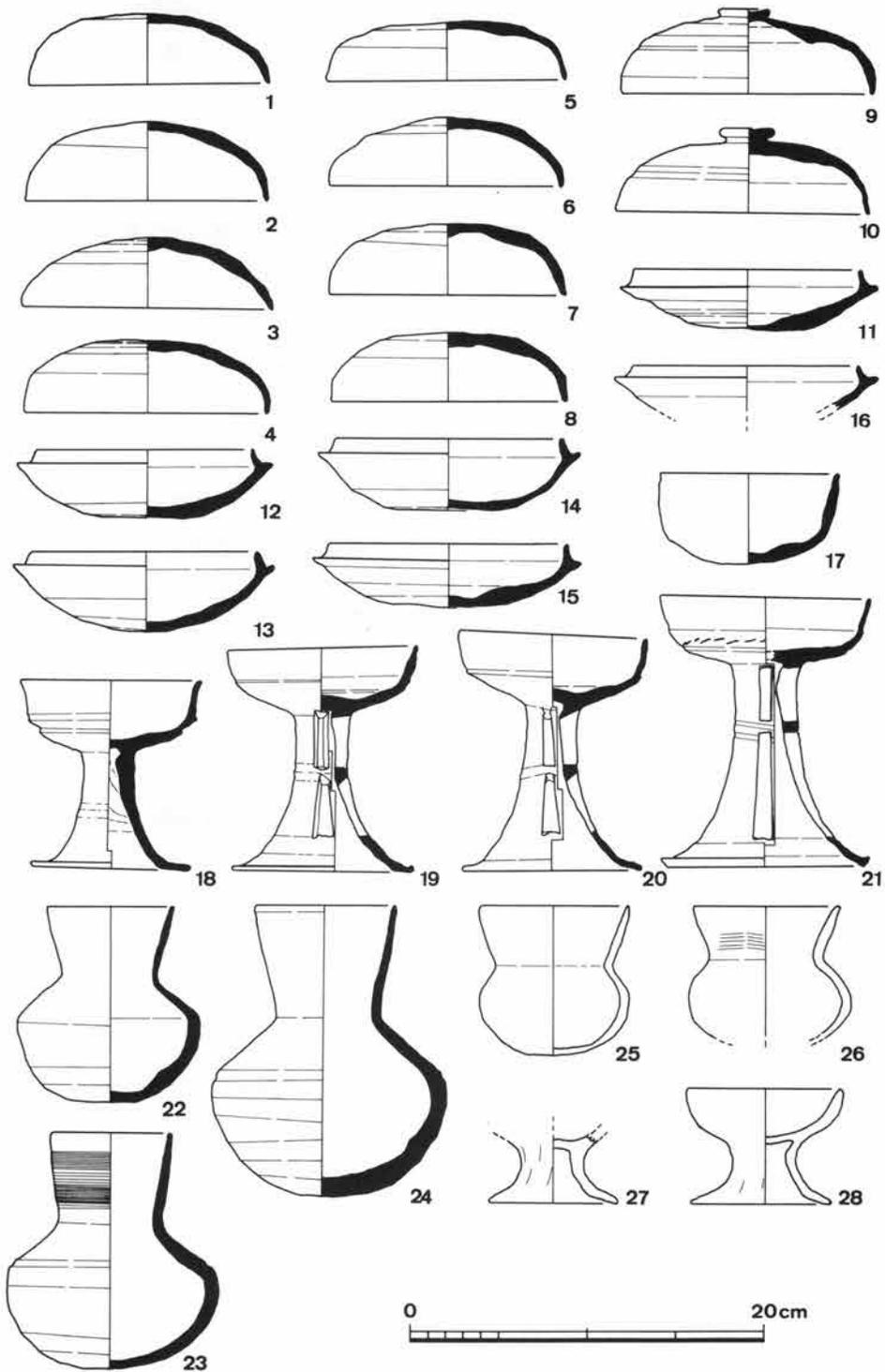
出土遺物は大別して土器・鉄製品・装身具などがある。以下に出土遺物の概要を述べる。なお、各個体の法量は付表5に記載した。

土器類には須恵器と土師器がある。

須恵器 須恵器は杯身6点、杯蓋8点、有蓋高杯蓋2点、椀1点、高杯4点、長頸壺3点、提瓶1点、壺1点、広口壺1点そして大甕1点がある。

杯蓋(1～8)は、口縁部と天井部との境に明確な稜をもたないものである。外面のケズリ調整の範囲は、天井頂部から1/2から1/3の範囲にとどまり、以下の部分はナデ調整している。口径は約13.5～14cmの範囲におさまる。高さは4～4.5cmである。1・3は閉塞部、2は、羨道部右側壁付近から出土した。

杯身(11～16)は、受け部が水平かあるいはわずかに斜め上方に向かい、端部はいずれも丸くおさめている。立ち上がりは短く内傾するものが大半であるが、11・15は直立に近い。口径は約12.8～13.5cmを測る。高さは3.2～4.4cmである。有蓋高杯蓋(9・10)は丸味を帯びた天井部の中央に扁平なつまみを貼りつけるものである。これらとセット関係をなす有蓋高杯は出土していない。椀17は、直上方に大きく立ち上がる口縁部をもつものである。口



第23図 出土遺物実測図(1)

径9.8cm・高さ5cmを測る。この器種は、園部天神山3号墳の出土遺物に類例がある。

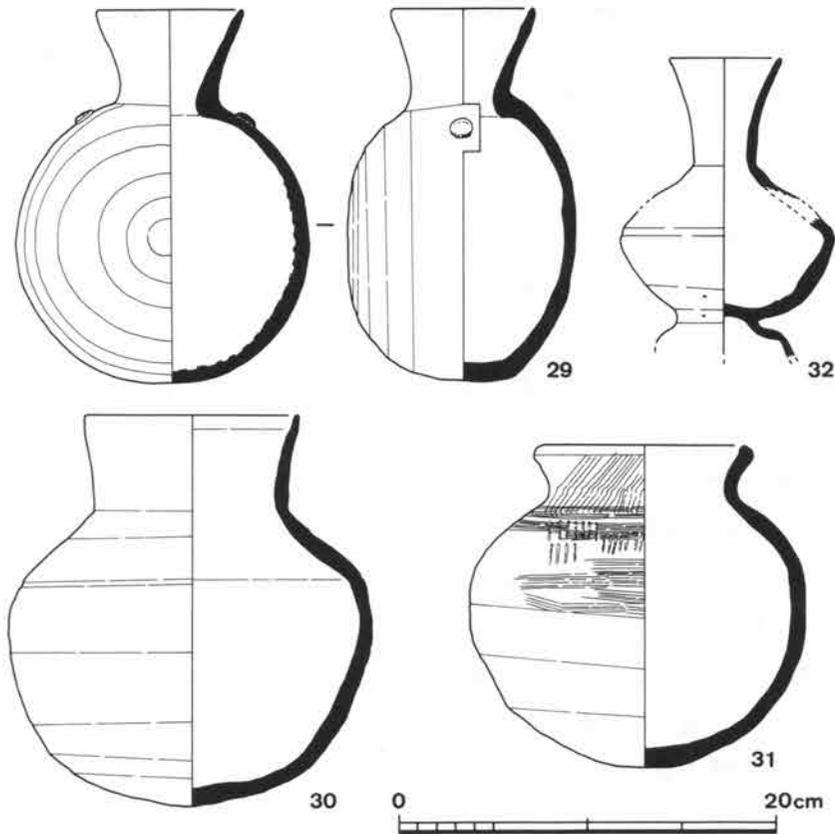
無蓋高杯(18~21)には透かしを持つもの(19~21)と持たないもの(18)とがある。透かしは対面する位置に施した方形2段のものである。21はナデによる稜と1条の沈線間に工具による不規則な刺突文を施している。

壺(22~24・30・31)には、小型で直立する長い口頸部をもつもの(22~24)、大型で直上方に立ち上がる口頸部をもつもの(30)、短く外反する口縁部をもつもの(31)とがある。

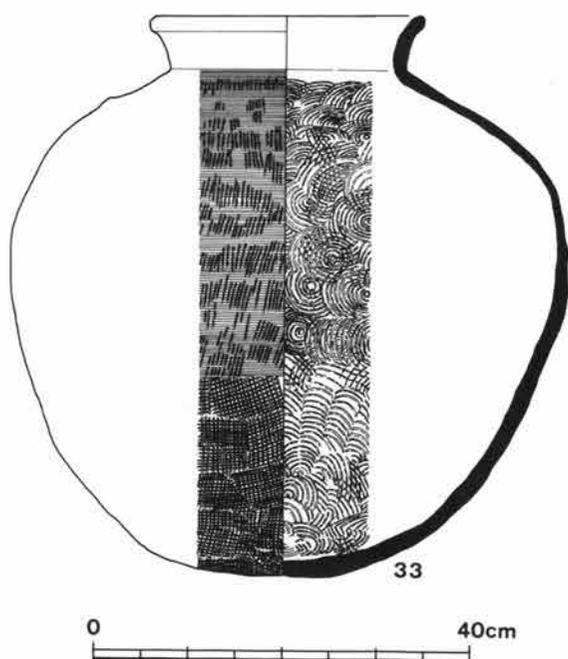
台付長頸壺(32)は、全体に小振で、透かしのない低い脚部を伴うものである。体部下半はヘラケズリののち、ていねいに脚部を貼りつけている。奥壁埋土中から出土した。

提瓶(29)は、円形の体部の肩部にボタン状の貼りつけをもち、短く外反する口頸部をもつ。

大甕(33)は、短く外反する口縁部をもつ。外面の調整は体部上半2/3をタタキのち横方向のカキメを施す。また内面は上半に同心円状の当て具痕が密に残る。色調は内・外面とも青灰色を呈し焼成は堅緻である。しかし、焼成時に窯内の他の製品と溶着した破片が



第24図 出土遺物実測図(2)



第25図 出土遺物実測図(3)

肩部に残り、底部にはわずかに焼き歪みが見られる。この土器は墓道部埋土上面で割れた状態で出土したが、古墳の被葬者の墓前祭祀行為に伴った遺物と思われる。以上の須恵器の所属時期は杯蓋・杯身などから田辺昭三氏による編年のTK209型式に比定できるとと思われる。

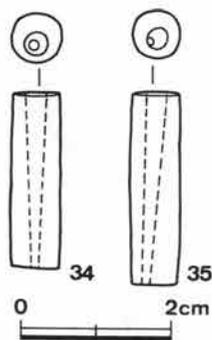
土師器 土師器には小型丸底壺2点、高杯2点がある。

小型丸底壺(25・26)は、丸みを帯びた体部に外反する口縁部がつく。体部最大径と口

径はほぼ同大である。25はほぼ完形ではあるが、内外面とも器表は剝離しており、調整技法は不明である。

高杯(28)は、杯底部から内湾しながら短く立ち上がる口縁をもつ。脚部は太くなだらかに裾へ開く。

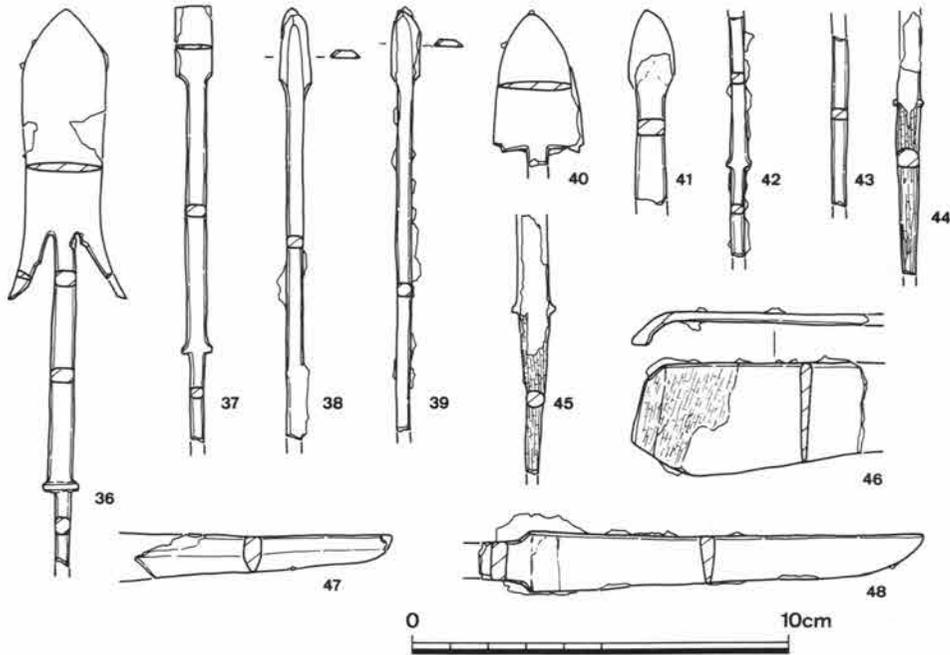
鉄製品(第27図) 鉄製品には鉄鎌・鉄鎌・刀子などがある。ほとんどの個体が破片となって出土した。鉄鎌は、平根式のもの(36・40)と長頸鎌(37~39・41)に分類できる。36は、大きく抉れた腸袂を持つが、左右非対象である。篋被は棘篋被であり、茎部分は一部が欠損している。37は、鎌身は長方



第26図 出土遺物実測図(4)

形を呈している。篋被は棘篋被である。38・39は、柳葉形の長頸鎌である。40は三角形平根式鎌で、二段腸袂である。41は、鎌身を欠損している。44・45は、頸部から茎部分にかけての破片である。篋被を持ち、表面には木質が残存している。鉄鎌46は、折り返し部分には木質が残存している。全体の約1/3が欠損している。48は刀子である。身部はほぼ完存し関は両関である。柄部は大半が欠損している。

装身具(第26図) 碧玉製の管玉が2点出土した。長さは34が2.3cm、35が2.6cmとややバラキがある。径は双方とも約0.7cmを測る。穿孔はどちらも片面穿孔である。色調は暗緑色を呈する。



第27図 出土遺物実測図(5)

②川向北遺跡

1. 検出遺構(第28・29図)

竪穴式住居跡(S H01) 墳丘西裾で検出した。約5m×6mの隅丸方形を呈する。この住居跡の上部は当古墳の墳丘築造の際に削平されたと思われる、残存しておらず、周壁溝と支柱穴などのピットを確認したにとどまる。ピットは径約20~30cm・深さ約10cmを測る。周壁溝は北東側に2条確認できるため、北東辺のみをやや南西側にずらして拡張を行っていたことがうかがえる。

土坑(S K02) 墳丘盛り土下の旧地表上面で検出した不整形な土坑である。長軸140cm・短軸80cm・深さ10cmを測る。本来はもう少し深かったと思われるが、墳丘築造のために削平を受けたものと思われる。この土坑底部から体部外面にタタキの入った甕(1)が出土した。

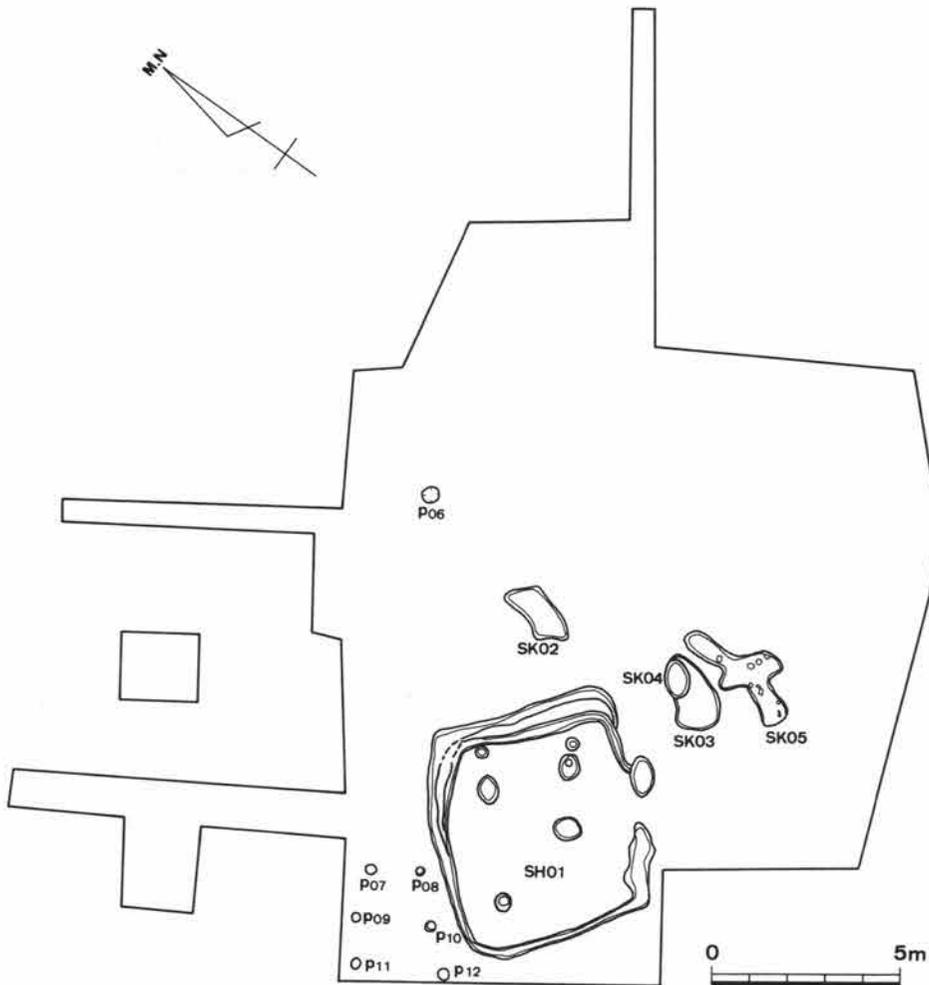
2. 出土遺物(第30図)

出土遺物には土器・石器・鉄製品がある。遺構から出土したものもあるが、大半は墳丘盛り土内から出土した。

弥生土器 器種には甕と壺・ミニチュア土器がある。甕は丸みを帯びた体部から「く」

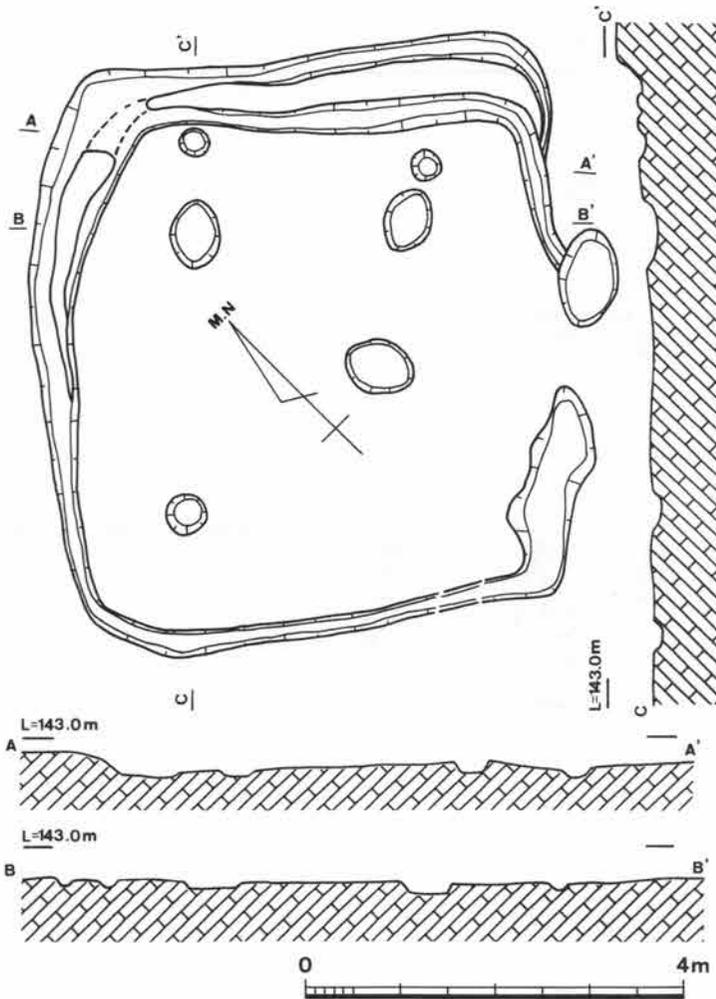
字形に外反するもの(1~3)と、頸部から緩やかに外反するもの(5)とがある。4・7は、有段口縁の壺である。8~10は、底部である。10は、外面はタタキ目を施し、内面は細かいヘラミガキが施される。11は、台付きのミニチュア壺の体部と思われる。底部には脚台を貼りつけたと思われる剝離痕が残存する。器壁が厚く内面には指頭圧痕が残る。これら出土した土器は畿内第V様式にあたるものと思われる。

石器 石器は剥片も含めて10数点が出土した。器種はスクレイパー、石鏃、石庖丁、磨製石器片、砥石、不明石製品がある。1は、安山岩製のスクレイパーである。刃部は両面加工されている。直刃と思われるが欠損しているために全形は不明である。3は片刃、直刃の石庖丁である。石材はホルンフェルスを使用している。4は2と同様、磨製石器片であ

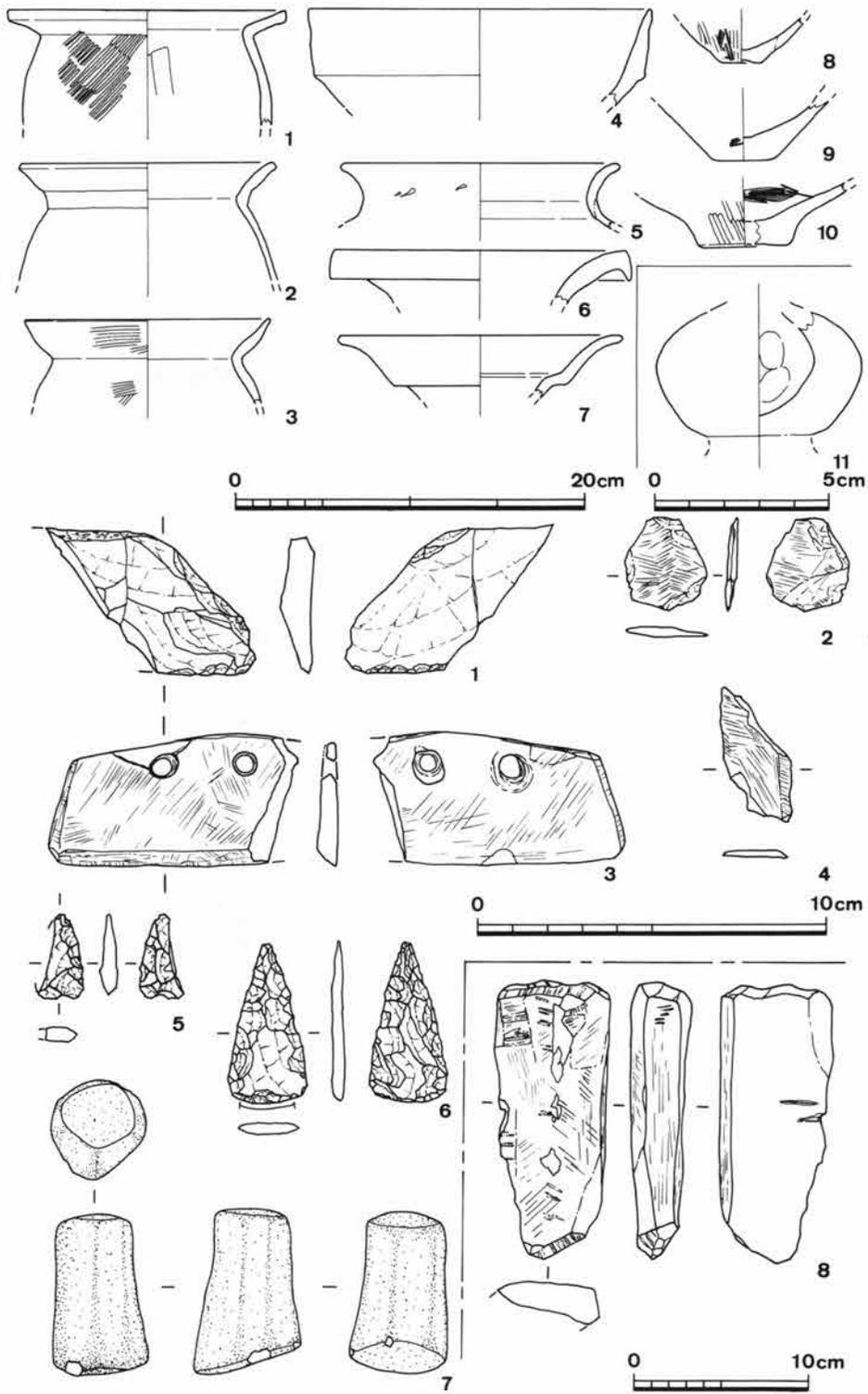


第28図 下層遺構平面図

るが、こちらは明確な研ぎ分けによる稜を持つ。研磨調整された表面のみの破片であり、裏面は欠損している。5は、サヌカイトの凹基無茎の石鏃である。やや粗雑な作りである。一側縁が折れによる欠損を受けている。6は、石鏃である。側縁部は細かな剥離を連続して刃部を作り出している。基部は矢柄着柄のために研磨を施し、調整している。石材はサヌカイトを使用している。7は不明石製品である。最大幅3.1cm・高さ4.6cmを測る。石材は砂岩である。全面が研磨成形されており、一見脚状を呈している。機能磨面は図で下部とした表面積の大きい面1か所と見られ、磨り石状の製品と思われる。8は砥石である。石質はきめが細かく、仕上げ砥石と思われる。長軸に対して直行あるいはやや斜行するように長さ1.0~1.5cm、幅1.0~2.0mmの断面「U」形のキズが無数に観察できる。また、



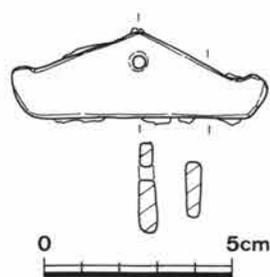
第29図 竪穴式住居跡実測図



第30図 出土遺物実測図(6)

破損した裏面には断面「V」形のキズが2条見られる。これらことから、彫刻刀の丸刀状のものや鉄器を研いだものと思われる。

鉄製品 第31図は火切り金具である。古墳西側墳裾部分で出土した。中央やや上部に径約3mmの小孔があく。奈良時代の遺物と思われるが、他にこの時期に所属する遺物の出土はなかった。



第31図 出土遺物実測図(7)

付表5 出土遺物法量表

土器

() 内は現存長、単位はすべてcm

種類	器種	番号	口径	器高	備考
須恵器	杯蓋	1	13.7	4.0	75%(但し口径)
須恵器	杯蓋	2	13.7	4.6	99%(口縁部少し欠損)
須恵器	杯蓋	3	14.1	4.0	25%(但し口径)
須恵器	杯蓋	4	14.0	4.3	99%
須恵器	杯蓋	5	13.4	3.4	100%
須恵器	杯蓋	6	13.1	4.0	90%
須恵器	杯蓋	7	13.4	4.0	75%(但し口縁部)
須恵器	杯蓋	8	13.4	4.0	99%
須恵器	杯蓋	9	14.1	4.9	80%
須恵器	杯蓋	10	14.3	4.9	96%
須恵器	杯身	11	12.9	3.4(3.5)	100%
須恵器	杯身	12	12.3	3.9	99%
須恵器	杯身	13	12.9	4.5	99%
須恵器	杯身	14	13.0	4.0	33%(但し口径)
須恵器	杯身	15	長径13.5 短径11.4	3.5(3.6)	100%
須恵器	杯身	16	12.7	残存高2.6	33%弱
須恵器	椀	17	10.2	5.1	100%
須恵器	高杯	18	10.1	10.75	100%
須恵器	高杯	19	10.7	12.8(12.9)	杯部・底部33%
須恵器	高杯	20	10.5	13.5(13.7)	100%
須恵器	高杯	21	11.9	15.5	95%
須恵器	長頸壺	22	7.3	11.2	100%
須恵器	長頸壺	23	6.8(6.3)	13.5(6.5)	83%
須恵器	長頸壺	24	7.9	16.6	約33%(但し口縁部)・体部100%
土師器	小型丸底壺	25	8.4	8.6	口縁部50%、他はほぼ完存
土師器	小型丸底壺	26	8.2	残存高7.9	約70%
土師器	高杯脚部	27	不明	残存高3.8	底部80%
土師器	高杯	28	8.7	6.5	約75%
須恵器	提瓶	29	7.6	19.8	99%
須恵器	広口壺	30	20.8	11.3	99%
須恵器	甕	31	10.7	17.2	99%
須恵器	台付壺	32	6.1	(15.7)	50%
須恵器	大甕	33	21.4	45.2	口縁部は残存、体部欠損部あり

石製品

玉類	管玉	番号	全長	幅	備考
玉類	管玉	34	2.3	0.7	100%
玉類	管玉	35	2.6	0.7	100%

鉄製品

器種	番号	全長	刃渡り	備考
鉄鏃	36	(14.7)	7.65	
鉄鏃	37	(11.55)	2.0	
鉄鏃	38	(11.25)	2.05	
鉄鏃	39	(11.1)	1.9	
鉄鏃	40		3.6	
鉄鏃	41	(3.95)		
鉄鏃	42	(6.3)		鏃身・茎のみ
鉄鏃	43	(4.45)		鏃身のみ
鉄鏃	44	(6.9)		木質残存
鉄鏃	45	(6.8)		木質残存
鉄鏃	46	(6.15)	(4.35)	木質残存
刀子	47	(6.8)		
刀子	48	(11.85)	(10.4)	金具などの装着痕あり

③まとめ

今回調査した川向北1号墳を含めて、園部町内には過去に一部の墳丘が調査された園部天神山古墳群といった古墳時代後期の群集墳が存在する^(註14)。今回調査した古墳は、ちょうど園部天神山古墳群と園部川を挟んで対峙する位置に所在してしており、これらの古墳群を築造した集団との何らかの関連があった可能性が考えられる。しかし、園部天神山古墳群の正式な報告がなされていないため、相互の古墳群の細部の検証ができないが、現在公表されている資料を見るかぎり、墳丘に外護列石をめぐる点、石室の形態や出土遺物などに共通性が見い出せそうである。石室の形態では天神山1・2号墳に後行し、天神山3・4号墳と同時期と考えられる。しかし、園部盆地での後期古墳の調査例が少ないことから、園部天神山古墳群と当古墳との関連性を言及するにはかなり無理がある。今後資料の蓄積を待って改めて考察する必要があると思われる。また、古墳墳裾で検出した弥生時代の住居跡とそれに伴う遺構・遺物は園部盆地で確認された例として、尾根を隔てて東側の谷部で確認された曾我谷遺跡^(註15)がある。丘陵と谷部といった立地条件の相違はあるが、遺物から見る限りほぼ同時期に営まれたものと思われる。今回は住居跡1棟のみで集落の範囲をつかむことはできなかった。しかし今後、周辺の調査で住居跡が確認される可能性は高いと思われる。

(柴 暁彦)

(3) 八木城跡・堂山窯跡

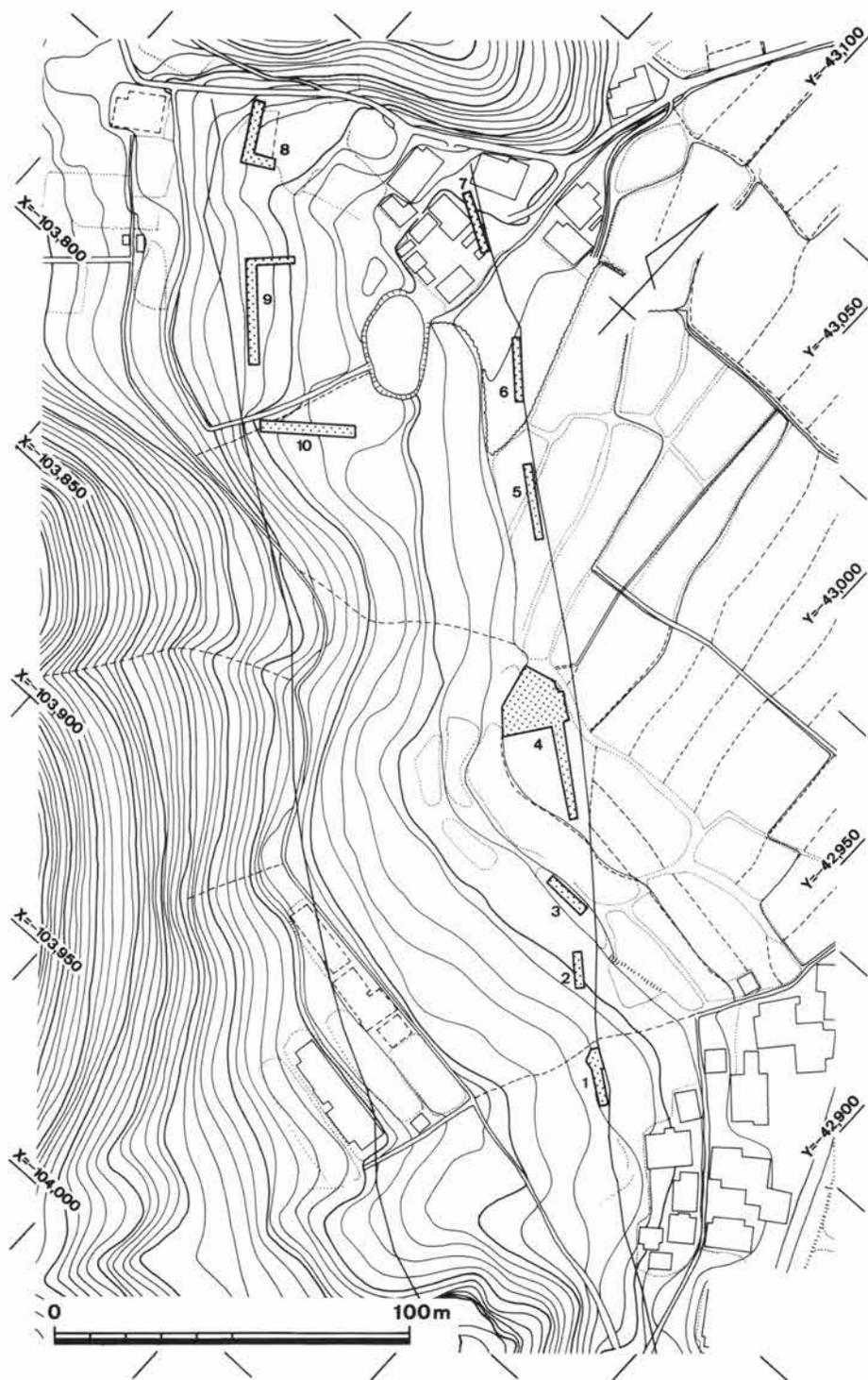
1. はじめに

八木城跡・堂山窯跡は船井郡八木町本郷に所在している。八木城跡は亀岡市と八木町にまたがる標高約350mの城山の山頂部に主郭、そしてその支尾根に曲輪などの防護施設が築かれた中世末の山城であり、内藤氏の居城である。八木城は京都府内の山城の中でも城郭施設の占める範囲は広大であり、古くから京都府内を中心によく知られた中世城郭の1つである。一方、堂山窯跡はこの城山の東斜面に構築された古墳時代の須恵器窯として周知の窯跡である。この窯跡は、昭和39年に京都西高校の教師・生徒らが中心となって調査されたという記録がある。今回は道路建設予定地内での遺構の有無・遺物の散布状況を確認するための試掘調査を行った。

2. 調査の概要

今回の調査地点の中には山裾に造られた水田部分に隣接しているため、農閑期に調査を実施した。調査にあたっては工事用道路部分を中心に東西総延長約700mにわたって10か所のトレンチを設定し、重機による掘削の後、人力による調査を行った。なお、試掘トレンチは八木城跡関連で1～6トレンチ、堂山窯跡関連で7～10のトレンチを設定した(第32図)。調査を行った結果、これらのトレンチのうちで、遺構を確認できたのは1・4・10トレンチである。その他のトレンチについては厚い土石の堆積のみで顕著な遺構・遺物等は確認できなかった。以下、各トレンチについて概要を説明する。

1トレンチ(第33図) 地元で「大手口」と呼ばれている部分に設定したトレンチである。遺構上面には表土下約1mの厚さで土石が堆積していた。この土石及び、19世紀の遺構面を除去すると、トレンチ南半で石積遺構を確認した(第34図)。この遺構は長軸約150cm・短軸約120cm、検出面からの深さ約35cmを測り、平面形は不整形を呈する。遺構掘形の周囲には拳大から人頭大の自然礫を3段以上積み上げているが、使用されている礫は形・大きさともふぞろいで、積み方も乱雑であり、崩落しやすかった。出土遺物には水溜め状の遺構埋土から出土した土師器皿・瓦質火舎・瀬戸美濃灰釉陶器などがある。また、この遺構に沿って地山削りだしの階段状遺構3段分を検出した。この階段の方向はほぼ東西を向いていた。一段は幅約80cm、奥行約25cm、高さ約10cmを測る。しかしトレンチが狭小で遺構の性格は判然としない。

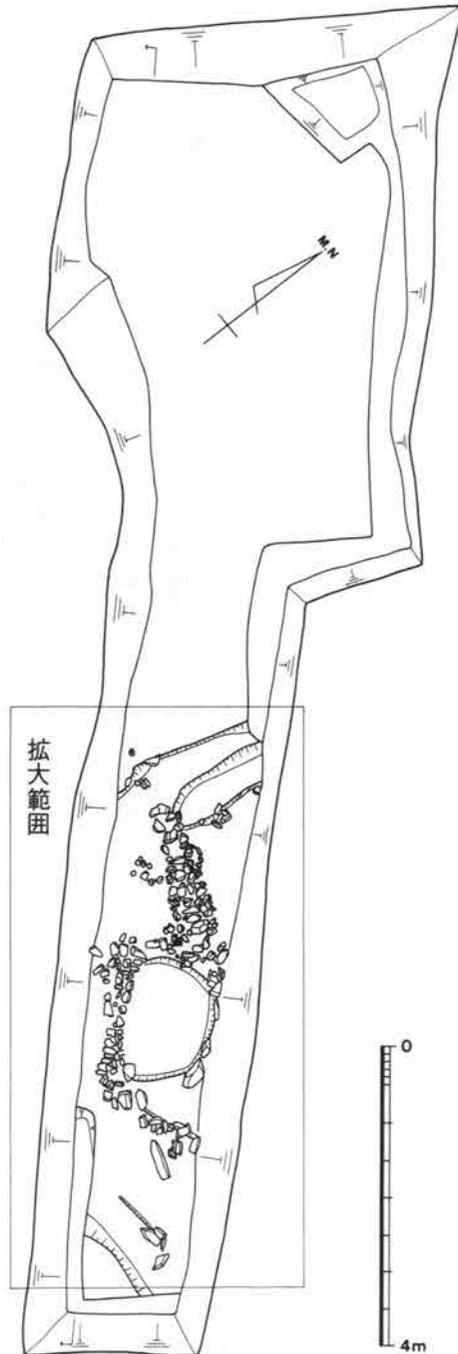


第32図 トレンチ配置図

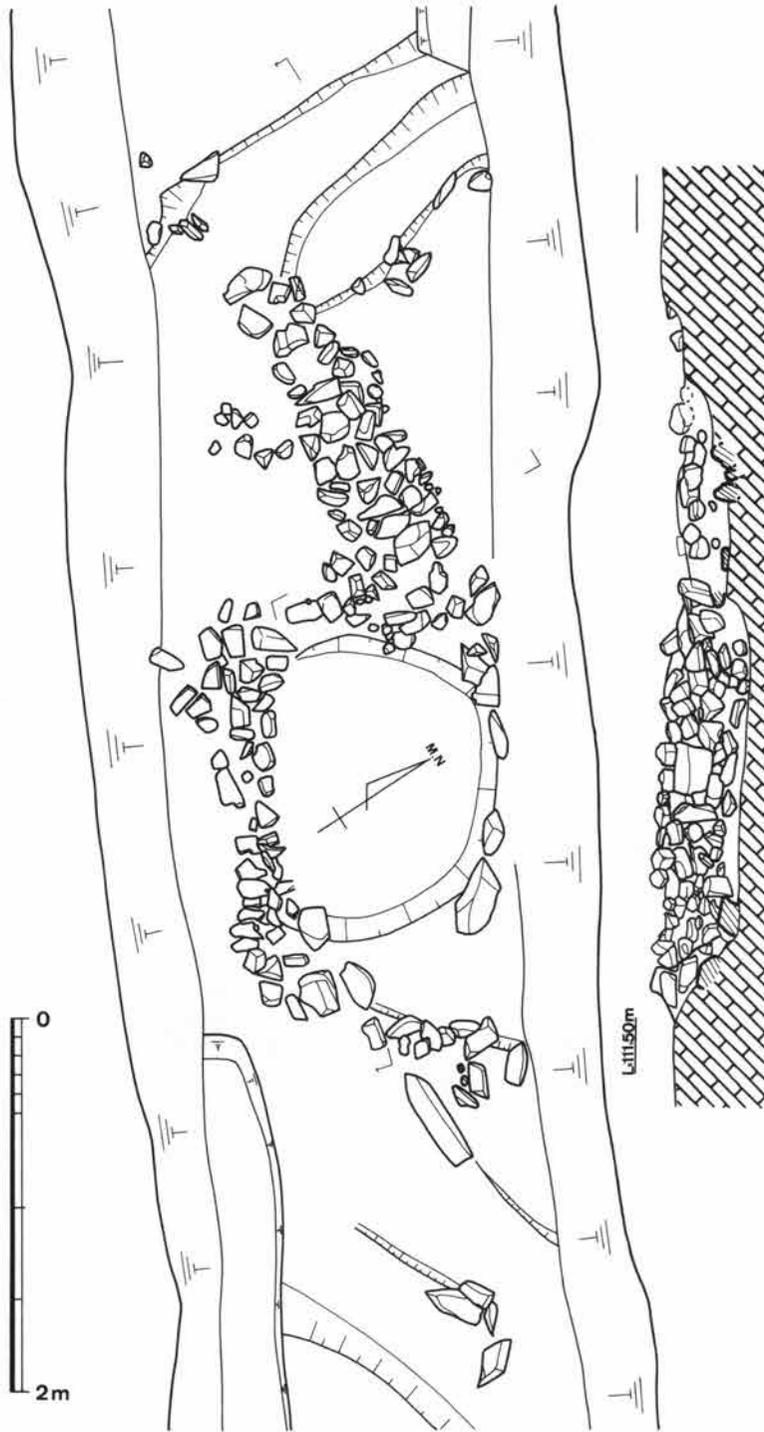
2 トレンチ 山裾の谷地形に設定した長さ約16m・幅約2.5mを測るトレンチである。表土下約40cmまで掘削したが、安定面は見られず、径5cm大から小児人頭大の礫が堆積していた。深掘り部分でさらに1mほど掘削したが、この下は礫混じりの灰色粘土層で遺物包含層も見られなかった。

3 トレンチ 2トレンチ1段下の水田部分に設定したトレンチである。長さ約15.6m・幅約3.8mを測る。土の堆積状況は2トレンチと同様であり、谷部分を通れた土石が堆積していた。図示はしていないが、この土石に混じって高さ約40cm・幅約30cm・厚さ約20cmの花崗岩に刻まれた石仏が出土した。この石仏はかなり表面が磨滅していることから、おそらく城山の山腹に安置されていたものが土石流とともに流されたものと思われる。

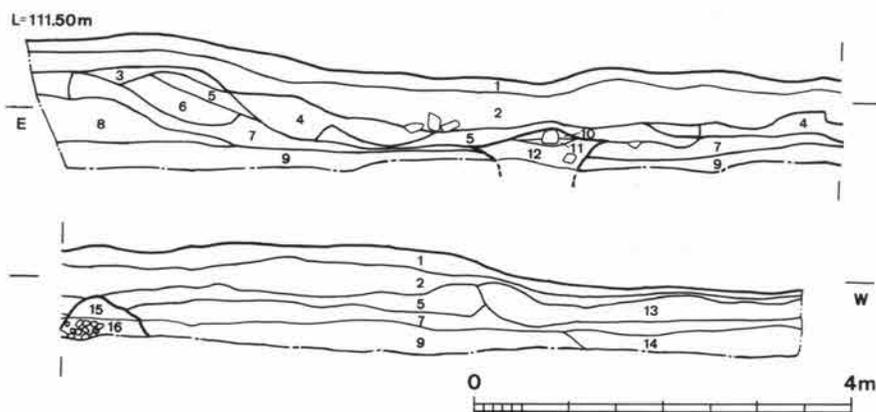
4 トレンチ 水田部分に設定したトレンチで、床土直下で遺構を検出した。検出した遺構は第3層で石組溝、土坑などがあり、第4層では礫敷遺構がある(第36・37図)。石組溝は長軸約340cm・幅約90cm、確認面からの深さ約30cmを測り、断面「U」字形を呈する。溝は現在の水田畦畔に沿って弧状にめぐっていた。溝の構造は、溝の肩部分を人頭大の角礫で固めるが、溝底部は素掘りのままである。溝の底面レベルは西側に向かって下がっており、西流したものと思われる。



第33図 1トレンチ平面図



第34図 1 トレンチ遺構実測図



第35図 1トレンチ南壁土層断面図

- | | | | |
|------------|-------------|------------|---------------------|
| 1. 表土 | 2. 黄褐色土 | 3. 暗黄褐色土 | 4. 暗茶褐色砂礫(炭化物を含む) |
| 5. 暗黄褐色土 | 6. 黄褐色砂礫 | 7. 暗黄褐色粘質土 | 8. 黄褐色砂礫 |
| 9. 黄褐色砂礫 | 10. 黄褐色土 | 11. 黄灰褐色土 | 12. 暗灰褐色粘質土(土師器を含む) |
| 13. 黄褐色粘質土 | 14. 暗茶褐色砂礫土 | 15. 黄褐色礫層 | 16. 黄褐色礫層(拳大の礫を含む) |

溝埋土は暗黒灰色の砂礫混じり土であった。しかし、この溝の検出面は水田床土直下であり、レベルの高い東側では石組溝に使用されたと思われる礫が床土中に包含されたり、遺構検出面に散乱していたことから考えても、開墾時に削平を受けたことが予想される。出土遺物は溝埋土から土師器皿、また上面包含層から須恵器長頸壺などが出土している。また、第4層で検出した石敷遺構は拳大から人頭大の礫が乱雑に重なっており、とくに面をそろえていないこと、石の下層は未分解の腐植土であること、そしてさらに下層は旧流路に伴う粘質土が堆積していることから考えて、軟弱な地盤に対する地業であったと思われる(第38図)。なお、この石敷間の土中で瓦器椀が出土した。

5 トレンチ 水田部分に設定した長さ約22m・幅約2.5mのトレンチである。水田床土の下は灰色粘土であり、さらにその下には時期不明の植物遺体を含むピート層であった。特に、出土遺物は見られなかった。

6 トレンチ 5 トレンチ同様、水田部分に設定したトレンチである。長さ約18m・幅約2.6mを測る。トレンチ内では水田床土下から切り込まれる平面方形を呈する土採り穴が見られた。これらに伴って瓦が出土した。この下層では植物遺体が見られた。

7 トレンチ 瓦工場に隣接する空き地部分に設定したトレンチで、長さ約17.3m・幅約3.2mを測る。このトレンチでは以前使用されていた瓦窯跡を2基確認した。それ以外、遺構・遺物とも確認できなかった。

8 トレンチ 城山と妙見山から派生する尾根ととの間の谷部分に設定した。表土下小礫層

で土石が堆積していた。特に遺構・遺物は見られなかった。

9トレンチ 竹林部分に設定した。長辺約30m・短辺約11.5m・幅約3mを測る「L」字形のトレンチである。このトレンチでも土石の堆積が見られたほかは遺構・遺物とも確認できなかった。

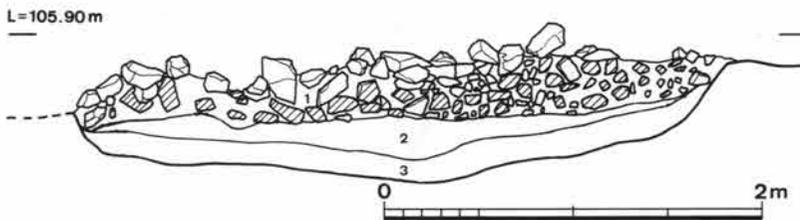
10トレンチ 斜面側に張り出す馬蹄形を呈する土塁状痕跡の残る、その直下に設定したトレンチである。幅約3.5m・長さ約26mを測る。この土塁状痕跡直下で幅約1.5m・深さ約30cmを測る溝状遺構を確認した。また、トレンチ中央から下部にかけては径約1mの範囲で人頭大礫が集石する集石状遺構を検出した。断割を行ったが、集石の下部で遺物の出土は見られなかった。しかし、集石の脇から完形の瓦器皿が出土したことから、遺構の可能性も考えられる。



第36図 4トレンチ第3層検出遺構実測図

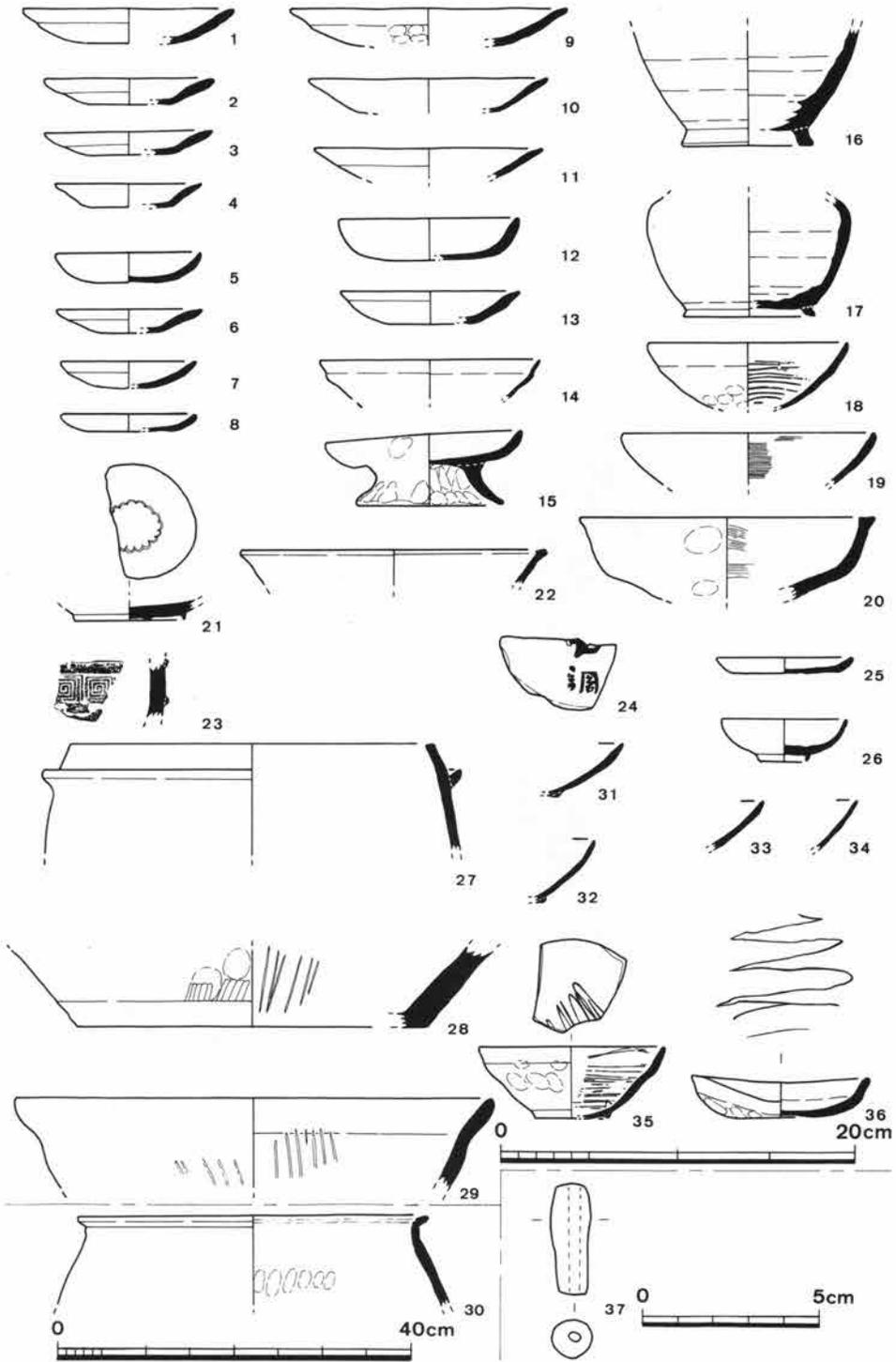


第37図 4トレンチ第4層検出遺構実測図



第38図 4トレンチ第4層石敷遺構断面図

1. 暗茶褐色粘質土 2. 暗茶褐色腐植土 3. 暗灰褐色粘質土



第39図 出土遺物実測図

3. 出土遺物(第39図)

1・4・10の各トレンチから出土した遺物の概要を述べる。1トレンチから出土した遺物は土師器皿(1~14)・瀬戸美濃灰釉皿(21)・瓦質火舎(23)などがある。出土遺物の大半は図示したとおり土師器皿である。破片が多いため詳細は不明であるが、大きさには直径が4.0cm程度のもの、5.0cm程度のもの、6.0cmを超えるものの3タイプがあると思われる。口縁部の特徴は外反するものと内湾するものとに大別できる。これらの土師器皿は、口縁端部の特徴から16世紀に比定できる。土師器の台付き皿(15)は、粗雑なつくりで全体に歪みが激しい。脚部は内外面とも指頭圧痕が顕著に残り、脚部の貼りつけにはヘラ状工具によりナデている。瀬戸美濃灰釉皿(21)は見込み部分に印刻花文を持つ。瓦質土器の火舎(23)は貼り付け突帯間に雷文をスタンプしている。4トレンチから出土した遺物は16~28・30~35・37である。遺物には須恵器(16・17・24)・土師器(25)・白磁皿(26)・丹波焼甕(30)・瓦器椀(31~35)・土錘(37)などがある。長頸壺(16・17)は体部から底部にかけての破片である。杯底部と思われる破片(24)は、「□調」と思われる墨書が認められる。白磁皿(26)は内面見込み部分には重ね焼きのため釉を拭き取ったと思われる露胎部分が残る。丹波焼甕(30)は、内面に粘土輪積み痕が残り、その周囲には指オサエの跡が残る。瓦器椀(31~34)は口縁部片である。下層の石敷から出土した瓦器椀(35)は暗文の残りが比較的よい。高台は断面逆三角形を呈している。10トレンチから出土した遺物は瓦質摺り鉢(29)・瓦器皿(36)である。瓦器皿(36)は、焼成は良好であるが、焼歪みが大きい。見込み部分には簡略化された暗文が見られる。

4. おわりに

今回の試掘調査では堂山窯跡に関連する資料は残念ながら得られなかった。この窯跡は以前に調査された記録もあることから、路線外に存在すると思われる。また、八木城跡に関連するトレンチの中で、1トレンチの遺構は出土遺物の時期に差が見られるが、遺構の位置付けは八木城の時期に符合する16世紀末~17世紀のものと思われる。一方、4トレンチで確認したのは八木城が築造される以前の中世の遺構・遺物である。これらは水田床土直下で検出したことから八木城の時期の遺構は削平されたと思われる。また、包含層から出土した長頸壺などの須恵器は、城山に堂山及び古谷窯跡など須恵器を焼成した窯跡が分布しており、これらはいずれかの窯跡の資料の可能性はある。今回は遺構・遺物の広がりを確認する調査であったため、今後の試掘ならびに面的調査に期待が持たれる。

(柴 暁彦)

- 注1 調査参加者は下記のとおりである(順不同・敬称略)。
橋本 稔・吉岡孝博・見須俊介・横山成己・大窪淳司・中井依子・八木知子・吉原淑子・福島
鈴代・潮田常明・田井道夫・井上友子・久世淑子・片山 泰・前田千枝子・仲 正和・中西セ
ツ・和久朝子・吉川静江・人羅幸子・井尻千代子・前原清美・山口利五郎・宮崎紗知子・広瀬
辰次・田村末雄・湯浅義雄・竹上てる・斉藤澄代・竹上美代子・松本末野・黒田美代子・谷口
明子・大槻益子・土井正文・明田安男・川勝貞夫・八木やす子・廣瀬作二・福島 勝・八木春
代・村上典子・岡本美和子・萩野富沙子・牧野當子・松尾幸枝・松下道子・丹新千晶・新谷幸
子・森川敦子・三澤繁忠・松崎才枝・田中文美・堀 源一・佐々木理・国重和江
- 注2 引原茂治「小谷遺跡・小谷17号墳」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財
調査研究センター) 1990
- 注3 引原茂治ほか「3. 医王谷3号墳・医王谷焼窯跡」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京
都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注4 清水眞一「土師器・長頸壺に関する一考察」(『橿原考古学研究所論集第九 創立50周年記念』
吉川弘文館) 1989
- 注5 古瀬清秀「4 農具」(河上邦彦ほか編『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品) 1991
- 注6 小野山節「馬具と乗馬の風習」(『世界考古学大系』3) 1959、山ノ井清人「環状鏡板付轡の
編年と系譜」(『唐澤考古』2 唐澤考古会) 1982、花谷 浩「馬具」(『湯舟坂2号墳』
久美浜町教育委員会) 1983、岡安光彦「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型
式学的分析と編年—」(『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会PHALANX) 1984、坂本
美夫「板状立開素環鏡板付轡」(『甲斐考古』46号 山梨県考古学会)、荒川 史「環状鏡板付
轡の問題点」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
1987など参照。
- 注7 中村孝行「安国寺平山古墳発掘調査概報」(『京都府綾部市文化財調査報告』第14集 綾部市
教育委員会) 1987
- 注8 小野山節・本村豪章「上毛野・伊勢崎市恵下古墳出土のガラス玉と須恵器と馬具」(『MUS
EUM』357 東京国立博物館) 1980
- 注9 近藤義郎「第3章 中宮1号墳発掘調査報告」(近藤義郎・中島壽雄『佐良山古墳群の研究』
第1冊 津山市) 1952
- 注10 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」(『古代学研究会』111 古代学研究会)
1986、同「畿内およびその周辺の横穴式石室雑考」(森 浩一編『考古学と生活文化』同志
社大学考古学シリーズV) 1992
- 注11 京都学園大学考古学研究会「栢田16号墳」『古道』3 1984
- 注12 注3文献
- 注13 園部町教育委員会「天神山古墳群—現地説明会資料—」1985
- 注14 注13に同じ
- 注15 平良泰久他「曾我谷遺跡発掘調査概報」(『園部町埋蔵文化財調査報告書』第2集 園部町教
育委員会) 1977

2. 第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要

(内里八丁遺跡・口仲谷古墳群)

はじめに

内里八丁遺跡の発掘調査は、第二京阪道路建設に先立ち、建設省近畿建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

第二京阪道路関連遺跡の調査は、昭和63年度の新田遺跡(八幡市域)・内里八丁遺跡の試掘調査に^(注1)始まる。

新田遺跡の調査では、路線帯内の全域が木津川の旧河川部にあたり、すでに遺跡が消滅しているとの判断から、トレンチによる試掘調査で終わっている。

内里八丁遺跡では、第二京阪道路建設ルートの東隣りを北流する防賀川が、その流れを西北に転じる付近で遺構の検出をみたため、面的な本調査に切り替えることとなった。この本調査対象地は、農道と防賀川によって3つの地区に分けられることから、南からA・B・Cの3地区を設定し、平成元年度から南部のA地区で本調査を開始している。A地区の調査ではこれまでに4時期の遺構面の存在を確認し、第1～3遺構面の調査を終了して^(注2)いる。A地区第1～3遺構面の概略は以下のとおりである。

第1遺構面(飛鳥～奈良時代・鎌倉時代) 海拔約11.7mに位置する。掘立柱建物跡1棟・総柱建物跡4棟・竪穴式住居跡1基・井戸跡1基・溝跡多数を検出している。代表的な出土遺物としては石帯(丸柄)・墨書土器(SE02)があり、7世紀中葉～8世紀に属する土器が多量に出土している。

第2遺構面(古墳時代前期) 海拔11.4m付近に位置する。古墳時代初頭の方形周溝墓・古墳時代前期の溝跡等を検出した。代表的な遺物として溝(SD39)から一括性のある布留式土器が出土したほか、包含層中から鶏形土製品の出土をみている。

第3遺構面(弥生時代後期末) 海拔11.0m付近に位置する。68枚の小区画水田跡を検出している。水田を覆う洪水砂中から甕・器台等(畿内V様式)が出土している。^(注3)

今回の報告は、平成3年4月16日～平成4年1月10日の間で実施した内里八丁遺跡A地区第4遺構面(弥生時代後期水田跡)とB地区第1遺構面(中・近世)について行う。また、平成4年1月13日～平成4年2月28日の間で実施した、綴喜郡田辺町口仲谷古墳群の調査報告も合わせて行う。

なお、今回の報告に使用した挿図の方位は、内里八丁遺跡は座標北、口仲谷古墳群は磁北である。

発掘調査は、調査第2課調査第3係長小山雅人・同調査員竹原一彦が担当し、本概要の執筆は竹原が担当した。調査を行うにあたり、八幡市教育委員会をはじめ数多くの機関から協力を得た。また、現地調査には、多くの方々の参加と御助言を賜った^(註4)。記して感謝の意に替える。なお、調査にかかる費用はすべて建設省近畿地方建設局が負担した。

位置と環境

内里八丁遺跡のある八幡市は山城盆地の南部にあり、西に京都府と大阪府の境でもある男山丘陵を配し、北と東には三重県布引山地に源を発する木津川が流れる。このため、八幡市は大きく二つの地域に分かれる。西の男山丘陵とそれに続く河岸段丘、東の沖積平野に分かれ、内里八丁遺跡は木津川が形成した沖積平野部に位置する。

八幡市域では、丘陵部と沖積平野のいずれにも、多数の遺跡が分布していることが知られている。以下、時代を追ってこれらの遺跡を概観していく。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は少なく、わずかに男山丘陵の金右衛門垣内遺跡が知られるのみである。この遺跡からは、ナイフ形石器や切目石錘が出土している。

弥生時代に入ると遺跡数も増加し、男山丘陵部では弥生時代中期の金右衛門垣内遺跡・幣原遺跡、銅鐸が出土した式部谷遺跡、弥生時代後期の美濃山廃寺下層遺跡等がある。沖積平野部では、弥生時代後期後半の木津川河床遺跡がある。

古墳時代では男山丘陵上や段丘縁辺部に古墳が築造される。前期の古墳としては、茶白山古墳・石不動古墳・西車塚古墳・ヒル塚古墳といった50～100m前後の規模の前方後方墳・前方後円墳・方墳がある。中期古墳では、東車塚古墳・美濃山王塚古墳等の前方後円墳がある。前方後円墳でみれば、前・中期を通して市域北部の旧八幡地域に集中する傾向にある。古墳時代後期では、美濃山地区から田辺町大住地区にかけて狐谷横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群などの横穴墓が数多く造られる。このことは、美濃山地域周辺に移住させられたとされる隼人との関連が考えられている。古墳時代の集落の調査例は少なく、木津川河床遺跡で庄内式併行期の住居跡が検出されているのと、新田遺跡で5世紀のカマドを持った竪穴式住居跡が検出されているだけである。

奈良時代の遺跡の中で著名なものとしては、西山廃寺・志水廃寺・美濃山廃寺の3寺院跡と、四天王寺の創建瓦を焼いた平野山瓦窯が男山丘陵周辺部にある。

これまでみてきたように、八幡市域における調査の多くは男山丘陵周辺部であり、平野部での調査はわずかに木津川河床遺跡と新田遺跡のみである。丘陵部にみられる大型古墳を

築いた生産基盤を考える上で、今回の内里八丁遺跡の調査成果に期待が寄せられた。



第40図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

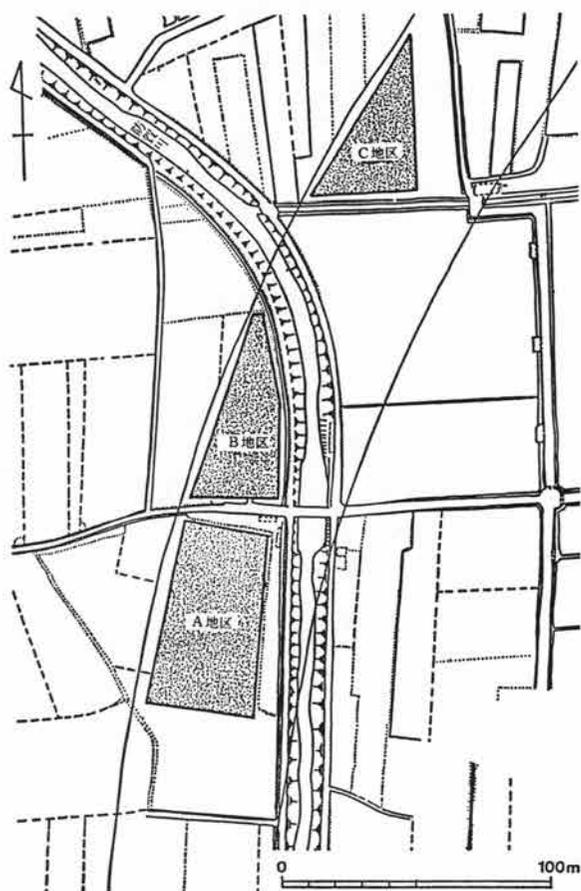
- | | | | | |
|-----------|--------------|------------|--------------|-----------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 口仲谷古墳群 | 3. 木津川河床遺跡 | 4. 川口環濠集落 | 5. 下奈良遺跡 |
| 6. 島遺跡 | 7. 戸津遺跡 | 8. 内里五丁遺跡 | 9. 上奈良遺跡 | 10. 上津屋遺跡 |
| 11. 西岩田遺跡 | 12. 新田遺跡 | 13. 魚田遺跡 | 14. 金右衛門垣内遺跡 | |
| 15. 荒坂遺跡 | 16. 石不動遺跡 | 17. 西車塚古墳 | 18. 東車塚古墳 | 19. ヒル塚古墳 |
| 20. 王塚古墳 | 21. 狐谷遺跡(横穴) | 22. 女谷横穴群 | 23. 荒坂横穴群 | |

(1) 内里八丁遺跡

1. 検出遺構

① A地区第4遺構面(第42図)

A地区の第4遺構面は、弥生時代後期末の水田跡を検出した第3遺構面下約20~30cm(海拔10.7m付近)に存在する。この遺構面の基盤土は暗灰色シルトであり、上層で検出した水田跡の基盤土(茶灰色粘質砂)と様相が大きく異なる。微地形にみる暗灰色シルト面は、調査地中央付近から東側が緩やかに上がり、中央以西はほぼ水平に近いが西北方向にやや下がる傾斜が認められる。調査区の西部から洪水砂により埋没した水田畦畔を検出した。中央部以東には水田畦畔が存在せず、水田土壌とみられる暗灰色シルト層が調査区内全域



第41図 調査区配置図

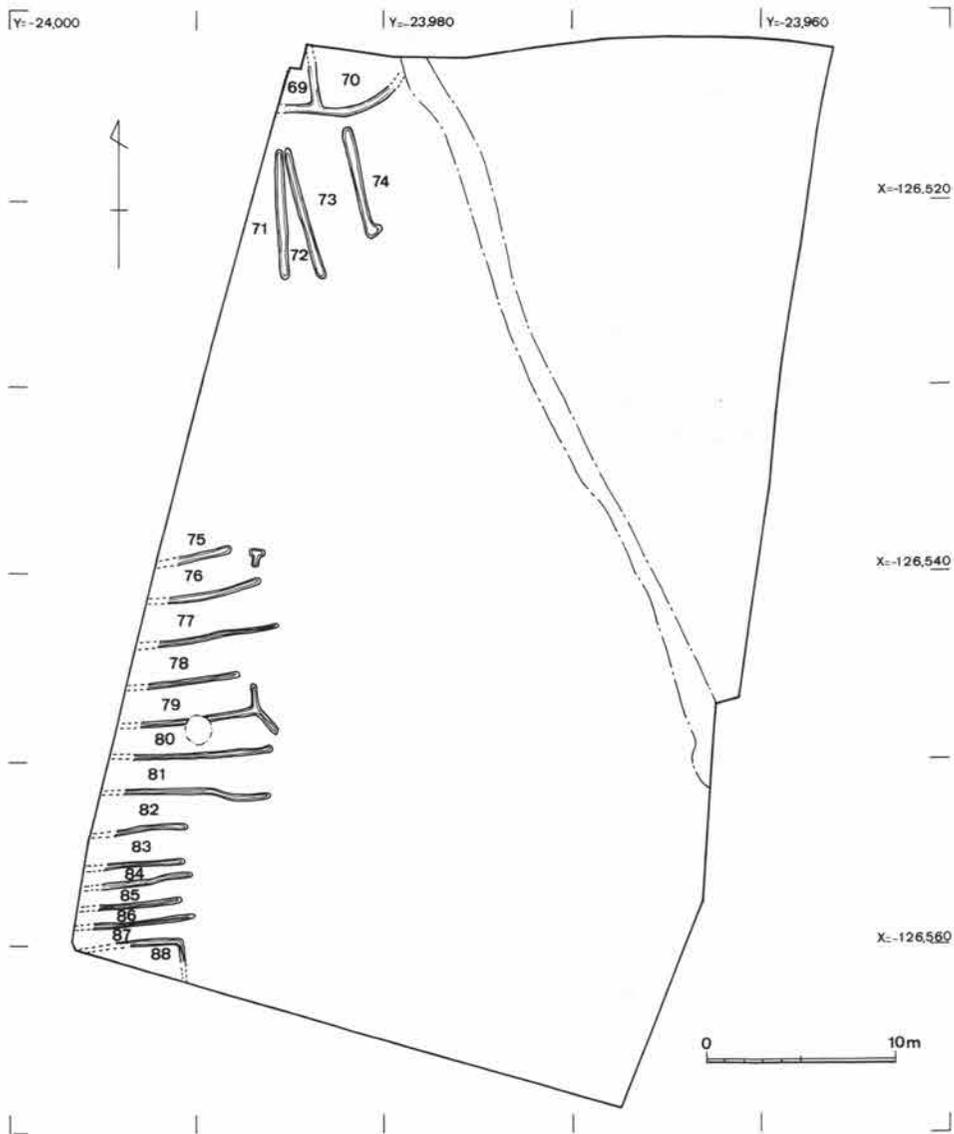
に広がっている。この第4遺構面では水田畦畔と水口を検出したが、上層水田跡と同様に水路等の遺構は存在しない。また、暗灰色シルト面には全域にわたり稲株痕跡の分布をみている。

水田遺構

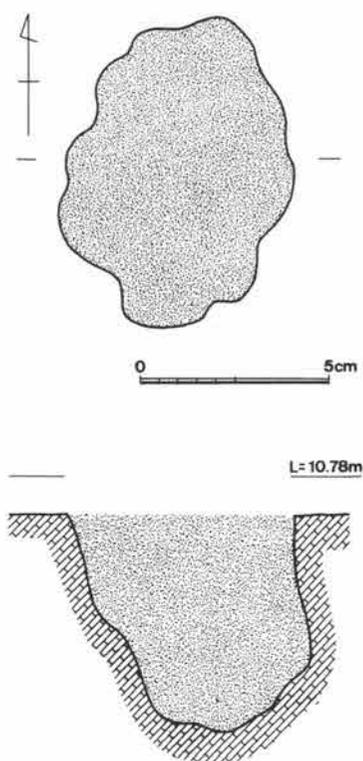
水田に伴う遺構としては、畦畔と水口を調査地西北部と西南部で検出した。

畦畔は、断面がカマボコ形を呈し、下端幅約30cm・高さ約15~20cmの規模を測る。水田土壌と同質土によって築かれているが、畦畔部分の土壌はやや明色を呈している。断面観察の結果、畦畔自体は水田土壌を盛り上げて築かれたことが判明した。水田1枚を完全に検出することができなかったが、畦畔に

よって区画された水田は、西北部と西南部では様相が大きく異なっている。西北部検出の畦畔は、上層水田と同様な規模・形状であることから、方形を意識した南北方向に長軸を取る小区画水田と考えられる。一方、調査地西南部で検出した畦畔は東西方向に直線的にのび、畦畔の間隔は北側の水田76～83で約2m、南端付近の水田84～87では約1mで配置されている。東西畦畔に直交する南北方向畦畔が一部にしか存在しないことから、水田は東西に細長い水田であったとみられよう。



第42図 A地区第4遺構面平面図



第43図 A種稲株痕跡

な曲線ではなく、輪花状の凹凸を認める(第43図・図版第33-(1))。小穴の底は丸みをもって終わり、やや傾斜する例が大多数を占める。

C種小穴は、他の2種と同様に5~7cm大の円形プランをもつものが多数を占めるが、一部には15cmを越える例も存在する。また、他の2種で看取された凹凸がなく、小穴の周縁ラインは単純な曲線である。深さは15cm以上を測るものが多数を占め、途中で屈曲する例も認められる。埋土は、粒子の細かい黒色もしくは灰黒色シルトである。

②B地区

B地区は、道路予定地と防賀川がともに大きくカーブして交錯する地点にあたり、A地区の北に位置する。東及び北側には北流する防賀川、南には条里に伴うと考えられる道路が存在する。調査区の中央には以前に実施した試掘トレンチ(No.11)が設けられている。試掘調査では、南端部で近世溝、中央付近で竪穴式住居跡様の遺構の存在が断面観察で確認されていた。また、特に遺物の出土が集中したことから、この地区は遺跡の中心部に位置するものと判断された。

西南部の水田76・79・80では東側を画する南北畦畔が認められる。畦畔の一部が途切れることから、この地点を水口と判断している。水田76では東北コーナーと西南コーナーの2か所に水口が設けられている。また、水田79には東北コーナー、水田80では東南コーナーにそれぞれ1か所水口が設けられている。

稲株痕跡

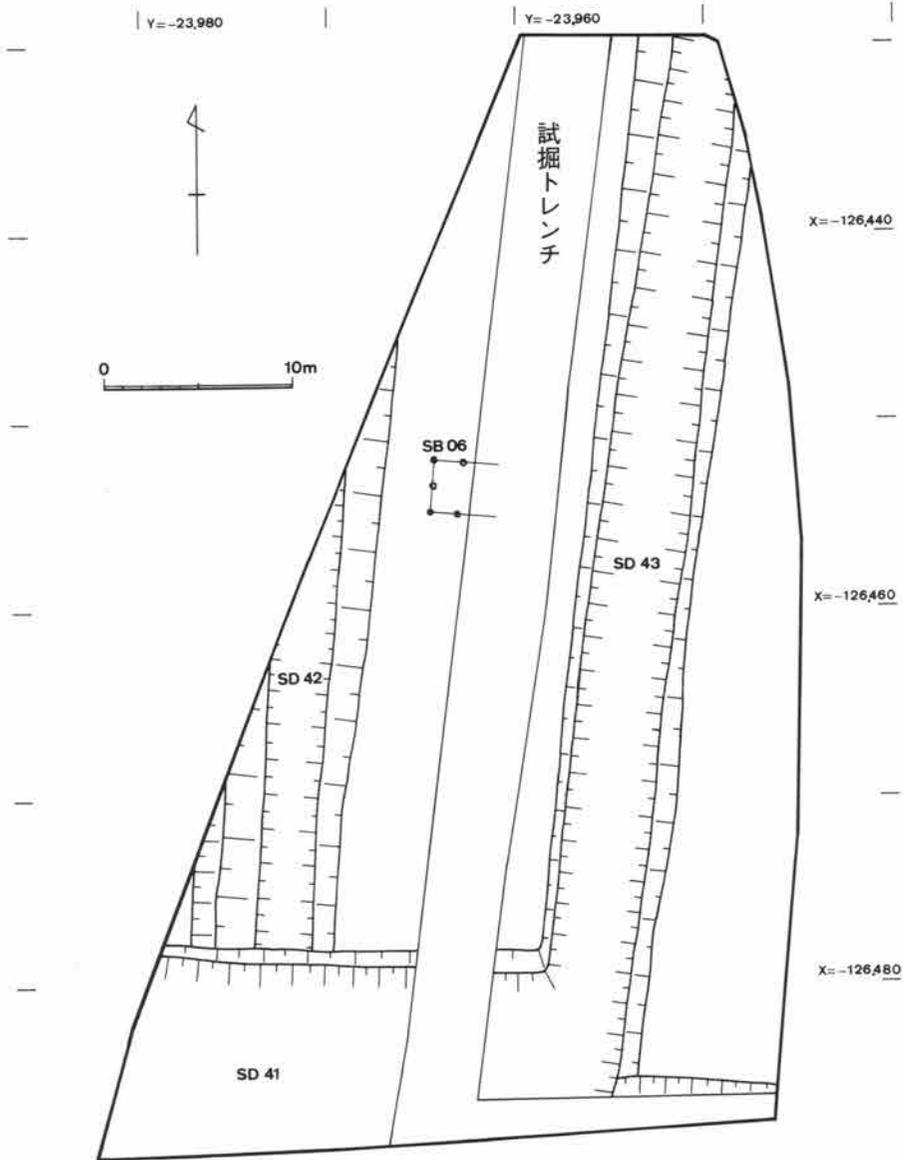
調査区全域には無数の小穴が分布している。小穴の埋土は一律でなく、3種類に大別できる。埋土の土質差により、洪水砂が充満したものをA種、洪水砂を含むが粘質土を主とするものをB種、黒色シルトが充満したものをC種とした。このうちA種とB種の小穴は規模・形状がほぼ同一であるが、C種小穴は他の2種と大きく異なる。

A種・B種の小穴は、直径5~7cm大の円形または楕円形プランをもち、深さ5cm前後を測るものが多数を占める。小穴の周縁ラインは単純

B地区第1遺構面(第44図)

B地区第1遺構面は地表下約30cmで検出し、海拔では約11.9m付近に相当する。検出遺構には、近世溝と中世の掘立柱建物跡1棟がある。

溝SD41 調査区の南端部で検出した東西方向溝である。溝の北肩部を検出したが南肩部は調査地外に位置する。検出した溝幅は約10m・深さ約50cmを測る。溝は、ほぼ同一地点に存在した小規模な流路の集合体であり、時期を経るごとに北に移動した溝の動きが



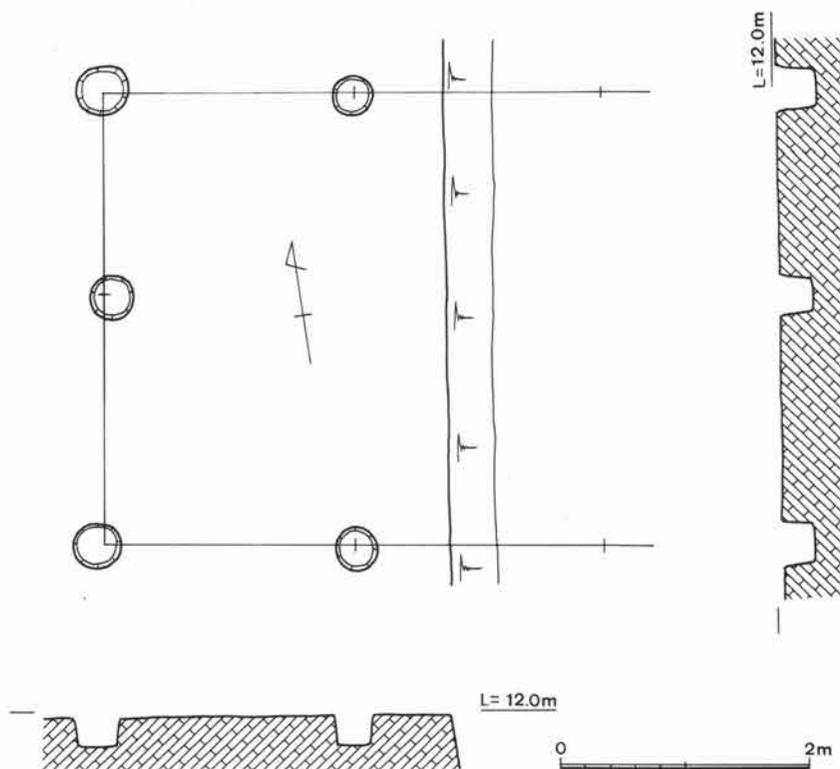
第44図 B地区第1遺構面平面図

土層の断面観察により読み取れた。また、最終段階の溝は直交する溝 S D43 と一体化し、「L」に屈曲する流れとなる。溝は短期間に埋まったとみられ、溝内には灰色系の砂及び粘質砂が互層状態で堆積し、各層から近世陶磁器が出土している。

溝 S D42 調査区西部で検出した南北方向溝であり、切り合い関係から S D41 に先行する。この溝も流れを東西に変えており、全体規模で幅約 8m × 深さ約 50cm を測る。最終段階の流れでは、幅約 3m × 深さ約 20cm を測る。近世陶磁器の出土をみている。

溝 S D43 調査区東部で検出した南北方向の溝であり、南端部は S D41 に接続する。この溝も流れを東西に変えており、全体規模で幅約 6m × 深さ約 50cm を測る。最終段階の流れでは、幅約 2.5m × 深さ約 30cm を測る。近世陶磁器の出土をみている。

掘立柱建物跡 S B06 (第45図) 調査区中央付近で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡東半部は試掘調査時に失われ、建物跡西半部の桁行 1 間 (約 2m) × 梁間 2 間 (約 3.6m) を検出した。桁行列の柱穴跡が試掘トレンチ以東に存在しないので、建物跡は桁行 3 間 (約 6m) と推定される。柱穴掘形は円形で、直径約 30cm × 深さ約 20cm である。掘形内埋土は黄色砂質土で、埋土中から瓦器碗の破片が出土した。方位は北から東に約 9° 振る。



第45図 B地区 S B06実測図

2. 出土遺物

A地区第4遺構面の調査では、下層水田を覆う洪水砂中から弥生時代後期に属する土器と、水田土壌中から石器の出土をみている。また、B地区第1遺構面の調査では、弥生時代後期～江戸時代に属する多量の遺物が出土した。B地区については、中世以降の代表的な遺物を図化した。

①弥生時代(第46図1～5・第47図15～17)

甕(1～3) いずれも複合口縁を持つ甕である。1・2は、口縁が内湾ぎみに立ち上がる一方、外面は強い横ナデにより外上方に傾く。体部外面はハケメ調整。内面は上半部が横方向、下半部が縦方向のヘラケズリである。3は、いったん「く」字に外反した口縁を上方にのぼして複合口縁をつくり、外面に擬凹線を施す。体部外面は左下がりのタタキを施し、内面はハケメ調整する。

甌(4) 小さな底部の中央に、直径約1.2cmの焼成前穿孔をもつ。深身の体部は外上方に開き、口縁部は内湾ぎみに丸く終わる。内外面は、ハケメ調整である。口径15.6cm・器高9.6cmを測る。

台付鉢(5) 丸みをもつ体部に強く開く脚台が付く。口縁部は内湾して丸く終わる。胎土は精良で、内外面はていねいにヘラミガキする。

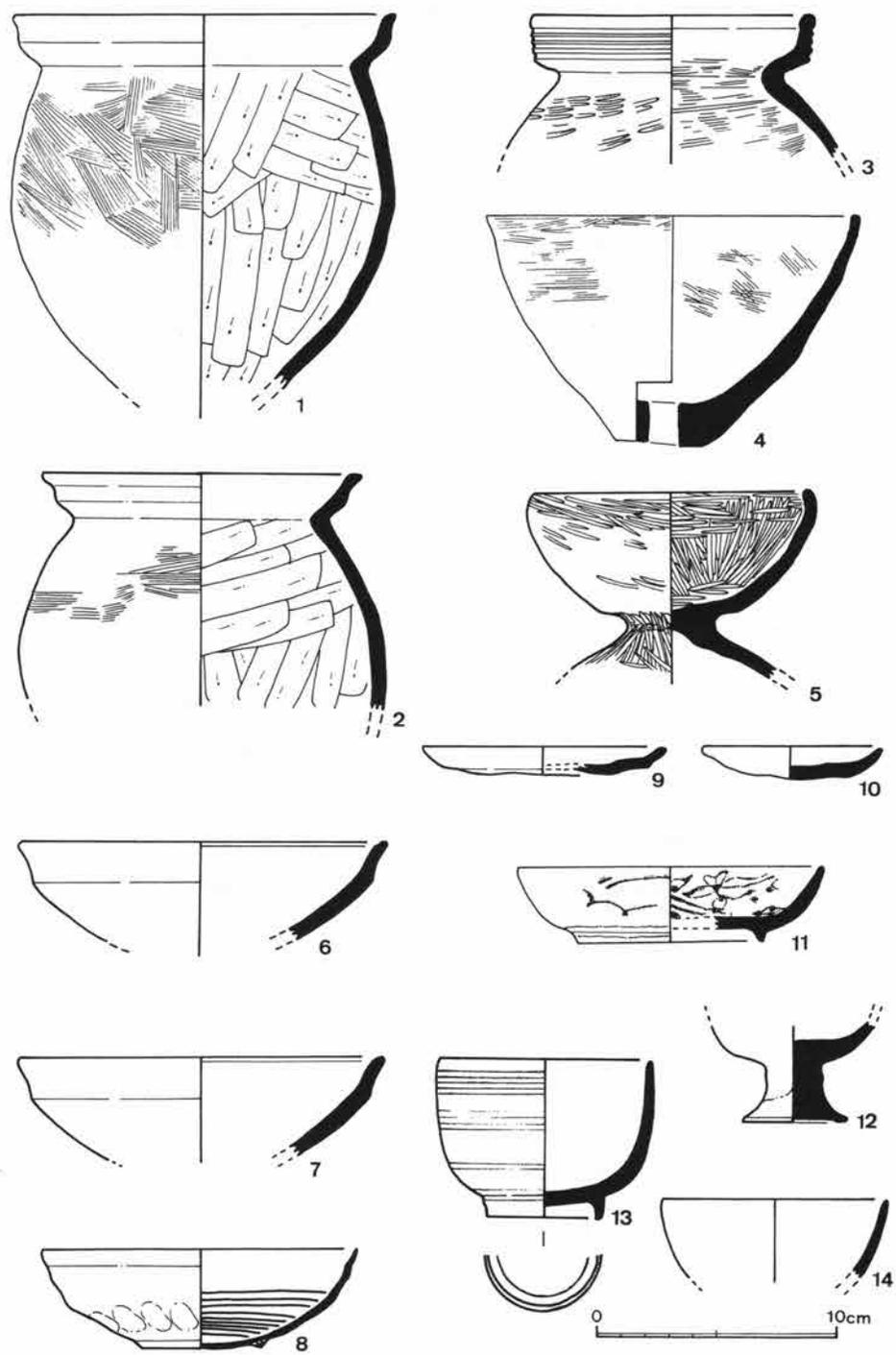
打製石鎌(15・16) サヌカイト製の凸基有茎鎌である。15の縁部調整は入念に実施され、二等辺三角形を呈する鎌身部は端正に仕上げている。16は、先端部がやや鈍角に開き、鎌身部に比べて茎部が大きい。

磨製石斧(17) 太型蛤刃石斧である。基端部と刃縁部幅は差がなく、全面がていねいに研磨される。刃部の表裏両面は特に滑らかに仕上げられるが、基部と刃部間の鑄は明瞭でない。

②鎌倉時代～江戸時代(第46図6～14)

瓦器椀(6～8) 6・7は、器高が低く皿に近い器形であり、器壁は厚い。口縁部は強い横ナデによりアクセントを付けてやや内傾した後、外反して終わる。口縁端部内面には沈線がめぐる。内面には粗い暗文が施されたとみられるが、器面の残りが悪く不明である。口径15.4cm前後である。8は、丸みを持った体部は器壁が薄く、いびつに仕上がる。口縁端部内面に沈線がみられず、内面の暗文は粗い。底部には、断面三角形の簡単な高台が張り付けられる。口径14.3cm・器高4.3cmを測る。6は、S B 06の柱穴内から出土している。7・8は、包含層出土である。

土師器皿(9・10) いずれも小型の皿であり、S D 41の出土である。9は、口径10.2cm・器高1.2cmを測る。10は、口径7.6cm・器高1.3cmを測る。



第46図 出土遺物実測図(1)

陶磁器(11~14) 11は、内外面に草花文を描いた伊万里の皿である。口径12.8cm・器高3.1cmを測る。S D41の出土である。12は、S D43から出土した仏飯器である。脚部上半以上を釉掛けし、外面には淡い藍色の圏線を描く。13は、伊万里系とみられる半筒椀である。畳付きを除いて全面に施釉され、外面には淡い藍色の圏線が描かれる。口径14.9cm・器高6.6cmを測る。S D41の出土である。14は、S D42から出土した伊万里系の白磁椀である。

3. まとめ

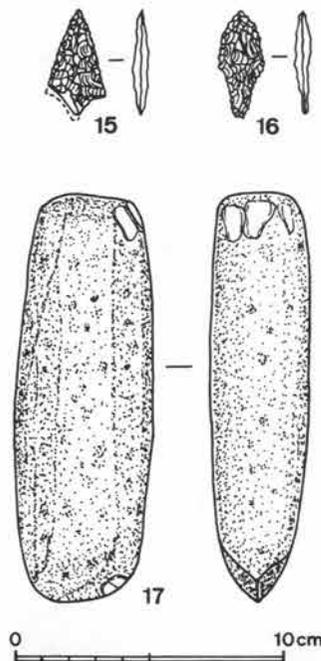
今年度はA地区での最終調査を行ったほか、新たにB地区で調査を開始した。

A地区では弥生時代の2時期の水田跡を検出し、上層水田跡の大部分は前年度に調査を終えている。今年度は、内里八丁遺跡で最も古い時期となる下層水田跡

の調査となった。上層・下層の水田跡は、大規模な洪水砂の堆積により埋没し、両水田を覆う洪水砂中には畿内第V様式に属する土器が含まれていた。出土した土器は流入遺物であり、水田の時期を確定するものではないが、上層水田跡に関しては上層・下層に存在する遺構面の調査から、ほぼ時期確定することができた。第2遺構面では上層水田を覆った洪水砂を切って方形周溝墓が築かれ、周溝内から畿内第V様式後半~庄内式に属する土器の出土をみている。一方、下層水田を覆った洪水砂には畿内第V様式前半とみられる土器が出土している。このことから、上層水田は弥生時代後期後半に営まれた水田であり、後期末頃に大規模な洪水にみまわれ、水田の復旧を実施することなく放棄されたとみられる。下層水田は、下限年代が弥生時代後期後半と判明している。水田の始まりに関しては不明な点が多いが、弥生時代中期にはさかのぼらないと現時点では判断している。

下層水田面に残る稲株痕跡と判断する小穴(A種・B種)は、上層水田面検出の稲株痕跡と同様であり特に異なるものではない。稲株痕跡は、およそ1㎡内にA種が34点、B種で12点前後で分布する。今回の調査では、新たにC種とした小穴の分布が認められた。C種小穴は、規模・形状から甲殻類(カニ等か)の巣穴である可能性が高い。

B地区では、鎌倉時代の掘立柱建物跡(S B06)のほか、条里に伴う近世の溝跡(S D41~43)を検出した。鎌倉時代の遺構は、これまでA地区南部で水田跡・柵列・溝等を検出



第47図 出土遺物実測図(2)

している。鎌倉時代面にみるA地区とB地区の比高差は約30cmを測る。立地・遺構の内容から微高地上のB地区が集落域、A地区は集落縁辺の耕作地といった土地利用がうかがえる。

鎌倉時代遺構面を切り込む近世溝は、幾度か流れの位置を変えるが、ほぼ同一場所にあることから、常に意識されていた水路とみられる。溝は、その方向性・位置関係等から、この地域に残る条里に伴う水路と考えられる。出土遺物の整理が進んでいないので、水路が造られた時期は不明であるが、ほぼ18世紀後半に埋没したことは明らかである。条里遺構は、今後実施する下層の調査成果と併せて検討したい。B地区調査では、これまでに近世溝・遺物包含層中から弥生時代後期～平安時代に属する遺物が多量に出土した。B地区は遺構・遺物の分布密度が高く、今後の調査に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

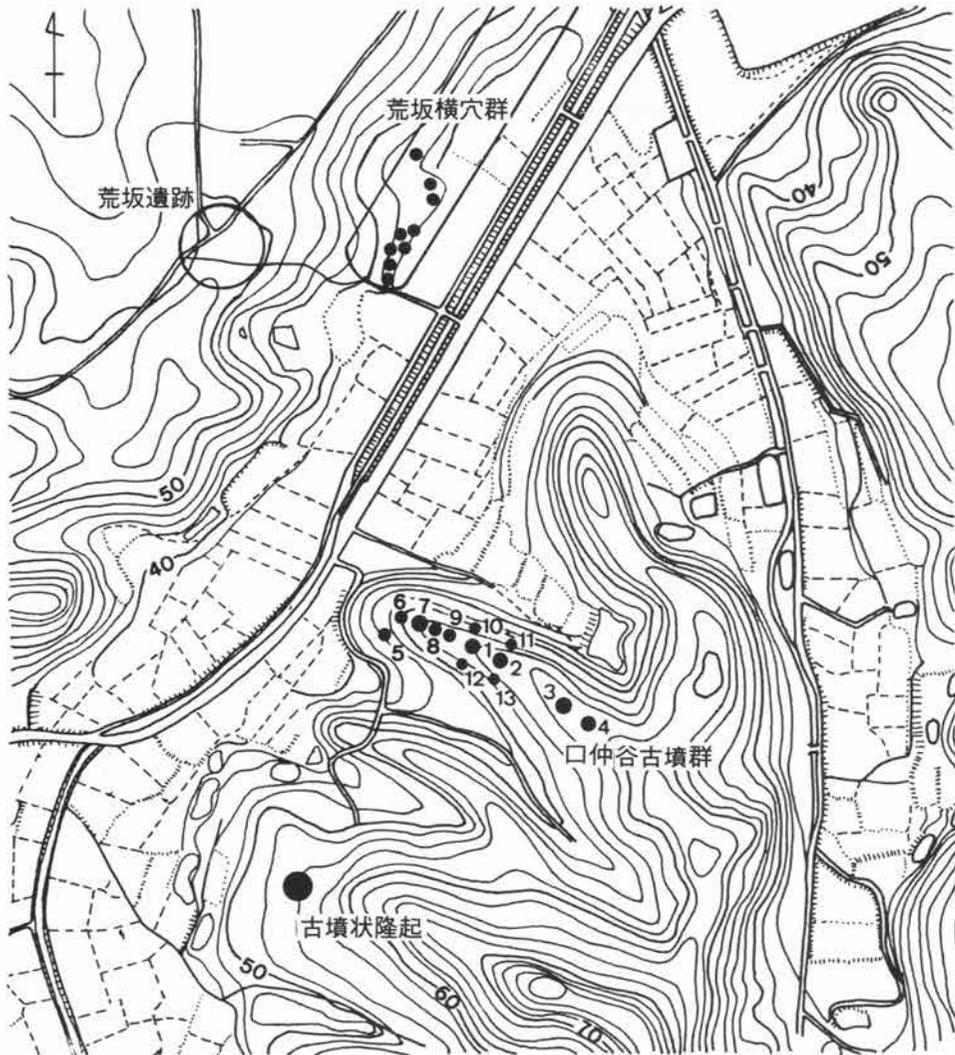


トータルステーションによる稲株痕跡測距風景

(2) 口仲谷古墳群

1. はじめに

口仲谷古墳群は、木津川の支流である大谷川右岸の低位丘陵(比高約14m)上に築かれた古墳群であり、綴喜郡田辺町口仲谷に所在する。これまで尾根筋上に4基の円墳が周知されている。今回の調査は、道路予定地に含まれた尾根先端部で新たに古墳状隆起を認めたことから、この古墳状隆起について実施したものである。発掘調査は平成4年1月13日～



第48図 口仲谷古墳群位置図(1/500)

2月14日の期間で実施した。

2. 調査の概要

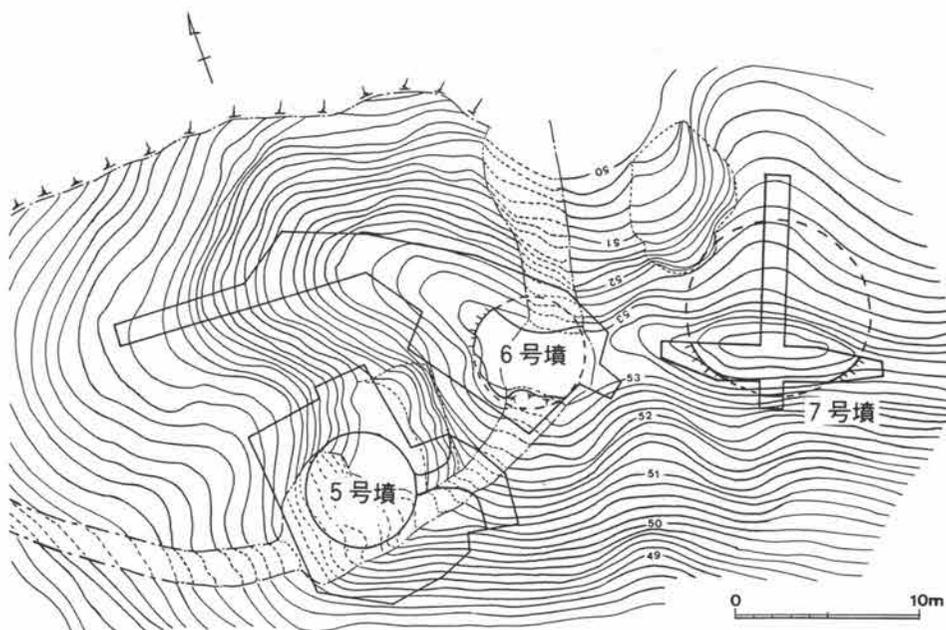
調査対象地は、調査開始以前に実施されていた樹木伐採に伴う重機投入により、古墳状隆起の一部がすでに削平を受けていた。調査に際しては、重機の削平地点を中心に精査を行うとともに、尾根筋上と尾根中腹の平坦地に試掘トレンチを設定した。

尾根筋上に設けたトレンチでは、砂・礫・粘土層より構成される洪積層(大阪層群)が表土層直下で検出された。尾根頂部の調査では2か所から古墳の痕跡を検出した。また、尾根中腹に設けたトレンチでは、円墳1基を検出した。検出した3基の古墳は周知の古墳ではなく、今回新たに5号墳・6号墳・7号墳の名称をつけた(第49図)。

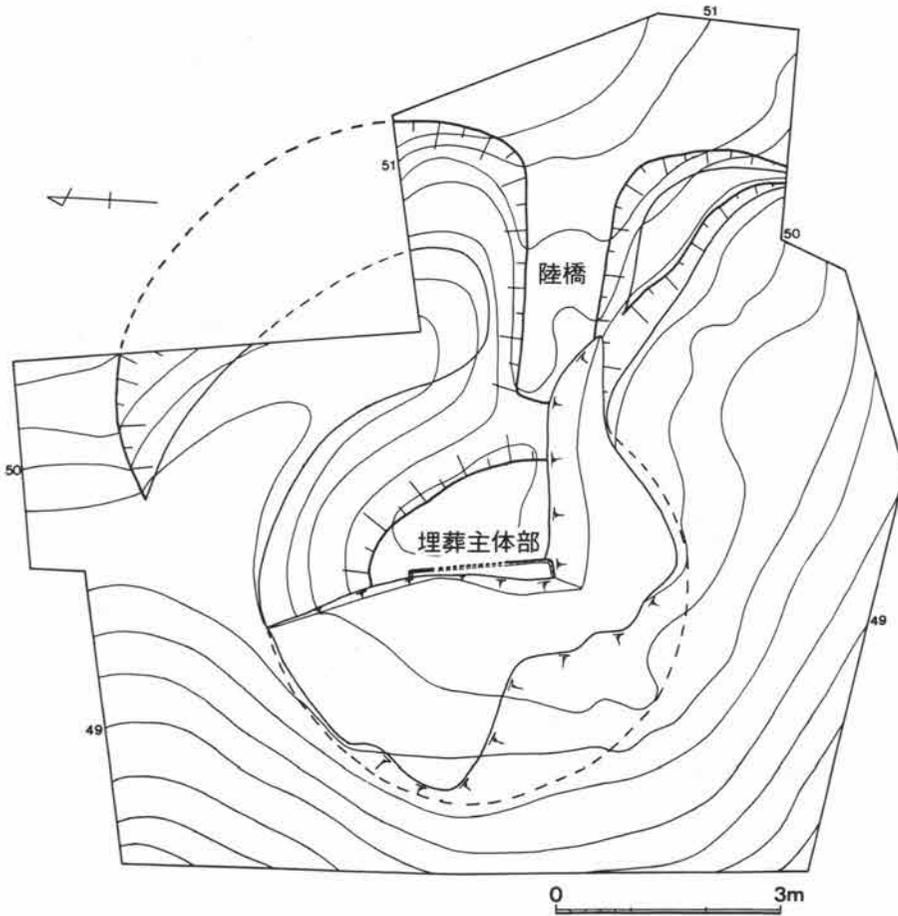
①5号墳(第50図)

地形測量段階では尾根の南側中腹に存在した小規模な平坦地であり、南半部が重機で大きく削られ、当初は古墳と認識できなかった。試掘調査の結果、地山の削り込み事業と墳丘の盛り土を検出したことから、古墳の存在を確認した。

検出した古墳は円墳で、直径約6m・高さ約1mの規模を測る。墳丘の最高所は標高約51.6mである。古墳は、平坦地の北に続く主尾根側斜面を大きく削って古墳の基盤面を造った後、盛り土による墳丘を築いていることが判明した。斜面の削り込み事業は全域に及



第49図 口仲谷古墳群測量図(調査前)



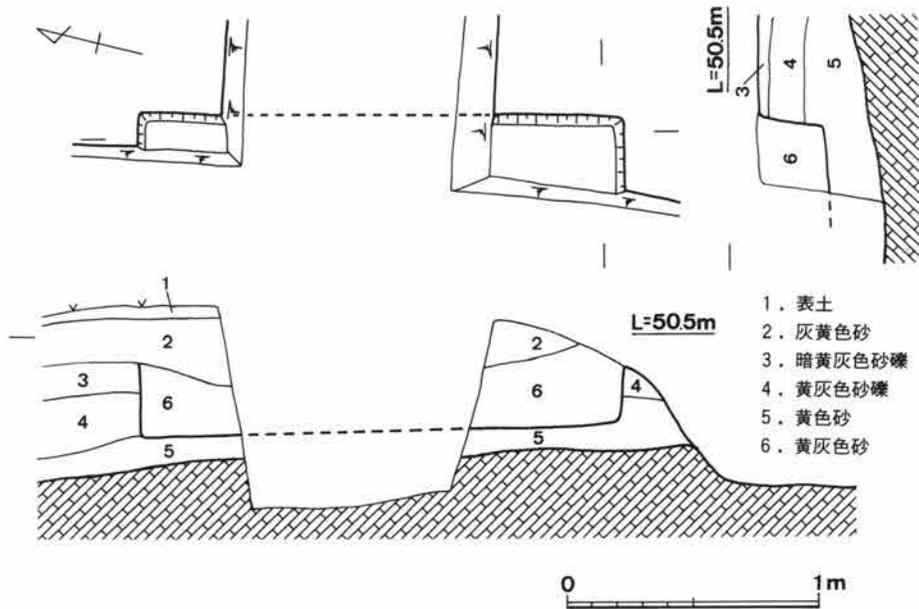
第50図 口仲谷5号墳墳丘測量図

ばず、古墳の東側を全長約2.8m・上部幅約80cmの範囲で断面台形状に削り残す。削り込みの地山断面には雑多な色調の砂礫層が広く露呈するが、墳丘盛り土は基本的にやや粗い灰色系の砂だけが使用されている。

古墳の中央から木棺直葬とみられる埋葬主体部1基を検出している(第51図)。埋葬主体部の規模は、全長約1.9m・幅60cm以上・深さ約60cmであり、主軸は北から西に約12°振っている。平坦な墓壇底は南側が高く、北側に向かって緩やかに傾斜する。埋葬主体部は南側半分がすでに消失していることから、その内容に関しては不明な点が多い。埋葬主体部を含め、5号墳の調査地内から遺物の出土はみられない。

②6号墳

標高約53mの尾根頂部の先端付近に存在した古墳であり、痩せ尾根の頂部がやや膨らんだ地点を利用して築かれている。墳丘西南部は下段の5号墳と陸橋を介して接続する。墳



第51図 5号墳埋葬主体部実測図

丘及び埋葬主体部は、重機による削平を受けてすでになく、地山面が広く露呈していた。尾根斜面の調査の結果、5号墳に近い西側斜面が円形に削り出されていたことから、古墳と認識したものである。墳丘基底部のラインからみて、直径約8m程度の円墳であったとみられる。古墳に伴う遺物の出土はみられない。

③7号墳

尾根筋上に存在する古墳であり、6号墳の南側に位置する。同じ尾根筋の南側約20mには、1号墳が存在している。古墳は、主尾根と支尾根の結接点の膨らみを利用して築かれている。2本の尾根筋上で実施した試掘調査では、尾根筋の西側斜面で墳丘ラインを検出したが、埋葬主体部等は検出できなかった。尾根の東側は過去の竹林整備に伴う土取り・土入れ等で地形が大きく改変され、墳丘の大部分がすでに失われていることが判明した。古墳は地山を円形に削り出して造られ、築造当時は直径約10m・高さ約1mの円墳であったと判断する。検出した墳丘の最高所は標高約54mである。古墳に伴う遺物の出土はみられない。

3. まとめ

口仲谷古墳群は、これまで発掘調査が実施されておらず、築造時期・性格等その内容に関しては全く不明であった。今回、古墳群が存在する尾根の先端部で調査を実施した結果、

5～7号墳とした3基の新たな古墳を検出したことから、この古墳群の内容の一端がおぼろげながら明らかとなった。以下、調査により判明した内容を簡単に述べる。

口仲谷古墳群は、今回の調査と周辺で実施した分布調査によって、直径約6～10m・高さ約1m程度の円墳13基で構成されることが新たに判明した。周辺の丘陵部は、特産の筍栽培に伴う竹林整備等で旧地形が大きく損なわれている場合が多く、今後の調査で新たな古墳が発見される可能性も高い。13基の円墳の大多数は尾根筋上に連続して築かれ、5号墳のみが尾根の中腹に存在する。

墳丘は、5号墳では斜面を平坦に削った後、墳丘自体は選別された盛り土で築かれる。6・7号墳は、墳丘削り出しと小規模な盛り土と考えられる。口仲谷古墳群の多くは、立地・規模等から6・7号墳と同様、墳丘削り出しと小規模な盛り土で築かれているとみられよう。

各古墳は5号墳と同様、埋葬主体部は木棺直葬とみられる。

口仲谷古墳群の時期に関しては、出土遺物がないことから確定が困難であるが、古墳時代後期とみている。

尾根先端の6号墳から中腹の5号墳の間には、墓道とみられる陸橋が設けられていた。尾根筋上に連続して存在する古墳間には顕著な丘陵切断溝がみられず、各古墳間は狭小な按部によって連なっている。各古墳間を結ぶ墓道として、この狭小な尾根筋按部が利用されたと考えられよう。

古墳時代前期末～中期中頃には、大住車塚・南塚古墳、美濃山王塚古墳などの首長墳が周辺地域で築かれるが、首長墳の系譜は美濃山王塚古墳の築造を最後に途絶える。これは美濃山王塚古墳以降、木津川対岸の久津川古墳群を形成した勢力が、南山城地域の覇権を確立したためであろう。

古墳時代後期の6世紀後半～7世紀初頭には丘陵東斜面を掘り込んで墓室とした横穴墓が数多く築かれる。口仲谷古墳群の北東約500mには松井横穴群、大谷川を挟んだ対岸の丘陵部には荒坂横穴・女谷横穴・美濃山横穴・狐谷横穴等の横穴群が築かれる。当地域は、南山城でも最も横穴の分布が濃密な地域であり、横穴群に関しては南九州の「隼人」との関連性が指摘されているところである。^(注5)

美濃山王塚古墳から横穴群が築かれる間、この地域では口仲谷古墳群の周辺に目立った古墳群の形成がみられない。口仲谷古墳群は、まだ時期確定に至らない古墳群であるが、この空白期間を埋め得る可能性がある。今後、残る古墳群の調査に期待が寄せられるところである。

(竹原一彦)

- 注1 三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 荒川 史・竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注2 竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注3 今年度の調査でA地区第3遺構面の東部で拡張を行った。拡張調査では水田畦畔・水口を新たに検出した。また、新たに検出した水田跡は8枚であり、前年度調査分とあわせ、上層水田跡は68枚となった。
- 注4 調査参加者
伊藤こず江・奥平廣子・北山貴美子・古城悟志・古谷哲也・今 芳也・近藤和江・榛村昌樹・中岡和男・西村華子・福田美枝・福田玲子・遠山光嗣・中尾友子・本田 香・森田千代子・山岡邦章・山内基弘・与十田節子・脇田友子
- 注5 海老瀬敏正ほか『田辺町遺跡分布調査概報』 田辺町教育委員会 1982

3. 木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要

はじめに

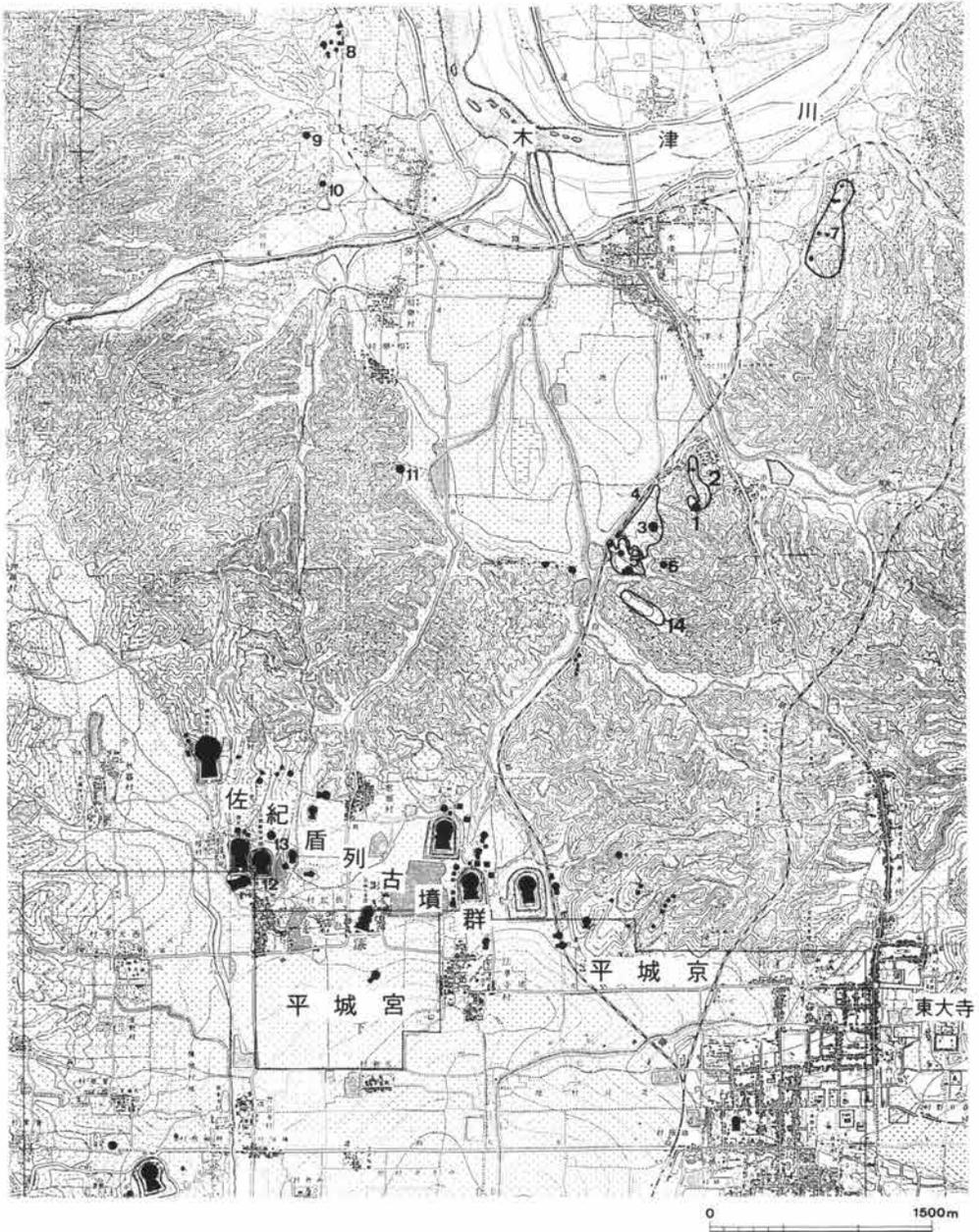
この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡群の調査である。平成3年度は、京都府相楽郡木津町大字市坂にある瀬後谷遺跡・西山塚古墳・西山遺跡の発掘調査を行った。

瀬後谷遺跡では、昨年度瓦窯2基の灰原を確認するとともに、トレンチ北壁で確認した焼土層の性格を明らかにし、また、上人ヶ平遺跡のような瓦工房跡の有無を確認するため、調査地を広げ発掘調査を実施した。その結果、昨年度トレンチ北壁でみつかった焼土層が窯体の一部(後述する3号窯)であることが明らかとなった。また、3号窯から広がる北側斜面の広範囲にわたって灰原を確認した。これらの灰原の様相から窯体自体は後世に削平されていて存在しないが、さらに数基の窯が予想できる資料を得た。灰原からは平城宮創建時の軒瓦のほか、多数の須恵器とともに土製の塔(瓦塔)も出土した。

西山塚古墳は、昨年度調査を実施した瓦谷古墳とは直線距離にして、約300mを測る位置にある。西山塚古墳は、『木津町史』資料編によると、「直径約28.0m、高さは約3.0mとなる」円墳で「墳頂部には4.0×7.5m、深さ0.7m程の盗掘坑^(注1)」が開けられている。今回の調査は、墳丘規模・周濠の有無・盗掘坑がある墳頂部での埋葬施設の様相を明らかにするため、発掘調査を行った。その結果、墳丘は26mを測る円墳で、幅5.0mの周濠がめぐり、墳頂部には『木津町史』資料編に記されたような盗掘坑が開けられており埋葬施設の大半が削り取られていた。ただ、盗掘坑によって削平された埋葬施設のほかに、新たに2基の埋葬施設を確認したが、調査期間の都合上、その2基の埋葬施設については、次年度以降新たに調査を再開することとした。

西山塚古墳の調査では、古墳が立地する平坦な台地上に、上人ヶ平遺跡と同様、古墳あるいは集落跡の所在が予想されたため、古墳の周辺の平坦地にもトレンチを設定した(西山遺跡D地点)。その結果、古墳時代前半期の竪穴式住居跡のほか、奈良～平安時代のもと思われる木槨構造をもつ木棺墓(古墳)を検出した。この古墳の棺内には、漆塗りの冠が副葬されていた。

西山遺跡(西山A地点)は、昭和62年度に実施した試掘調査で、幅2mの円形を描く溝のほか、土師器甕を2個、合わせ口にした甕棺墓(S X 6801)など^(注2)を検出していたが、周辺平



(仮製地形図に加筆)

第52図 調査地位置図(周辺遺跡位置図)

- | | | | | |
|---------|-----------------|------------|----------|-------------------|
| 1.西山塚古墳 | 2.西山遺跡 | 3.瓦谷古墳 | 4.瓦谷遺跡 | 5.上人ヶ平遺跡(上人ヶ平古墳群) |
| 6.幣羅坂古墳 | 7.燈籠寺遺跡(内田山古墳群) | 8.吐師七ツ塚古墳群 | 9.坊谷古墳 | |
| 10.白山古墳 | 11.音乗谷古墳 | 12.佐紀陵山古墳 | 13.マエ塚古墳 | 14.瀬後谷遺跡 |

坦部にも、遺構・遺物が確認される可能性が高いため、調査地を広げ、面的に発掘調査を実施した。発掘調査の結果、昭和62年度の試掘調査で確認していた「幅2mの円形を描く溝」は、古墳(方墳)に伴う溝であることが明らかとなった。またこの方墳のほか、新たに1基の方墳の周溝も確認した。この方墳の溝からは、家形埴輪のほか、周溝中に木箱に納められた状態で、勾玉・管玉・白玉のほか有孔円板などが多量に出土した。西山遺跡A地点では、方墳2基のほか、奈良時代の掘立柱建物跡(東西棟、2間×4間)も確認した。

以上の3遺跡について、その概要報告を行うが、西山塚古墳については、次年度以降、新たにみつかった埋葬施設、墳丘の構築方法を検討するための調査を予定しているため、今回は簡単にその概要のみの説明にとどめる。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員石井清司、同調査員竹井治雄・伊賀高弘が担当し、多くの補助員・整理員の協力を得た。^(注3)

なお、本調査に係わる経費は、住宅・都市整備公団、関西文化学術研究都市整備局が負担した。

(石井清司)

(1) 瀬後谷遺跡

1. 調査の経過

瀬後谷遺跡は、平城宮北方の奈良山丘陵の一画で、瓦工房跡として著名な上人ヶ平遺跡とは、丘陵を挟んだ南側の谷筋にある瓦窯である。

瀬後谷遺跡の調査は、昭和62年度から平成3年度までの5か年にわたり実施した。

第1次調査(昭和62年度)は、谷水田部に10か所の試掘グリッドを設定し、遺構・遺物を確認するための試掘調査を行った。^(注4)この試掘調査では、22btグリッドで灰原の流土と奈良時代の須恵器・瓦が多量に出土し、22btの西側に設定した21btグリッドでも遺物(須恵器・瓦・中世土師器皿等)が出土したので、この周辺に窯の存在を想定した。

第2次調査(昭和63年度)は、第1次調査の結果をふまえ、谷の南側斜面(試掘対象面積8,800㎡)の磁気探査を行った。その結果、22btグリッドに近接した6・7区でわずかに反応変化を示し、丘陵部でのある程度の試掘範囲を限定した。^(注5)

第3次調査(平成元年度)は、磁気探査の結果、丘陵部の試掘対象地が限定できたため、調査地を限定し、試掘調査を行った。第3次調査では、A地区・B地区・C地区に各トレ



第53図 調査区配置図

ンチを設定し、掘削作業を進めた結果、B・C地区では窯に関連した遺構・遺物はみつからなかった。ただA地区では、炭層の堆積する溝状遺構を検出し、同炭層から奈良時代の布目瓦・須恵器とともに窯壁の断片が散乱した状態で出土し、この周辺に本来あった窯が、後世の削平を受け、遺存しないものと考えた。^(注6)

第4次調査(平成2年度)は、第3次調査のAトレンチの西側にトレンチを設定し、掘削作業を進めた結果、後述するように瓦窯2基を確認した。ただ、平成3年1月から第4次調査を着手したため、瓦窯の本体・灰原の範囲等、十分確認できなかつた。^(注7)

第5次調査は、平成3年1月からの第4次調査で検出した1・2号窯の細部調査とともに、第4次調査の最終段階で検出したトレンチの北壁の焼土坑の規模を確認するために、第4次調査区の北側に小規模なトレンチを設定した。その結果、焼土坑は窯であることが明らかになり、急遽調査面積を広げ、窯の全容・窯に伴う工房跡などの追求につとめた。第5次調査では新たにみつかった3号窯のほか、窯本体は削平されて遺存しないが、灰原を広範囲で確認し、推定4・5号窯灰原とした。また、2号窯の灰原は遺存しないものと第4次調査の段階で考えたが、旧河道を挟んで2号窯に伴う灰原を確認した。この第5次調査でみつかった遺物は、各灰原から出土した軒瓦を含む瓦類のほか、3号窯に伴う須恵器・推定4号窯灰原に伴って須恵器・土製塔などがある。第5次調査でみつかった3号窯が田畑の耕作土の下4mで、現在の地形からみると谷部にあたり、多量の流土が瀬後谷の谷部に堆積したと考えられるため、谷部を中心に試掘トレンチを6か所設定し、掘削したが、窯などは検出できなかった。

2. 検出遺構

前述のように、第1～3次調査では明瞭な遺構は検出できなかったが、第4・5次調査では、試掘調査でみつかった灰原と遺物に関連した窯を確認した。

窯は、国土座標の $X = -142,910$ ・ $Y = -16,500$ を中心に約20mの範囲に集中して5基(うち、灰原のみ確認は2基)分布している。なお、1・2号窯については、昨年度報告しており、今年度は新たにみつかった3号窯の窯体構造と、その周辺でみつかった灰原について略述する。

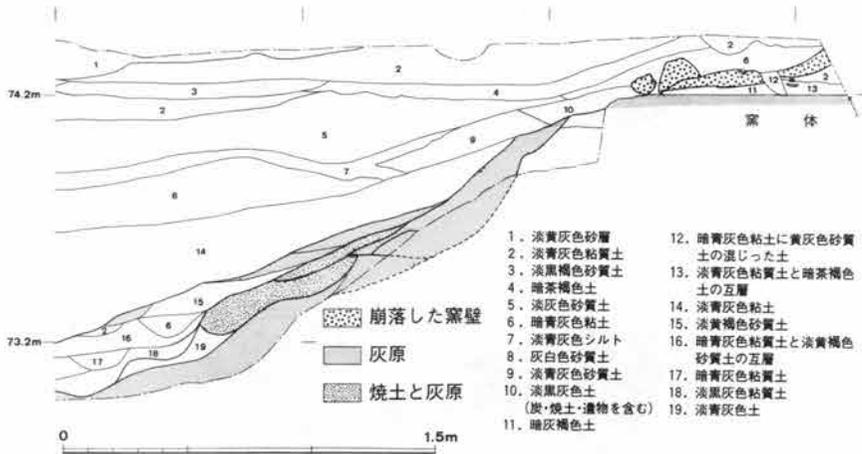
a. 3号窯

3号窯は、2号窯の西北約10mにあり、煙道部・焼成部は、後世に削平されており、わずかに燃焼部の一部が遺存しているのみであった。

燃焼部 燃焼部は、検出長1.5m・幅1.9mで、明瞭な床面の張り替えはない。燃焼部床面には須恵器(主に杯A)が20個体以上出土した。



第54図 遺構平面図



第55図 3号窯灰原堆積状況図

前庭部 前庭部は、燃焼部から約70cmの範囲にわたっているが、燃焼部から灰原にかけて35°の傾斜をもち、作業時に作業するには困難な傾斜である。このため、前庭部に作業用の床を想定し、ピットの検出につとめたが明確なピットはみつからなかった。

灰原 灰原は燃焼部を中心に直径約9mの範囲にわたって広がり、その東側は後述する2号窯の推定灰原と重複する。灰原は3層に細分できる。

3号窯の窯本体では、燃焼部床面から瓦片が1点出土したが、その灰原からは須恵器とともに、瓦が出土しており、瓦と須恵器を焼いたのち、最終作業時にはもっぱら須恵器を焼いた可能性が高い。

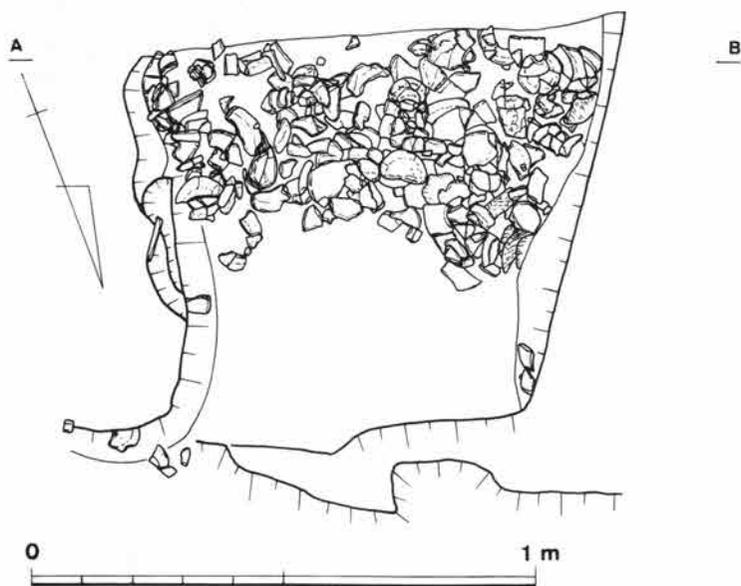
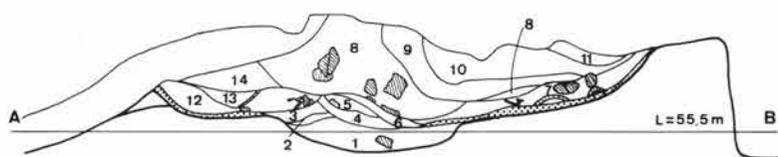
b. 4号窯

4号窯は窯本体は遺存せず、灰原のみを確認した。灰原は3号窯の燃焼部から西に約4mの位置で東西約4.5m・南北約3mの範囲にわたって広がる。灰原内からは、須恵器・瓦のほか、土製塔片がまとも出土した。この4号窯は、窯本体が遺存しないため、4号窯単独であるのか、あるいは3号窯の灰原なのかは厳密には明らかでない。ただ、3号窯では土製塔が出土していないため、ここでは3号窯とは別と考慮して、推定4号窯灰原としておく。

なお、4号窯の灰原からは、土器・瓦とともに、窯壁の一部も出土している。

c. 5号窯

5号窯も窯本体が遺存しておらず、灰原のみ確認した。灰原は3号窯の燃焼部から西約2mで、東西約5m・南北約7mの範囲にわたって広がる。灰原は1層で、灰原内からは須恵器・瓦のほか、4号窯灰原から流れたと思われる土製塔が少量出土した。5号窯灰原も窯本体がないため、厳密には推定5号窯灰原である。5号窯灰原は4号窯灰原と重複関



第56図 3号窯窯体(燃烧部)平面及び土層断面図

- | | | |
|-----------------------|-------------------------------------------|-------------------|
| 1. 淡灰白色粘質土(焼土・炭を多く含む) | 2. 黒灰色砂質土(炭層) | 3. 暗灰色砂質土 |
| 4. 暗灰色粘質土(炭を多く含む) | 5. 淡黄灰色土(炭をわずかに含む) | 6. 黒灰色土(炭層) |
| 7. 暗灰色粘質土(炭・遺物を多く含む) | 8. 赤褐色土と暗灰色粘質土のブロック(窯壁を多く含み、天井部が崩落したものか?) | 9. 暗灰色粘質土(焼土を含む) |
| 10. 灰色粘質土(焼土を含む) | 11. 焼土 | 12. 淡黒灰色土(焼土と炭の層) |
| 13. 淡青灰色土(遺物を多く含む) | 14. 焼土 | 15. 青灰色粘土 |

係があり、5号窯灰原の上層に4号窯灰原が堆積している。

d. 推定2号窯灰原

3号窯灰原の東側で、東西約19m・南北約4mの広範囲にわたって灰原を確認した。この灰原は、3号窯灰原の下層で、2号窯焚口部から派生したかのように扇状に広がるが、2号窯焚口部と灰原との間に幅7mの近世以降の溝(河道)があり、焚口部とは直接つながらない。ただ、2号窯窯体内から出土した軒丸瓦と同型式(軒丸瓦1-6284E)の軒丸瓦が出土しており、2号窯に伴う灰原の可能性が高い。灰原は間層を挟んで2層に大別でき、多量の瓦と少量の須恵器が出土した。

3. 出土遺物

第5次調査では整理箱にして600箱以上の遺物が出土した。その内訳は、須恵器163箱・瓦376箱以上で、他に土製塔3箱、中世の土器1箱である。各遺物については、現在整理中であり、今回はその一部を図示するにとどめる。

a. 瓦類

瓦は376箱以上出土した。そのうち、軒丸瓦・軒平瓦は100点以上あり、他に丸瓦・平瓦である。軒瓦の大半は平城宮・京から出土しており、同範瓦については、平城宮瓦型式名を併記した。

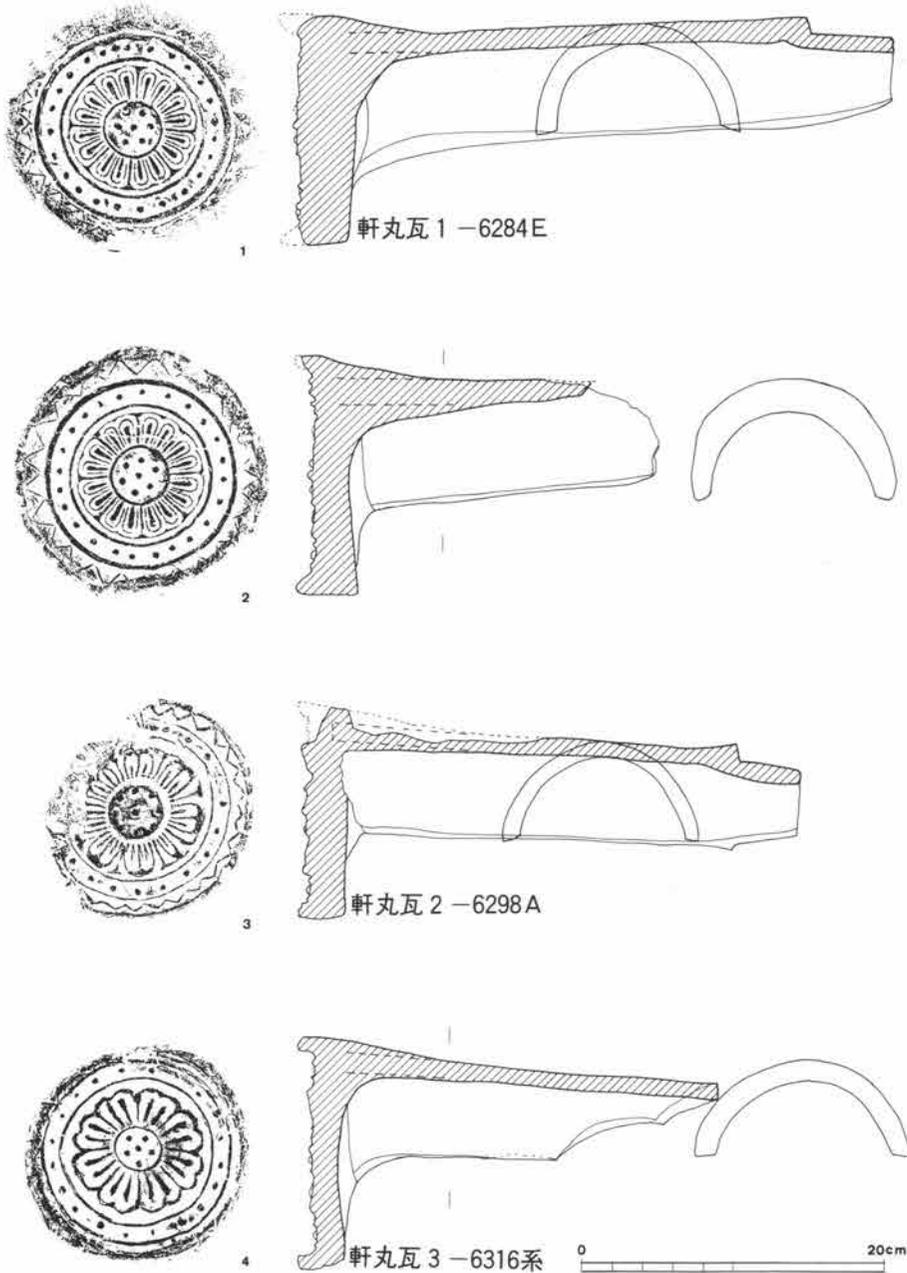
①軒丸瓦(第57図) 3型式50点が出土した。

軒丸瓦1=6284E型式(複弁八葉蓮華文軒丸瓦) 6284E型式は、直径15.8~16.2cm・中房径3.8~4.0cmを測り、圏線で囲まれた中房内に1+6の蓮子を配する。中房高は弁区と同じ高さ。内区は複弁八葉蓮華文で短く、間弁が界線状に弁をめぐる(間弁B系統)。外区には高く突出した珠文を24個配する。外縁は円弧ぎみの斜縁(匙面)で線鋸歯文を配する。

瀬後谷遺跡では、2号窯窯体内(2点)のほか、2・3・4号窯の灰原から46点出土している。

軒丸瓦2=6298A型式(複弁八葉蓮華文軒丸瓦) 6298A型式は、直径14.5cmを測る複弁八葉蓮華文である。中房は弁区とほぼ同じ高さであるが、中房と弁区の上に深い凹状の窪みをめぐるように中房を突出したように作りだす。中房内には1+8の蓮子を配するが、外側の8個の蓮子が周縁間に配されている。内区は八葉であるが、八葉のうち一葉のみが単弁であり、当初複弁八葉を意識したものが割り付けミスにより1か所単弁になったものと思われる。弁は突出し、反転も強く、弁端が高く反り上がる。内区の弁と間弁が独立している。弁端と外区の間には溝状の掘り窪みがあり、外区には20個前後の珠文を配したものと思われるが不明である。外縁はやや太目の線鋸歯文を配する。外縁部は円弧ぎみの斜縁(匙面)である。瀬後谷遺跡では3号窯灰原を中心に2点出土した。

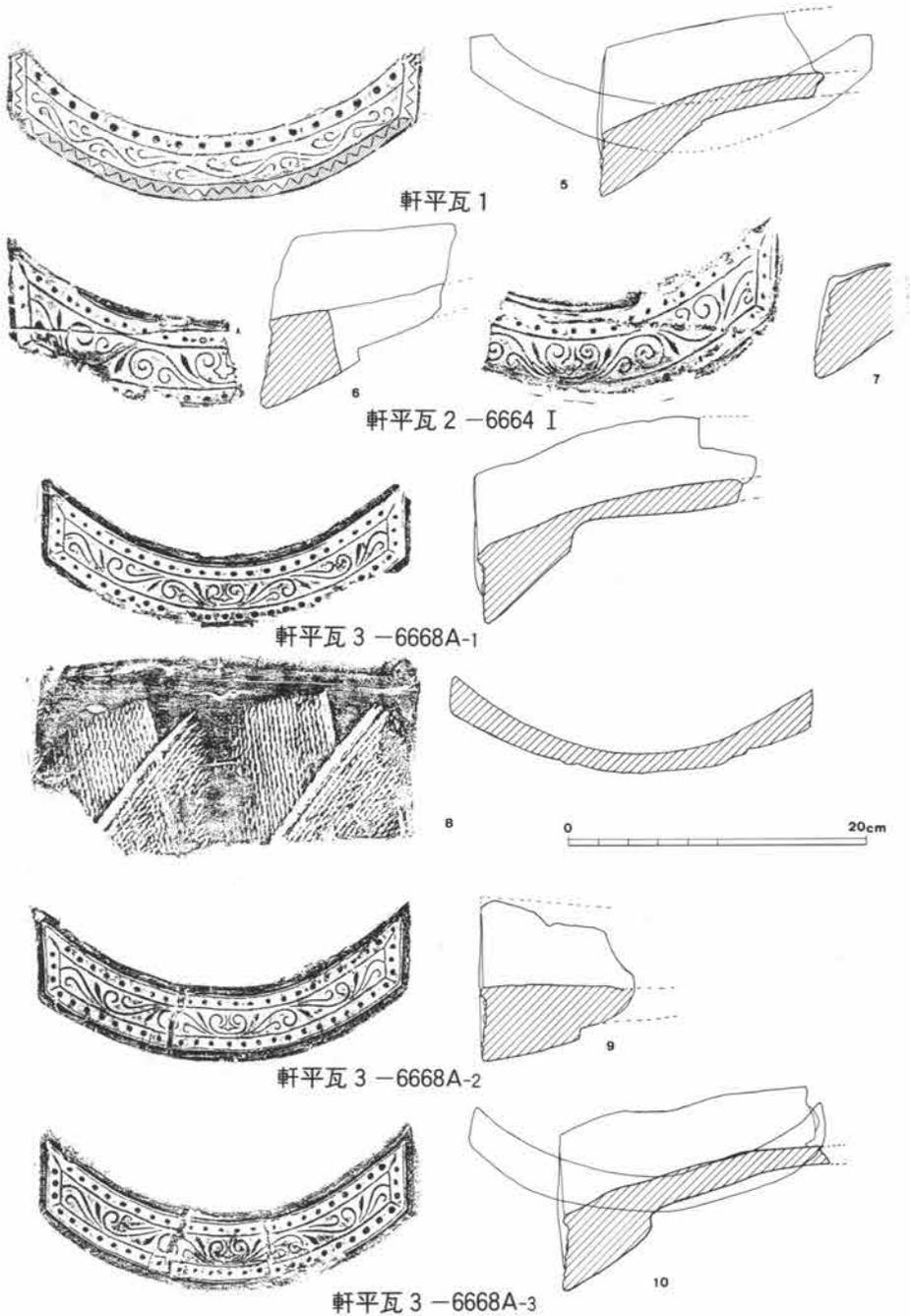
軒丸瓦3=6316系(複弁八葉蓮華文軒丸瓦) 軒丸瓦3は、直径15.4cmに対して、中房径は小さく3.2cmを測る。中房は窪み突線で中房を表現するかの感がある。中房内には1+5の蓮子を配する。弁は中央に凸線がなく、子葉2本を輪郭線で囲み、間弁を表現しない(間弁C系統)。外区には20個の珠文を配する。外縁は直立ぎみの斜縁で、外区近くにわずかに線鋸歯文が認められる。線鋸歯文のピッチは細かい。軒丸瓦3は、6316系統の軒丸瓦であるが、平城宮・京ともいまのところ出土例がない。瀬後谷遺跡では、3号窯に隣接した推定5号窯灰原から1点出土した。



第57図 出土遺物実測図(1) - 軒丸瓦 -

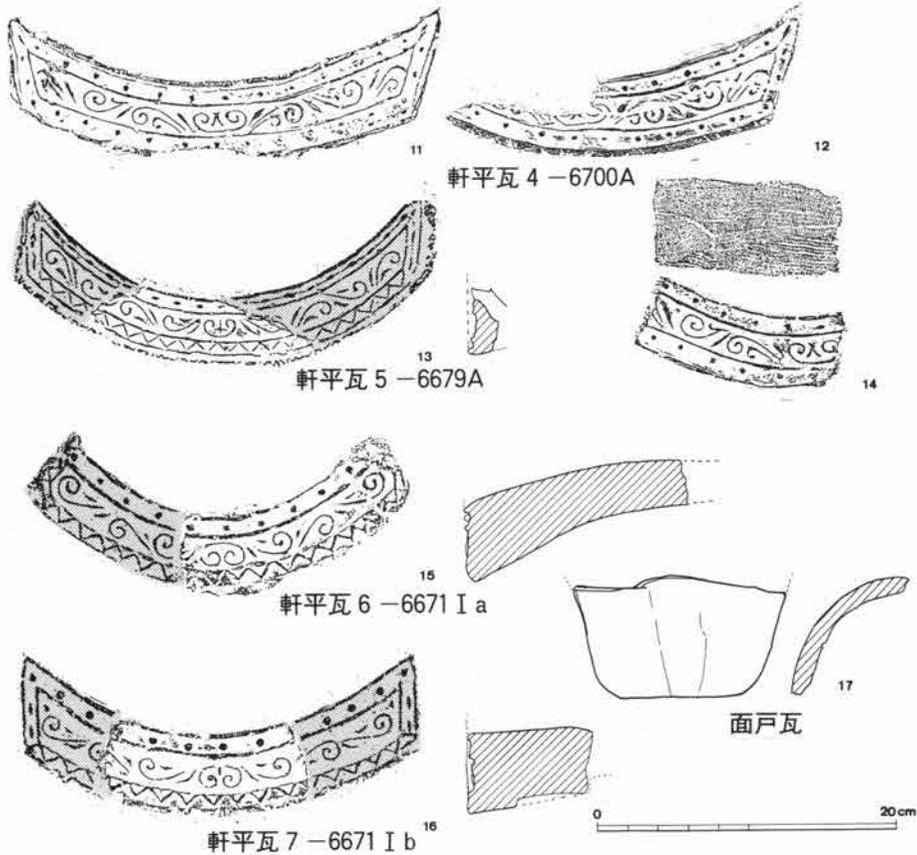
②軒平瓦(第58・59図) 軒平瓦は5型式6種で50点が出土した。

軒平瓦1=(左偏行唐草文軒平瓦) 軒平瓦1は、右から左へ唐草が展開する左偏行唐草文で、茎の起点と末端が反転し、茎に接しない形で2支葉を配する。下外区と脇区の線鋸歯文が連続する。上外区の珠文は18個を数える。顎は段顎である。凹面は、瓦当近くの2



第58図 出土遺物実測図(2) - 軒平瓦(1) -

cm程度を横方向にヘラ削りするものから、瓦当面から15cmにわたり横方向のヘラ削りするものがある。軒平瓦1の成形方法は桶巻き作りで、粘土は輪積み成形によると思われる。瀬後谷遺跡では2号窯灰原を中心に出土する。同型式の平城宮・京での出土例を知らない。



第59図 出土遺物実測図(3) - 軒平瓦(2) -

軒平瓦 2 = 6664I 型式(均整唐草文軒平瓦) 6664I 型式は、中心飾りの花頭が基部上端で左右に開き、内区と外区を画する界線に接している。唐草は3回反転で、主・支葉とも先端の巻き込みが強い。上・下・脇区とも珠文を配する。顎は段顎である。成形は桶巻き作りで、粘土は輪積み成形と思われる。凸面は縦方向の縄タタキを施す。瀬後谷遺跡では、6664I 型式の軒平瓦は20点と出土量が多く、2・3・4・5号窯の各灰原から出土している。ただ、瀬後谷遺跡出土の6664I 型式の瓦は、中心部上面から脇区と下外区の屈曲部にかけて左右に範割れの跡がみられ、極端なまでに焼け歪みにより変形している。

軒平瓦 3 = 6668A 型式(均整唐草文軒平瓦) 6668A 型式は、中心飾りの花頭は「ㄣ」状に開くもので、内区と外区を画する界線には接していない。唐草は3回反転である。顎は段顎である。凸面は縦位の縄タタキの上に斜位の縄タタキを加えるものがある。瀬後谷遺跡出土の6668A 型式の瓦は、範割れの無いもの(6668A-1)、中心飾りから派生する第1主葉の左側のみ範割れのあるもの(6668A-2)、中心飾りの両側にあるもの(6668A-3)がある。窯ごとの出土をみると、2号窯灰原では6668A-1・2・3のいずれもがあるが、3号

窯灰原では6668A-3のみとなる。6668A型式の瓦は、桶巻き作りで、粘土は輪積み成形と思われる。顎は段顎である。6668A型式の瓦は、6664I型式の瓦にくらべて小ぶりである。

軒平瓦 4 = 6700A型式(均整唐草文軒平瓦) 中心飾りは、花頭文様から退化した「X」形を呈する。唐草は3回反転で主葉・支葉の元が内圏線に接し、そこから派生する。内区幅は狭く、唐草文様は偏平な感じをあたえる。上区と脇区を区切る界線はあるが、下区と脇区を区切る界線はない。珠文は高く突出している。顎は段顎であるが、瓦当面から段部にかけて極端なまでに削り取られており、その断面は三角形状を呈する。成形は桶巻き作りで、粘土は輪積みと思われる。瓦当近くの側面・凹面に糸切りと思われる粗い条痕の痕跡がある。6700A型式は3号窯の灰原から出土した。

軒平瓦 5 = 6679A型式(均整唐草文軒平瓦) 「+」字の中心飾りに下から上へ巻き込む中心葉で、唐草は4転する。中心葉及び主葉の巻き込みは強い。上外区・脇区には楕円形(杏仁)珠文を19個配する(奈文研資料より)が、各珠文を結ぶかのように細かい突線文が1条はある。下外区はピッチの小さい線鋸歯文である。顎は平城宮・京の同型式の資料では段顎と直線顎があるが、瀬後谷遺跡では直線顎のものが出土している。瀬後谷遺跡では3・4号窯の灰原から出土している。

軒平瓦 6 = 6671Ia型式(均整唐草文軒平瓦) 6671型式は興福寺式と称されているものである。6671Ia型式は花頭文様がなく、中心葉が上から下へ強く巻き込む。唐草は3転で、上下区には円形珠文を、脇区には楕円形(杏仁)の珠文を配している。下外区は太い線鋸歯文である。顎は直線顎である。6671Ia型式の瓦には明瞭な桶巻き作りの痕跡がない。瀬後谷遺跡では3号窯の灰原のみから出土している。

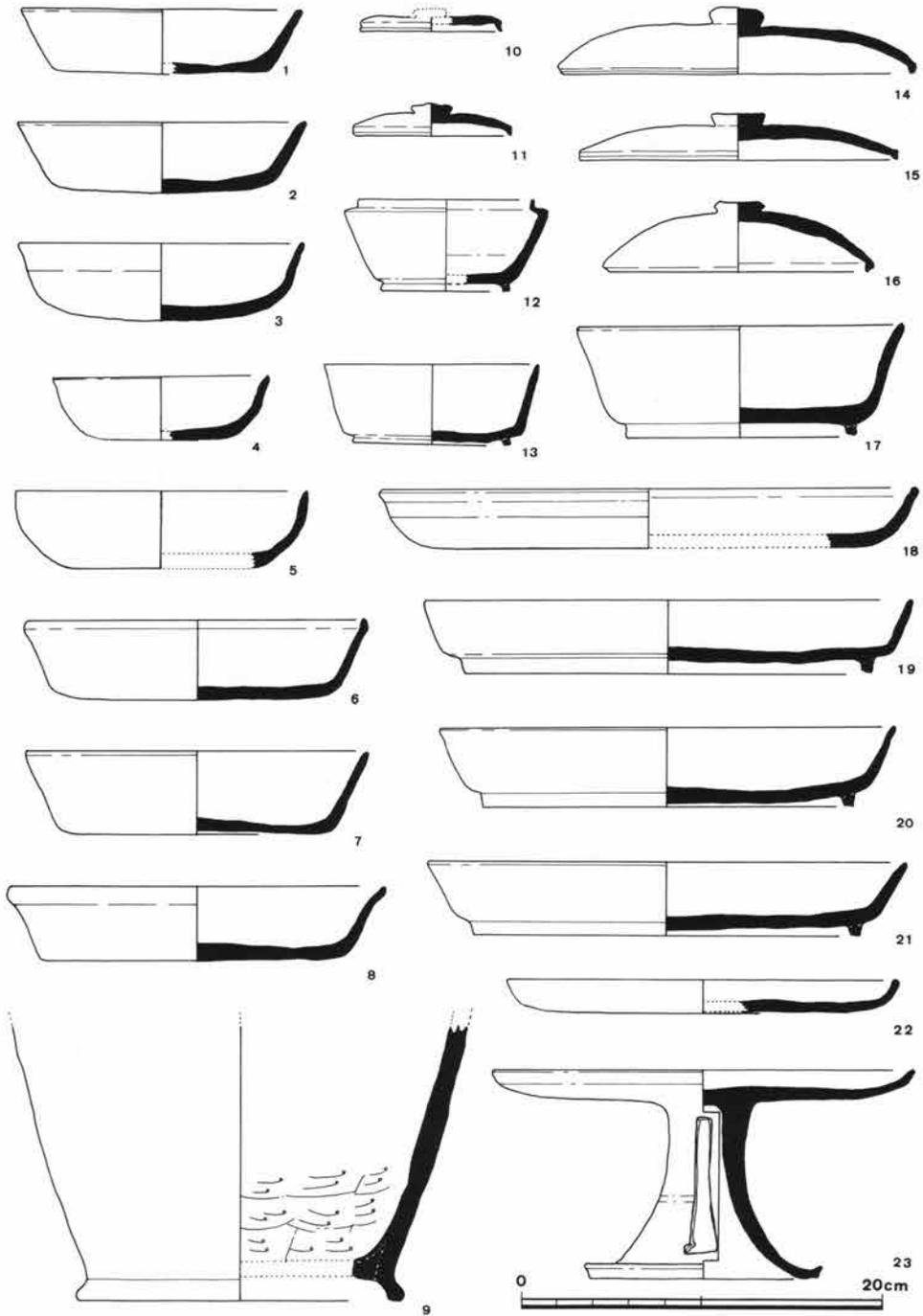
軒平瓦 7 = 6671Ib型式(均整唐草文軒平瓦) 6671Ib型式の軒丸瓦に縦線を中心飾りとして彫り足す。上・下・脇区に対し内区が低く、上・下・脇区が飛び出した感を与える。上外区端の珠文が円から楕円(あるいは楕円から円形)へ彫り直した痕跡がある。顎は6671Ia型式と同様、直線顎である。6671Ib型式は3号窯灰原のほか、4号窯灰原から出土した。

b. 土器(第60～62図)

土器の大半は各窯の灰原を中心に出土しており、整理箱にして163箱以上の須恵器が出土した。これらの須恵器については現在整理中であり、その一部を図示するにとどめ、今後の整理作業の結果をまって詳細に検討していきたい。

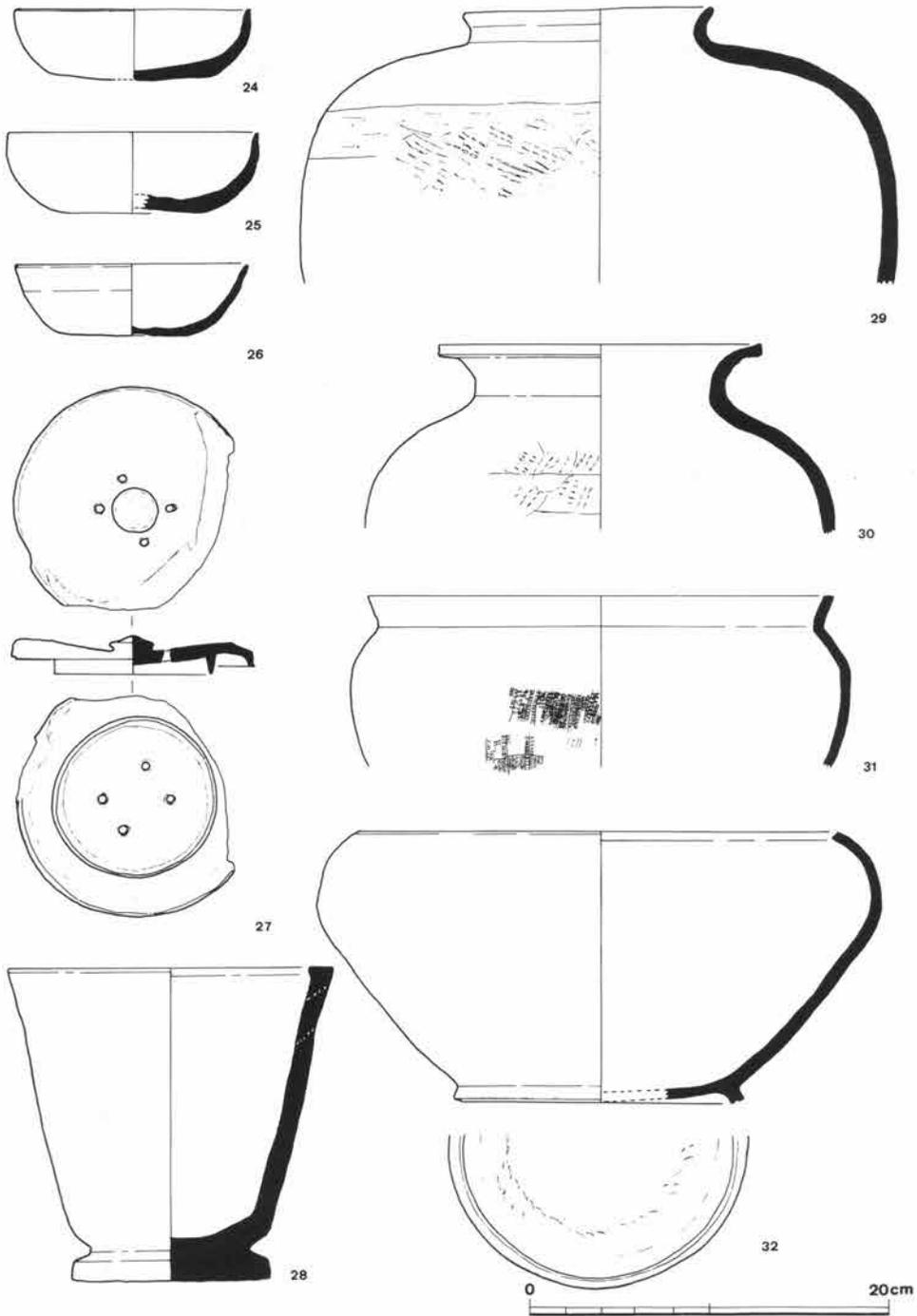
c. 土製塔(瓦塔)

土製塔は、推定4号窯灰原のほか、推定5号窯灰原から出土したが、推定5号窯灰原上層に推定4号窯灰原が堆積していることを考えると、推定5号窯灰原出土の土製塔は推定4号窯灰原からの混入の可能性も高い。土製塔片は100点以上が出土し、一部を図示した。

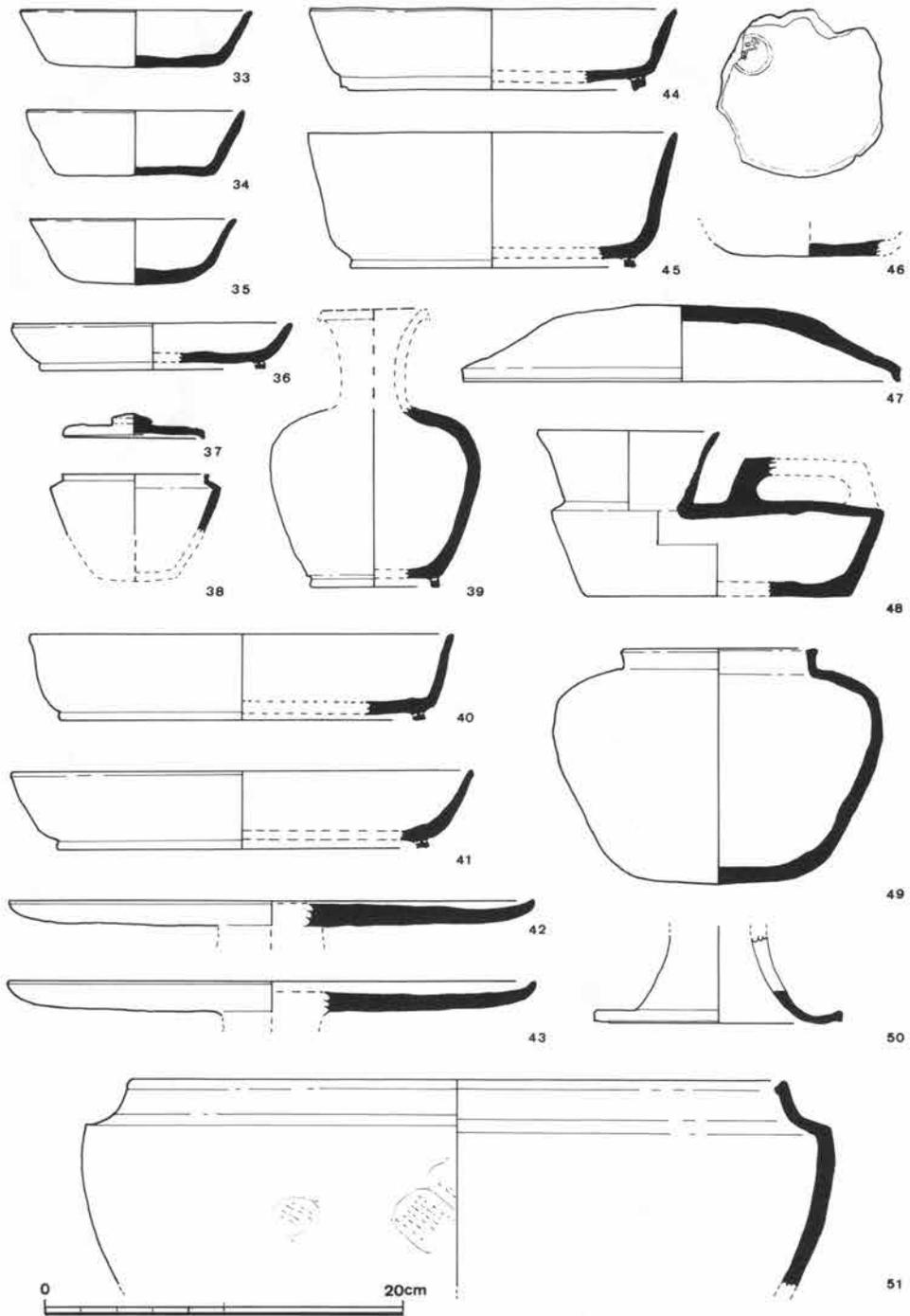


第60図 出土遺物実測図(4)―須恵器(1)―

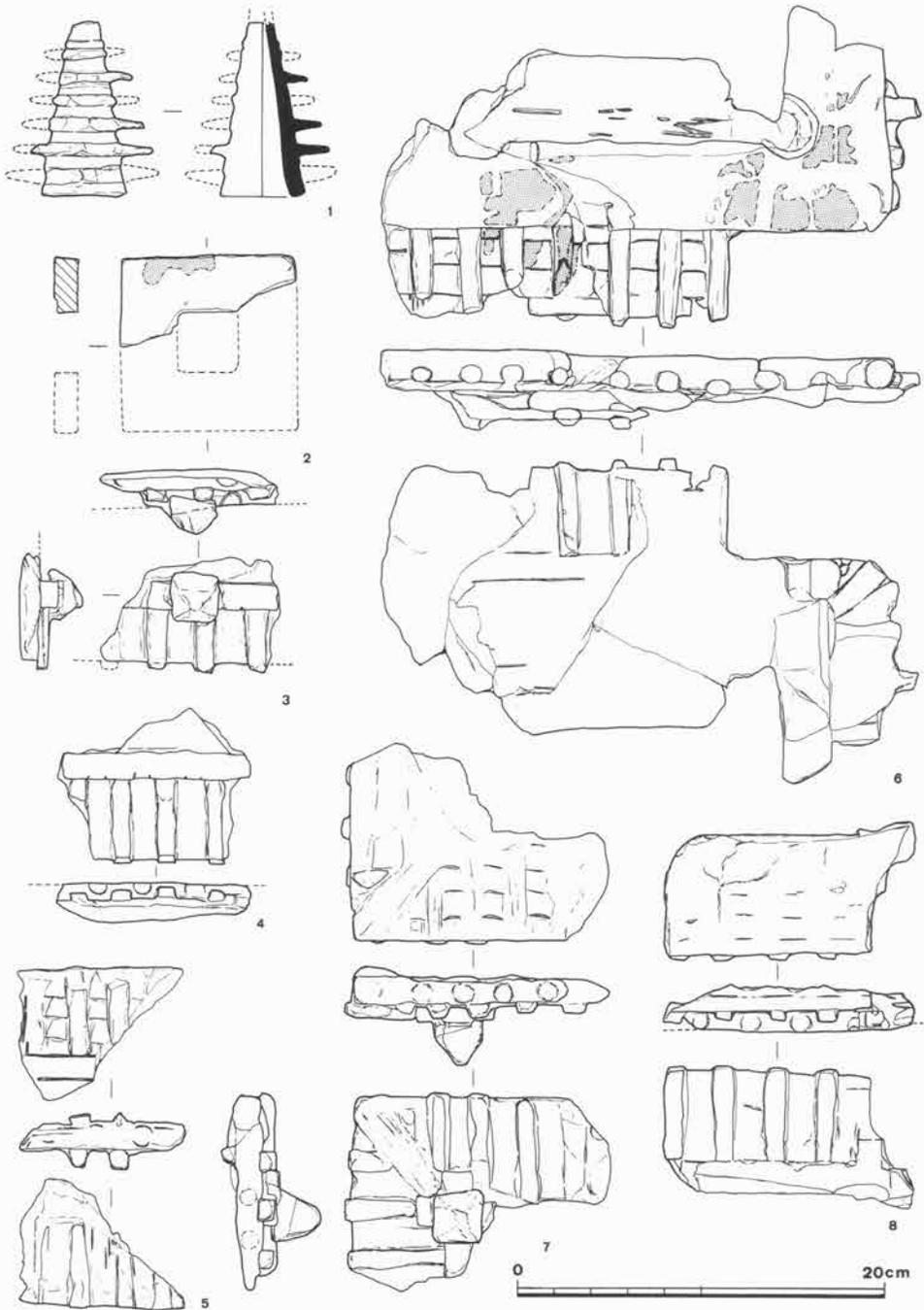
1・2・6・7・17・19～21. 3号窯窯体内 3・5・9・10～16・18・22・23. 3号窯灰原



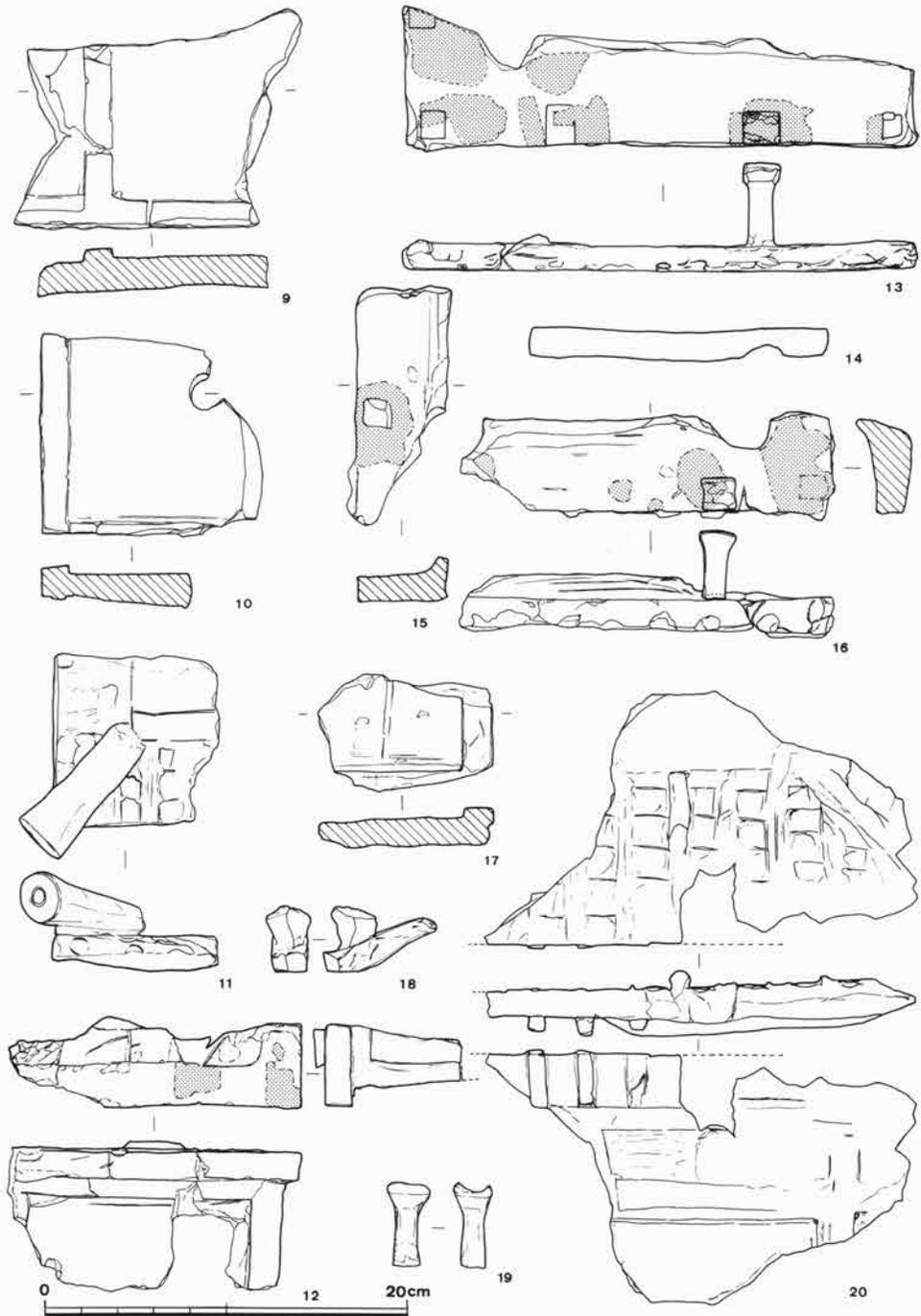
第61図 出土遺物実測図(5)－須恵器(2)－
24～32. 3号窯灰原



第62図 出土遺物実測図(6)―須恵器(3)―
33～51. 4号窯灰原



第63図 出土遺物実測図(7) - 土裂塔(1) -



第64図 出土遺物実測図(8)-土製塔(2)-

第63図1は、相輪の一部である九輪と思われる。2は露盤と思われる。表面に一部釉が付着している。3～8は、屋蓋を表現したものである。3は、垂木と斗栱を表現している。6・7は同一個体と思われる。6は、幅広の刻みを入れて平行を表現し、そのうち半円形の粘土を貼り付けて丸瓦を表現している。また、幅45cmの粘土帯を貼り付けて台輪を表現している。台輪の上面には、高欄を貼り付けた跡や釉も付着している。台輪の内面各隅には円形のえぐりがあり、ここに丸柱を挿入したと思われる。9・10・17は壁面を表現したと思われる。11は、大棟を表現する。13～16・19は、台輪及び高欄を表現する。12は、基壇と思われる。20は、最上層部の屋蓋と思われる。

4. 小結

瀬後谷遺跡では、5基の窯跡の調査をしたが、そのうち、窯本体が明らかなものは1・2・3号窯の3基であり、他の4・5号窯は窯本体が削平されており、灰原のみ遺存していた。また、窯本体が明らかな2号窯も窯本体と灰原の間に近世以降の溝(河道か?)があり、窯本体と灰原が直接つながらない。このため、2・4・5号窯は本来「推定灰原」と記述すべきであるが、ここでは「2・4・5号窯灰原」として記述を行った。

なお、4・5号窯灰原は3号窯に帰属する可能性もあるが、ここでは保留しておく。

a. 窯相互の前後関係

窯本体は直接切り合うような前後関係はないが、灰原の堆積状況とその範囲などからわずかに前後関係を知ることができる。すなわち、

1：2号窯灰原と3号窯灰原が重なる10ライン上では、2号窯灰原の上層に青灰色粘土・黄褐色粘質土を挟んで3号窯灰原が堆積していた。このため、灰原の堆積状況から2号窯の操業ののち、3号窯が操業されている。

2：5号窯の灰原は、3号窯焚き口部の西約2mで、東西約5m・南北約7mの狭い範囲にわたって堆積していた。5号窯の灰原は3号窯の灰原の上層に堆積しており、3号窯の操業ののち、5号窯が操業されている(ただ、5号窯の窯本体が遺存していないため、推定5号窯灰原が3号窯の灰原に帰属する可能性もあることは、前述のとおりである)。

3：5号窯の灰原の西に隣接してある4号窯の灰原は、5号窯の灰原の上層に黄褐色粘質土の間層を挟んでその上層に4号窯の灰原が堆積しており、5号窯の操業ののち、4号窯が操業していたことが明らかである(なお、4号窯も窯本体が遺存していないことは前述したとおりである)。

このように、窯本体の切り合い関係は明らかでないが、灰原の堆積状況から2号窯→3号窯→5号窯→4号窯という操業順位が考えられる。ただ前述のように、5号窯が単独の

窯か、あるいは3号窯の灰原の一部かは、窯本体が削平されているため、明らかではない。

b. 軒瓦からみた瀬後谷遺跡の年代

瀬後谷遺跡でみつかった瓦(軒瓦)の大半は、奈良山を越えた平城宮・京へ供給されている。このため、平城宮での瓦編年に準拠して軒瓦を検討し、その製品を焼いた窯の年代を検討していきたい。

瀬後谷2号窯出土の軒丸瓦6284E、軒平瓦1・6664I・6668A型式は、平城宮瓦編年^(註9)の第I-1期の軒瓦に相当する。ただ、6284E型式の瓦当と丸瓦の接合が、古い様相の直角に接合しているものではなく、やや鋭角ぎみに接合されている。軒平瓦6664I型式がすべて瓦当に范割れが認められ、また6668A型式の瓦当にも范割れのないものが少なく、大半が范割れのあるものである。このことから、瓦当文様は第I-1期に相当するが、第I-2期あるいは第II期と新しくなる可能性も否定できない。

瀬後谷3号窯で主体をなす軒瓦は、平城宮(京)内での出土量が少なく、その軒瓦の年代については、なお流動的である。ただ、軒丸瓦6298A型式の外縁部が直立縁ではなく、円弧を描いた斜縁(匙面)である。この円弧を描いた斜縁(匙面)は、平城宮瓦編年の第II期までであり、第III期には直立縁に変化することから、6298A型式は第II期までにおさまる。また、6671型式は、興福寺式の軒平瓦である。この興福寺式軒瓦は、森 郁夫氏によると、興福寺の創建の時期、和銅年間(710年代)から紀伊国分寺造営期の天平勝宝年間(750年代)に至るまで生産されている^(註10)。また、平城宮軒瓦編年では、6671A型式が第I期に、6671b型式が第II-1期に位置づけられている。ただ、3号窯で遺物の主体をなす須恵器をみるかぎり、平城III期に属する土器がみあたらないため、3号窯の操業年代は、平城宮瓦編年の第II期におさまるものと思われる。

5号窯で出土する軒瓦の大半は、2・3号窯で焼成された軒瓦であるが、2・3号窯で出土しない軒瓦に軒丸瓦6316系がある。この瓦は、平城宮・京での出土例がなく、時期決定の資料に欠ける。毛利光俊彦氏の指摘によると、6316系は間弁C系統で、平城宮では聖武帝の平城遷都(745年)以降の瓦当文様である。また、瀬後谷5号窯出土の6316系軒丸瓦の外縁部は直立ぎみの斜縁で、この形態も新しい様相を示している。ただ、6316系軒丸瓦は平城京の羅城門^(註11)のほか、松尾廃寺でも出土しており、あえて平城遷都以降に考える必要性もないという高橋美久二氏の指摘もある。遺構で記したように、5号窯灰原の上層に4号窯の灰原が堆積しており、この4号窯の灰原からは2・3号窯の軒瓦が出土していること、4・5号窯ともその出土須恵器が平城宮土器編年のIII期の時期まではいかないことを考えあわせると、6316系軒丸瓦は第II期となる可能性もある。この6316系軒丸瓦の時期については、今後の消費地での調査成果をまわって結論づけたい。(石井清司)

(2) 西山塚古墳とその周辺地区

1. 調査の概要

a. 西山塚古墳

今回の調査は、古墳全体を対象とし、内部施設をも含めた古墳の形態や構造を知る目的で実施した。その結果、墳丘の構造や外部施設の内容、周濠の存在、内部施設の構造等が判明するなど、当初の課題を解明することができた。ところが、年度内最後に墳丘築成状態を観察するために、墳丘に断割を設定したところ、墳丘の下部から規模の大きな埋葬施設が新たに確認された。このため、この古墳の調査は、これら下部の埋葬施設の調査を中心に、次年度(平成4年度)事業に継続することとなった。

したがって、今回の報告では、今後刊行される報文との内容の重複を避けるため、平成4年度調査の成果を含め、現時点までに判明した事実をその要旨のみ簡単に列挙し、詳細は次年度報告にゆずることとする。

①古墳は、奈良山丘陵の北側斜面で、州見山(標高106m)から北西に延びる幅の広い尾根の頂部(標高約77m)に立地する。

②直径26mの2段築成の円墳で、周濠(幅約5m)が完周している。

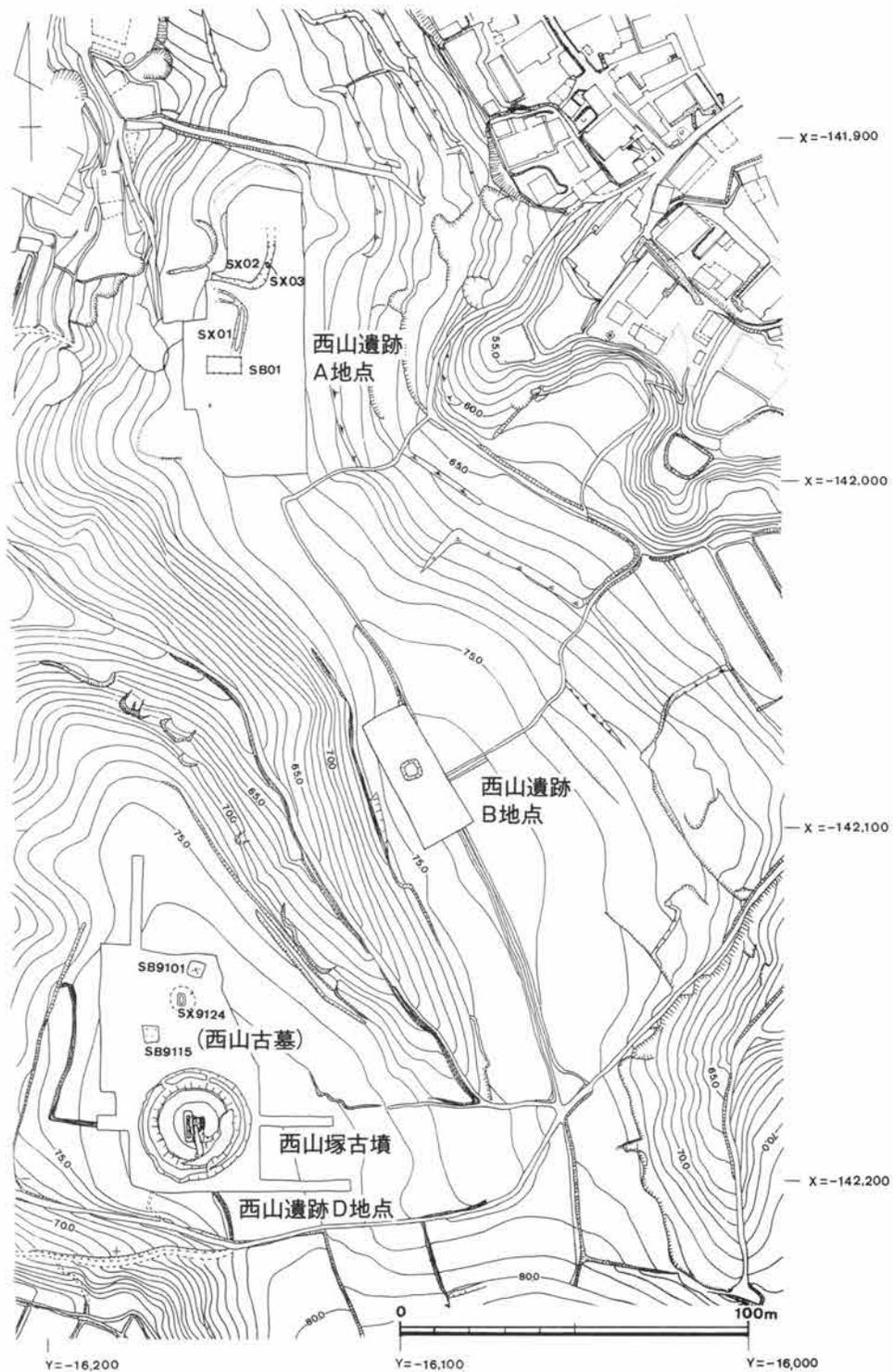
③外部施設として、1段目墳丘テラスに埴輪列、2段目墳丘斜面に葺石が施されるが、墳丘面の流出によりその遺存状態はよくない。

④墳頂部(墳丘中央部)に主軸を南北にそろえた埋葬施設が東西に並列している。いずれも木棺直葬形式の竪穴系埋葬施設で、西棺→中央棺→東棺の順で構築されている。

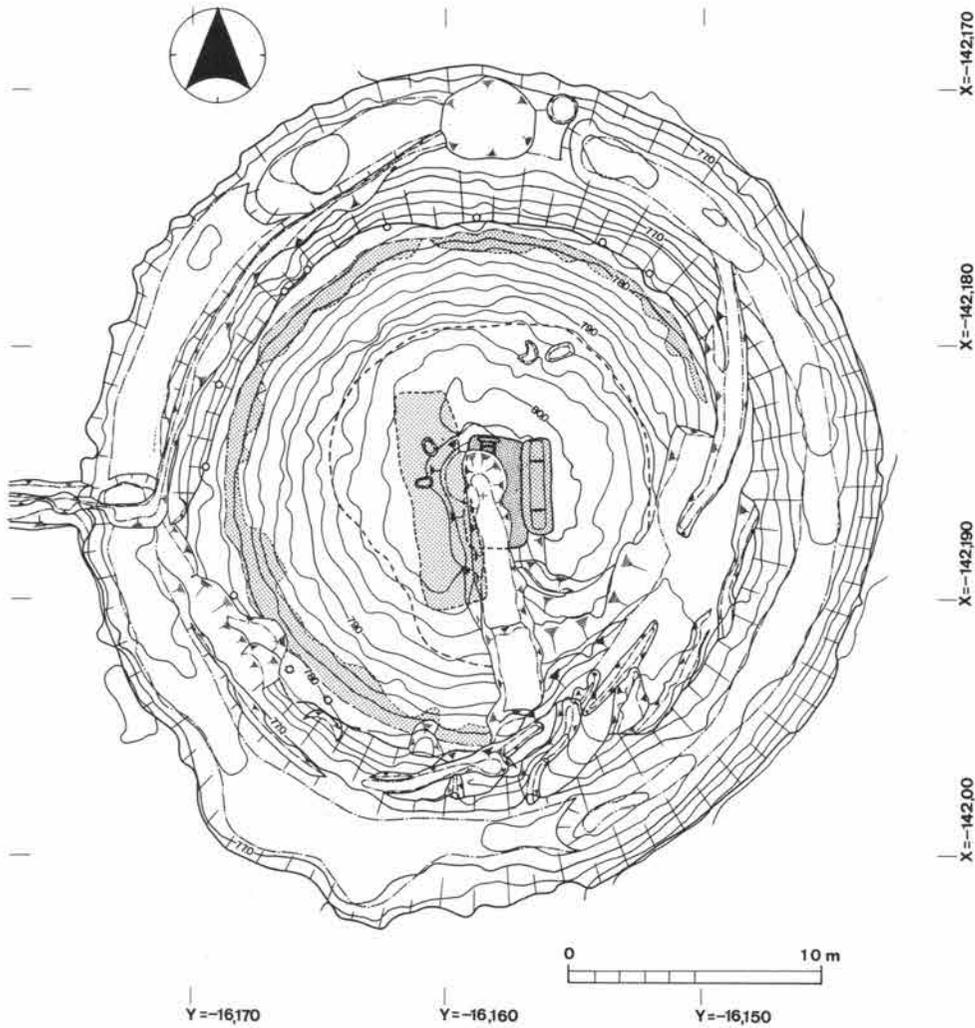
⑤西棺(第1主体)は、2段墓壇の下段部分(長さ5.8m・幅1.5m)に、組合式木棺(内法長約4.9m)を付設したものである。長側板に複数の板材を用い、側板設置後内部に砂利と礫を充填し、底板を設けない特異な構造を採る。内部は仕切板2枚で3空間に分割し、中央に遺骸を北枕(枕石を用いる)で埋葬する。副葬品として棺外に革製漆塗盾1張・一対の鉄鉾と石突(長さ3.5m)、棺内に木製把装具が遺存する鉄剣2口と鉄刀1口・矢羽根部分の漆膜を有した矢筒(靱)に収納された矢56本・滑石製白玉多数・堅櫛6～7点が出土した。

⑥中央棺(第2主体)は、墳丘のほぼ中央に位置することから盗掘を受け、大半が破壊されている。墓壇(長4.8m)底で組合式木棺の痕跡を確認した。副葬品は、わずかに鉄刀1口が棺外に残存するにすぎず、ほかに盗掘坑埋土から若干の須恵器片や鉄鏃片が出土した。

⑦東棺(第3主体)は、墓壇(長さ3.7m)内に割竹形木棺(長3.4m)を直葬したものである。



第65図 西山塚古墳・西山遺跡 調査区配置図



第66図 西山塚古墳平面図(内部主体配置図)

両小口の閉塞は拳大の礫塊による。棺内には鉄刀1口と竖櫛数点が副葬されていた。円筒埴輪を転用した枕状施設が北小口側に設置されている。

⑧墳丘の断面観察によると、土壘や土壇を核として一定量の土を盛り、その上面を水平にならすことで完結する工程(作業単位)が認められる。さらにこの手順を上方に3回くり返すことで墳丘(二段目墳丘)が構築されていることがわかった。また、内部主体は、異なった高さに設けられ、その構築面は墳丘の土盛り工程面に対応することが判明した。すなわち、第1主体と第2・3主体の構築面には約1.0mの高低差があり、前者が造営された後(構築墓壙)、上位に墳丘盛り土が付加され、完成した墳頂部に後2者が掘り込まれる(掘り込み墓壙a類)という関係が明らかとなった。^(注12)

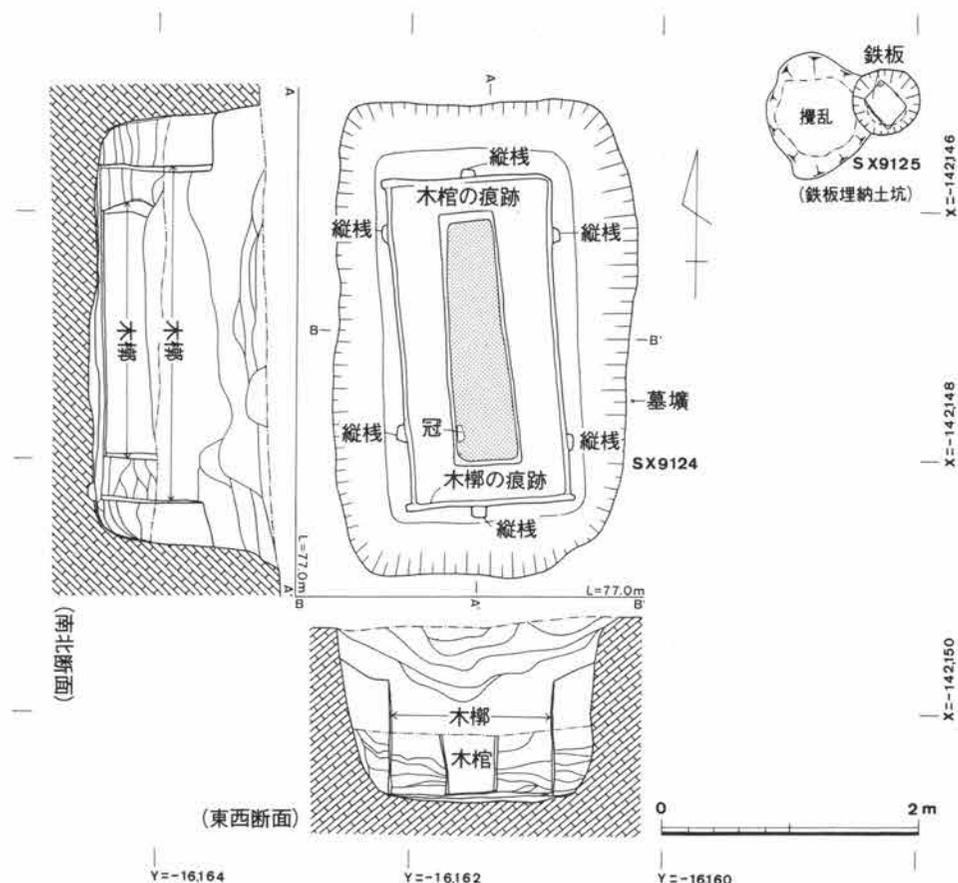
⑨古墳の築造時期は、各埋葬施設の時期差も考慮しなければならないが、副葬品の組成や内容、豊富な埴輪資料などから、総じて5世紀の後半に納まるものと考えられる。

b. 西山古墓(S X9124・S X9125)

西山塚古墳の墳丘中心から真北に40m離れた地点で検出された。南北に主軸をとる長方形プランの土坑(S X9124)と、その北東側に近接する小規模なピット状土坑(S X9125)である。両者は埋土が他の遺構のそれと顕著に異なり、互いに地山層を深く掘り下げないと得られない赤褐色系土で埋められていた。

調査の結果、S X9124は、木棺を納めた埋葬施設本体、S X9125は、埋葬遺構に関連する可能性の高い板状鉄製品を埋納するための土坑であることが判明した。したがって、これらを一括して、「西山古墓」と命名することにする。

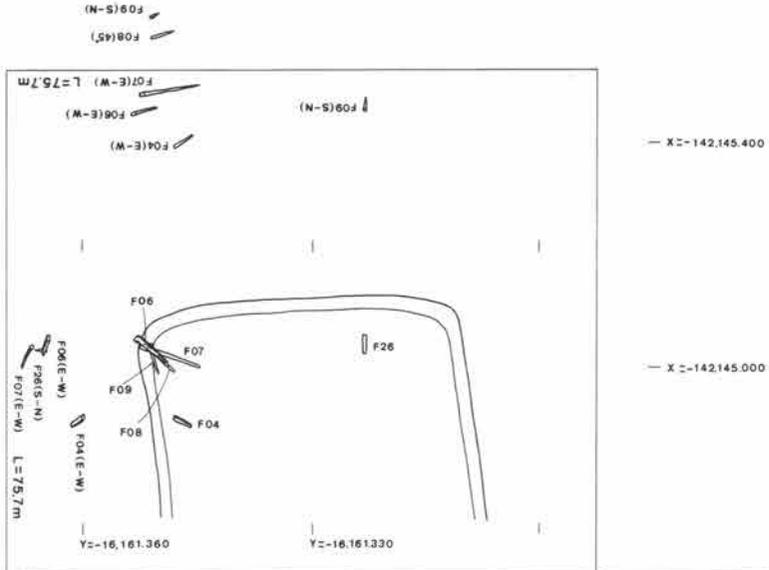
埋葬施設本体であるS X9124は、墓壙内に木質こそ遺存していなかったものの、内部が比較的湿潤な環境にあったため、木が完全に腐朽して土化していなかった。つまり、灰色



第67図 西山古墓実測図

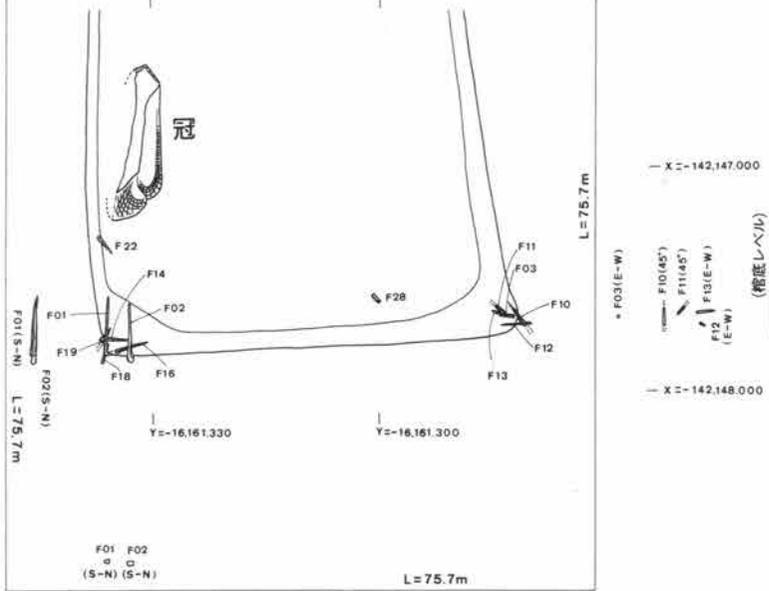
(北から南をみた側面図)

(槽底レベル)



(西から東をみた側面図)

(槽底レベル)



(西から東をみた側面図)

(槽底レベル)



(東から西をみた側面図)

(槽底レベル)

(南から北をみた側面図)

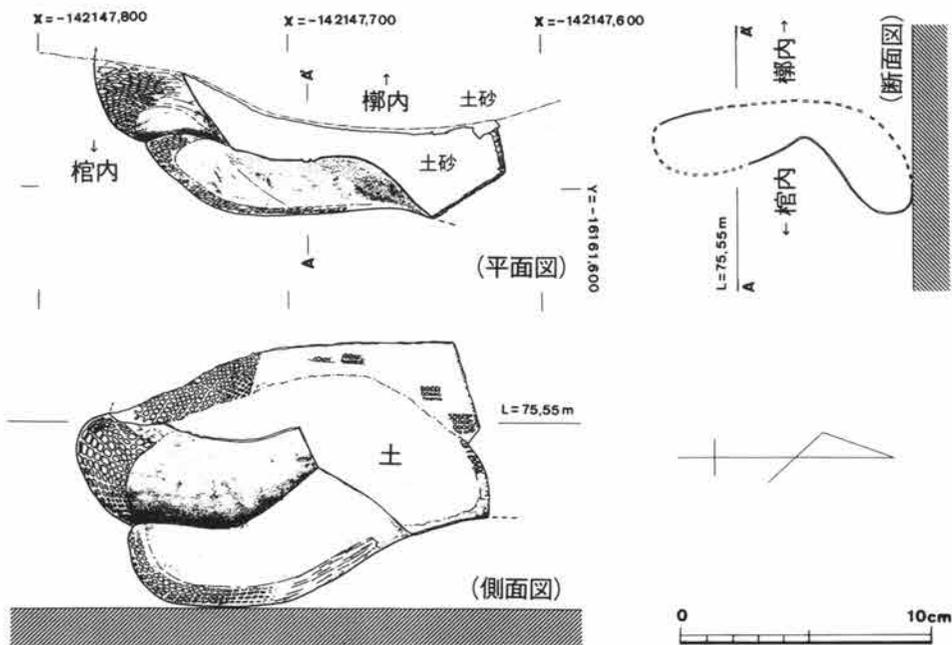
第68図 西山古墳 鉄釘出土状態実測図

粘土に置きかわった状態で木の痕跡が残っており、加えて、鉄釘などの緊結金具が原位置を保っていたことから、その内部構造を比較的容易に解明することができた。すなわち、その埋葬施設は、木棺を木柵組(木槨)で保護した二重構造を採る、いわゆる「木槨墓」であることが判明した。

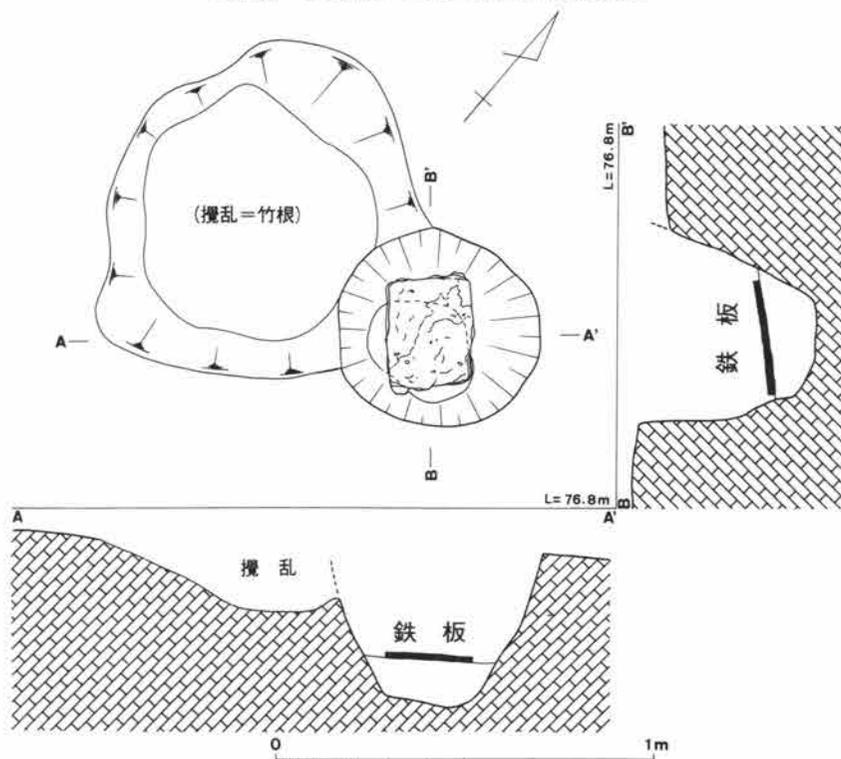
木棺は、主軸を座標北に対してN6°Wに合わせている。その構造は、4枚(板厚約3cm)の各小口側の端部を柵組み結合したうえ、結合部を鉄釘で固定して側板とする組合式箱形木棺(内法長1.85m)で、内法幅は、0.45~0.5mを測り南側が幅広い。底板は、一枚板を使用しているようで、南端が北端より約3cm高くなるように設置されている。側板は、底板の四辺の縁に載るが、底に鉄釘はみられず両者をいかなる方法で固定したかは不明である。棺内の出土遺物として、上記の鉄釘のほかに、南端(南小口から15cm北方)近くで、西長側板に寄りかかるようにして袋状漆塗製品(冠)が1点出土した。

木槨は、主軸を棺と合わせ、棺が中央にくるように配置している。構造は、長側板の小口面に短側板(小口板)を当てがう型式で、南北で幅がほとんど変わらない長方形プランを呈する(内法長2.7m・内法幅1.3m)。現存で高さ約90cmを測る四辺の側板は、槨外裏込め土の内面に残る板目の重なりから、複数の板材を縦に積み上げて構成したものと推定される。また、縦に重ねられた側板がずれないように、側板の外側に長辺に2か所、短辺の中央に1か所、それぞれ対向する位置に縦棧を配し、側板とは斜め外上方から打ち込まれた鉄釘で固定されていた。縦棧は、天地がほぼ同じ規模の角柱で、横断面形が台形(底辺約10cm・厚さ約5cm)を呈している。棧の下端は、槨底にそろえて平坦におわり、墓壙底に杭状に打ち込まれてはいない。底板は、墓壙底に残された木目柄から、複数の板材を横に並べており、側板は、その縁辺部に載っている。側板と底板の固定には、鉄釘が用いられ、釘を底板下部から打ち上げることで両者を固定している。特に、短辺側は、20~30cm間隔で釘が残存しており、底板を構成する部材の幅を反映しているものかもしれない。木槨は、墓壙底に直接据え置かず、壙底の南寄りに枕木状の角材を東西にわたして、それを介して設置している。

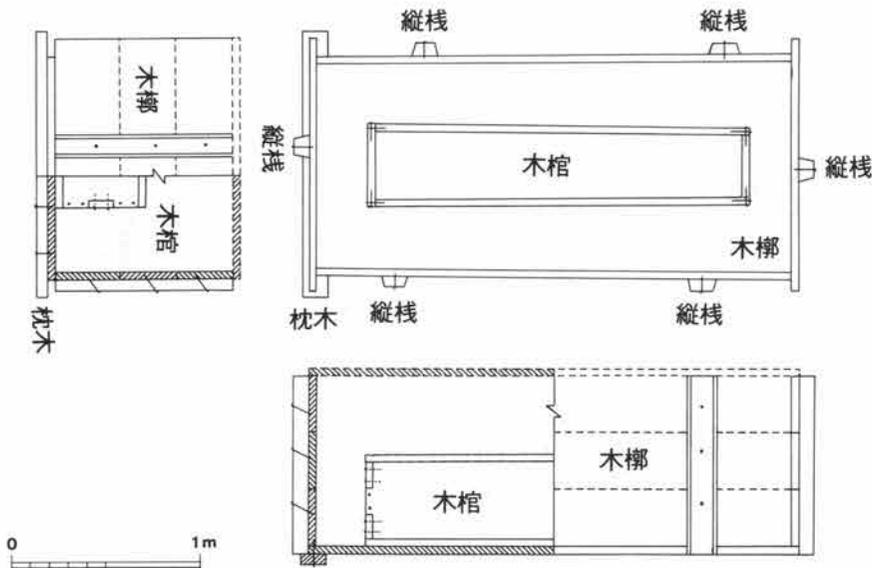
墓壙は、外部ですでに組み上げられていた可能性の高い木槨を安置するため、槨より一回り大きな隅丸長方形プランの掘形(長軸3.7m・短軸2.3m、主軸は座標南北に一致)を堅固な地山層に穿っている。現状での深さは約1.3mを測るが、墓壙の周囲の検出面上に古墓を覆う盛り土の一部が残存することから、この検出面は、墓壙構築時の状態からほとんど削平を受けていないことが判明した。墓壙内は、基本的には掘形掘削の際の排土で埋め戻されているが、槨内は、蓋板の陥没により土砂が内部に流入していた。土砂の移動を受けない槨外の状況をみると、5~10cm厚で水平方向に順次土を入れていったことがわかった。



第69図 西山古墓 木棺内冠出土状態実測図



第70図 西山古墓 鉄板出土状態実測図



第71図 西山古墓 木棺・木槨構造復原図

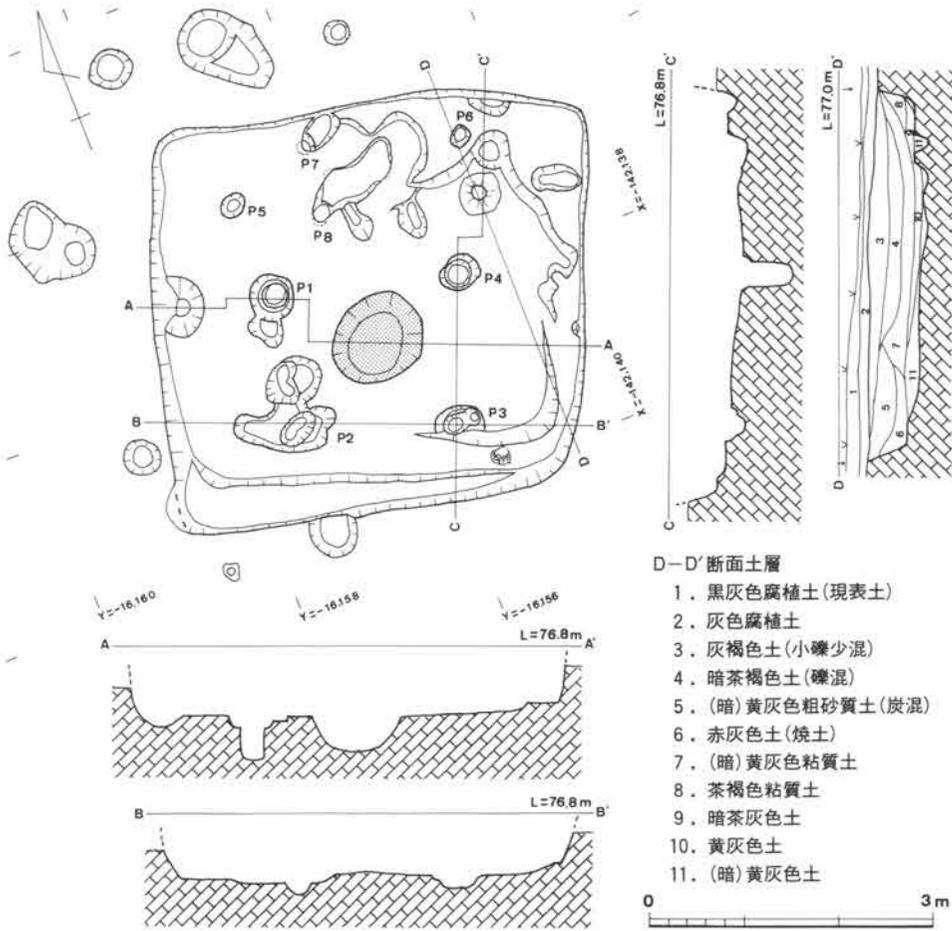
鉄板を埋置したS X 9125(第70図)は、古基本体であるS X 9124の墓壙北辺を東に延長したライン上(墓壙北東隅から東へ2.0m)に位置する。西側が竹の根による攪乱を受けていたが、ほぼ旧状をとどめており、直径0.55mの円形プランで、断面形は、底部が水平な截頭逆円錐台形(深さ0.5m・底径0.25m)を呈する。

鉄板は2枚が重ねられた状態でほぼ水平に埋置されていた。その位置は、平面的には、土坑のほぼ中央で、坑底よりも0.10~0.12m上の位置に鉄板の四隅が坑壁に接するように据えられていた。矩形を呈する鉄板の長軸の示す方位は、N43°Wで、西側の墓壙本体の主軸とは合わない。坑内はS X 9124墓壙掘削の際の赤褐色系土で一気に埋められていたが、鉄板より下位は土砂は流入しておらず空洞のままであった。

c. その他の遺構

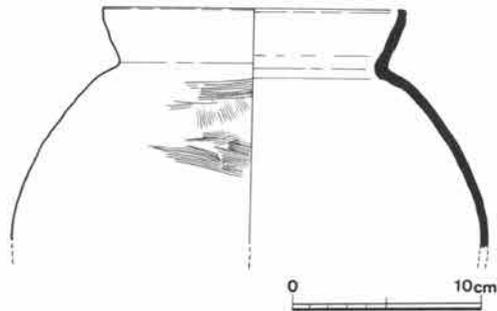
古墳・古墓関連遺構以外に、古墳時代前半期(布留式併行期)の竪穴式住居跡2棟、及び中世の遺物を包含する土坑を数か所検出した。ここでは、前者について説明を加える。

S H 9101(第72図) 調査区の北東隅で検出された竪穴式住居跡である。東西4.6m・南北4.4mのほぼ正方形に近い平面形を呈し、対向する壁は互いに平行するものの、やや平行四辺形に近く変形している(東西壁の示す方位はN20°Eを測る)。検出面からの深さ(壁高)は、0.4m前後を測るが、床面は平坦でなく、幾分凹凸がみられる。とりわけ南辺と北東隅部が一段高く削り残され不定形のテラス状を呈する。床面には大小のピットや不整形の浅い落ち込みが多数みられるが、深さと規模から抽出できた支柱は竪穴の南寄りに偏在していた4本形式(P 1~P 4)と考えられ、これとは別に北側の空間に1段規模を縮小し



第72図 SH9101実測図

た副柱(P5・P6)を柱筋を通さずに配して補う。また、北壁に近くその中央に南北に並ぶP7・P8は、他のピットに比べ深く掘り込まれるが、掘形は北東方向に大きく傾斜している。周壁溝は四周いずれにもないが、床面の付属施設として西壁のほぼ中央部に壁に接するように楕円形土坑(長径0.6m・短径0.4m・床面

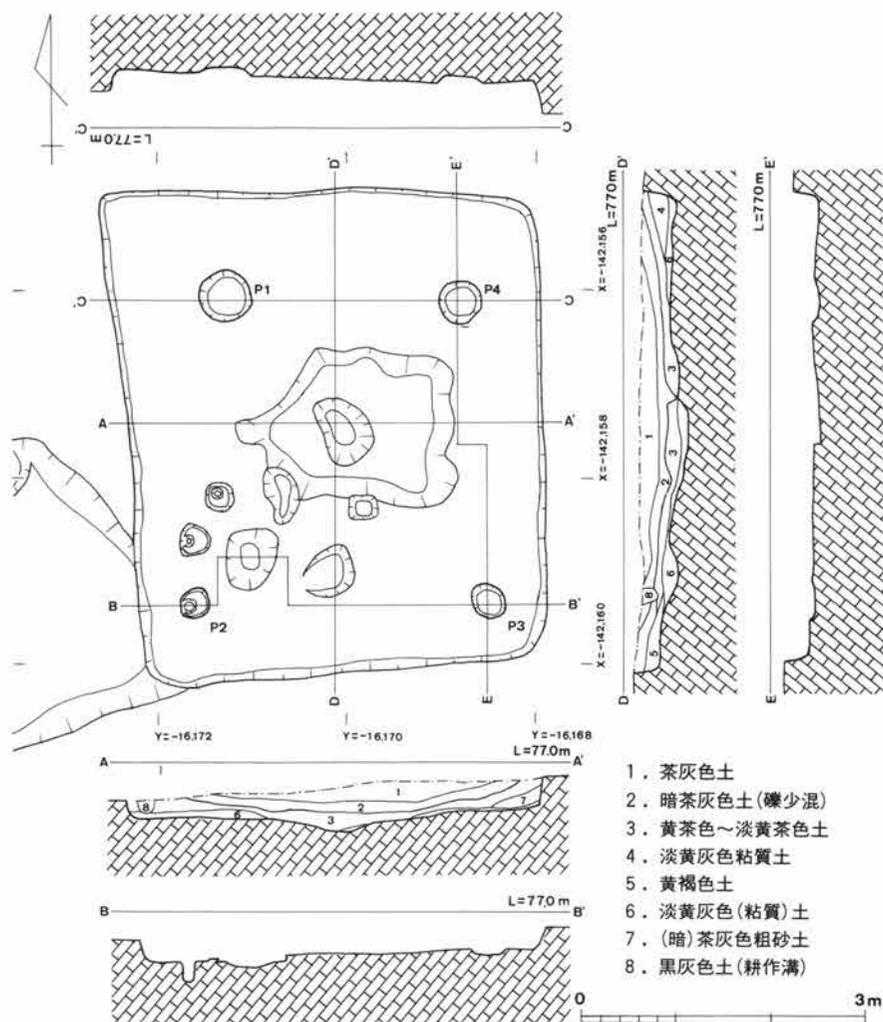


第73図 SH9101出土遺物実測図

からの深さ0.15m)が、また、支柱穴に囲まれた中央部に多量の焼灰で埋没していた円形土坑(直径約1.0m・床面からの深さ0.4m、図にはスクリーンで表示)が設けられる。前者は貯蔵穴、後者は地床炉の痕跡であろうか。堅穴内埋土は、断面D-D'図のようにレンズ状

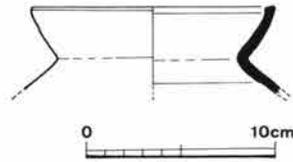
堆積を示すが、3・4層は多量の礫を含み中世の遺物が出土した。床面上の遺物は少ないが、南東隅の壁際で、布留式併行期の甕形土器がほぼ完形で出土した(第73図)。

S H9115(第74図) S H9101の南西約20mで検出した竪穴式住居跡である。主軸は、ほぼ座標南北を示すが、西壁が北でやや西に振って(北辺で0.5m西へ張り出す)、幾分変形した正方形プランを呈する(南北5.2m・東西4.5m)。現存する壁高は、0.2~0.35mを測るが、床面は多少の起伏をもち、南東から北西に向かってわずかに傾斜している(比高差0.1m)。柱穴は、大小7基余り検出したが、主柱となるものは、やや台形プランを呈する4主柱(P1~P4)に復原できる。主柱穴は、直径0.3~0.55mを測る円形掘形を呈するが、浅いものが多く、P2を除いて柱痕跡は確認できなかった。周壁溝はないが、床面のほぼ中央



第74図 S H9115実測図

に2段掘りされた不整形プランの浅い土坑(東西2.3m・南北1.5m・深さ0.25m)がある。内部に焼土・焼灰は全く混入せず、その性格は不明である。住居跡内堆積土は、大きく上位から暗茶灰色系土と黄灰色系土に大きく分けられるが、前者からSH9101同様中世の遺物(土師皿・羽釜など)が出土した。床面上の遺物は少ないが、P4に東接する床面で布留式併行期の甕(口縁部のみ)が出土しており、この遺構の時期を示すと考えられる。



第75図 SH9115出土
遺物実測図

2. 出土遺物

袋状漆塗製品(図版第54-(1)・55) 木棺内の南寄りの西長側板に寄りかかるように出土した。一端(南側)が閉塞する扁平な袋状を呈し、出土時点では上部から北側にかけての部分が損壊している。現在、遺物本体の形状維持のために、内部と背後(西側)に付着する土を除去しておらず、全体の構造を知ることはできない。ただ少なくとも露呈する部分(東側面)をみると、閉塞する側は1ないし2か所が谷状にくびれて閉塞部に2～3の山状突起を造り出している。上部の突起部分は失われているが、おそらく中央突起を一段大きく、その上下(露呈する側を正面とみれば、その左右)に幾分小さな突起を接続させていたものと推定される。こうした構造は、後述する礼冠らいかんの中の三山冠さんざんかんの巾子ぬすこに形態的に類似する。

細部の組織に関しては、断面観察等の詳細な分析を行っておらず、不明な点が多いが、巾子の頂部を除く部分は、皮革にみられる毛穴が観察されないので獣皮革とは考え難い素地の内側に平織りの粗目の布を重ねて漆で塗り固めている。頂部にあたる部分は、素地が略され網目のみとなり通気性を考慮している。

板状鉄製品(図版第56) 西山古基本体(墓壙)の北東側に穿たれた小土坑(SK9125)から2枚出土した。その状態は概述したので繰り返さないが、2枚ともほぼ同形同大で、ほとんどずれることなく密着するように合わさっていた。形態は、対向する辺が等長の幅広の長方形の平面形を呈し、その規模は、錆膨れのため正確な数値は計測できないが、長辺約31.0cm(唐尺のほぼ1尺)、短辺約21.0cm(唐尺の0.7尺)、厚さ約0.3～0.4cm、重さは2枚合計で3,050gを測る。欠落する部分はない。

出土時の現況は、錆着した2枚の鉄板の表面(特に検出時の上面)の錆の進行が著しく、小礫をだき込むかたちで大きく変形するところもあった。また、水平に埋め置かれていた関係で、上部から加わる土圧によって2枚ともわずかに湾曲していた。ところで、こうした鉄板は、後述するように墳墓遺構から出土する例が多く、その表面に被葬者を知る手懸りとなる文字の存在が期待された。そこで、錆着して剝がれない2枚の鉄板の分離と、文

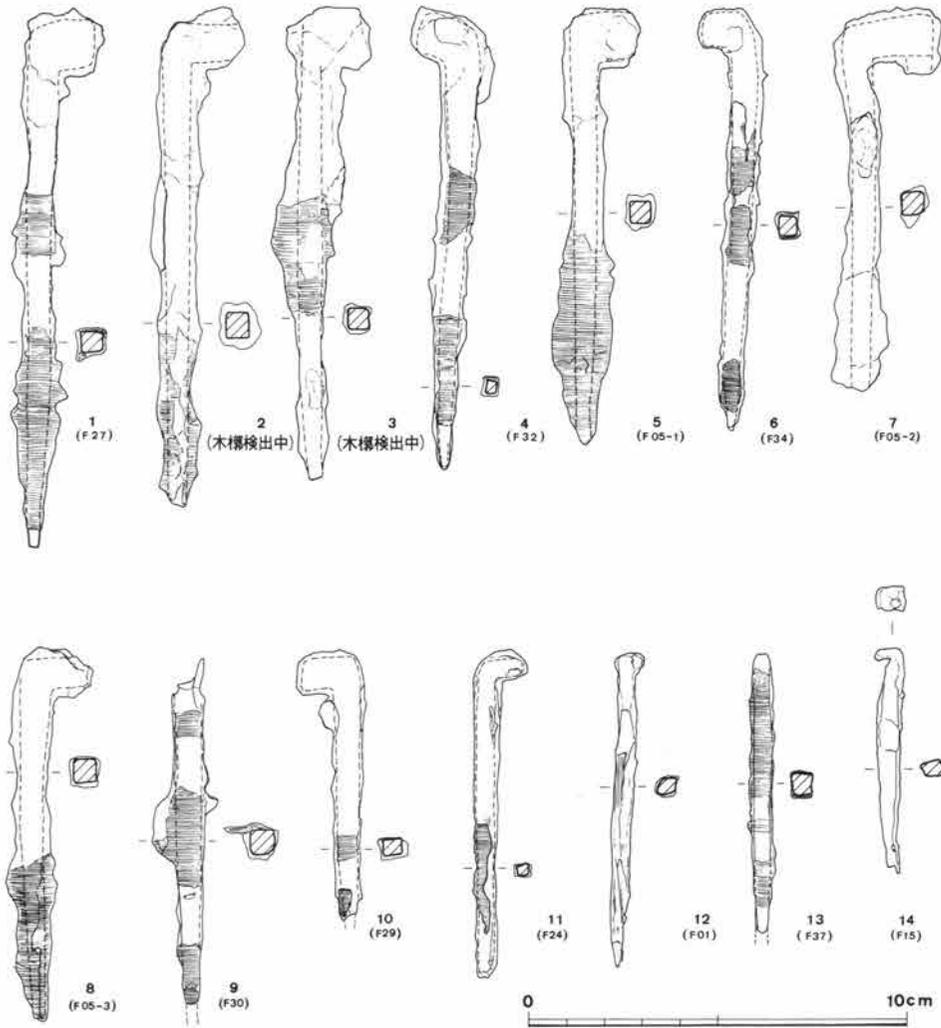
字の有無の確認作業を奈良国立文化財研究所のご協力を得て実施した。その経過を略述する。まず、鉄板の表面の土をクリーニングした上で重量と塩分の含有量を測定し、非破壊(2枚接合)の状態、表面の赤外線及びX線観察を試みた。その結果、文字は確認されなかった。次に表面に形成された銹を可能な限り除去し、各々2枚の鉄板の外面にガーゼを介在させたアクリル樹脂で裏打ち保護を施した上で、ダイヤモンドカッター等を使用して密着した部分を切り離し、2枚の鉄板を分離した。互いの鉄板の内面(接合面)には、細かいフレーク状の組織が密集して付着しており、顕微鏡観察によると、これは密閉された微小空間に形成された特殊な銹であることが判明した。そして、仮に文字が存在する場合、刻字のほかに墨書の可能性も考慮に入れ、接合面の銹を除去せずに、接合面を赤外線観察した。また、個別に分離して単体となった鉄板のX線観察も再度行った(図版第56-(3)・(4))。その結果、刻字であれ墨書であれ、文字はその痕跡すら確認することはできなかった。現在、鉄板は、接合面の微細な銹をそのままにして脱塩及び保存処理している。文字の解明については将来にゆだねたい。

鉄釘(第76図) 破片も含め総数62点出土した。ここでは比較的遺存状態の良好なものを図示し説明を加える。出土した鉄釘は、銹化が著しく細部の構造などに不明な点が多いが、釘身の断面はいずれも方形を呈し、頭部の側面形状はすべてその頂部を一方に「L」字形に屈曲させた折頭タイプに属する。これらは、釘身の規模により、身部が0.5~0.6cm角で全長10.0~15.0cmを測る大形のもの(1~10)と、細身(0.3~0.5cm角)で全長5.9~8.7cmを測る小形品(11~14)に分別できる。大形品は、脚部上端を薄くせず、そのままほぼ直角方向に曲げて釘頭としたもので、その突出長は約1.0cmで端面は平坦面を呈する。ただ、7は、突出長が1.8cmと長く、屈曲部も外反しており特異な形状を示す。細身の小形品は、頭部の屈曲方法と釘身長の違いでさらに二分できる。すなわち全長8.0~9.0cmを測り、大形品同様屈曲部を細めることなく曲げるもの(11・12)と、全長6cm前後で、脚部上端を厚さ0.3cm前後に薄く叩きのばした上で屈曲させるもの(14のみ)である。

土師器甕形土器 いずれも断片資料で竪穴式住居跡から出土した。

第73図は、SH9101から出土したもので、復原口径16.0cmを測る中形甕である。遺存状態が悪く口唇部は旧状を失うが、わずかに内方に肥厚するようである。体部外面は、タテハケを全面に施した後、ていねいなヨコハケを加え、肩部下寄りに不規則で断続的な横基調のハケを用いて仕上げる。内面は頸部屈曲部より2cm以下にヘラケズリ痕が認められる。体部外面には煤が付着している。

第75図は、SH9115床面に倒立した状態で出土し、体部の大半を欠損している(復原口径12.4cm)。頸部から緩やかに屈曲し、口縁は幾分内湾ぎみに立ち上がる。口唇部は、上



第76図 西山古墓 出土遺物実測図—鉄釘—

面がわずかに内傾する面をもたせて、丸く肥厚する断面形を示す。口縁内外は、布を介在させたヨコナデで仕上げ、器表には細かい条痕が残る。内面は、頸部屈曲部より1.5cm以下にヨコヘラケズリがみられ器厚を減じている。

3. 小結

今回の調査で判明した事実のうち、西山古墓について若干の考察を加えまとめとする。

a. 古墓の造営時期について

西山古墓からは、土器資料などの時期を特定し得る副葬遺物がなく、遺物の上から造営時期を求めることは困難である。そこで、仮に、規模や構造が類似する他の埋葬遺構(古

墓)の年代観と照合させ、これらと大幅に時期差がないものとするれば、8世紀後半～9世紀中頃の年代幅におさまると考えられる。冠や鉄板の出土がこれを前後する時期に集中することは、これを補強する要素となる(後述)。

ところで、黒崎 直氏は、古代における上流階層の(墳)墓の動向についてその変化と画期を見出し、およそ3段階の時期区分を試みている^(注13)。すなわち、氏は第Ⅰ段階(僧道昭による火葬開始=700年～神護景雲年間=769年)を「火葬の開始と火葬墓が盛行する時期」とし、続く第Ⅱ段階(宝亀年間=770年～天長・承和年間=842年)を「土葬への回帰する時期」、第Ⅲ段階(嵯峨天皇喪葬の承和年間=842年以降10世紀まで)を「薄葬を基調とする土・火葬混在期」とそれぞれ規定した。とりわけ第Ⅱ段階は、それに先立つ聖武喪葬(756年)に土葬が採用されたのを契機に、貴族層がこれにならう形で土葬墓を営むようになり、大化の薄葬令(646年)以来の薄葬を旨とする思想が崩壊し、厚葬の風を次第に帯びてくるようになる。そうした中で再び薄葬を志向して、淳和・嵯峨帝が薄葬を内容とする遺詔を発し、特に後者が効力を発揮し、以降大規模な墓の造営はみられなくなる(第Ⅲ段階への移行)。したがって、氏の段階区分に依拠するならば、西山古墓のような大規模な木棺墓は、それが盛行する第Ⅱ期(8世紀後葉～9世紀前半)に帰属することになる。

b. 古墓の類例とその企画性について

黒崎氏が第Ⅱ段階とした土葬墓の類例は、付表6に示したように、今回の西山古墓を含めて全国で10数例が確認されている。これらは、大半が畿内に分布しているが、梨の木古墓や鳥取古墓・宮ノ本第2号墓のように畿外での検出例もある。

その構造をみると、いずれの場合も木棺を墓壙内に直葬する例はなく、何らかの被覆施設(槨)を設けるのを原則としている。これは文献にみえる「而重以棺槨繞以松炭」(『続日本後紀』承和9年7月15日条、いわゆる嵯峨遺詔)に対応するものである。その方法は、木炭槨が最も多く、1例だけであるが塼槨も存在する(高安山第30号墓^(注14))。木枠組で木棺を覆う木槨構造を採るものは、これまで平吉古墓を知るのみであったが、西山古墓例がこれに加わり2例目を数えるに至った。

次に、墓壙の規模と槨の規模をみると、その形態のみならず規模が共通するものが少なからず認められる。例えば、西山古墓の槨の規模(長軸2.7m×短軸1.3m)は、西野山古墓^(注16)や沓掛古墓^(注17)・宮ノ本第2号墓^(注18)の墓壙の規模(この場合木炭槨の輪郭)とおおむね一致する。また、比較の対象は異なるが、同じ木槨墓構造を採る平吉古墓の墓壙の規模もこれと近似した数値を示す。

次に副葬品の内容をみると、青銅製品(鏡や容器類)・石帯・刀剣類・玉類・銭貨・土器類などがあり、副葬にあたってはそのいずれかがセットで埋納されている場合が多い。そ

付表6 主要な8・9世紀の木棺墓一覧表(注13論文をもとに加筆して作成)

遺跡名 (所在地)	構造 時期	墓壇の規模と形態 主軸の示す方位	①櫛の規模 ②木棺の規模	副葬品(出土遺物)
梨の木古墓 (滋賀県犬上 郡多賀町)	木炭櫛 9世紀	長約3.6m・幅約2m 長方形 南北主軸	①墓壇と同じ ②長1.6m 幅約0.6~0.7m	緑釉有蓋無頸壺、緑釉唾壺
西野山古墓 (京都市山科 区川田)	木炭櫛 9世紀 前半	長2.7m・幅1.35m 長方形 ほぼ南北主軸	①墓壇と同じ ②不詳	銅鏡(金銀平脱双鳳文鏡)1・石帯(丸軀・ 巡方)残欠、金装大刀1、刀子破片3、 鉄鏃8、漆箱破片30、黒色土器(平瓶の ミニチュア・風字硯各1)、鉄板2
長野古墓 (京都府向日 市物集女)	木炭櫛 9世紀 前半	長約2m・幅約1m 長方形 南北主軸	①墓壇と同じ ②不明	銅鏡(六花双鸞寶馬鏡)1、水晶丸玉2、 筭様品2、瓶子2
鳥取古墓 (京都府竹野 郡弥栄町)	? 9世紀 前半	底部の幅3m以上 断面播鉢形	①不明 ②不明	銅鏡(亀鈕瑞花双鳳文八稜鏡)1、石帯 (丸軀・巡方)7、刀剣類(槍・刀剣?)、 茄子形垂飾2、須恵器大形甕1
香掛古墓 (京都市西京 区大枝)	木炭櫛 8世紀 後葉	復原長2.5m・ 幅1.2m 長方形	①墓壇と同じ ②復原長1.85m 幅0.55m	銅水瓶1、銅小椀1、漆方形小箱1、 水晶丸玉3、木製丸玉2
高尾古墓 (京都府綴喜 郡宇治田原町)	木炭櫛 8世紀 ?	「石室などの施設はなく、直接土 中から木炭・灰等と一緒に遺物(右掲 が出土したと伝える。)(報文)		和同開珎1、須恵器(子持壺1・壺1・ 高杯1・杯身2・杯蓋1)、土師器片
猪の谷古墓 (京都府相楽 郡和束町)	木炭櫛 か?	「丘陵稜線上に径6.7m、高さ1.2m の封土があり、封土下約60cmに木炭 敷面が存在した…」(報文)		なし
平古古墓 (奈良県高市 郡明日香村)	木 櫛 9世紀 前半	長2.7m・幅1.4m 長方形 主軸は北東~南西	①長2.12m・ 幅0.55m ②長1.86m・ 幅0.4m	棺蓋板上・冠断片、石帯(丸軀)1、砥 石1、須恵器瓶子1、黒色 土器鉢1 櫛(梓組)蓋上面…土師器杯6
西山古墓 (京都府相楽 郡木津町)	木 櫛 8世紀 後葉~ 9世紀 前半?	長3.7m・幅2.3m 隅丸長方形 主軸は南北	①長2.7m・ 幅1.3m ②長2.0m・ 幅0.45~0.5m	棺内…冠1
高安山第10号墓 (奈良県生駒 郡三郷町)	木櫛? 8世紀 末?	不明、周囲に列石 による方形区画 主軸は南北	①長3m・ 幅1.5m ②不明	土壇(木櫛?)内炭層中…鉄板1(木箱 収納か) 土壇(木櫛?)内炭層中…和同開珎・ 神功開寶・萬年通寶
高安山第30号墓 (奈良県生駒 郡三郷町)	樽 櫛 年代不 詳	長2.9m・幅2.0m 長方形、主軸東西 周溝による区画有	①長2.3m・ 幅0.82m ②不明	なし
宮ノ本第2号墓 (福岡県太宰 府市)	木炭櫛 9世紀 初頭	長2.6m・幅1.6m 長方形、主軸東西 長方形列石区画有	①墓壇と同じ ②長1.9m・ 幅0.42m	棺内…鉄小刀(鞘入)1、網状漆製品 (冠)片、不明漆膜小片、 棺外…土師器(杯A5・皿2)

鉄釘などの緊結金具は、各古墓から普遍的に出土しており、出土遺物に加えていない。

して、その内容は、木槨墓よりも木炭槨墓の方が優位であることが看取できる。網状の漆塗りの冠については、西山古墓以外に平吉古墓や宮ノ本第2号墓からも出土しており、古墓に副葬される品目としては決して特殊なものでないことがわかる。

このように、この時期に営まれた古墓には、具体的に成文化された法令こそ知られていないが、その構造や規模、副葬品の内容・組み合わせなどに、一定の法則が存在したと考えられ、西山古墓の場合もこうした規制のもとに企画的に営まれた墓といえることができる。

c. 漆塗の冠について

この時期の粗目の網状を呈する平織の布を漆で固めた製品(冠)については、同様のものが現在までに6例ばかり確認されている^(注19)。ただ、その多くが残存度の悪い断片資料で、全容をうかがえるものは少ない。こうした中で今回の西山古墓出土例は、巾子の一部にすぎないものの、冠帽本体が押しつぶされた状態で出土した平城京東二坊坊間小路西側溝洫と合わせ、形態を知る上で貴重な資料となる。

ところで、これらの出土例は、いずれも表面を黒漆で塗り固めているが、この点を重視すると、こうした冠は、文献にみえる「漆紗冠」(『日本書紀』天武天皇11年3月条)、あるいは「漆冠」(『続日本紀』大宝元年3月甲午条、いわゆる大宝令の服制規定)に相当する可能性が高い^(注20)。一方、古代の律令制下における儀式や饗宴の際に着用する冠には、礼服冠(大祀・大嘗・元日に着用)と朝服冠(朝廷の一般儀式に着用)が規定されている。そして、養老・衣服令諸臣条には、諸臣の礼服について位階ごとにその内容を記すが、その規定範囲が一位から五位に限定されている。つまり、六位以下には礼服の規定はみられない。実際の施行例をみても、例えば、「天皇御大極殿受朝、親王及大納言已上始著礼服、諸王臣已下着朝服」(『続日本紀』大宝2年春正月己巳朔条)、「勅、五位已上礼服冠者、元来官作賜之、自今以後令私作備、内命婦亦同」(『続日本紀』天平13年10月辛卯条)、「盧舎那大佛像成、始開眼是日行幸東大寺、天皇親率文武百官、設齋大会、其儀一同元日、五位已上者著礼服、六位已下者當色(朝服のこと、筆者注)、」(『続日本紀』天平勝宝4年夏4月乙酉条)とあるように、礼服の着用は、親王・大納言以上あるいは五位以上の者に限定されていたことが確認できる。この「礼服冠」の実態については、『延喜式』卷19式部下元正朝賀条に、位階ごとにその内容が詳しく記されている。同条によれば、朝賀・即位儀において「五位以上服礼服、^{四位已下非有職掌}著礼服、」とした上で、「其礼服」(礼服冠)について冠(本体)・冠頂・櫛形上・前後押鬘上・額上のそれぞれについてその素材や裝飾物(玉飾りなど)を規定している。このうち冠本体については、親王一品から諸臣三位までは「漆地金装」、諸臣四・五位は「漆地銀装」とあって、いずれもその素材に漆が塗られていたことがわかる。ちなみに、朝服冠は養老・衣服令朝服条に、五位以上が「皂羅頭巾」、六位

以下が「自縵頭巾」と規定しており、素材である羅・縵はいずれも織物(布)で、これを頭巾のように用いたと考えられ、少なくとも素材を漆で塗り固めるようなことはしない。

ただ、時代が下り平安時代になると、典儀・贅者といった六位の官に儀礼的規制が適用されるに及んで、礼服の規定範囲が六位にまで拡大され、「三山冠」と称する礼冠が生み出される^(註21)。いずれにせよ、西山古墓出土例は、素材が「漆地」である点において、朝服冠とはできず、五・六位以上にのみ着用が許された礼服冠の可能性が高い。

d. 鉄板について

現在までに同種の板状鉄製品(鉄板)は、管見によると、全国でおよそ18遺構24例ばかり確認されている(付表7参照)。これらを見ると、例外なく墓にともなって出土しており、その方法も土葬・火葬墓を問わない。鉄板が出土する埋葬遺構の造営時期をみても、おおむね奈良時代から平安時代前半期に納まる点も共通している。

ただ、鉄板の形状(法量)、特にその平面形をみると、西山古墓例のような長辺と短辺の比率がおよそ1:0.7位の幅の広い長方形(矩形)のものと、長辺に対して短辺(幅)が極端に短いいわゆる短冊形の鉄板に二大別することができる。そして、その形状ごとの分布をみると、矩形タイプは畿内を中心に分布しており、短冊形タイプは九州や関東地方に多い傾向が看取できる。

そこで畿内型ともいべき矩形タイプの規模と枚数を仔細にみると、規模は、横枕例を

付表7 鉄板出土遺跡一覧表

遺 跡 名	所 在 地	種類	鉄板法量 (cm)	形状	数	時 期
西山古墓	京都府木津町	土葬	31×21×0.3	矩形	2	奈良末～平安初頭?
西野山古墓	京都市山科区	土葬	31×21×0.3	矩形	2	平安初頭
能登遺跡火葬墓	奈良県桜井市	火葬	30×21.8	矩形	2	奈良
小治田朝臣安萬侶墓	奈良県都祁村	火葬	20または25×15	矩形	1	奈良
高安山第10号墓	奈良県平群町	土葬	22×18×0.4	矩形	1	奈良
岩尾遺跡火葬墓	奈良県榛原町	火葬	30×21×0.3	矩形	2	平安初頭
横枕遺跡火葬墓	奈良県桜井市	火葬	21.8×21.8	方形	1	平安初頭
石曳古墓	大阪府羽曳野市	火葬	29×19.6	矩形	2	奈良
小川原遺跡(火葬墓)	滋賀県長浜市	火葬	断片資料	方形	?	?
西之宮遺跡	徳島県鳴島町	土葬	約27.6×15.6以上	矩形	2	奈良
狐塚火葬墓	熊本県旭志村麓	火葬	28.5×7~8?×0.3	短冊	1	奈良
南平上遺跡	熊本県熊本市	火葬	21.7×4	短冊	1	平安前期
野川南耕地遺跡火葬墓	神奈川県川崎市	火葬	31.3×7×0.4	短冊	1	平安前期
林小原子台遺跡20号墓	千葉県芝山町	火葬	(31.8)×6.6×0.2	短冊	1	平安前期
林小原子台遺跡21号墓	千葉県芝山町	火葬	断片資料	不明	?	平安前期
雷塚遺跡火葬墓	千葉県袖ヶ浦市	火葬	30×10×0.3	短冊	1	奈良末～平安初頭
諏訪山遺跡3号墓	東京都世田谷区	火葬	29.5×7×0.4	短冊	1	
板東谷遺跡7号墓	神奈川県	火葬		短冊	1	

除き、およそ1:0.7の比率に統一されており、西山古墓例と全く同形同大(31cm×21cm)のものも少なくない。さらに矩形タイプは、同形同大のものを2枚セットで埋納する例が多いことも重要な点として確認できる。したがって、その性格を考察する場合、2枚一組の矩形タイプと1枚の単独出土に限られる短冊形タイプでは若干その性格が異なるものと考えられるので、以下、矩形タイプの鉄板に焦点を絞ってその性格をさぐってみたい。

そこで、矩形タイプの鉄板の平面形状と2枚一組で出土するという点を重視すると、結論的には次の四つの可能性が指摘できる。①墓誌、②買地券、③いずれかが形骸化したもの、④そのいずれでもない。①・②について若干説明を加える。

まず、墓誌の可能性だが、日本出土の墓誌は、古いものでは青銅あるいは銀製で、短冊形に造ったもの、あるいは火葬用骨蔵器に記されたものを単独で納めるものが多い。ところが、8世紀後半になると、これに加えて先に考証した墓自体が火葬から土葬へ回帰する現象に連動する形で、石製や瓦埴製といった非金属の墓誌が出現する(高屋枚人墓誌・紀吉継墓誌・楊貴氏墓誌など)。これら石・瓦埴製墓誌は、厚みこそ異なるが、その平面形は、矩形タイプの鉄板と近似し、さらに墓誌本体と同形同大の誌蓋(篆蓋)の両者を一具とするそれまでみられなかった(しかし中国の伝統的な墓誌に由来する)タイプの墓誌である。矩形タイプの鉄板は、これら有蓋形式の非金属製墓誌と期を同じく出現しており、形態のみならず、用い方まで共通することから、有蓋形式の鉄製墓誌とみる見解が存在する。

次に、買地券説だが、買地券とは買山券・買地券・冢券とも記し、本来は土地を売買する際の契約証書(不動産取得証書)のことで、中国の古代において鉄板に朱漆書きをして用いたものである。それが後漢代になると、葬送儀礼の中にとりこまれるようになり、死者が自らの葬地を先住者(土地神)から取得し、その安護を神に付託するという信仰が生まれ、以降買地券の墓地埋納が盛行する。そして、墓中に埋納されるに及んで明器化し、材質も鉛・瓦埴・石へと変化する。こうした中国古代の土俗信仰である買地券が、日本でも2例確認されている。福岡県太宰府市の宮ノ本1号火葬墓出土の鉛板に墨書したもの(「男好雄亡父買地鉛券」)と、岡山県吉備郡真備町出土と伝えられる「白髮部毗登富比売買地埴券」である。とくに、富比売買地券の場合、ほぼ同形同大の埴券に同じ内容の文字を刻字したものが2枚出土している。

買地券は、本来売主と買主のために同じ内容のものを2通作成して、それぞれ分ち持つ(割付)もので、こうした原則に基づき墓地に埋納する買地券も2枚作成する場合がある。富比売買地券が2枚一組であったことと、その平面形が矩形(41.8cm×約20cm)である点は、矩形タイプの鉄板と共通する要素である。しかし、一方で、宮ノ本例のように、短冊形に近い長方形(復原35.8cm×10.0~11.9cm)を呈するものがあり、出土例の少なさもある

が、日本古代では買地券を墓中に埋納する風習がそれほど定着せず、その形式も定型化するに至らなかったとも考えられる。

今回の西山古墓例の場合、文字の存在が確認できなかったため、こうした問題を解決することはできなかった。今後、同種の類例の出土に期待したい。

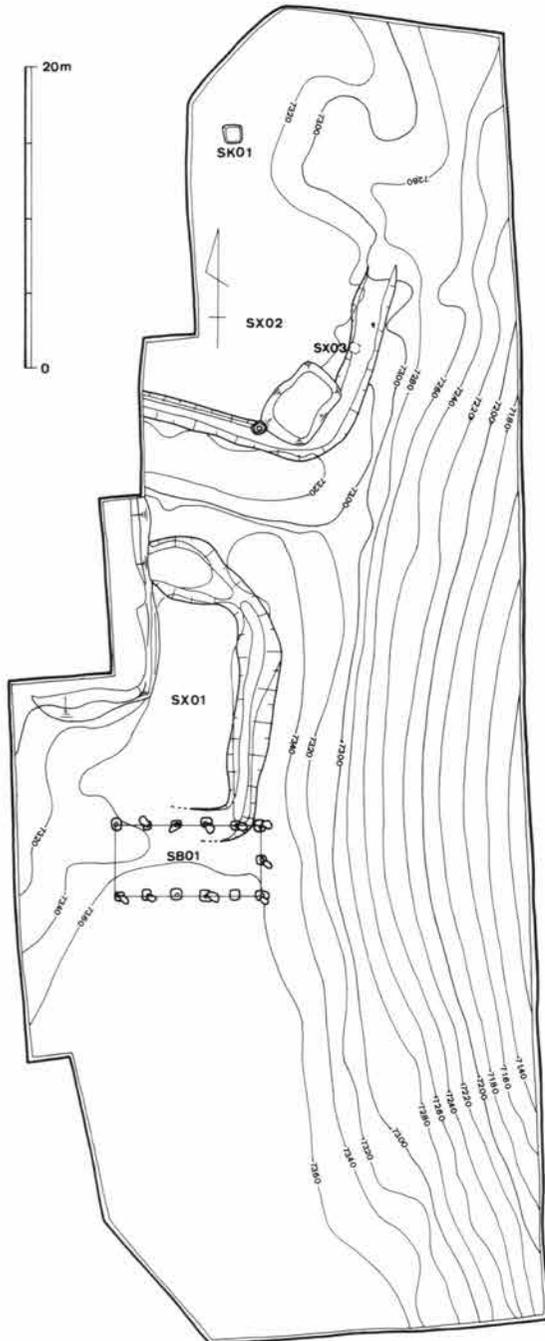
(伊賀高弘)

(3) 西山遺跡

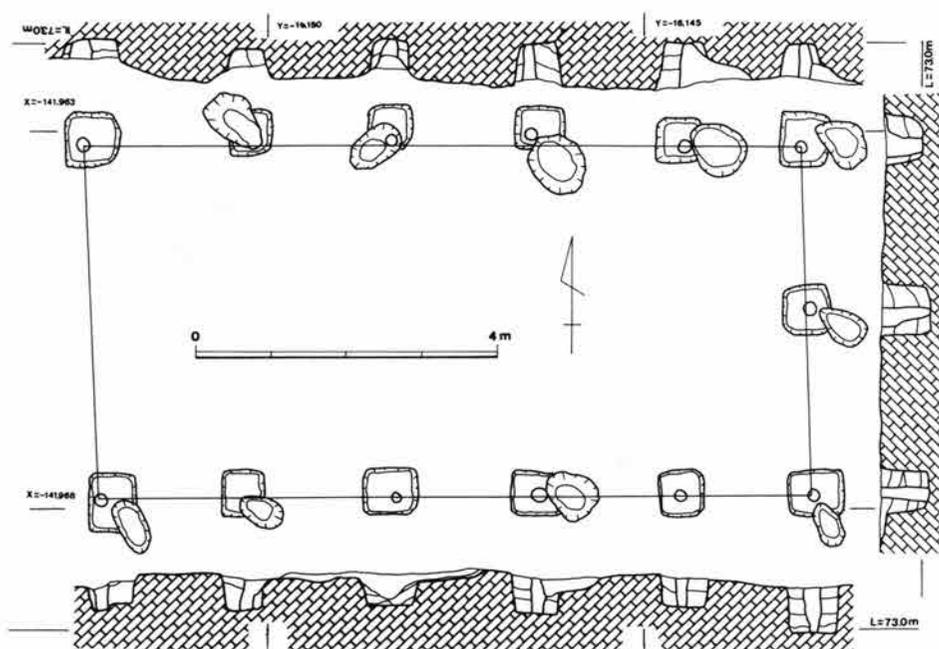
1. 調査の経過

西山遺跡の立地は標高74m前後の狭い丘陵尾根上にあり、地表下0.3~0.5mが遺構面である。

丘陵上は畑、植林によって攪乱を大きく受けているように見えるが、昭和62年度の試掘調査によって溝・甕棺等が確認されている。今回の調査は、この成果を基に約1,200㎡の発掘区を設定し、平成3年10月1日に開始し、平成4年2月20日に終了した。その結果、西山遺跡A地点では、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、古墳の周濠2条を検出した。



第77図 西山遺跡A地点遺構配置図



第78図 掘立柱建物跡 S B01実測図

2. 検出遺構

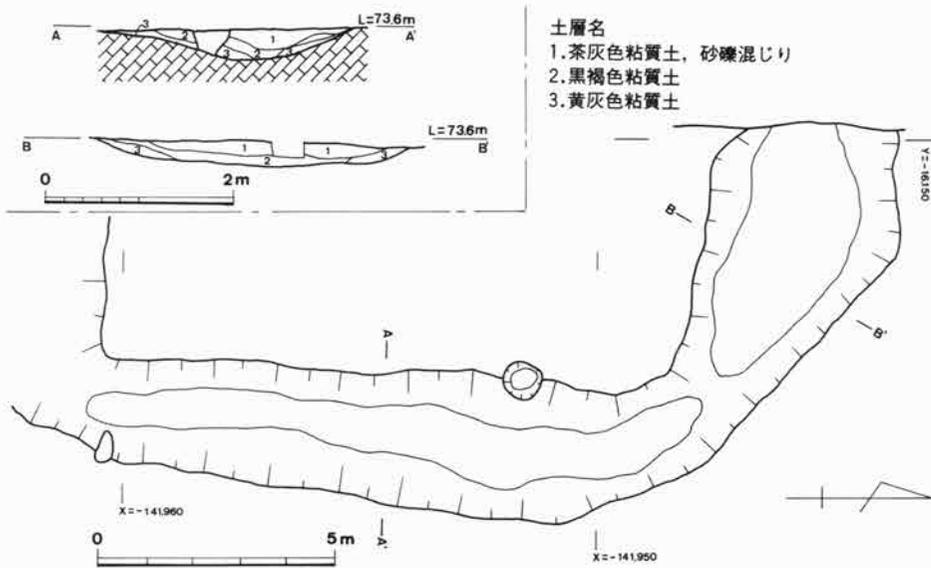
a. 掘立柱建物跡 S B01

溝 S X01の南側で検出した梁間2間×桁行5間の東西棟建物跡である。柱間寸法は、梁間2.4m(8尺)、桁行1.88m(6.5尺)である。柱の掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.6~0.7m・深さ0.2~0.6mを測る。柱痕の直径は0.18m(6寸)前後である。建物跡の主軸は座標北で西へ約1°振る。柱穴の基底面は、北側桁行と東側梁間では標高73mでそろい、南側桁行では、標高73.2m前後でふぞろいである。柱の抜き取り穴は不定形な楕円形を呈し、柱穴の南東方向に多い。柱穴内の遺物としては、土師器の破片が少量あった。

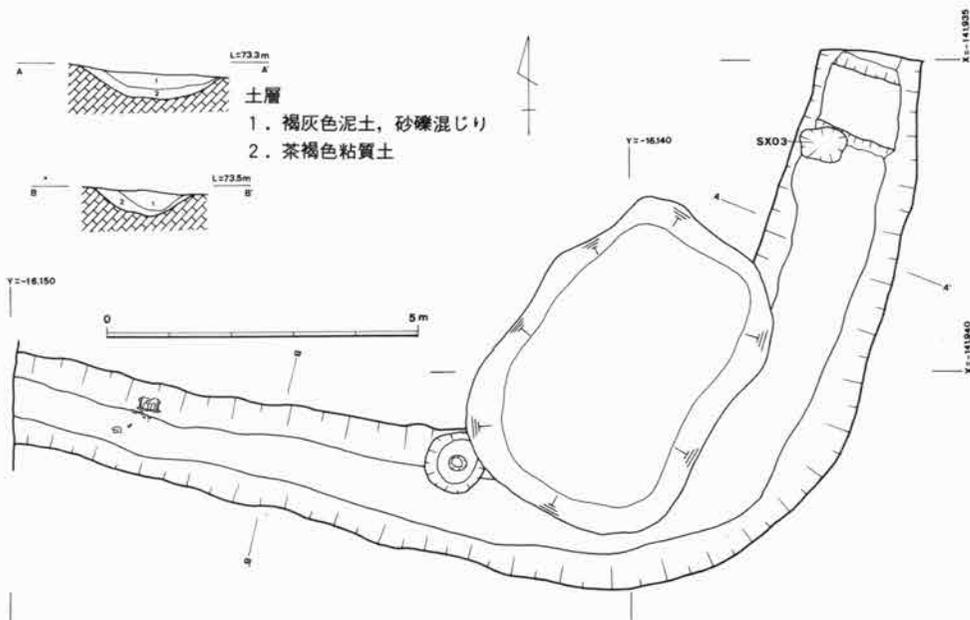
b. 溝 S X01

トレンチ中央部で検出した北辺溝で、東辺溝がそれに連続する「L」字状を呈する溝である。東辺溝は南端で西方へわずかに屈曲した後、消滅している。これはS B01の造営に先だって整地が行われた結果と考えられる。平面形態が、北辺・東辺とも直線で両者が直角をなすことから、方墳が削平されたものと思われる。一辺の長さは約12m程度であろう。

溝幅は2.8~1.5m・深さ0.4mを測り、コーナー付近で狭くまた浅くなる。溝の外縁は、やや丸みを帯びた弧を描く。断面は椀状を呈し、堆積土層は大きく3層に分かれる。上層は、茶灰色粘質土(礫混じり)で、奈良時代の須恵器や瓦片を含む。中層は黒褐色粘質土で、須恵器・土師器を含む。下層は黄灰色土、墳丘盛り土あるいは地山の崩落土である。



第79図 溝S X01実測図

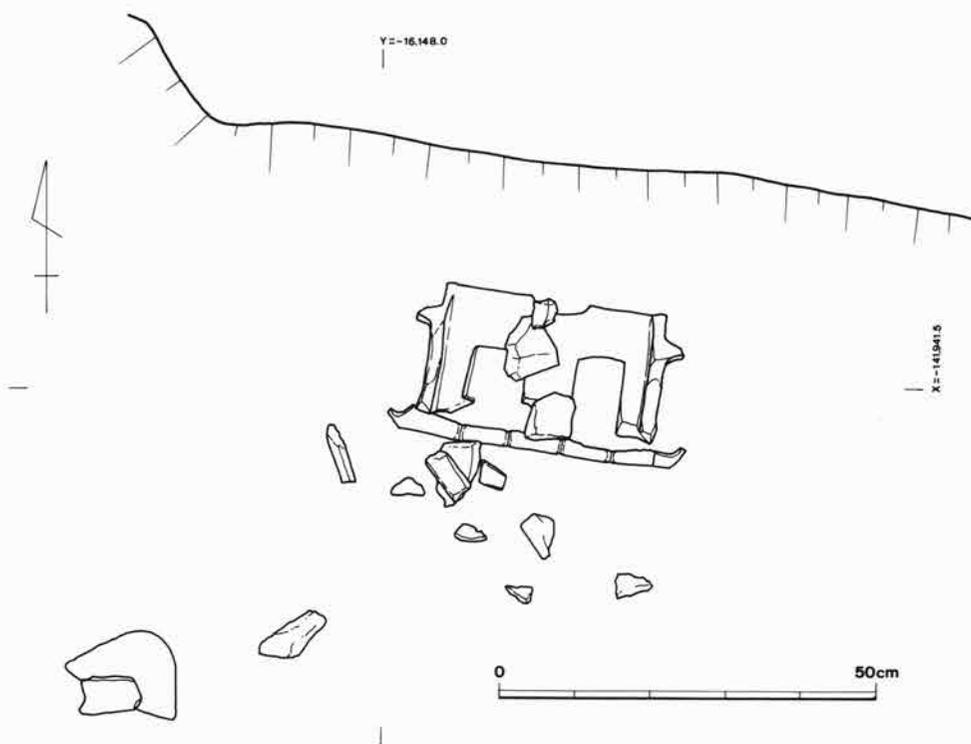


第80図 溝S X02実測図

この溝は、出土遺物や土層の堆積状況から奈良時代に人為的に埋められたと思われる。

c. 溝S X02

トレンチ北辺部で検出した東辺溝と南辺溝が連続する「L」字状の溝である。コーナー付近で近・現代の土採り穴により大きく削平されるが、これも方墳と考えられる。平面形



第81図 溝S X 02 家形埴輪出土状況図

態は、直線を呈し、直角に屈曲する。溝の外縁は弓なりの曲線を描く。

溝幅は1.3~1.8m・深さ0.4mを測る。溝の断面は南辺溝は「U」字状、東辺溝では椀状を呈する。堆積土層は2層に大別できる。上層は褐灰色泥土(砂礫混じり)で、奈良時代の須恵器・瓦、埴輪等を含む。下層は茶褐色粘質土で、南辺で家形埴輪、S X 03付近では布留式土器(高杯・壺)が出土した。S X 01で見られた暗褐色粘質土(中層)は、ここではほとんどなかった。この溝もS X 01と同様、奈良時代に入り人為的に埋められたと思われる。

家形埴輪は南辺溝の中央北側の肩部から出土した。高床式家形埴輪の基部から床面までの梁間か桁行の一面である。柱は3本分を表現しており、基部の中央部に半円孔がある。

溝東辺では、幅1.2mの掘り残された部分があり、陸橋もしくは張り出し部分の遺構とみられる。この遺構は地山の固くしまった砂礫を削り出して造られ、溝底面より0.15mの高まりをもつ。

d. 祭祀遺構S X 03

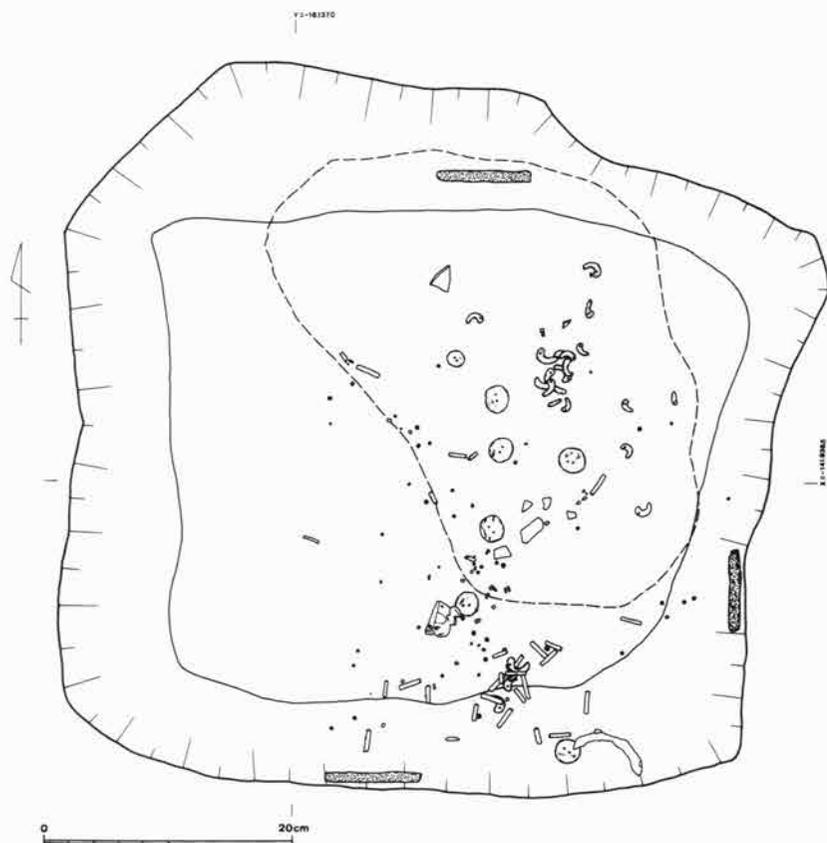
陸橋部と墳丘部との角で0.5m×0.5mの範囲にわたって玉類・石製模造品・鉄製品等が広がり、これらに伴う赤色顔料が分布する遺構を検出した。赤色顔料の厚さは1cmを満たない。堆積土は明茶褐色土が主な土質であるが、若干掘り下げると幅1~1.5cm・長さ3

～5cmの灰色砂質の直線的な帯が3か所で確認され、さらに底面では西から東に傾きをもった厚さ5cmの灰色砂質土が不定形に残っていた。これは木質が砂質土に置換したものであろう。復原してみると一辺40cmの方形の「木箱」が想定できる。「木箱」を設置するための掘形はなかった。

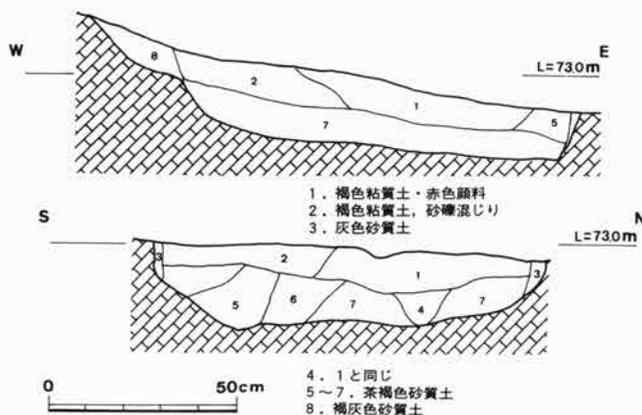
出土した遺物は、有孔円板9個、滑石製勾玉25個、ガラス製勾玉5個、碧玉製管玉26個、滑石製管玉5個、滑石製白玉40個、竪櫛、環状鉄製品、鉄製刀子等である。これらの遺物は、赤色顔料の中、及び直下で1～2cmのレベル差内で検出された。有孔円板を中心に出土状況を記述する。

有孔円板は、5個を3～5cm間隔で円弧状に一行に配し(A列と呼ぶ)、さらに一部欠損するが、A列の東側にもう1列配していたであろう(B列と呼ぶ)^(注23)。A列の長さ17.5cm、B列の長さ19.0cmを測る。

滑石製勾玉はB列の北端に集中して分布する。その数は17個あり、すべて滑石製である。勾玉の頭が数点重なりあうグループと、7個の勾玉が南北に3～5cmの間隔で14cmにわ



第82図 祭祀遺構 S X03(点線内は赤色顔料の分布範囲)

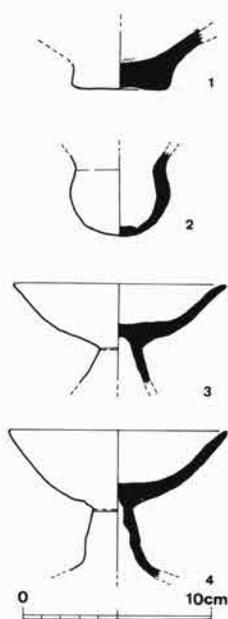


第83図 祭祀遺構 S X03断面実測図

玉質である。これらも糸・紐によって結ばれていたであろう。一方、滑石製管玉は北西のやや離れた位置から出土した。

白玉は、A列・B列の西側でその南半を取り囲むように2個一組を基本として連なっているように出土した。石材は滑石である。

竪櫛は、A列南端の円板と一部重なる。黒褐色を呈し、漆塗りであろう。環状鉄製品はB列南端の円板と一部重なる。錆が激しく弓状に残存する。刀子はA B両列の中央付近で交差する。錆が激しく数片に分かれていた。



第84図 西山遺跡
出土遺物実測図(1)
— 弥生土器・
古式土師器 —

S X03は、遺物の組成、出土状況から祭祀遺構であることに誤りないであろう。

このような周溝内で出土する遺構は全国的に稀少であるが、遺物の組成をみると古墳の主体部に類例が求められる。例えば、総社市の随庵古墳^(註24)では、人体埋葬の頭部に有孔円板及び勾玉・刀子・環状品といった遺物が配置され、その組成がS X03と酷似していることは見逃せない。

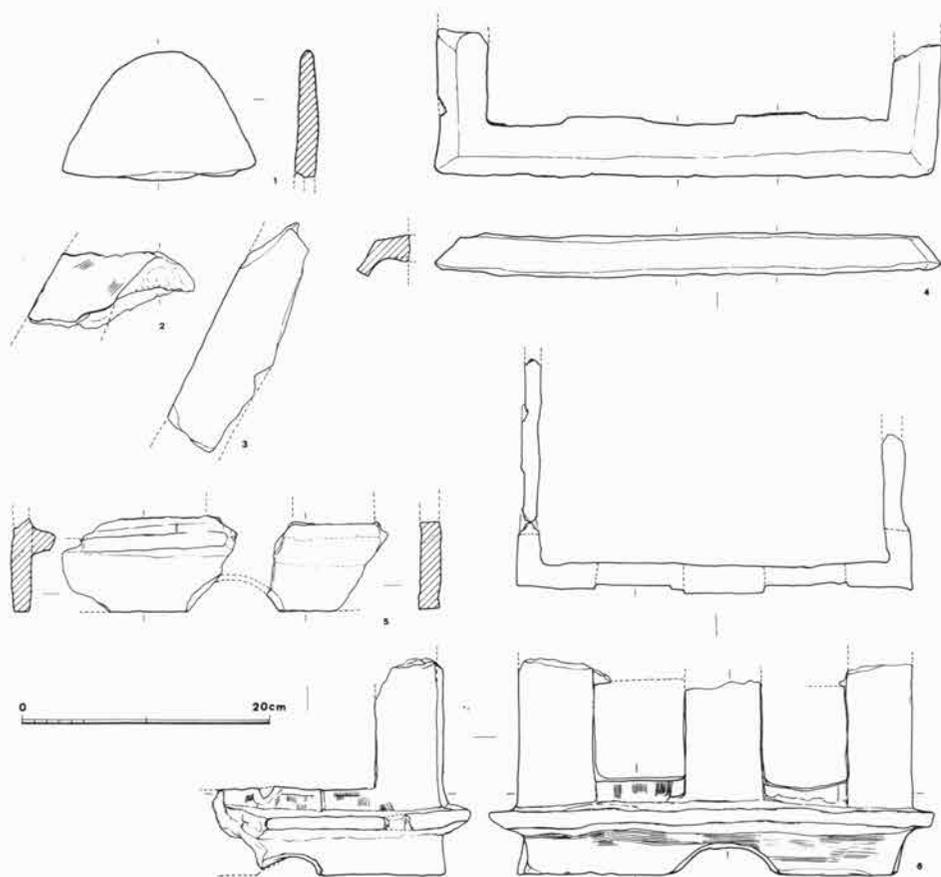
(竹井治雄)

3. 出土遺物

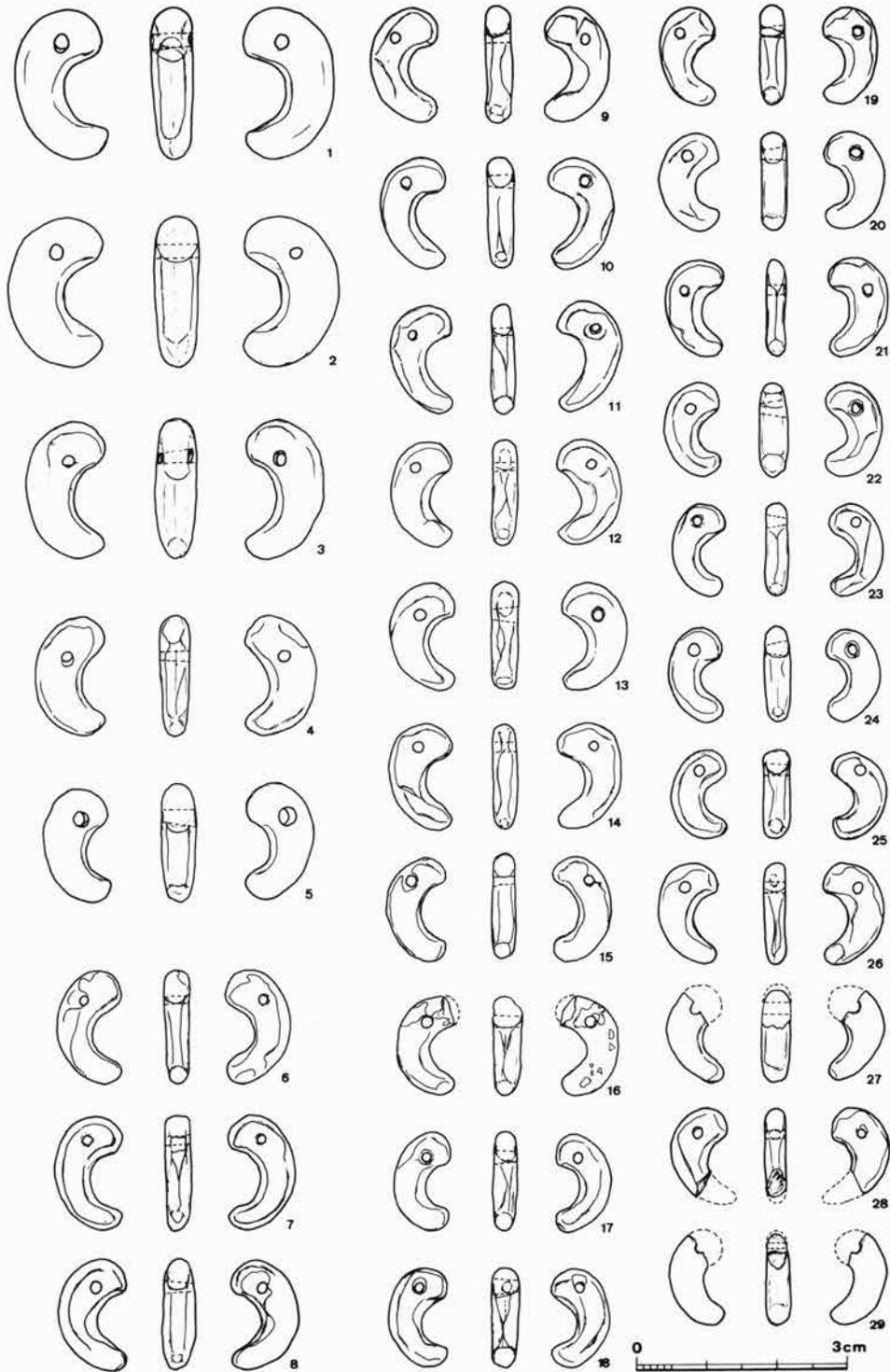
今回の調査で出土した遺物の量は、整理箱に4箱程度である。その内容は、弥生時代後期～古墳時代初頭の少数の土器片と、古墳関係の土師器・埴輪・玉類・石製模造品・鉄製品、及び、掘立柱建物跡や道路状遺構に関連する奈良時代の土師器との3時期に分けられる。他に表土層から出土した近現代の陶磁器類がある。

弥生時代後期に属する甕(第84図1)は、底部の破片で、内面にハケメが見られる。古墳時代の土師器には、A地区古墳周溝S X02東辺の祭祀遺構S X03付近から出土した小型丸底壺と高杯がある。小型丸底壺(2)は、口縁部を欠くが、厚手で、手づくね土器に近い造りである。胴部最大径5.4cmの小型品である。高杯2点(3・4)は、椀状の杯部を持つ同型式のものである。口縁部径は、ともに11.5cm前後を測るが、3の2.2cmに対して、4は3.2cmと深い。杯部と脚部の接合部を1本の沈線で強調している。

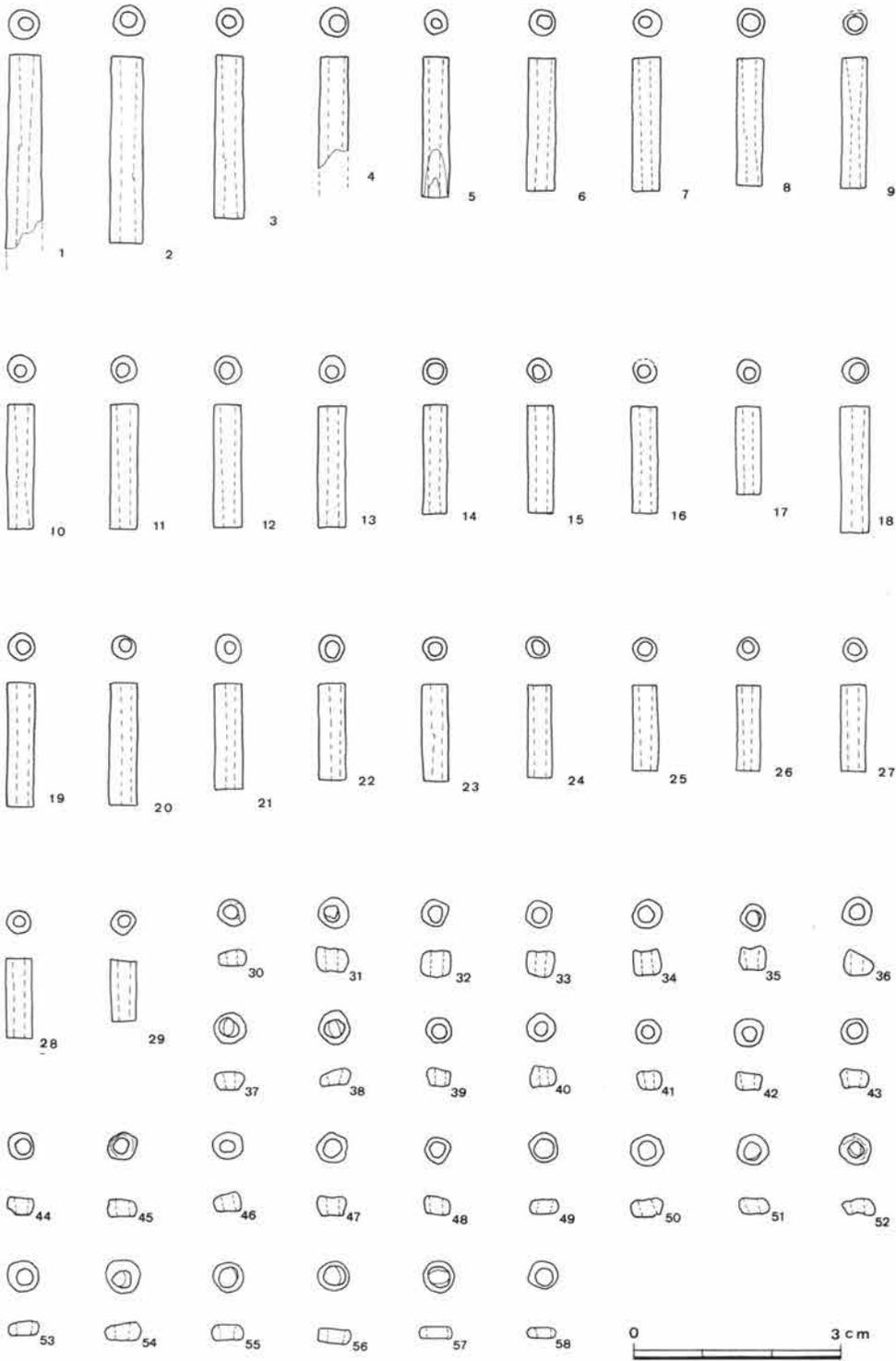
S X02の南辺周溝から埴輪片が20点ほど出土したが、いずれも家形埴輪の破片と思われる。第85図はその主要な破片である。床面を表現するタガ状突帯の2か所のコーナー部が基底部の破片(6)に見られ、さらに先端が垂下する形態の突帯部のみが遊離した破片(4)にも3か所のコーナーがある。これらが1個体に属するものと仮定すると、高床式の建物を想定せざるを得ない。基底部破片に残る透かし部分の大きさもこのことを裏付ける。一方、屋根部の構造に関しては、破風板(2・3)の他に、大棟妻部(1)の破片があり、入母屋造り



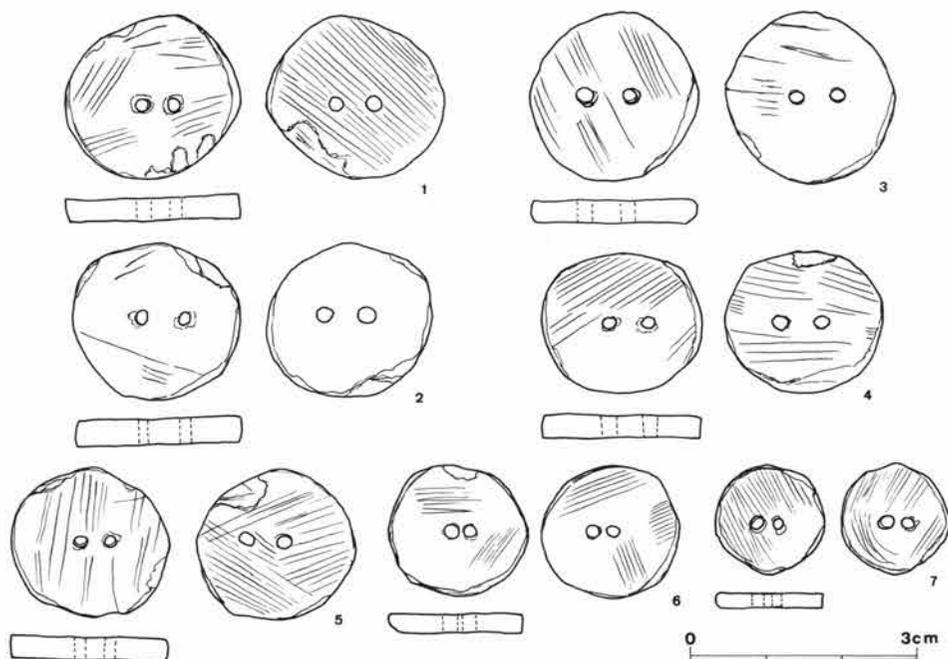
第85図 西山遺跡出土遺物実測図(2)―家形埴輪―



第86図 西山遺跡出土遺物実測図(3) - 勾玉 -



第87図 西山遺跡出土遺物実測図(4)－管玉・白玉－



第88図 西山遺跡出土遺物実測図(5)－有孔円板－

か切妻造りと推定できるが、屋根本体の破片がなく、いずれか判断しがたい。

祭祀遺構 S X 03から出土した玉類は、勾玉30点・管玉31点・白玉40点を確認したが、他に、白玉には破碎して粉状になったものが数点分ある。また、管玉の破損品には同一個体に属するものもあるかもしれない。勾玉は、白色勾玉5点と滑石勾玉25点に分けられる。

「白色勾玉」は、灰白色を呈し、肉眼では鉛ガラスが風化したように見えるが、材質が未鑑定であるので、ここではこのように呼んでおきたい。この白色勾玉は、滑石製品より一回り大きく、長さ2.1cm前後の3点(第86図1～3)と1.6～1.7cmの2点(第86図4・5)の2群に分けられる。わずかに偏平で、頭部下端にやや尖りを見せるが、背は丸く、腹は十分に削られ、尾は尖っており、典型的な勾玉の形態からそれほど逸脱していない。一方、滑石勾玉(第86図6～29)は、緑がかった灰色を呈する。長さは、1.3～1.6cmを測り、大きさの差はあまりない。頭部の丸みよりも腹部の削りを強調した結果、頭部下端がやや尖っていることなど、ほぼ同様の製作技法を見せている。また、完全に曲面的に仕上げず、稜線を各所に残しているが、滑石製品とは言え、未だ勾玉本来の形態を止どめ、完全な偏平化に至っていない。

管玉は、5点が滑石製(第87図1～4)で、灰緑色トーンが強く、黒い粒子が見える。残り26点が緑色凝灰岩製品(第87図5～29)である。色調は、淡緑色から黄褐色にかけて微妙な差があるが、淡緑色のものと、淡黄褐色のものに大別できる。管玉の大きさがこの材質と

色調の差に対応しているようである。滑石の管玉は径4.5mm前後で2.3～2.8cm以上を測る長いものが多い。緑色凝灰岩の淡緑色のものは、径3.5mm前後で、1.5～2.0cmを測り、淡黄色のものは、径3.2～3.5mmを測るものが多く、1.5cm前後に集中する小型品である。

白玉(第87図30～58)は、いずれも滑石製品である。径は、3.5～4.5mmのものがほとんどで、41点中32点が4～4.5mmに集中する。形態は、単なる円柱の輪切り状ではなく、上下の稜線部分を面取りし、玉らしい丸みを持たせている。

玉類に共伴したいわゆる石製模造品の種類は、有孔円板(第88図)のみに限られる。滑石製品で、孔は2か所あり、双孔円板と呼ばれるもので、9点出土した。直径2.0～2.3cmのものが大部分であるが、径1.8cmのものと1.5cmのやや小型品が各1点ある。厚さは、3～4mmを測るが、小型品は、2mm台の厚さしかない。

鉄製品が2点、玉類とともに出土したが、腐食のために形態を特定できない。あえて推測すれば、刀子と環状製品かと思われる。他に、豎櫛が1点共伴しているが、図化し得ていない。

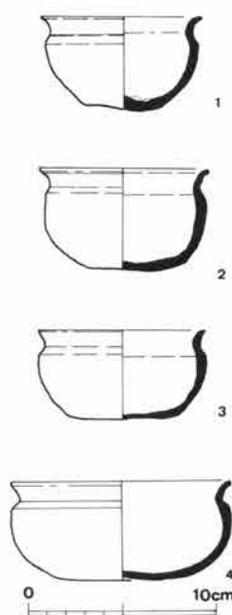
奈良時代の遺物は、土師器と須恵器であるが、ほとんどが細片である。実測し得た土器は、土師器4点にすぎない。第89図1～4はいずれも土師器壺Bの小型品である。1～3の3点は、それぞれ口径8.4・8.8・8.9cm、器高5.1・5.5・4.8cmを測り、ほぼ同一規格の製品である。4は、口径11.8cmとやや大きいのが、器高は5.3cmと、他の3点と同一である。製作技法は共通しており、全体にヨコナデで仕上げ、底部内面に指押さえ痕を顕著に残す。頸部外面を強くナデて、外反する口縁部を成形する点が、この土器の特徴らしい。焼成は良好で、胎土は密、色調も淡黄褐色で4点とも共通している。

(小山雅人)

4. 小結

今回の西山遺跡の調査で、「L」字状に検出した2条の溝は、その形態の類似や、一方の溝から出土した古墳関係の遺物から、2基の低墳丘の方墳と判断される。この種の方墳は、従来南山城で多く知られているが、木津町における^(注25)学術文化研究都市関係の調査でも、すでに瓦谷遺跡や上人ヶ平遺跡で検出をみている。

また、西山遺跡の方墳が上人ヶ平古墳群や内田山古墳群と共通するのは、古墳の規模か



第89図 西山遺跡出土
遺物実測図(6)
—奈良時代土師器—

らみて、分不相応とも思われる形象埴輪の出土である。西山遺跡の家形埴輪片は、復原は困難であるが、かなり見栄えのする高床式の建物を表現しているようである。

一方、いささか奇異と思われるのは、円筒埴輪が一片すら出土していないことである。もし、この古墳に家形埴輪のみが樹立されていたとすれば、綾部市の野崎2・4号墳^(注26)(円墳)や長岡京市の宇津久志2号墳^(注27)(方墳)と同様の非常に珍しい例となる。

祭祀遺構S X03については、それが古墳の主体部ではなく周溝内、しかも陸橋の傍らに存在する点で、はなはだ特異な例とせざるを得ない。滑石製模造品は、古墳の主体部内外・墳頂部・造り出し部からの出土例が多く知られているが、古墳の周溝内の祭祀的遺構として、わずかに福岡県豊津町の徳永川の上遺跡で青銅鏡・ガラス小玉・鉄製刀子・鋤先・堅櫛とともに、滑石製模造鏡・勾玉・白玉が古墳周溝内の土坑状遺構から出土したことが全国初として報じられている^(注28)。また、福岡県炭焼5号墳^(注29)では、有孔円板と刀子が周溝底の2m離れたそれぞれ幅約1mの隅丸方形の窪みから1点ずつ赤色顔料とともに出土しており、鳥取県青木遺跡の古墳(B S X06)の周溝からは土製模造品が出土している^(注31)。周溝を掘り残した陸橋の傍らでの祭祀遺物の出土例としては、管見の限りでは、綾部市野崎3号墳の土製模造品^(注32)が唯一例である。ただ、徳永川の上遺跡例は、西山遺跡にない青銅鏡・ガラス小玉・鋤先を除けば、遺物の種類はかなり似通っている点が指摘できよう。そして、有孔円板が鏡、刀子が剣の代用品と見なすことが可能であるなら、鏡・玉・剣に櫛を加えた祭祀用遺物は、石室など古墳主体部の内外で検出される同様の遺物と基本的には同じ性格を持つものではないであろうか。しかし一方では、炭焼5号墳のように、周溝内に顔料を伴う土坑に遺物を埋置する例もあり、にわかには結論を出せない。石製模造品や古墳での祭祀については、いくつかの研究があるが、今回の西山遺跡例は、徳永川の上遺跡例とともに、かつて知られていなかった古墳周溝の祭祀の存在を示すものとして貴重な資料となる。

奈良時代の掘立柱建物跡については、これのために古墳を削平し、整地を行い、建物も方位を正確に北に向けた、比較的大形の建物である点、注目されるが、今年度段階では周辺からの関連遺構・遺物がわずかであるので、次年度以降の北部と南部の調査結果を待つべきであろう。

(小山雅人)

注1 平良泰久「西山塚古墳」(『木津町史 史料編I』木津町) 1984

注2 小池 寛「西山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

- 注3 調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)
五百磐頭一・岩本 貴・小野紀男・鹿島昌也・日下隆春・佐伯崇吉・鈴木一有・高橋乙彦・辻谷真夕・筒井崇史・中井英策・平松弘孝・藤野洋大・堀 優子・三好 愛・山田哲也・有馬三喜子・坂田千晶・新谷二三代・武田久美子・辻 道子・中西 修・中村久登・林 恵子・林益美・古川良子・吉永清美
- 注4 戸原和人「木津地区所在遺跡 昭和62年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注5 石井清司「木津地区所在遺跡 昭和63年度発掘調査概要(5)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注6 伊賀高弘「木津地区所在遺跡 平成元年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注7 石井清司「木津地区所在遺跡 平成2年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡(第4次調査)」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注8 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』1978、『平城宮出土軒瓦型式一覧 補遺篇』1984
- 注9 毛利光俊彦「平城宮・京出土軒瓦の再検討」(『平城宮発掘調査報告』XⅢ 奈良国立文化財研究所) 1991
- 注10 森 郁夫「興福寺式軒瓦」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』1982)
- 注11 高島忠平ほか『平城宮羅城門跡発掘調査報告(第一～第三次発掘調査報告)』大和郡山市教育委員会 1972
- 注12 墓壙の種類は、和田晴吾氏の堅穴系埋葬施設の分類によった(和田晴吾「葬制の変遷」都出比呂志編『古代史復元』6 講談社) 1989。
- 注13 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」(『研究論集』VI 奈良国立文化財研究所) 1980
- 注14 河上邦彦「高安城跡調査概報2-1982年度-」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立橿原考古学研究所編) 1982
- 注15 奈良国立文化財研究所「平吉遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概要』8 1978
- 注16 梅原末治「山科村西野山ノ墳墓トソノ発見ノ遺物」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府) 1920
- 注17 梅原末治「山城大枝の奈良時代の一古墓」(『史迹と美術』第41輯の8、第418号 史迹美術同致会) 1971
- 注18 高倉洋彰ほか『宮ノ本遺跡』(太宰府町の文化財第3集 古都太宰府を守る会) 1980
- 注19 漆塗りの冠の類例は以下のものが挙げられる。なお、報文に「冠」と明記されていなくても、その可能性の高いものは類例に加えた。
- ①正倉院北蔵所蔵の「礼服御冠残欠」(『正倉院御物図録』3巻)
- ②平城宮官衙地域SK219出土例(『平城宮発掘調査報告』Ⅱ)

- ③平城京左京東二坊坊間路西側溝 S D4699出土例(『平城京長屋王邸宅と木簡』 奈良国立文化財研究所編 吉川弘文館)
- ④平城京左京八条三坊 S D1155出土例(『平城京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』 奈良県・奈良国立文化財研究所)
- ⑤奈良県明日香村平吉遺跡木槨墓 S X16(平吉古墓)出土例(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』 8 奈良国立文化財研究所)
- ⑥福岡県太宰府市宮ノ本 2号墓出土例(『宮ノ本遺跡 太宰府町の文化財』第3集 古都太宰府を守る会)
- 注20 関根真隆『奈良朝服飾の研究』 吉川弘文館
- 注21 江馬 務『有職故実』(『日本の美と教養』5 河原書店) 1965
- 注22 間壁忠彦・間壁葦子「天平宝字七年矢田部益足買地券文(白髪部毗登富比売墓地塼券)の検討」『倉敷考古館研究集報』第15号 1980
- 注23 B列は図示した円板は2個分で「列」と呼ぶにふさわしくないが、この間に2個の円板があった(円板の出土数計9個)ものと思われる。また、B列の長さはA列とほぼ等しい。
- 注24 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葦子『総社市随庵古墳』 総社市教育委員会 1965 6頁挿図5
- 注25 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991、293~308頁
- 注26 小山雅人「野崎古墳群」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、212~215、229~230頁
- 注27 白川成明「右京第321次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1990、48~49頁
- 注28 ①椋山林継「祭と葬の文化—石製模造遺物を中心として—」(『日本考古学論集』3 吉川弘文館 1986、229~271頁所収)
- ②白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館) 1985、79~114頁
- ③寺沢知子「石製模造品の出現」(『古代』第90号 早稲田大学考古学会) 1990、167~187頁
- 注29 『アサヒグラフ』3522号 1989 26頁
- 注30 柳田康雄編『炭焼古墳群』(『福岡県文化財調査報告書』第37集 福岡県教育委員会) 1968、18~20頁、第9・17図、なお、徳永川の上遺跡と炭焼5号墳について、柳田康雄氏から口頭で御教示を得た。
- 注31 青木遺跡発掘調査団・編集者団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 鳥取県教育委員会 1978、本文編78頁
- 注32 注26文献

4. 名神高速道路関係遺跡発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の走行車線の拡幅工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い影響を受ける遺跡の事前調査であり、調査は、昭和63年度から開始し、本年度で4年目となる。

名神高速道路の走る京都市西南部は、京都市南区・伏見区、向日市、長岡京市、乙訓郡大山崎町の行政区にわたり、地形的には、南に桂川、宇治川、木津川の3河川の合流地点、西には、天王山を頂点とする西山の峰々が南北に連なる。調査地の大半は低位段丘面及び沖積平野を横切って走り、ほぼ全域が長岡京域に含まれている。さらに、該当地域には長

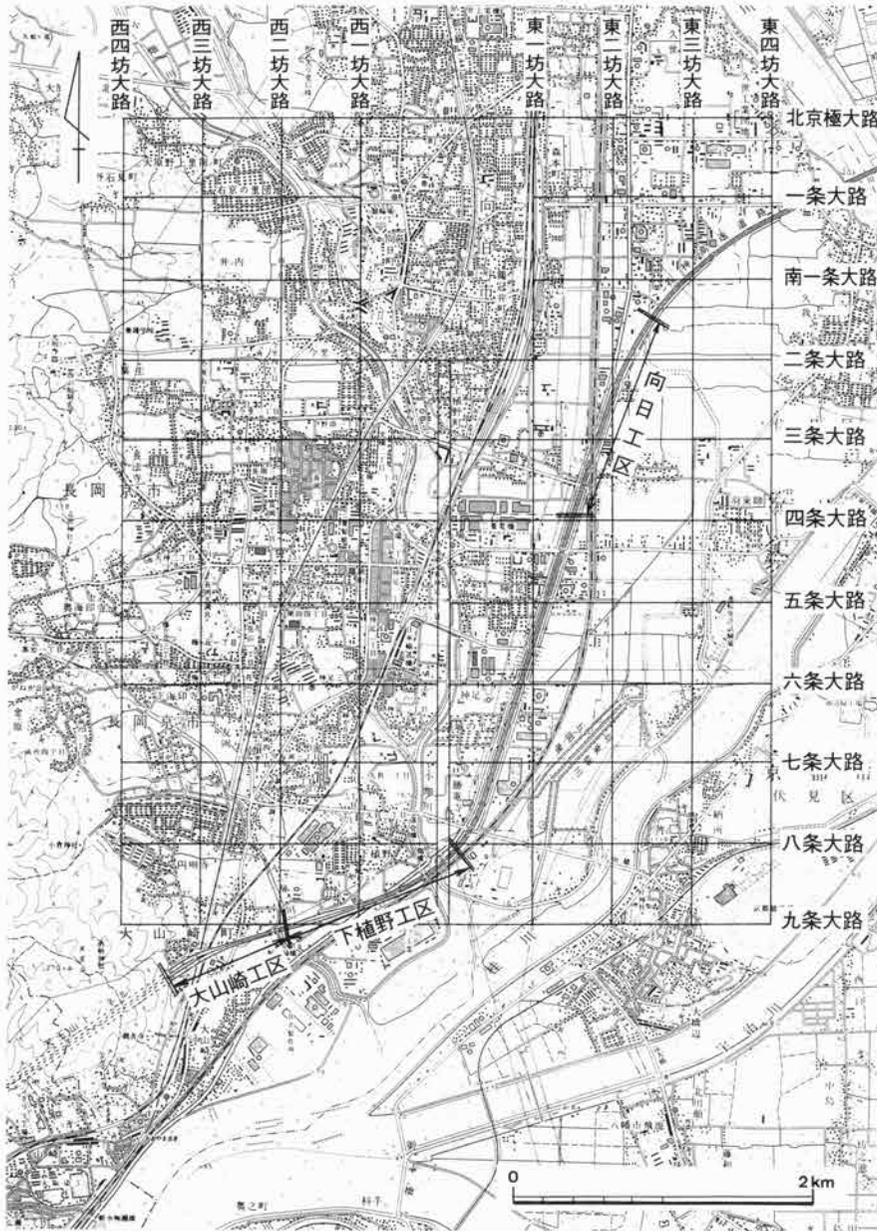
付表8 調査地一覧表

工区	地区名	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	面積	開始	終了
向日	4BL16tr	L268	7ANFWD-2	上植野町脇田	四条第一小路	180	5/7	7/18
	4BL17-1tr	L267	7ANXKM-2	羽東師菱川町(小角)	三条大路	180	6/1	8/20
	5BL17-2tr	L267	7ANXKM-2	羽東師菱川町(小角)	三条大路・東二坊大路	180	6/18	9/10
	7BL20tr	L241	7ANXYT	羽東師菱川町(山縄手)	三条条間小路	360	4/9	6/1
	11BL22tr	L267	7ANWIR-2	久我西出町(井手浦)	二条条間大路	240	7/18	10/21
	12BL13tr	L267	7ANWSS-2	久我西出町(下り長)	二条第一小路・東三坊第二小路	480	8/27	12/20
	小計					1,620		
下植野	B地区	R368	7ANSID-2	円明寺壱町田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	2,750	4/15	3/6
	C-1地区	R368	7ANSID-2	円明寺壱町田	右京九条二坊・松田遺跡 下植野南遺跡	310	12/17	2/27
	C-3地区	R368	7ANSID-2	円明寺壱町田	右京九条二坊・下植野南遺跡	1,000	1/27	3/6
	D地区	R368	7ANTID-3	円明寺飯田	右京九条一坊・下植野南遺跡	700	8/5	10/11
	E-2tr	R368	7ANTKT-2	下植野上枚方	朱雀大路	320	7/18	9/11
	小計					5,080		
大山崎	C-2地区	R349	7ANSDD-4	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	1,230	4/8	12/20
	C-3a地区	R367	7ANSDD-5	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府	1,190	4/16	12/9
	C-3b地区	R367	7ANSDD-5	円明寺百々	百々遺跡・第三次山城国府		4/16	7/17
	D-2地区	R367	7ANSIR-2	円明寺井尻	百々遺跡・第三次山城国府	100	8/6	9/27
	E地区	R367	7ANSIR-2	円明寺井尻	百々遺跡・算用田遺跡	1,000	12/9	2/27
	小計					3,520		
合計					10,220			

岡京以外の遺跡も数多く分布している。

今年度の調査対象地は、長岡京の条坊復原(平城京型)によると、左京二条三坊・四条二坊、右京九条一坊・二坊、九条三坊南接地が想定される地点である。また、大山崎町では百々遺跡・算用田遺跡・下植野南遺跡・松田遺跡が調査対象地内に含まれている。

発掘調査区は、道路公団側の工事区分に合わせ、向日工区・下植野工区・大山崎工区の



第90図 調査地区位置図

3区に分けている。このうち、向日工区は、長岡京跡左京第241・267・268次調査、下植野工区は、右京第368次調査として調査を実施した。また、大山崎工区は長岡京の右京九条域に接するため右京第349・367次調査とした。

検出した遺構の番号は、各地区ごとの連番とした。現地の発掘調査は、平成3年4月8日～平成4年3月6日を要した。調査面積は、延約10,220m²となった。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

調査には、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員戸原和人、同調査員竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹・岩松 保・中川和哉・鍋田 勇があたった。本書の執筆については、(1)向日工区を石尾・鍋田、(2)下植野工区を戸原・竹井・黒坪・鍋田、(3)大山崎工区を岩松・石尾が担当した。

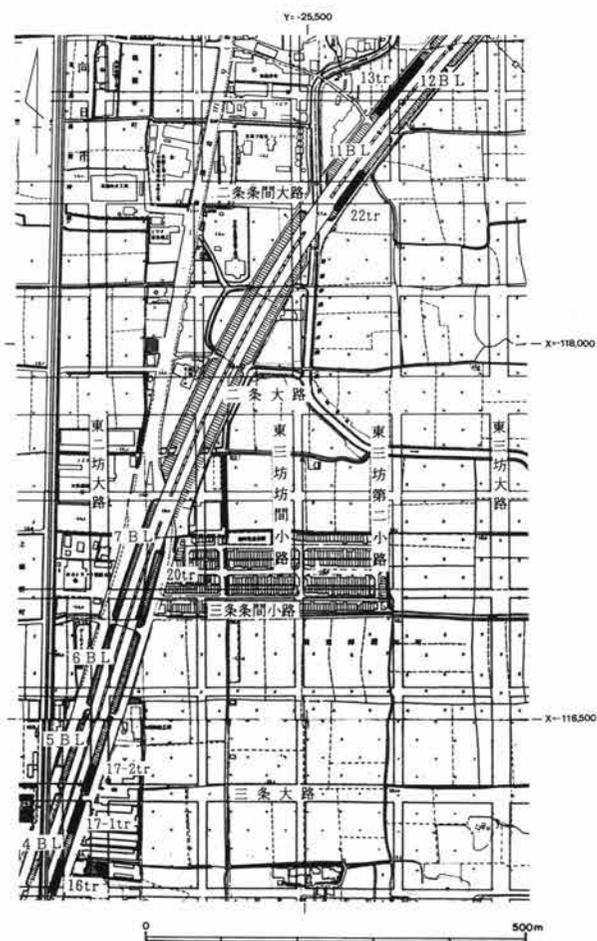
調査を行うにあたり、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所等の関係各機関をはじめ、各大学の学生諸氏の協力を得た。謝辞を述べたい。

(戸原和人)

(1) 長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区
(7ANFWD-2、XKM-2、XYT、WIR-2、WSS-2地区)

1. はじめに

向日工区の調査は今年で3年目にあたる。今年度の調査は昨年度末で調査が終了しなかったもの(左京第241次調査)を含む。調査地域が京都市域と向日市域にまたがるため、昨年度同様に京都市域を左京第241・267次調査、向日市域を左京第268次調査と2つの調査次数に分けた。京都市域は伏見区羽東師菱川町で、旧小字名の山畷手・小角を各々7ANXYT・XKMとし、伏見区久我西出町を旧小字名の井出浦・下り長を各々7ANWIR・WSSとした。



第91図 向日工区 調査トレンチ配置図

向日市域は上植野町脇田の小字名より7ANFWDと調査地記号を付した。

現地調査は、試掘を実施した後に遺物包含層、または遺構検出面まで重機掘削を行い、安全対策工事を終了した時点で、公団より調査区(トレンチ)の引き渡しを受け、調査終了後に公団に引き渡し方法をとった。このため実際の現地調査期間の日付とは異なる場合がある。

調査には日本道路公団が設置した国土座標の入った基準点を使用して測量を行い、遺構平面図(トレンチ図を含む)には、相互関係を表わすためすべて国土座標を表示した。また、各遺構平面図等に付した遺構番号は、当初各トレン

チごとに付したものを南方のトレンチから付け直した(説明会資料等とは大幅に異なる)。

調査区(ブロック・トレンチ)ごとの調査回数、調査地記号、所在地、調査面積、調査期間は付表8のとおりである。

以下、南方より各トレンチごとに記述する。なお、7ブロック20トレンチの調査概要は1990年度概報に掲載したので今回は割愛する。

長岡京条坊の呼称は従来どおりとする(平城京型条坊復原)。

(石尾政信)

2. 調査の概要

①4ブロック(7ANFWD-2・XKM-2地区) 向日市上植野町脇田、京都市伏見区羽束師菱川町に所在し、長岡京跡左京四條二坊十六町に当る。三条大路・四條第一小路の検出を目的とした調査区である。

第16トレンチ

従来の平城京型復原による長岡京跡四條第一小路の検出を目的とした調査区であるが、後述するように長岡京期の遺構は確認できず、弥生時代～古墳時代の溝を検出した。

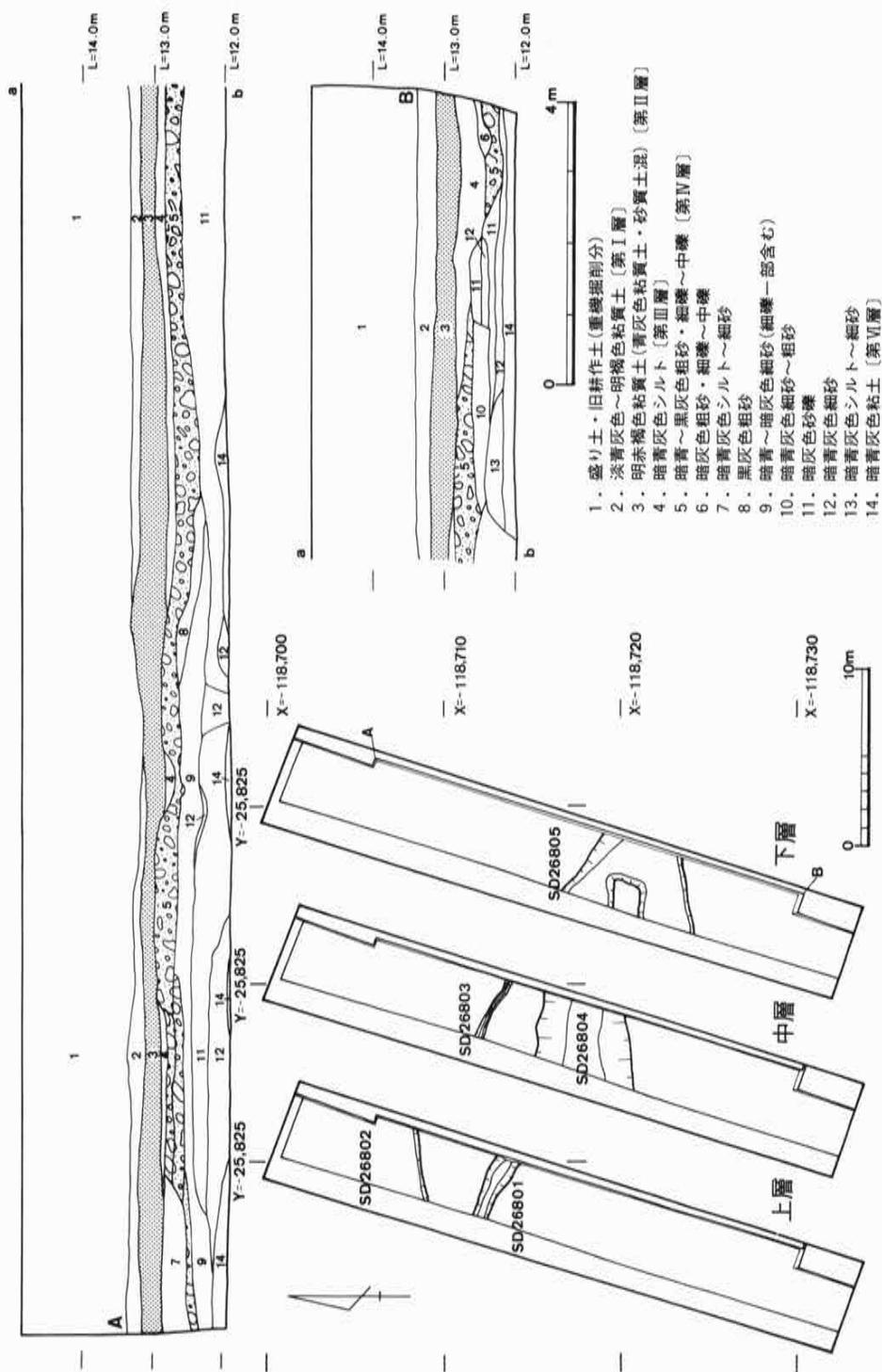
A. 調査の経過と基本層位(第92図、図版第61)

調査は、試掘調査の結果を受けて、地表下約1.2mまでを機械掘削し、その後は人力による掘削を行った。本トレンチは、矢板・シートパイルを使用しているため、土層の観察はトレンチ西側の調査用排水溝及び東側に設定した畔にて行った。

調査地は、小畑川によって形成された扇状地の端部に位置している。基本層位は、第I～IV層に区分されるが、必ずしもすべての場所には当てはまらない。

耕作土(第I層)は、現代の盛り土下面において確認される以外、下層では認められない。最も安定した広がりをもつ第II層(明赤褐色粘質土)は、整地層と考えられ、トレンチの全面で確認できた。この上面にて遺構検出作業を行ったが、何ら遺構は検出できなかった。長岡京期以降～中世の遺物は、第I層に包含されているため、それ以後の遺構は削平を受けた可能性がある。第II・III層(暗青灰色シルト)は遺物を含まない。第IV層(暗青～黒灰色粗砂・細～中礫)は、トレンチのほぼ全面に広がる古墳時代の遺物包含層である。上面では、陶器編年TK43前後の須恵器を若干含むものの、主体は布留式の土師器である。この層の上面では、溝SD26801・02を検出した。南側では包含層のレベルが下がり、溝状を呈する可能性もあるが、遺構としては認識できなかった。

なお、周辺のトレンチでは、この遺物包含層は確認できていない。第V層は、トレンチ内でシルト・細砂・砂礫が複雑な状況を呈して堆積した層である。扇状地を構成する堆積



第92図 向日工区 4BL. 第16トレンチ 遺構平面図及び東壁土層断面図

物と考えられる。この上面では、溝S D 26803・04を検出した。第VI層は、暗青灰色粘土であり、この面をベースとして溝S D 26805を検出した。第VI層は、低湿地に堆積し形成された層と考えられる。この時点では、第V層からの湧水が激しく、また、第VI層が掘削部分で確認するかぎり、遺物を含まないと判断されたため、この層までで調査を終了した。

B. 検出遺構(第92図、図版第61・62)

溝S D 26801 第IV層上面で検出した溝である。幅0.9～1.3m・深さ0.2～0.25mを測る。検出部分での中心ラインは、N-62°-Wであり、西北西から東南東方向への流れを有する。溝の東側は、ゆるやかな弧状を描くため、南東方向へと続くことが推定される。埋土は、下層が青灰色シルト、上層が明褐色土である。遺物は、ローリングを受けた土師器細片が少量出土したのみである。

溝S D 26802 トレンチ北部で検出した溝状の落ち込みである。直線的に延びる南側肩部を検出した。幅は不明であるが、検出部分で約8mを測る。深さは、約0.4mであり、幅に比して浅い。埋土は、暗青灰色シルト・細砂である。遺物は出土していない。

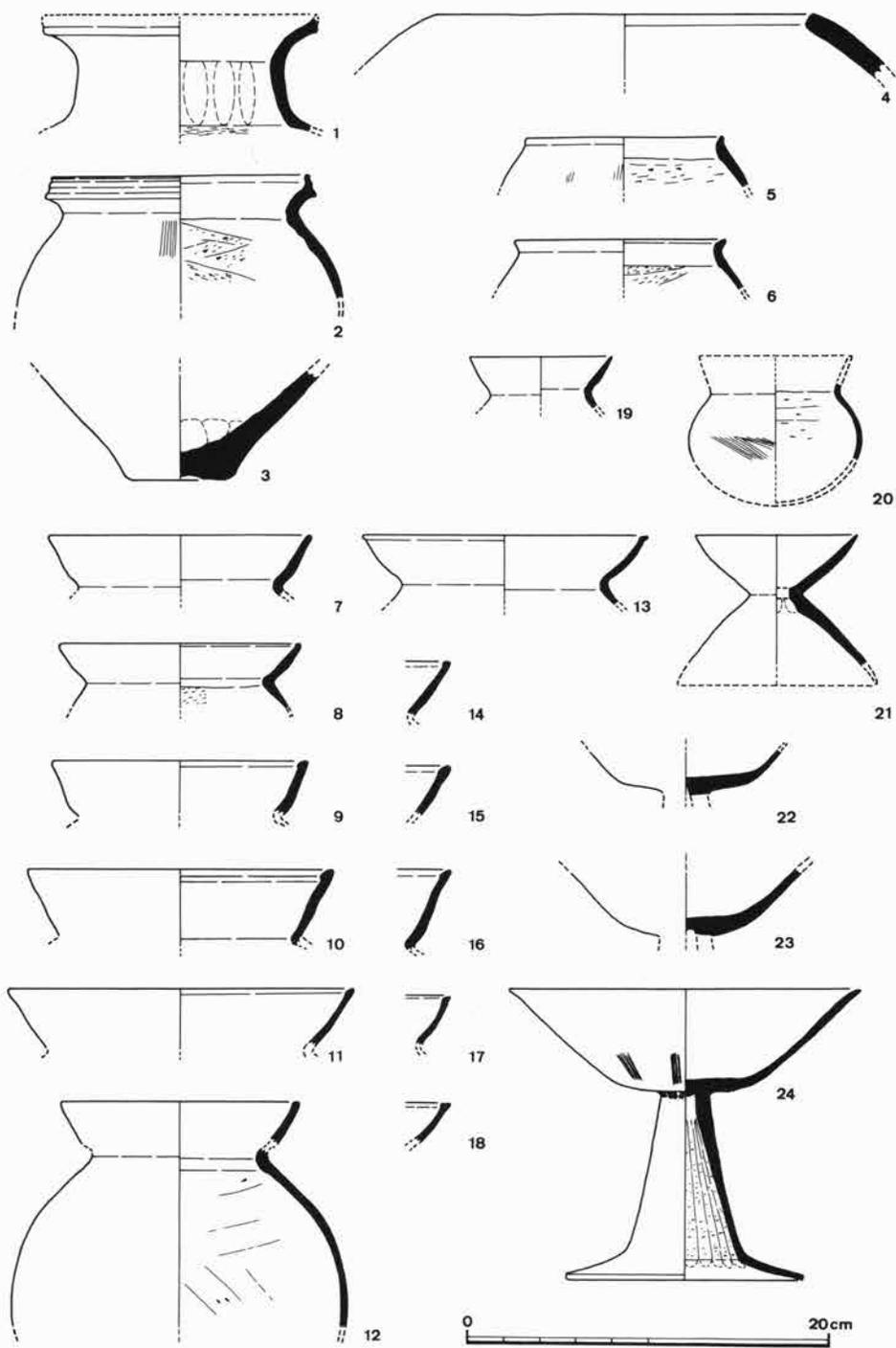
溝S D 26803 第V層上面で検出した幅の狭い小規模な溝である。幅0.2～0.5mで、深さ0.1mを測る。第IV層上面のS D 26801とほぼ同じ場所に位置するが、層的には明らかに下層に形成されている。第IV層を埋土とする。遺物は出土していない。

溝S D 26804 トレンチのほぼ中央部に位置する。東西方向の流れをもち、浅い落ち込み状を呈する。古墳時代の遺物包含層の一部とも解釈可能であるが、ここでは溝として報告する。幅約5m・深さ約0.3mを測る。第IV層を埋土とし、下層～上層に布留式中～新段階の土師器を含む。最下層では、弥生土器が少量出土している。

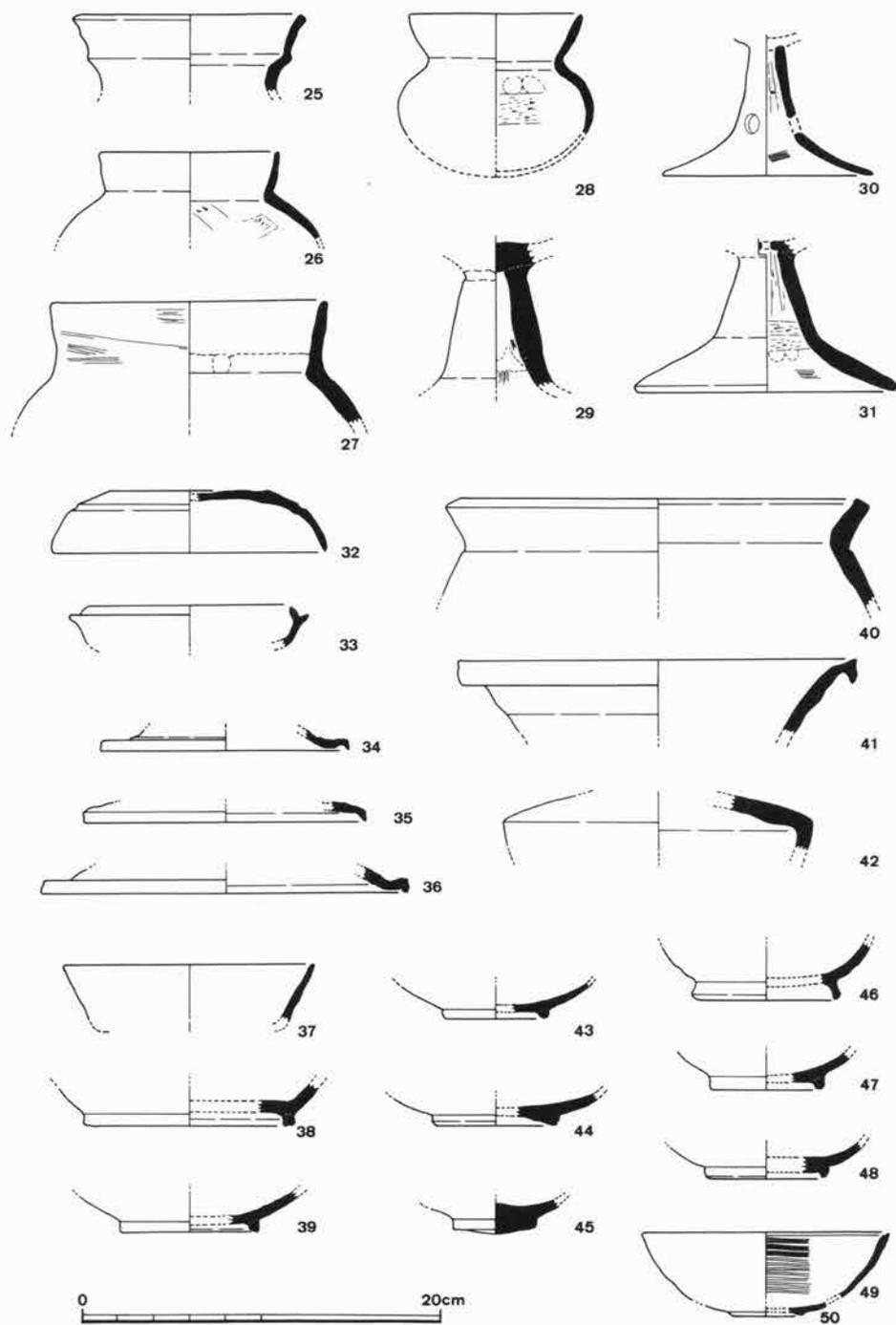
溝S D 26805 第VI層上面で検出した東西方向の溝である。西側では、中洲状の高まりを挟んで二条の流れを形成しているが、東側で合流する。暗灰色砂礫を埋土とする。少量の弥生土器片が出土している。

C. 出土遺物(第93～94図、図版第63)

溝S D 26804 弥生土器(1～6)、土師器(7～24)が出土した。1は、直立ぎみの頸部を有する広口壺で、外面をナデ、口縁部内面をミガキによってていねいに仕上げている。口縁部外面に一条の凹線を施している。2は、内傾する口縁端部に二条の凹線を施す。3は、摩滅のため内外面とも調整不明である。2・3は、淡灰褐色を呈し、胎土に細礫を多く含む。4は、口径21.2cmを測る無頸壺で、精良な胎土を有し、内外面ともナデにより仕上げる。5・6は、わずかな頸部を有し、端部を上方ないし外側へつまみ出す。体部内面はヘラケズ



第93図 向日工区 4BL. 第16トレンチ 出土遺物実測図(1)



第94図 向日工区 4BL. 第16トレンチ 出土遺物実測図(2)

り、外面は荒いハケもしくはナデにより調整する。これらの弥生土器は、中期後半の所産と考えられる。

土師器の甕は、細片が多く、口縁部を対象に図化した(7~18)。口縁端部が内側に肥厚するものが多数を占めるが(48個体中43個体=89.6%)、外反ぎみに丸くおさめるもの(7)、外側へつまみ出すもの(13)、上端に面を有するもの(17・18)も存在する。19・20は、小型丸底壺である。19は、やや尖りぎみの口縁端部を有する。19は淡赤褐色、20は淡灰褐色を呈し、胎土はともに石英・長石のほか赤色斑粒を含む。21は中空の小型器台で、内外面ともナデ調整する。精良な胎土を有する。22~24は、高杯である。22・23は、摩滅が著しい。ともに砂粒を多く含み粗い胎土をもつ。24は直線的にのび、端部でやや外反する杯部を有する。外面に稜はもたない。杯部下半及び脚部との接合部にハケ調整が認められるが、他は摩滅のため不明である。淡灰褐色を呈する。

【第Ⅳ層】土師器(25~31)、須恵器(32・33)が出土した。25は、二重口縁を有する壺、26・27は直口壺である。26は、体部内面をヘラケズリし、他はナデによる調整を施す。28は、小型丸底壺で体部下半を欠損するが、扁平ぎみの体部を有する。29~31は、高杯脚部である。

32の杯蓋は天井部と口縁部との境界に浅い凹線をめぐらす。33の杯身は立ち上がりが低く内傾する。ともに陶邑編年TK43前後に併行する時期と考えられる。

【第Ⅰ層】須恵器(34~38・41・42)、灰釉陶器(46)、緑釉陶器(47・48)、瓦器碗(49・50)、布目瓦等、長岡京期~中世の土器が出土した。

D. 小 結

検出した遺構は、層位及び出土土器から3時期に分けられる。

溝SD26801・02は、第Ⅳ層上面で検出しており、第Ⅳ層の最終埋没時(陶邑編年TK43前後)以降とすることができる。第Ⅱ層の整地層は、時期を特定できないものの、長岡京期以前と考えられるので、この間に形成されたものと考えられる。

溝SD26803・04は、第Ⅴ層上面で形成され、第Ⅳ層の堆積によって埋没している。SD26804は、最下層に弥生土器を含むため時期の遡る可能性もあるが、遺構の性格や量的にみて混入とすべきであり、布留式の段階に形成されたと考えられる。

溝SD26805は、第Ⅵ層上面で検出した。弥生時代中期と考えられる。

以上、本トレンチで検出した遺構は、いずれも溝であり、集落の中心をなすものではない。第Ⅵ層の状況から、弥生時代以前にあっては低湿地であったと考えられ、古墳時代に至っても居住地域には適さなかったことが推定される。溝SD26804及び第Ⅳ層の土器は、

当地の北東に位置する芝ヶ本遺跡からの流入と考えるのが妥当であろう。また、溝の埋没時期は、南東部の鴨田遺跡第5次調査で検出された大溝SD10670と近似しており、鴨田集落の消長とも関連する可能性が指摘できる。

(鍋田 勇)

第17-1トレンチ

A. 検出遺構(第95図、図版第64)

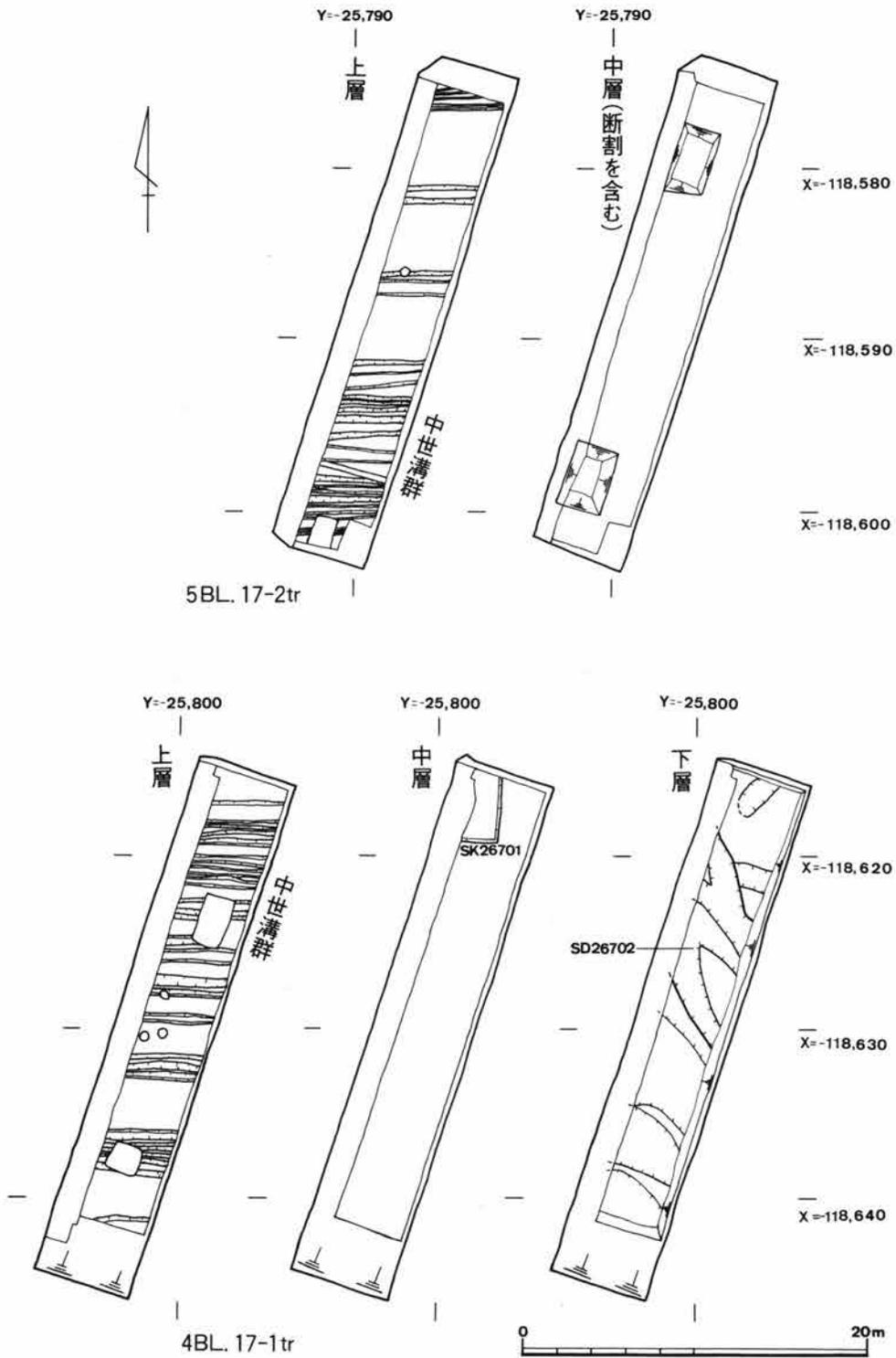
旧耕作土・床土の下層は、中世土器などを包含する灰色・黄灰色土層となり、その下に黄褐色土層がみられる。この黄褐色土層を掘り込んだ東西方向の素掘り溝群を合計26条検出した。これらの溝は幅20～80cmを測り、深いものは約30cmある。溝から瓦器片などが出土することから、中世の水田耕作に係わるものと考えられる。この溝群は標高12.8m前後で検出される。

トレンチ北端で黄褐色土層の落ち込みを検出した。これを土坑SK26701とした。この土坑は南北4m以上・東西約2m以上・深さ約20cmを測り、方形または長方形の東南隅と推定される。土坑を中心とする黄褐色土層から歴史時代の土器が出土した。

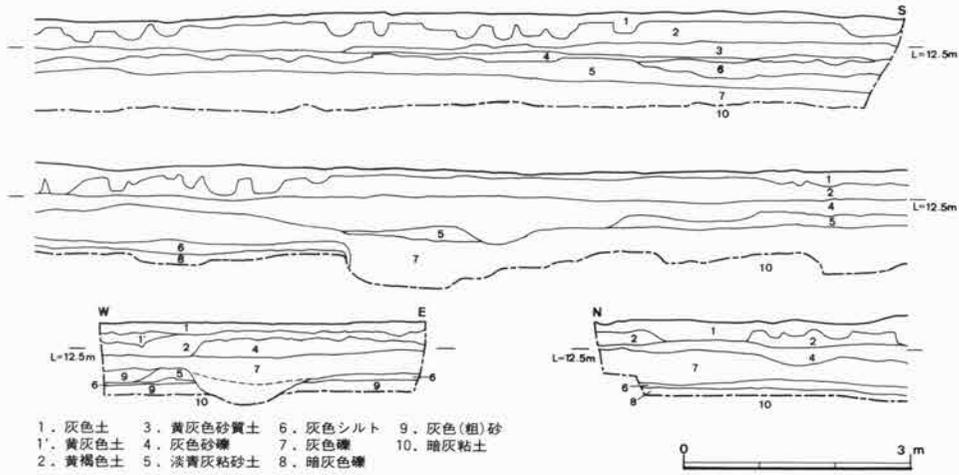
これより下は旧河道の様相を示すように、砂礫、砂層、シルト層が堆積していた。このうち北西方向から南東方向に深く抉られたところをSD26702とした。砂礫層などから古墳時代から弥生時代の土器が出土した。

B. 出土遺物(第97図)

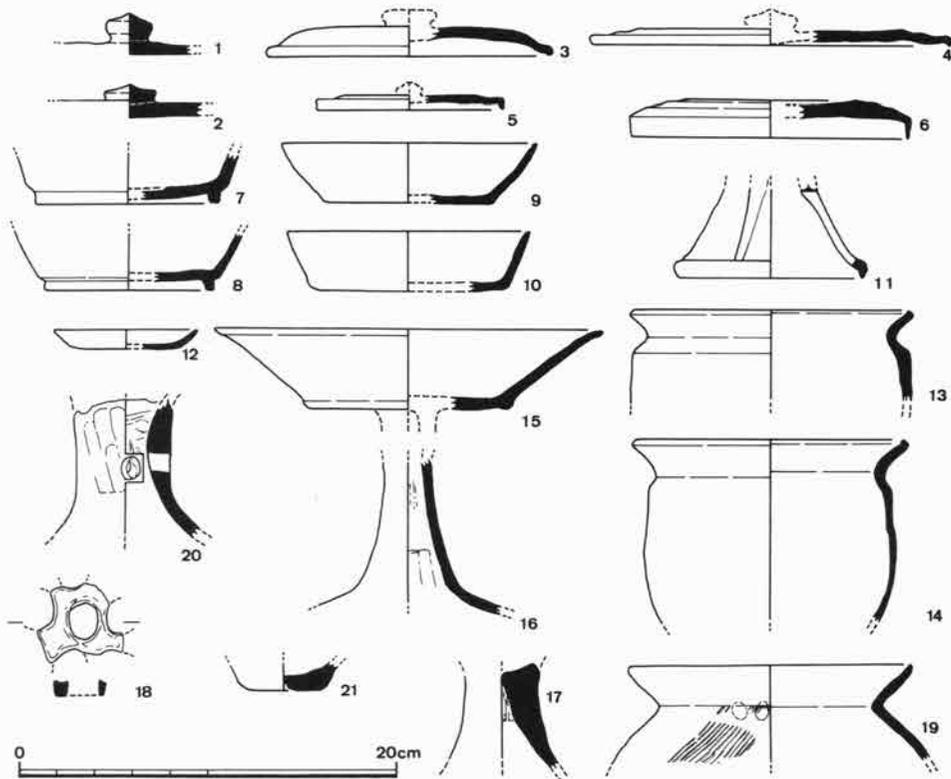
黄灰色土層から瓦器の皿(12)が出土している。復原口径7.8cm・高さ1.1cmを測る。SK26701及び黄褐色土層から須恵器の蓋(1～6)、杯B(7・8)、杯A(9・10)、土師器の甕(13・14)が出土した。蓋は端部が屈曲するもの(3～5)と、端部を垂直に折り曲げるもの(6)がある。復原口径は3が15.6cm、5が10.2cm、6が15cmとなる。10は復原口径13cm・高さ3.1cmを測る。土師器の甕は口縁部を強くナデるため「く」字状に屈曲する。復原口径は15cmとなる。これらは8世紀～9世紀初めの特徴を持っているので、長岡京期の土器も多く含んでいる。砂礫層、砂層から須恵器の高杯脚部(11)、土師器の高杯(15・17)、甕の底部(18)、庄内式土器並行期の土師器甕(19)、弥生土器の器台(20)や底部片(21)などが出土している。これらは磨耗して調整方法が不明なものが多い。20は、孔を3か所2段に穿っており、弥生時代後期のものであろう。



第95図 向日工区 4BL.第17-1トレンチ・5BL.第17-2トレンチ 遺構平面図



第96図 向日工区 4BL. 第17-1トレンチ 東・西壁土層断面図



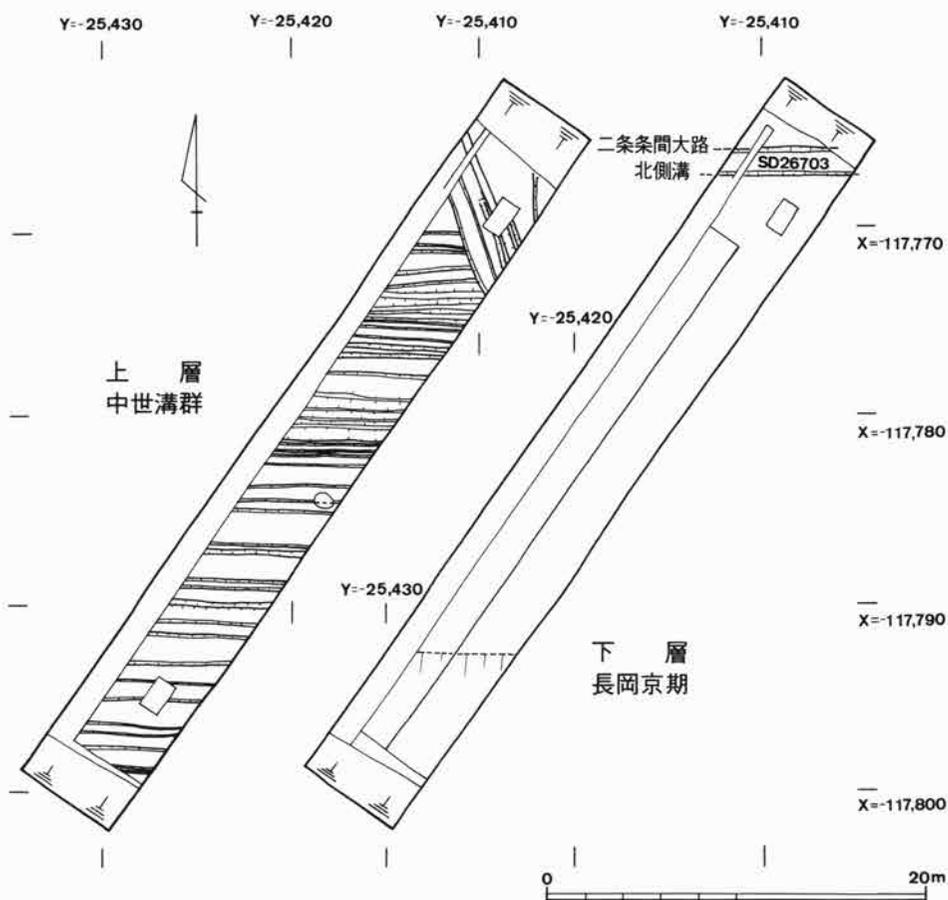
第97図 向日工区 4BL. 第17-1トレンチ 出土遺物実測図

②第5ブロック(7ANXKM-2地区) 京都市伏見区羽東師菱川町に所在し、長岡京跡左京三条二坊十六町にあたる。三条大路、東二坊大路の検出を目的とした調査区である。

第17-2トレンチ(第95図、図版第65)

第17-1トレンチと同様に旧耕作土・床土の下に中世土器包含層があり、その下に黄褐色土層がある。この黄褐色土層を掘り込んだ水田耕作に係わる東西方向の素掘り溝群を21条と、これより新しい若干斜行する素掘り溝1条を検出した。素掘り溝群は中央より北では、2条が1組になり、その間隔が4.0~4.5mを測る。黄褐色土層の下は砂礫層・砂層で顕著な遺構はない。北と南の2か所で断割を実施したところ、砂礫層・砂層・シルト層が堆積し、第17-1トレンチと同様な旧河道が推定されたので全体の掘削は行っていない。

出土遺物も第17-1トレンチ同様の傾向であるが、図化できるものはない。



第98図 向日工区 11BL. 第22トレンチ 遺構平面図

③第11ブロック(7ANWIR-2地区) 京都市伏見区久我西出町に所在し、長岡京跡左京二条三坊十町にあたり、二条条間大路の検出を目的とした調査区である。

第22トレンチ(第98図、図版第66)

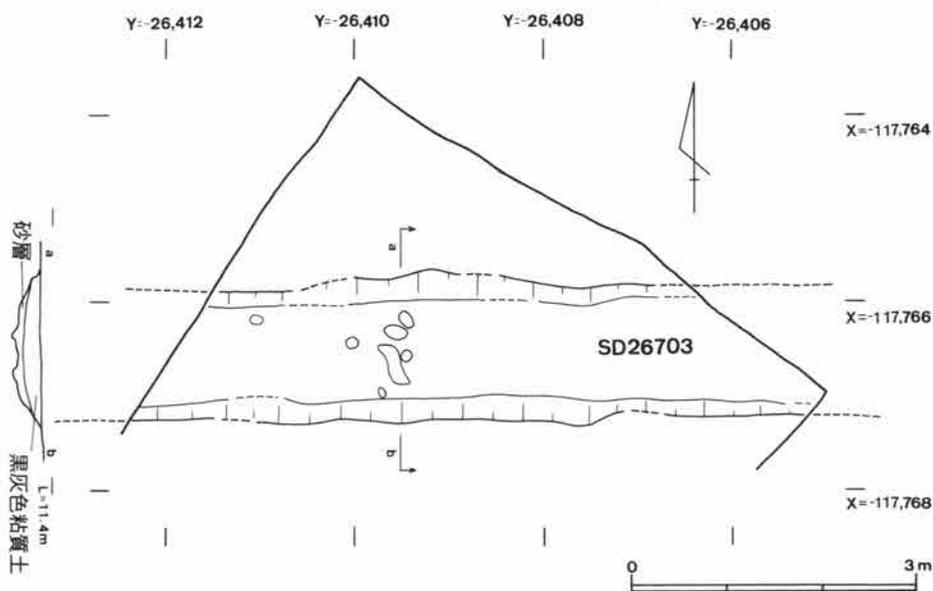
旧耕作土・床土の下に淡灰褐色土の中世土器包含層がある。その下層は南端に淡い黒灰粘砂土層が堆積するが、これ以外は青灰・暗青灰粘砂土層が堆積する。その下では砂層・砂礫層がみられる。これらの堆積層を掘り込んだ水田耕作に係わる東西方向の素掘り溝群、北端に南北方向の溝群を検出した。東西方向の溝は数条が重なり合うものが多い。これらは標高11.5～11.6mで検出する。溝の一つから渡来銭(感平元宝)が出土した。

トレンチ北端で南北方向の素掘り溝に切られた、長岡京期の東西方向の溝(S D 26703)を検出した。

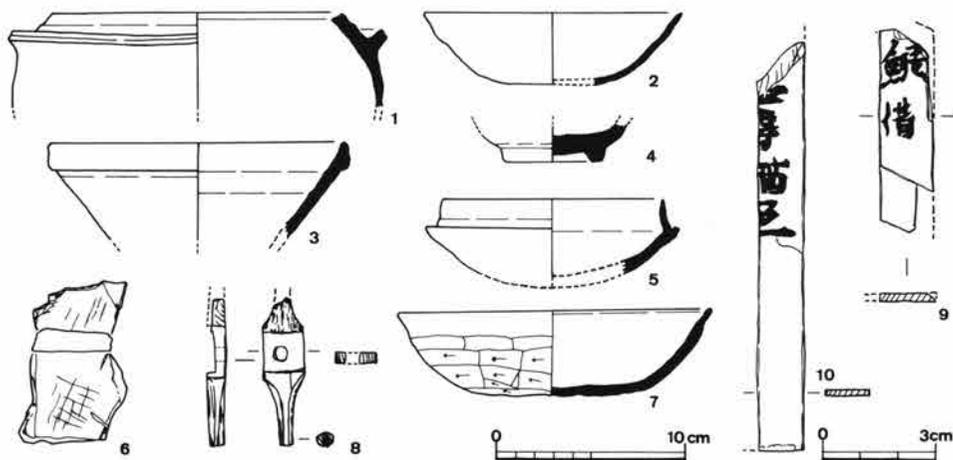
A. 検出遺構

二条条間大路北側溝 S D 26703(第99図) 溝の幅は1.5m前後、検出面からの深さ20～30cmを測る素掘り溝である。溝の底に凹みがある。溝の埋土は上層で黒灰色粘質土に暗灰褐色土がわずかに混じり、下層には砂が堆積していた。砂の堆積状況及び溝底面の高低差から、西から東に流れていたと推定される。溝内から木簡、木製品、種子類、獣骨や土師器などが出土した。溝の中心座標はY=-25,409.500のときX=-117,766.550となる。

この溝 S D 26703の南では長岡京期の遺構が存在しないことや、これまでの調査成果から、二条条間大路北側溝と判断した。



第99図 向日工区 11BL. 第22トレンチ 二条条間大路北側溝 S D 26703実測図



第100図 向日工区 11BL.第22トレンチ 出土遺物実測図 土器・木筒・木器

B. 出土遺物(第100図、図版第72)

素掘り溝から瓦質の羽釜(1)、瓦器碗(2)、砥石(6)、遺物包含層から青白磁の碗(3)、陶器の丸碗(4)が出土した。4は高台を除く内外面に光沢のある茶褐色をした鉄釉がかかる。17世紀後葉から18世紀前葉の所産であろう。これ以外は中世の遺物である。

溝S D26703から長岡京期の土師器の杯(7)、木製糸巻き(8)、木筒(9・10)、古墳時代後期の須恵器杯身(5)が出土している。7は完形品で外面にヘラケズリを施し、上端をわずかに削り残す。口径17.1cm・高さ4.5cmを測る。8は糸巻きの支柱で、中央に組み合わせの袂があり、直径7.5mmの心棒を通す孔を穿つ。現存長7.8cm・最大幅2.3cmを測る。

木筒の積文・内容

(9) 「鯛借」

法量(mm) (55)×(15)×2

形式059

(10) 石カ 津カ 酒カ 足カ
□ □ □ □

法量(mm) (109)×(12.5)×2.5

形式081

(9)は上端の一部を欠損するが、圭頭に尖らせていることがわかる。下端及び側面は折損する。文字は二字あり、その下の間隔が開くことから初めから二字であったと考えられる。二字目が「借」であるから、鯛を借りた、または鯛という人物が何かを借りたとも読めるが、後者の場合は文意がわかりにくい。付札木筒に例がみられる「鯛膳」の二字目の偏を、肉月となるべきものを人偏にしたのかもしれない。

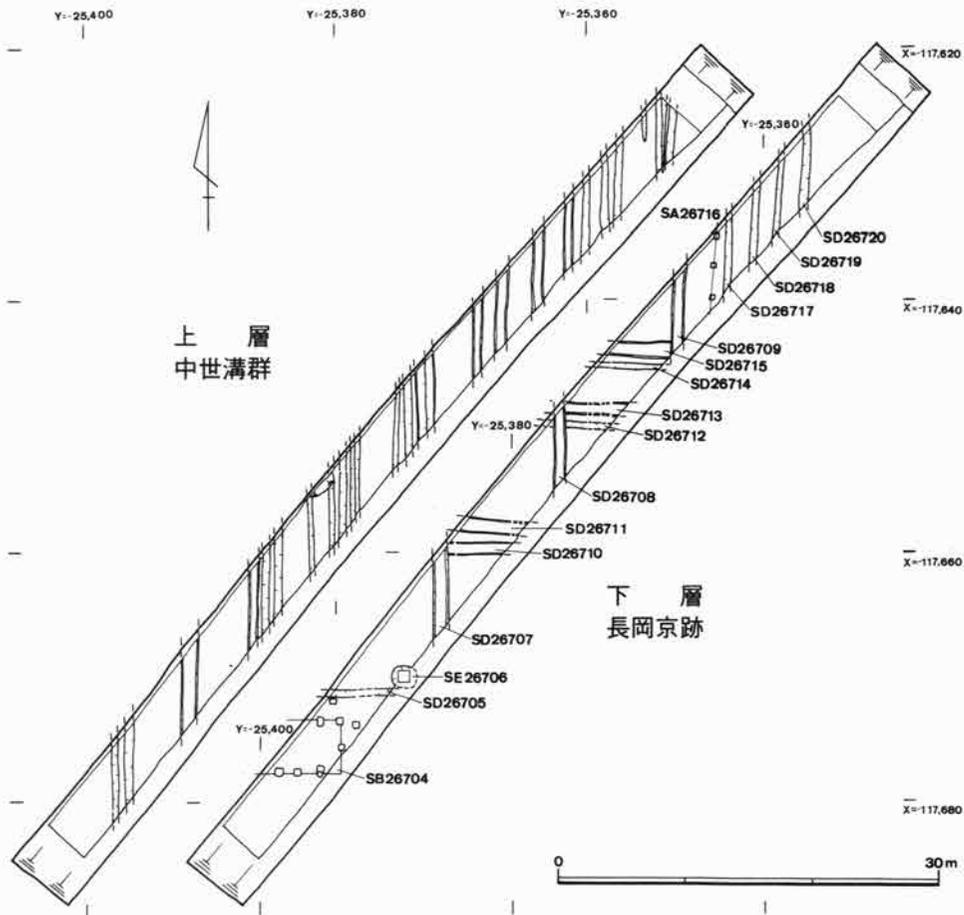
(10)は下端が折損するとともに、割截することが文字からわかる。四文字が推定される。「石津酒足」と人名を記したものと推定される。

なお、木簡の積読に当たっては、向日市文化資料館清水みき氏の御教示を得た。

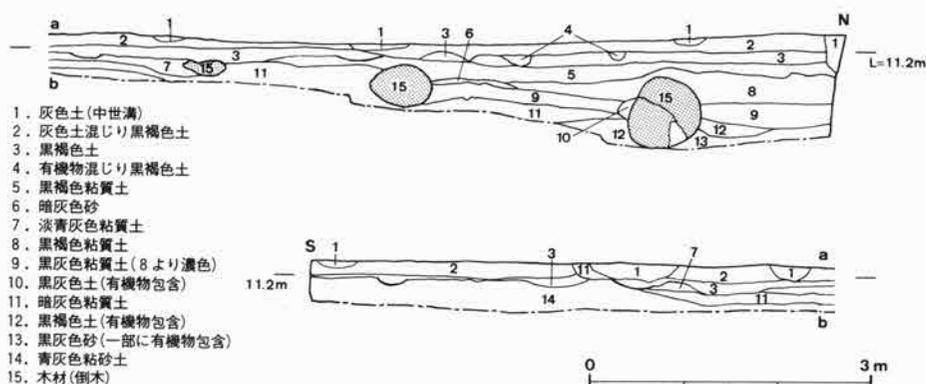
④第12ブロック(7ANWSS-2地区) 京都市伏見区久我西出町に所在し、長岡京跡左京二条二坊九・十・十六町にあたる。二条第一小路、東三坊第二小路の検出を目的とした調査区である。この調査地の北隣り、左京第177次調査(7ANWSS地区)で東三坊第二小路東側溝(SD08)が検出されている。

第13トレンチ(第101図、図版第67～71)

旧耕作土・床土の下に灰褐色土・茶褐色の中世土器包含層がある。その下は灰色土混じり



第101図 向日工区 12BL.第13トレンチ 遺構平面図



第102図 向日工区 12BL.第13トレンチ 北部・西壁断面図

黒褐色土層及び黒褐色粘質土層がある。これらを掘り込んだ南北方向の素掘り溝群を合計26条検出した。これらの溝は幅30～80cmを測り、深いものは約30cmある。ほぼ等間隔で並ぶもの、数条が接近したもの、重なり合うものなどがある。溝から土師器片、瓦器などが出土することから中世の水田耕作に係わるものと考えられる。これらの溝は標高11.6m前後で検出する。中世土器包含層から渡来銭(祥符通宝・治平元宝・元豊通宝)が出土した。

長岡京期の土器が出土する黒褐色土層の下は青灰色・暗青灰色粘砂土層、その下に砂層・砂礫層が堆積する。青灰色・暗青灰色粘砂土層を掘り込んで長岡京期の遺構と、これに切られた溝及び柱掘形がある。長岡京期の遺構は、黒褐色土または灰色土混じり黒褐色土の埋土である。

トレンチ北端では東方向に落ち込む湿地状堆積と倒木を検出した。その土層断面図を第102図に示した。ここでは時期が判別できる遺物(土器)は出土しなかった。

以下に長岡京期の遺構について遺構番号の若いものから記述する。

A. 検出遺構(第103～107図、図版第67～71)

掘立柱建物跡 S B 26704(第104図、図版第68) 南北2間×東西3間以上の東西方向の掘立柱建物跡である。一辺45～60cmの柱掘形で、深さ30cm前後を測り、柱痕が不明瞭なものが多い。柱間は南北約2.1m・東西約1.65mを測る。

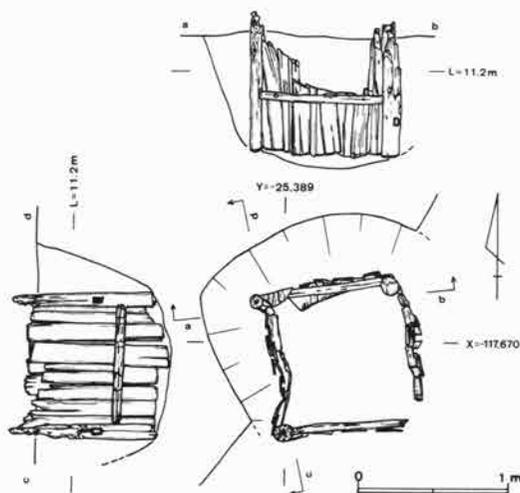
溝 S D 26705 S B 26704の北で検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅40～50cm・深さ約10cmを測る。溝心はY=-25,394.000のときX=-117,641.400となる。

井戸跡 S E 26706(第103図、図版第67) 東半分を重機掘削のとき削られ掘形の形状は明瞭でないが、約1.5mの隅丸方形を呈する。内側に約90cm間隔に隅柱を立てた、隅柱横棧止め縦板組の井戸枠を検出した。横棧は最下段のみ残っていたが、隅柱の残存状況から

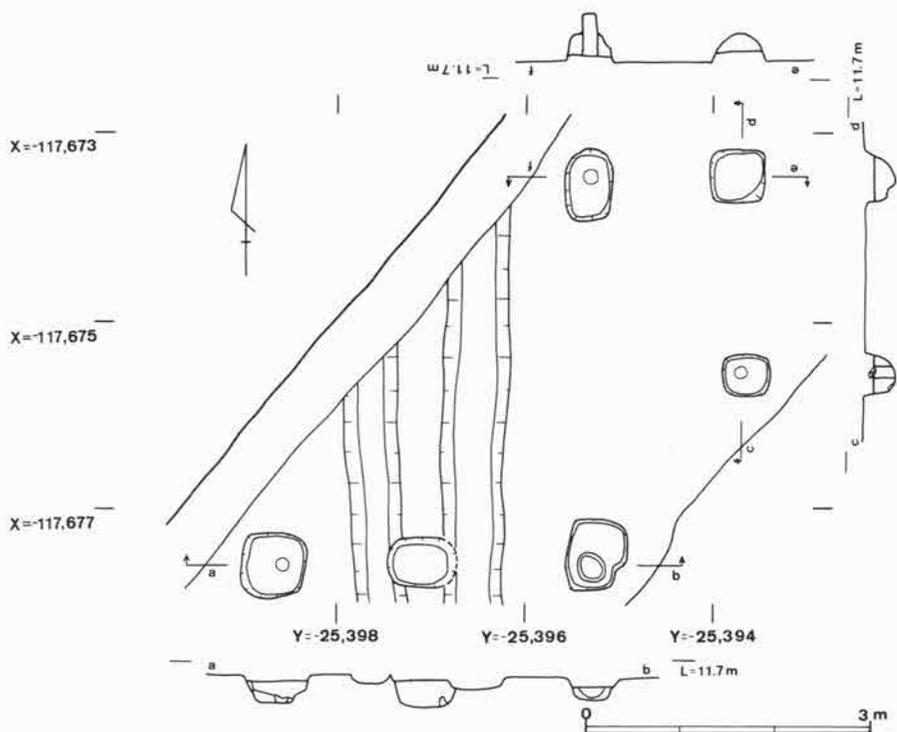
二段あったと推定される。隅柱は直径10~15cm・長さ約1m遺存し、直交する横棧の枘穴は高さを違えている。縦板は幅15cm・厚さ1.5cm前後のものを二~三重に重ねている。

東三坊第二小路西側溝 S D 26707 溝の上層と西側が中世素掘り溝に切られている。幅1.0~1.2m・深さ約15cmを測る南北方向の素掘り溝である。溝心はX=-117,662.000のときY=-25,385.600となる。これまでの調査資料から東三坊第二小路西側溝と判断した。

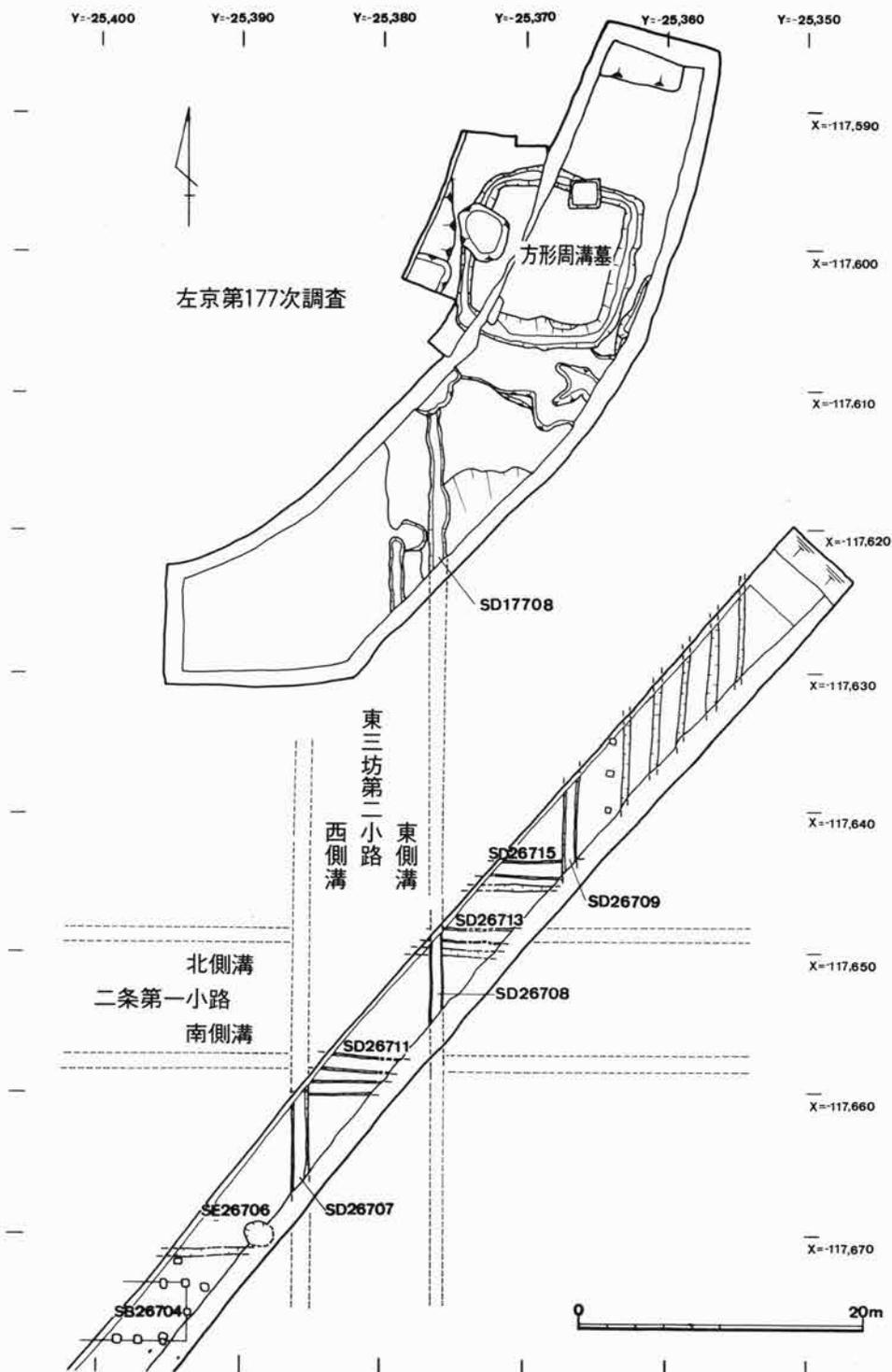
東三坊第二小路東側溝 S D 26708 溝の幅約1.0m・深さ約30cmを測る。南北方向の素掘り溝である。溝心はX=-117,652.000のときY=-25,376.100となる。これまでの調査資料から東三坊第二



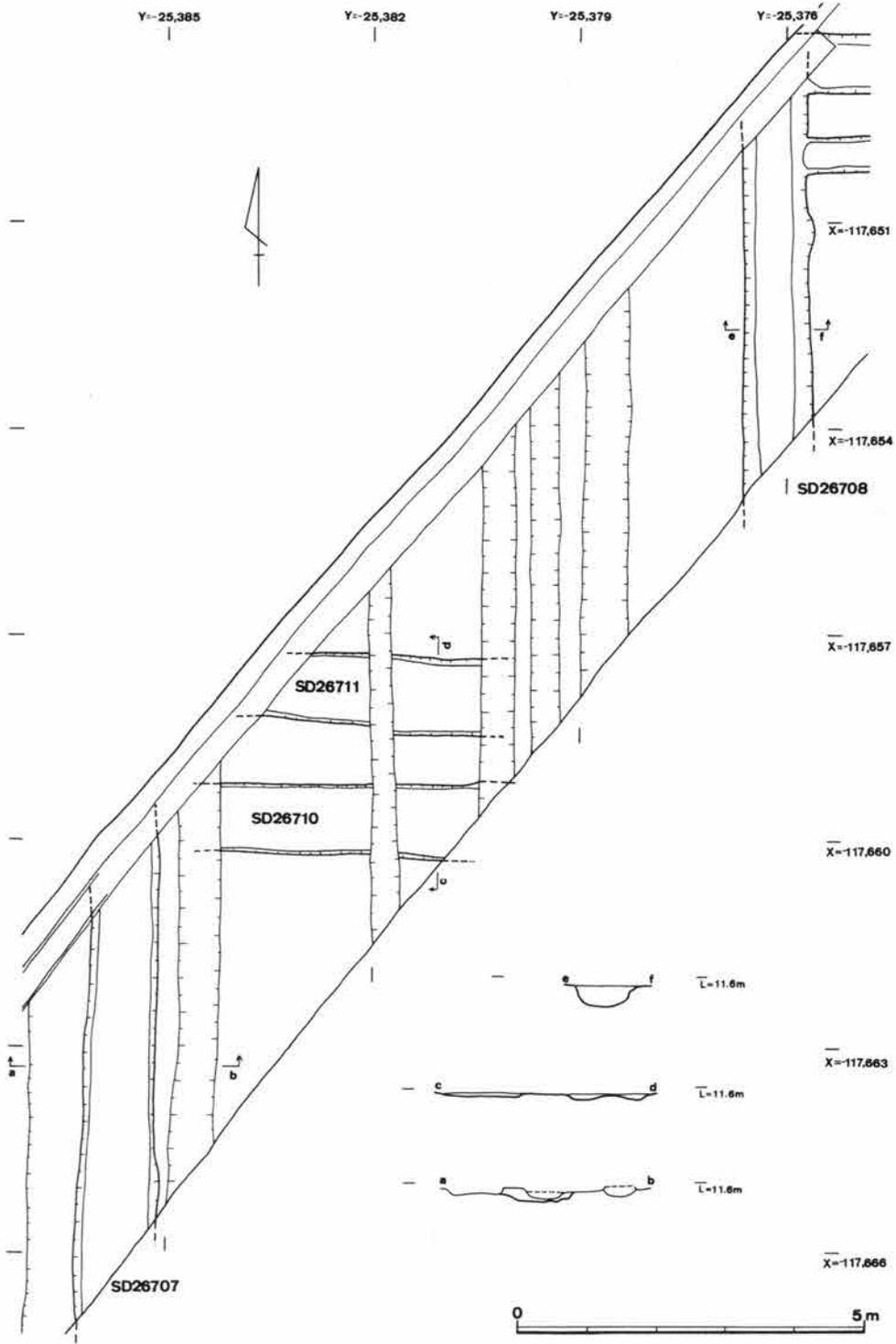
第103図 向日工区 12BL.第13トレンチ 井戸 S E 26706実測図



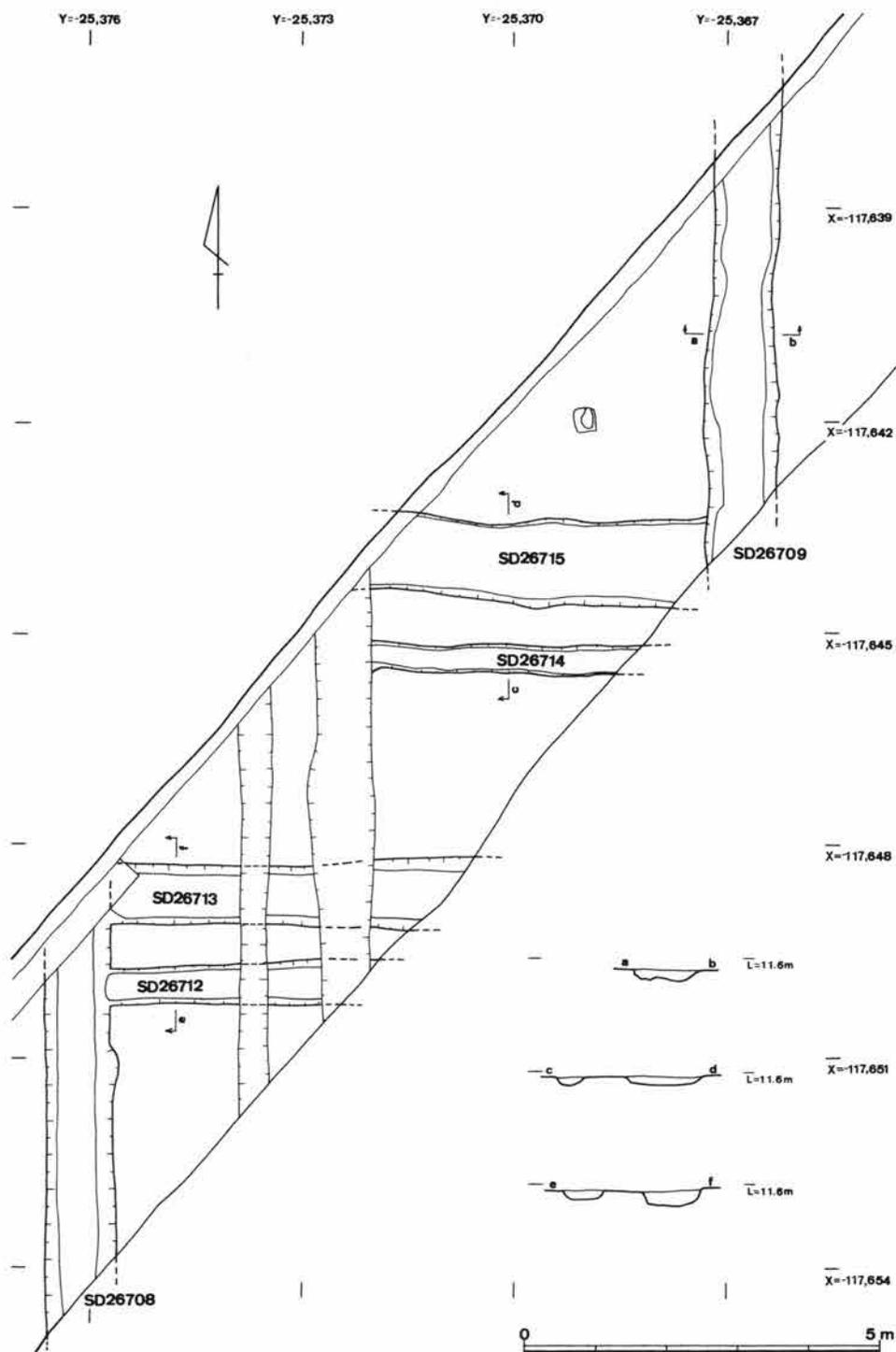
第104図 向日工区 12BL.第13トレンチ 掘立柱建物跡 S B 26704実測図



第105図 向日工区 12BL. 第13トレンチ 条坊割付図



第106図 向日工区 12BL.第13トレンチ S D26707・08・10・11実測図



第107図 向日工区 12BL.第13トレンチ S D26708・09、S D26712～S D26715実測図

小路東側溝と判断した。

溝 S D 26709 溝の上層を中世素掘り溝に切られている。幅約1.0m・深さ10~20cmを測る南北方向の素掘り溝である。溝心はX=-117,641.000のときY=-25,366.800となる。この溝は、S D 26707・08とほぼ等間隔に並ぶ。

溝 S D 26710 溝の幅約1.0m・深さ約3~5cmを測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,381.000のときX=-117,659.650となる。

二条第一小路南側溝 S D 26711 溝の幅1.0m前後・深さ約5~10cmを測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,381.000のときX=-117,657.850となる。これまでの調査資料から二条第一小路南側溝と判断した。

溝 S D 26712 溝の幅0.5~0.65m・深さ15cm前後を測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,373.000のときX=-117,650.000となる。

二条第二小路北側溝 S D 26713 溝の幅約0.8m・深さ約25cmを測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,373.000のときX=-117,648.700となる。これまでの調査資料から二条第二小路北側溝と判断した。

溝 S D 26714 溝の幅約0.4m・深さ約10cmを測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,370.000のときX=-117,645.350となる。

溝 S D 26715 溝の幅1.0~1.2m・深さ約10cmを測る。東西方向の素掘り溝である。溝心はY=-25,370.000のときX=-117,643.900となる。

柵列跡 S A 26716 一辺約40cmの方形掘形で深さ20~30cmを測る。径約15cmの柱痕がある。南北方向に柱掘形が並ぶことから柵列と判断した。柱間は約2.4mを測る。真北より東に約1.5度振れている。

溝 S D 26717 溝の幅約0.4m・深さ10cm前後を測る。南北方向の素掘り溝である。真北に対して東に約1度振れている。溝の上層から須恵器壺Gが出土した。

溝 S D 26718~20 溝の幅約0.4m・深さ10cm前後を測る。南北方向の素掘り溝である。これらは溝 S D 26717から東にほぼ等間隔(溝心間で1.8~2.0mを測る)に並ぶ。

B. 出土遺物(第108~112図、図版第72・73)

中世遺物包含層から瓦器、土師器、須恵器、緑釉陶器、渡来銭などが出土しているが、図面化できるものは少ない。各々の遺構や黒褐色土層等の包含層から多量の長岡京期の遺物が出土している。以下に長岡京期の遺物、包含層の遺物、木製品、石器の順番に記述する。長岡京期の土器は『平城宮発掘調査報告 X I』、瓦類は『平城宮出土軒瓦形式一覧』・『同補遺編』(奈良国立文化財研究所発行)を基準に分類した。

土器類

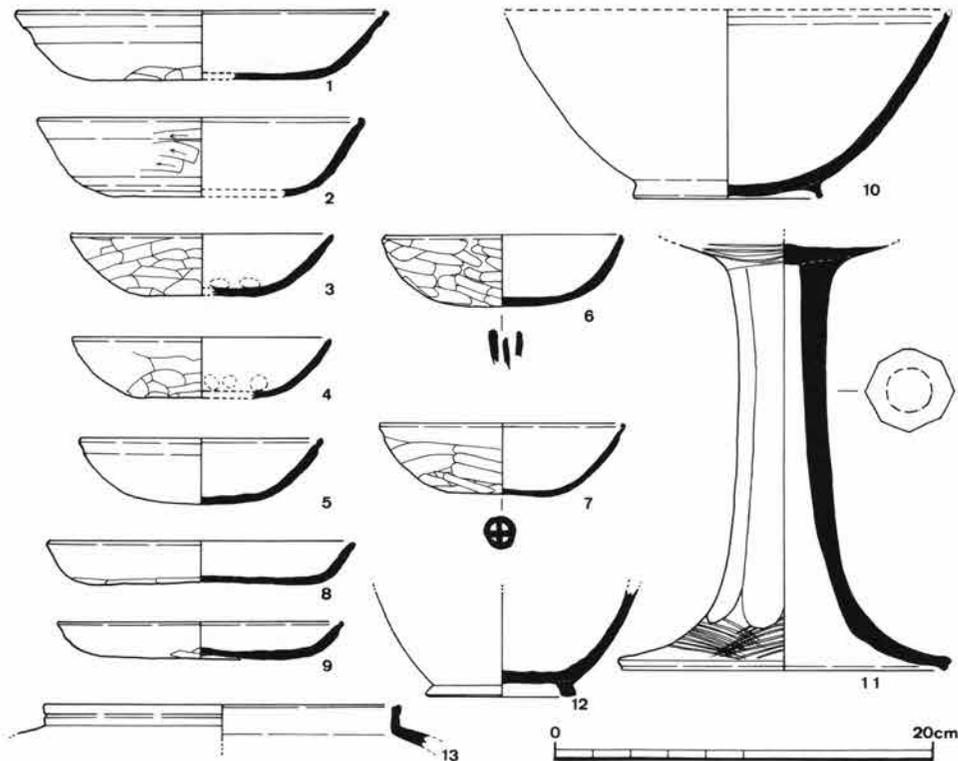
井戸跡 S E 26704出土遺物(第108図) 土師器の杯A(1・2)、椀A(3~7)、皿A(8・9)、大型の杯B(10)、高杯の脚部(11)、須恵器の壺底部(12)、壺A(13)などがある。

土師器杯A 1は口縁部下半から底部にヘラケズリを行い、b手法に近い仕上がりである。2は外面にヘラケズリを行い内面を横ナデするc手法である。1は復原口径20cm・器高3.8cmを測る。2は復原口径17.8cm・器高4.3cmを測る。

土師器椀A 6・7の2点は完形品である。6はc手法で底部外面に「三」または「川」に見える墨書があり、口径12.6cm・器高4.2cmを測る。胎土に石英・黒褐色粒子を含み、色調が淡黄灰色を呈する。7もc手法で底部外面に「⊕」と記号を記した墨書がある。口径13.1cm・器高3.8cmを測る。胎土に石英・赤褐色粒子を含み色調が淡橙褐色を呈する。

土師器皿A 8は口縁部と底部の境界から底部にヘラケズリを行い、内面を横ナデするb手法である。口径16.4cm・器高2.3cmを測る。胎土に石英・赤褐色粒子を含み、色調が淡橙褐色を呈する。9はc手法である。ほぼ完形品で口径15.3cm・器高2cmを測る。

土師器杯B 10は破片で口縁端部を欠くが、復原口径23.6cm・復原器高9.8cmを測る。器壁が摩耗して調整方法がみにくいが、口縁部外面にはヘラミガキを施す。



第108図 向日工区 12BL. 第13トレンチ 出土遺物実測図(1) 井戸 S E 26706

土師器高杯脚 11は八角に面とりしている。脚部内面に凹凸がなく棒づくりである。脚裾部外面に六方向のヘラミガキを施す。残存高22.9cm・脚低径17cmを測る。

溝出土遺物(第109図) 須恵器の蓋(1・2)、杯B(3・4・5)、杯A(6・7)、壺G(11)、壺L(8~10)、甕(12)、土師器の蓋(13)、杯A(14・15)、椀A(16~18)、椀C(19)、皿A(20・21・24)、皿C(22・23)、甕(25・26)、土馬(27)などが出土している。S D 26707から3・4・6・12・22が、S D 26708から16・17・23・27が、S D 26713から7が、S D 26714から9が、S D 26717から11が出土し、その他はS D 26715から出土した(図化していないが各々の溝から土器が出土している)。

須恵器蓋 端部が屈曲し、段があるもの(1)とないものが(2)ある。1は口径14.2cm・器高1.9cmを測る。

須恵器杯B 3が復原口径15.4cm・器高5.3cmを測り、5が復原口径18cm・器高5.7cmを測る。いずれも焼成が良好で、色調は灰色を呈する。

須恵器杯A 6が復原口径15.4cm・器高3.4cmを測り、7はほぼ完形品で口径16.5cm・器高3cmを測る。7は焼成がやや甘くて淡灰色を呈し、口縁端部が灰黒色となる。

須恵器壺L 口頸部(8・9)と体部(10)がある。10は残存高9.7cm・体部最大径16.4cmを測る。焼成が良好で淡青灰色を呈する。

須恵器壺G 11は口頸端部の一部を欠くがほぼ完形品で、器高19.7cm・底径4.8cmを測る。胎土に小石を含み、焼成が良好で暗青灰色を呈する。底に糸切り痕が残る。

須恵器甕A 12は復原口径26.4cmを測る。焼成が良好で淡青灰色を呈する。

土師器蓋 13はほぼ完形品で、口径11.2cm・器高2.3cmを測る。外面にヘラミガキ、内面に螺旋状に展開する暗文を施す。焼成が良好で淡灰褐色を呈する。

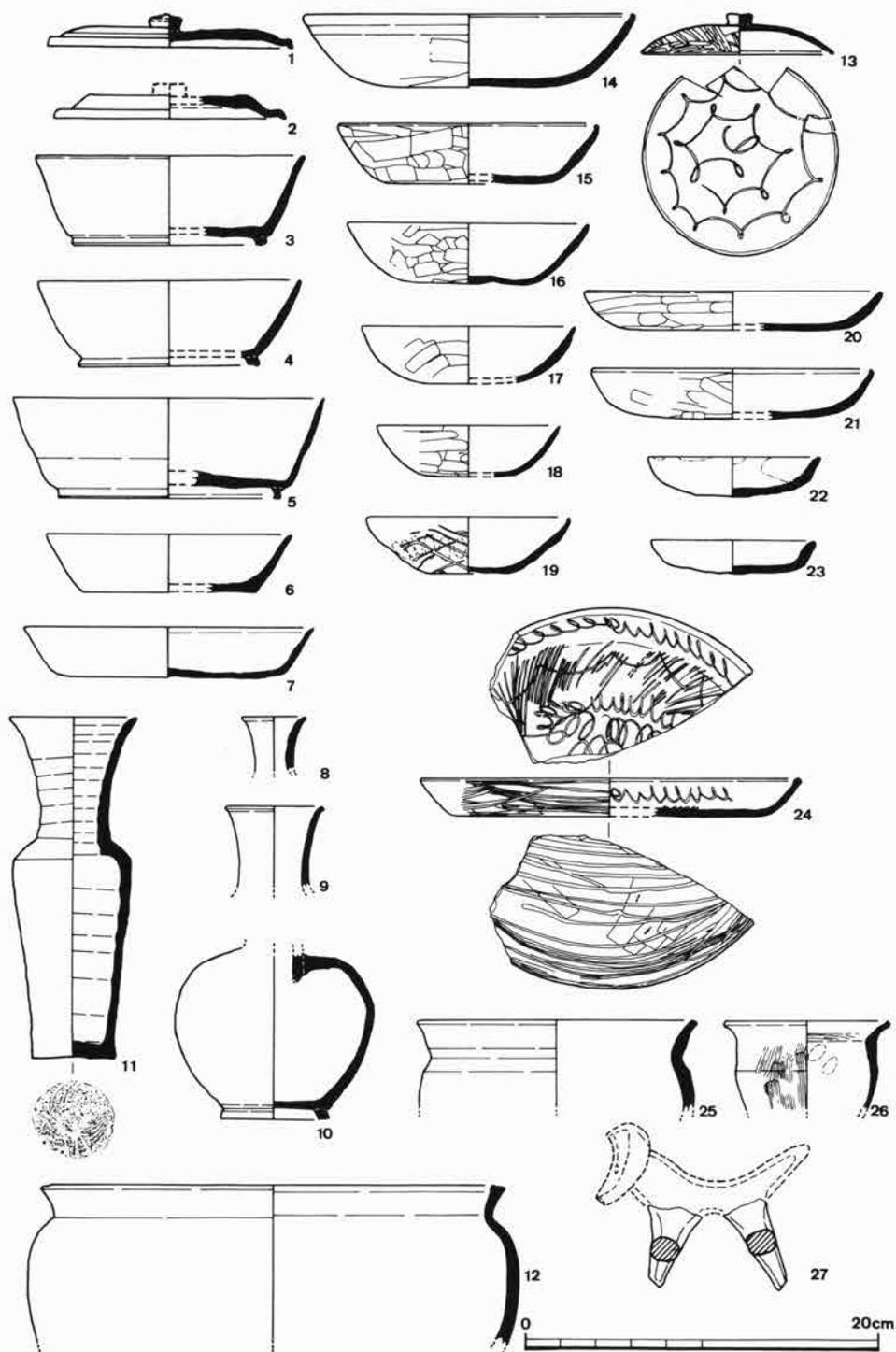
土師器杯A c手法で、14が復原口径19.2cm・器高4.1cmを測り、15が復原口径14.8cm・器高4.3cmを測る。14は胎土に石英、赤褐色粒子を含み、焼成が良好で淡橙褐色を呈する。

土師器椀A c手法である。16はほぼ完形品で口径14cm・器高3.6cmを測る。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。17は復原口径12.4cm・器高3.2cm、18は復原口径10.6cm・器高3cmを測る。

土師器椀C 19は外面不調整で、口縁部にあらいヘラミガキを施す。口径11.3cm・器高3.3cmを測る。焼成が良好で淡橙褐色を呈する。

土師器皿A c手法である。20は復原口径17.2cm・器高2.3cm、21は復原口径16.4cm・器高2.9cmを測る。24は外面にヘラケズリの後、底部及び口縁部に荒いヘラミガキ、内面に螺旋及び放射状の暗文を施す。焼成が良好で淡橙褐色を呈する。

土師器皿C 22・23は外面不調整のe手法である。両者とも完形品で、22が口径



第109図 向日工区 12BL. 第13トレンチ 出土遺物実測図(2) 土器(長岡京期の溝)

10cm・器高2.3cm、23は口径9.4cm・器高2cmを測る。口縁部に油煤が付着することから灯明皿に使用したことがわかる。

土師器甕A 口縁を緩やかに「く」字に外反させる。25は復原口径16.1cm、26は復原口径9.6cmを測る。26は体部外面に煤が付着する。

土馬 27は、土馬の前脚及び後脚と推定される。焼成が良好で淡橙褐色を呈する。

包含層遺物(第110図) 中世遺物包含層から出土した緑釉陶器の底部(1)と、黒褐色土層から出土した長岡京期の土器、弥生土器の底部(8)等がある。

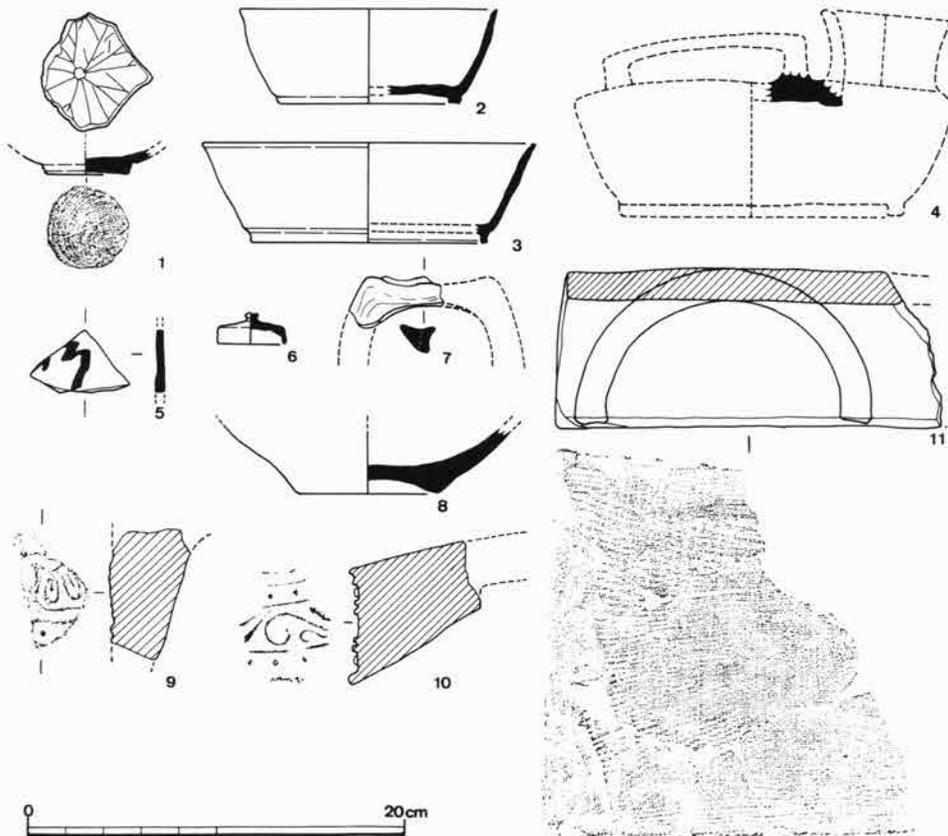
1は緑釉陶器の底部で内面に枝葉状の線刻を行い、底部は糸切り痕を残したまま削りだす。内外面とも淡い黄緑色に発色した釉をかける。9世紀の所産であろう。

須恵器杯Bは、2が復原口径13.6cm・器高5.2cm、3が復原口径18cm・器高5.2cmを測る。

5は須恵器の底部片に墨書が見られるが、小片のため文字か記号か判読できない。

4は須恵器の平瓶で把手と注口の接合部分である。他に把手の破片もある。

6は須恵器で模造品の蓋である。完形品で口径3.7cm・器高1.7cmを測る。焼成は良好で



第110図 向日工区 12BL. 第13トレンチ 出土遺物実測図(3) 包含層

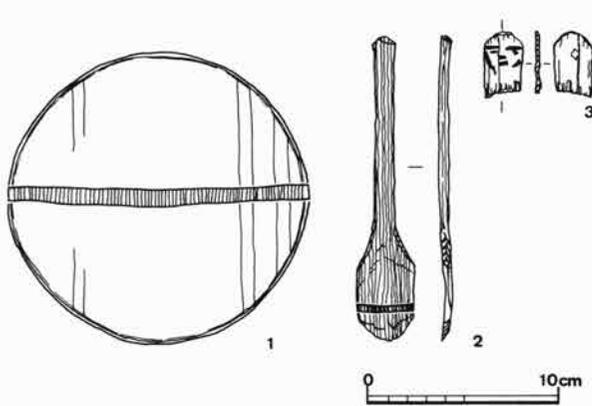
青灰色を呈する。

7は模造品のカマド形土製品である。断面が三角形の庇(火よけ)を取り付ける。

8は弥生土器の底部片で、摩耗しているが外面にハケ目が認められる。底径7.7cmを測る。胎土に石英・長石・チャート・黒色砂粒を含み、焼成は良好で茶褐色を呈する。弥生中期の所産であろう。

瓦類(第110図)

黒褐色土層から軒丸瓦(9)、軒平瓦(10)、丸瓦(11)等が出土した。9は焼成がやや甘く



表面が黒灰色、断面が淡灰色を呈する。瓦当文様は復弁蓮華文であるが断片のため形式は不明である。10は焼成が良好で表面が黒灰色、断面が灰色を呈する。平城宮式の6664型式と推定される。

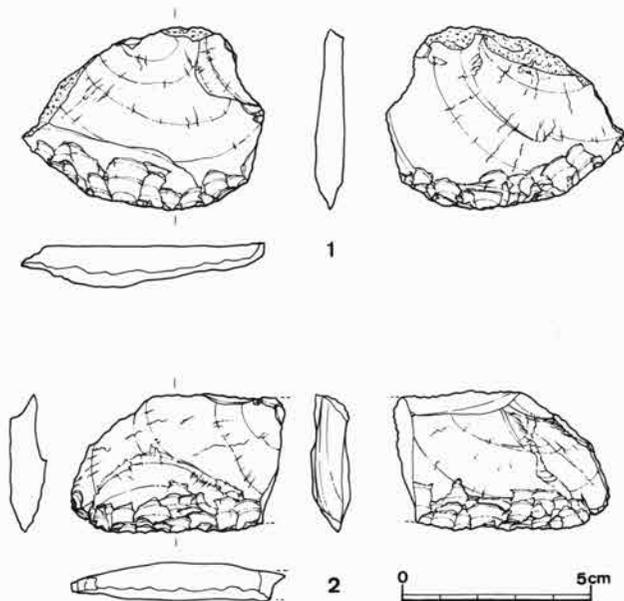
木製品(第111図)

第111図 向日工区 12BL. 第13トレンチ
出土遺物実測図(4) 木製品

1は井戸跡 S E 26706出土の曲物の底板で、側面に5か所の留め孔がある。柁目材を使用し、直径15.8cm・厚さ約0.8cmを測る。

2は S D 26713から出土した匙である。柁目板を荒く削って柄と匙部を造り出す。匙部の先端は尖り、中央がわずかに凹む。全長12.6cm・匙部幅3cmを測る。

3は S D 26708出土の人形の頭部である。片面に墨で顔を描く。残存長3.5cm・最大幅2cm・厚さ0.15cmを測る。



第112図 向日工区 12BL. 第13トレンチ
出土遺物実測図(5) 石器

石器(第112図)

1はサヌカイトを石材とする削器である。刃部は両面加工し、長さ6.5cm・幅4.95cm・厚さ1.1cm・重さ25.08gを測る。S D26717から出土した。

2もサヌカイトを石材とする削器である。刃部は両面加工し、長さ6.7cm・幅3.75cm・厚さ1.05cm・重さ30.51gを測る。トレンチ南部の包含層から出土した。これらは鶏冠井遺跡・鶏冠井清水遺跡との関連で弥生中期の所産であろう。

3. まとめ

名神拡幅工事の都合上遅れる一部を除いて向日工区の調査を一旦終了した。

この長岡京跡左京第267次調査は、二条条間大路北側溝、条坊交差点の一部を検出した等多くの成果があった。以下、簡単に長岡京期の調査成果を列挙する。

①今回の調査で初めて二条条間大路北側溝(S D26703)を検出した。左京第162次調査^(注2)で検出された二条条間大路南側溝S D16202の溝心と国土座標で比較すれば、溝心間が37.4mを測る。右京第285次調査^(注3)で検出された二条条間大路南側溝S D28502と国土座標で比較すれば、溝心間が34.4mを測る。二条条間大路は大路の中でも朱雀大路につぐ二条大路級の道路幅を有することが判明した。これは長岡京条坊復原案のうちでも、条坊を二町北に上げる復原案を補強するものとなる。今回の調査では、南北両側溝は同一遺構面で確認できておらず、今後の調査が期待される。

②二条第一小路と東三坊第二小路の交差点推定地では、それぞれの条坊側溝の一部を検出した。二条第一小路では、南側溝S D26711と北側溝S D26713の溝心間距離は、9.5mを測る。両側溝の南には、並行する溝が各一条があり、南側溝S D26711と溝S D26710の溝心間が1.8m、北側溝S D26713と溝S D26712の溝心間が1.3mを測る。これらの両側溝の間に築地の存在を考えるにはその間隔はあまりにも狭い。北側溝の北では、東西溝S D26714と15があり、S D26713とS D26715の溝心間距離は4.8mを測り、この間には築地等を推定することができる。左京第82次調査^(注4)で検出された北側溝S D8203と今回の北側溝S D26713を国土座標で比較すると、S D26713が1.2m南に位置している。

東三坊第二小路では西側溝S D26707と東側溝S D26708の溝心間距離は9.5mを測る。東側溝S D26708から溝心間距離が9.3mの位置で平行する南北溝S D26709を検出している。その東では、南北方向の柵列跡S D26716、南北方向の溝群を検出している。これらは、現段階では、宅地内の区画溝と柵列及び耕作等に係わる溝群と推定される。

東三坊第二小路東側溝S D26708は、左京第177次調査^(注5)で検出された東側溝S D08と国土座標がほぼ一致する。

(石尾政信)

(2) 長岡京跡右京第368次 下植野工区
(7ANSID-2・TID-3・TKT-2地区)

1. はじめに

下植野工区は、乙訓郡大山崎町円明寺壺町田、下植野飯田・上枚方に所在する。調査地は、長岡京復原案によると、左京九条一坊二町の朱雀大路東側溝推定地と、右京九条一坊十四町、二坊二・四・五・十二・十三町に復原される地点に当たる。また、『京都府遺跡地図』によると、縄文時代から古墳時代にかけての集落遺跡である松田遺跡及び、下植野南遺跡の範囲にはいる(第113図)。

調査は、昨年度の調査に引き続き、二年目の本調査である。昨年度の調査では、A～Eの各地区で、古墳時代後期から平安時代にかけての各種の遺構、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝や土坑さらに旧河川などの遺構群と、これらに伴う土器や装飾品などの遺物が数多く出土した。

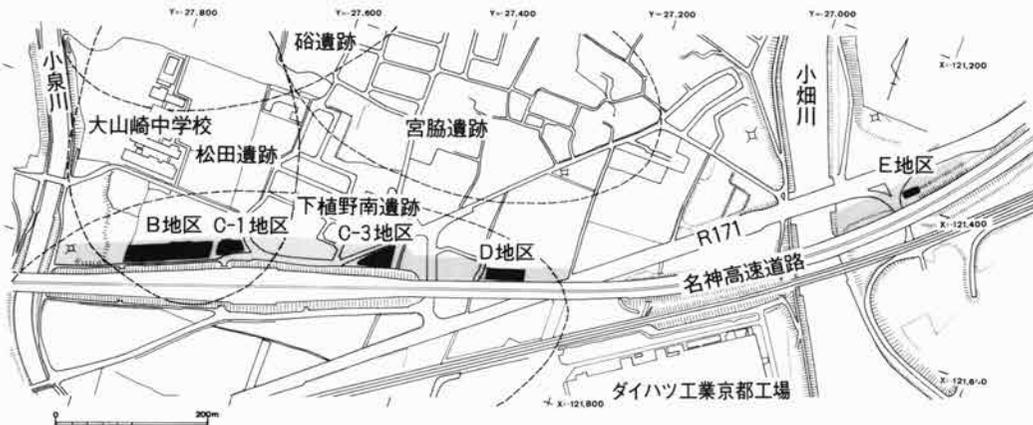
今年度は、昨年度のB～E区の試掘トレンチを開発対象地全域に広げ、遺構・遺物の確認に努めた。

(黒坪一樹)

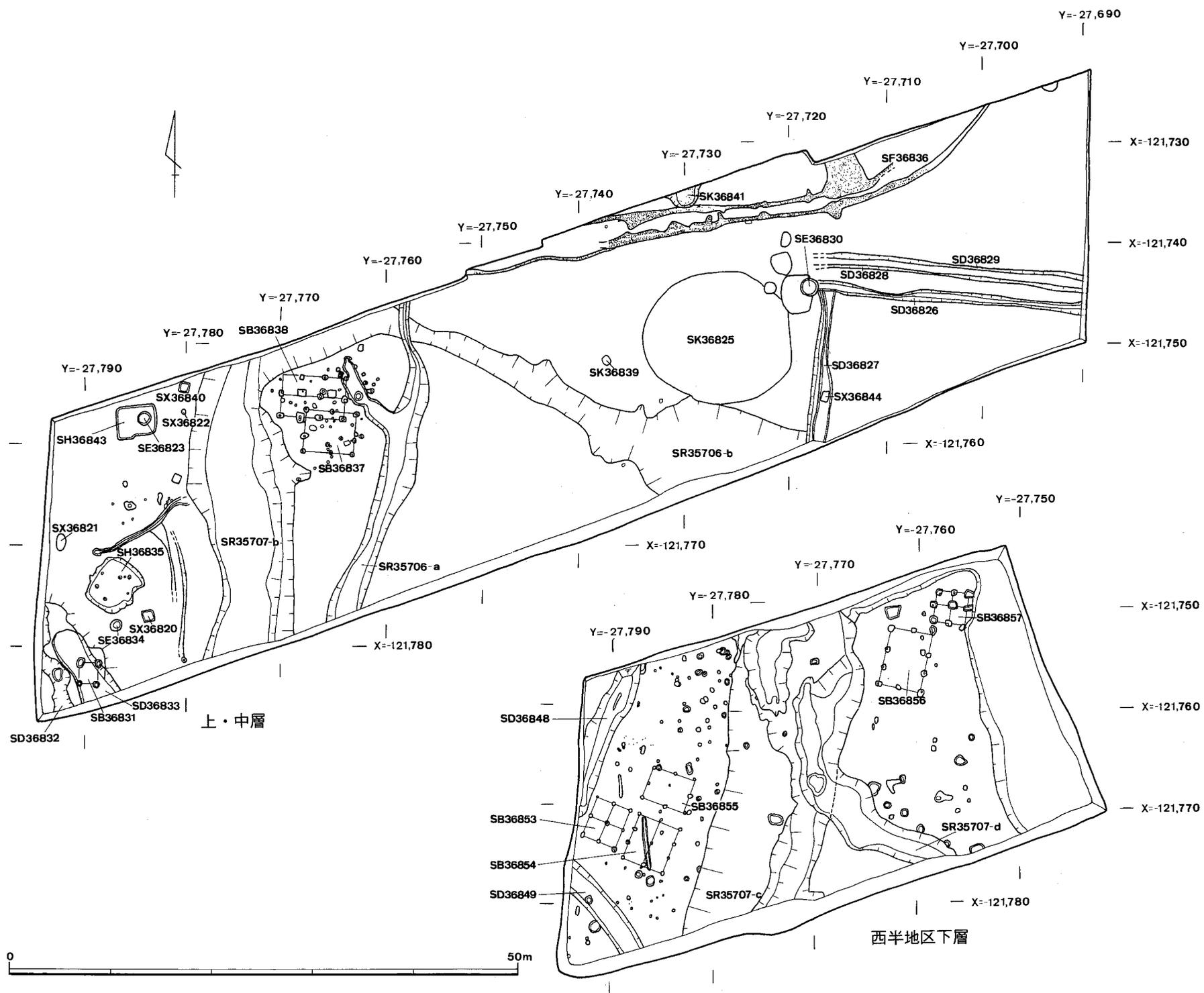
2. 調査の概要

① B地区(第114図、図版第74)

B地区は、昨年度の試掘調査によって、3時期の遺構面(上・中・下層)の存在が明らかとなっている。若干ながら振り返っておくと、現在の水田床土直下の砂礫層上面からは、



第113図 下植野工区 調査トレンチ配置図



第114图 下植野工区 B地区 遺構平面図

平安時代から鎌倉時代にかけての土器が、下位の砂礫中からは、古墳時代後期(6世紀後半)の遺物が出土している。中層では古墳時代の遺物を含む旧小泉川の河床が検出され、5世紀から7世紀の遺物が出土している。そして、下層では、時期不詳であるが、掘立柱建物の柱穴痕が検出されている。

今回、同地区を大きく拡張したことにより、改めて上記の文化層に伴う遺構群の存在が明らかとなった。まず上層遺構群は、近世の井戸跡(S E 36830)をはじめとする数基の農耕に伴うと考えられる溜め井戸跡や、水田耕作に伴う畦畔などを確認している。また、平安時代末から鎌倉時代初頭の土坑(S K 36841)、平安時代の井戸跡(S E 36823・34)、凹地状遺構(S K 36825)、礎石建物跡(S B 36831)、溝(S D 36832・33)、路面状遺構(S F 36836)、掘立柱建物跡(S B 36837・38)などがある。

中層遺構には、古墳時代後期(6世紀)の祭祀遺構(S X 36820・21・22・24)、竪穴式住居跡(S H 36835・43)、古墳時代前期から後期の流路(S R 35706・07)などがある。

下層遺構としては、中層に庄内式併行期の土器が出土した溝(S D 36848)、時期は不詳であるが、溝(S D 36849)、掘立柱建物跡(S B 36853~36857)などを検出している。

(黒坪一樹)

イ. 上層遺構(第114図、図版第75-(1)) 近世から平安時代までの幅広い時代のものである。調査区を南北に広く流れる旧河道 S R 35706と S R 35707の洪水堆積によって覆われた広い範囲の上面で検出している。旧河道内からは、古墳時代の遺物が中心に出土しており、中世・平安時代の遺物がほとんど出土しないことから、平安時代以前に埋没していたことが考えられるが、当該期の遺構はこの礫層を取り除いた段階ではじめて検出できた。

A. 検出遺構

井戸跡 S E 36830 直径1.8mの掘形内に径1.6m・検出高0.4mの桶を埋めており、農業用の水溜めと考えられる。桶内からは、近世の下駄などの木製品が出土している。この井戸跡周辺には、4基の大小の野井戸跡が検出されている。

溝 S D 36826~29 調査地の東で検出した溝群である。溝 S D 36826と36827は、幅0.6~1.2mを測る溝である。北側及び西側の水田との地形の変換点にあり、水田耕作に伴う水路として使用されたものと考えられる。溝 S D 36828・29は、幅0.3~0.4mを測る S D 36826から北側の水田内の溝である。

土坑 S K 36841 北壁中央東よりにかかって検出されたため、全体形は不明である。東西3m・南北1.7m以上の規模を持ち、深さは最も深いところで約15cmを測る。北壁断面で見ると、掘形は底の丸い皿形である。瓦器椀、脚付瓦質鍋が多量に投棄されていた。

井戸跡 S E 36823・34 調査地の西で検出した。直径1.2～1.4mで、円形を呈し、深さ約0.4mを測る。壁面には、黄白色の粘質土を張り付けている。井戸跡内からは、土師器杯や「て」字口縁の皿などが出土している。

凹地状遺構 S K 36825 長径14.5m・短径12.5mの円に近い範囲から平安時代の須恵器・緑釉陶器・瓦などが出土した。比較的浅い凹みで、残存の深さは、中央が最大で、20cmを測る。自然の凹みに遺物を投棄した大形の土器溜りまたは整地層の一部と言える。

礎石建物跡 S B 36831 拳大からもう少し大きめの自然石(山石)を集積し、その上に柱を建てたと考えられるものである。各根石部の中央がやや空いて礎石の設置が推定されることや、レベルがほぼそろっていることから、柱跡と判断した。また、周辺の地盤が柔らかかったため、溝 S D 36832・33の埋土によって周辺を整地したと考えられる。集石部の中心間距離は、東西約2m・南北2.1mを測る。

溝 S D 36832 調査区の南西隅で検出した。幅2.4m・深さ5～10cmで、10mにわたり検出した。埋土は暗灰褐色粘質土で、平安時代の須恵器・土師器などがまとまって出土した。

溝 S D 36833 溝 S D 36832の東で検出した。幅約4m・深さ5～10cmの浅い溝で、10mにわたり検出した。溝内からは、平安時代の土器が出土した。全体としては、西から東に下がる地形を埋めた整地層の様相を呈している。

路面状遺構 S F 36836 調査区北壁中間部から東に向かったのびる帯状の敷石遺構である。帯状の敷石は、西側で大きく3条、東側で2条あり、東にいくにつれて北へむかって曲がっている。2～3cm大から拳大の自然礫を使用している。敷石部分の断面観察では、帯状の礫の下に深い掘り込みが認められる。現在のところ石敷列の間を路面と考えているが、下層にある溝とその上面に敷設されている石敷の関係については明らかでない。

掘立柱建物跡 S B 36837 南北2間×東西2間である。柱間寸法は南北1.5mと北側2.6m、東西が北側で2.4～2.6m、南側で2.2mと2.7mを測る。掘形は、楕円形及び円形を呈する。

掘立柱建物跡 S B 36838 桁行3間×梁間2間の東西棟である。柱間寸法は、桁行梁間とも2.0～2.3mを測る。検出した掘立柱建物跡は、S B 36837・38ともN6°Eの傾きを持つ。

土坑 S K 36839 調査地の中央部で検出した焼土坑である。時期の決め手となる出土遺物はなく、平面0.6m×0.9mで深さ約0.3mを測る。土坑底部には炭が検出されるものの高温で焼けることなく、周辺の壁のみが強く焼けしまっている。

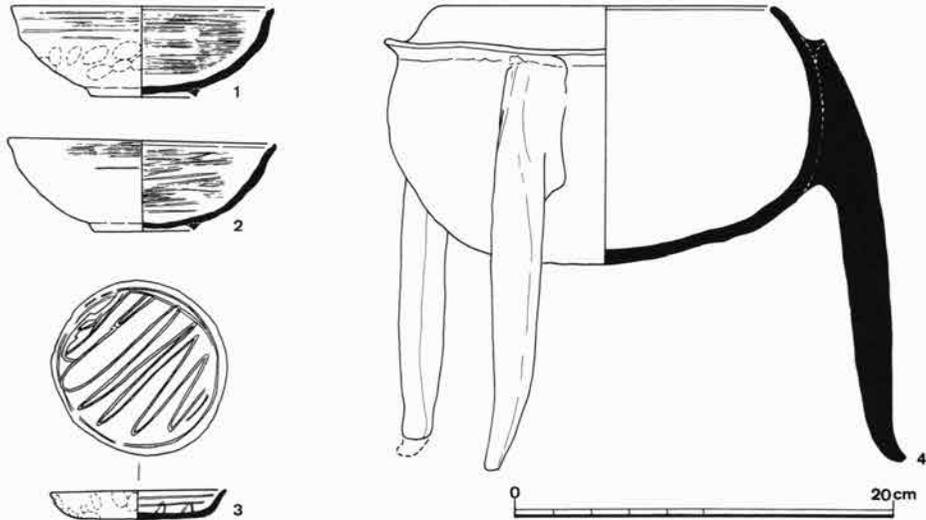
土坑 S X 36840 一辺約1m・深さ3cmを測る方形の土坑である。掘形の中央底面に直径約30cmの凹みがあり、柱掘形とも考えられるが、関連する遺構を確認しておらず断定できない。掘形内からは、平安時代の遺物が出土するが、その性格については不明である。

(黒坪一樹)

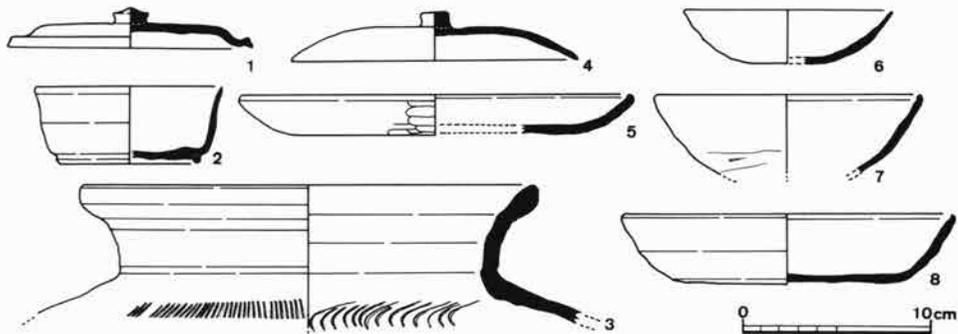
B. 出土遺物(第115・116図)

第115図は、土坑S K36841の代表的な出土遺物である。1・2は、三角形断面の高台を持つ瓦器碗である。口縁端部内側に沈線があり、体部中間でわずかにラインを屈曲させる。内面及び外面上半に細かなミガキ(平行暗文)が見られる。3は、瓦器質の皿である。ジグザグの暗文が見込みに明瞭に見られる。4は、瓦器質の脚付鍋である。碗の形態からおおよそ13世紀に比定されよう。

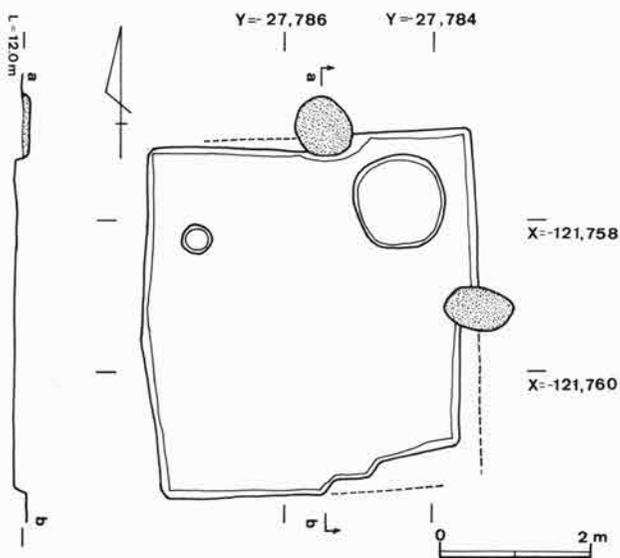
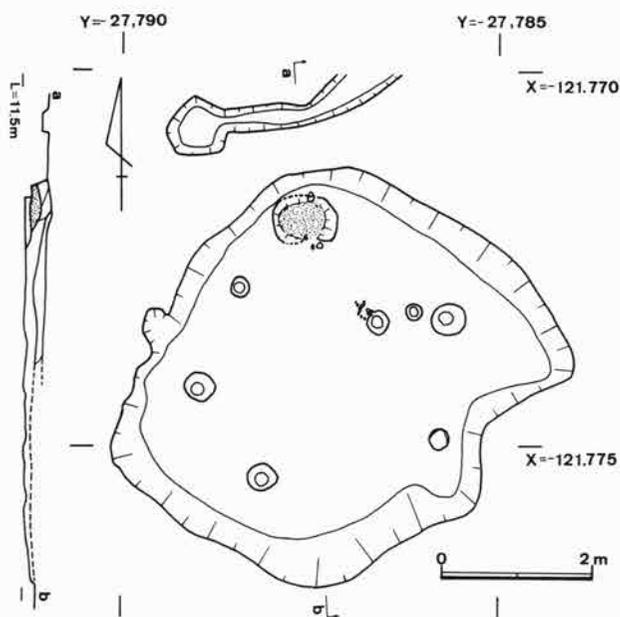
第116図1～8は、凹地状遺構S K36825及び包含層出土の遺物である。1は、須恵器杯蓋である。口径12.8cmを測る。2は、須恵器杯Bである。体部中間からやや外反する口縁部をもち、その端部は丸く取められる。口径9.6cm・器高4cmを測る。3はS K36825出土の須恵器甕である。4は、土師器杯蓋である。良精な胎土が用いられている。調整は、内



第115図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(1) S K36841



第116図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(2) (平安時代)



第117図 下植野工区 B地区 竪穴式住居跡 S H36835(上)
S H36843実測図(下)

外面とも摩滅により不明である。口径は14.8cm、器高は3cmを測る。5は土師器皿、6・7は土師器椀、8は土師器杯である。これらの出土遺物の形態をみると、时期的には長岡京期を含む平安時代でも古い時期のと考えられる。

□. 中層遺構(第114図、図版第74-(2)) 中層は旧河道の氾濫地を整地して営まれた遺構が多く、洪水層と整地層の認識が困難なため明確なプランを検出できなかった遺構も多い。ここでは古墳時代の竪穴式住居跡や、祭祀遺構・旧河道等を検出したが、遺構としてのまとまりを確認できない土器溜りも多くあった。

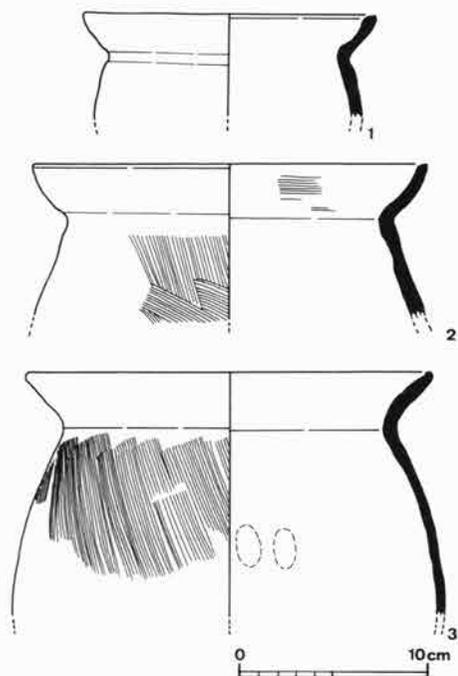
A. 検出遺構

竪穴式住居跡 S H36835 (第117・118図、図版第77-(1)) 検出状況は不整形ながら、短辺5m・長辺5.5mの方形になる。掘形の立ち上がりは約40cmを残す。北側隅部にカマドが造り付けられる。柱穴痕の残りは悪く、主柱痕等は明瞭でない。埋土は上層が洪水による細砂礫、下層が暗褐色砂礫混り粘質土である。

竪穴式住居跡 S H36843 (第117・118図)

一辺4.5mを測る正方形を呈する。掘形の立ち上がりは、約20cmを測る。北辺中央にカマド跡らしき焼土が見られる。また、東側の一辺中央部にも焼土の広がり認められたが、北

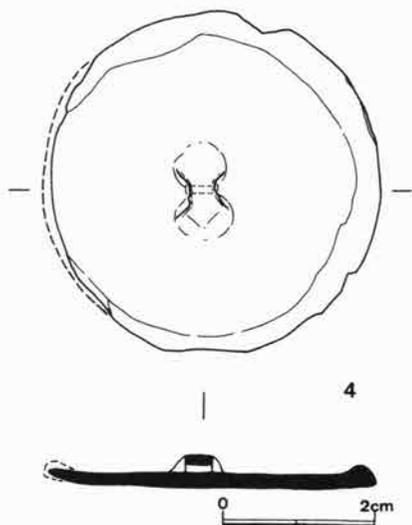
側に比べて残りは悪くカマド跡とは言えない。柱穴は、1基のみであるが、確実にこの住居跡に伴うものであるかどうかは不明である。埋土は、暗褐色粘質土である。



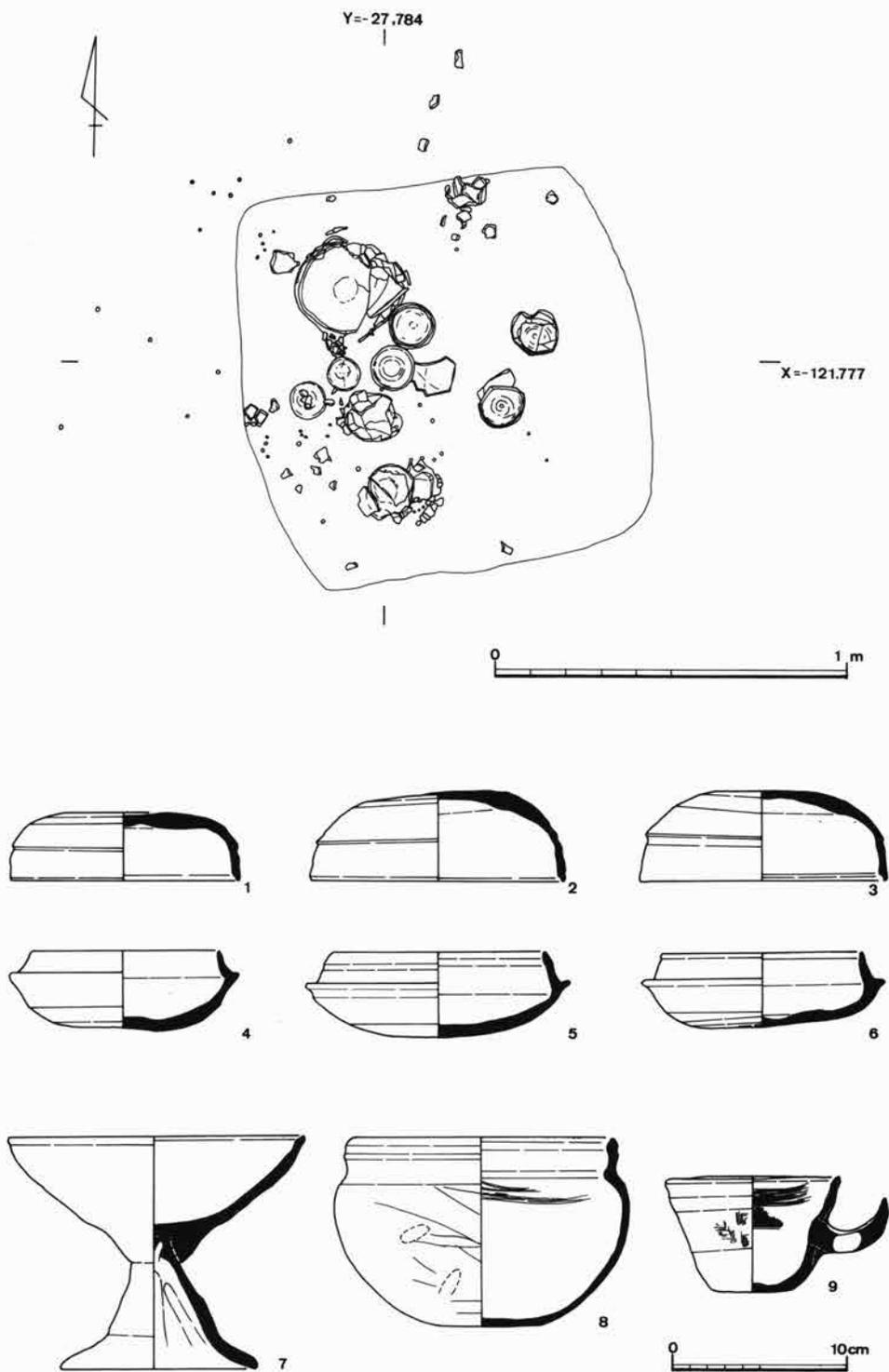
祭祀遺構 S X 36820 (第119・120図、図版第76-(1)) 最下層に一辺が約1.1mの方形プランの掘形を持ち、2~3回の祭祀を行ったと考えられる堆積が認められる遺構である。完形品の須恵器や土師器を地面を浅く凹めた土坑に据え置き、周辺に滑石製白玉をばらまいた状況である。埋葬した形跡はなく、何らかの祭祀が行われたようである。須恵器には、杯身・杯蓋・壺・高杯・鉢・甕などがあり、土師器では、高杯・鉢・把手付碗・甕などがある。

祭祀遺構 S X 36821 南北が1.6m、東西が1.2mの範囲に据え置かれた土器の広がりを確認した。数か所で須恵器杯身の上に口縁を上にした杯蓋を載せ、周辺には、土師器の甕や須恵器の甕などとともに滑石製の白玉がばらまかれた状況で出土した。

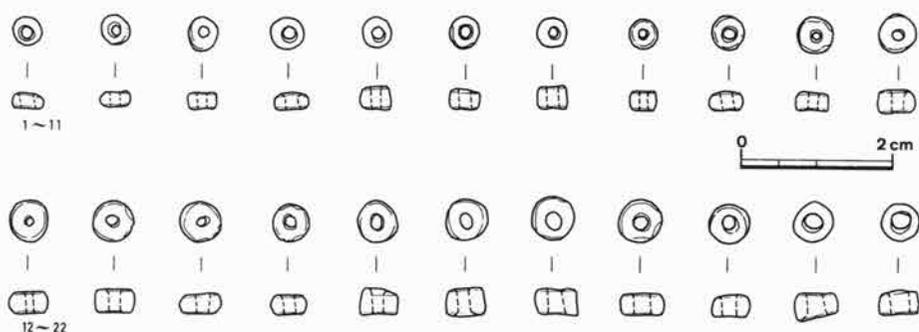
祭祀遺構 S X 36822 (第121図、図版第76-(2)) 最下層に東西0.9m・南北0.85mの方形プランの掘形を持ち、2~3回の祭祀を行ったと考えられる堆積が認められる遺構である。S X 36820同様各種の土器を埋置した状況であり、完形の土器が多く出土した。須恵器には、杯身・杯蓋・壺・高杯・鉢・甕などがあり、土師器では、高



第118図 下植野工区 B地区
出土遺物実測図(3) S H36835・43



第119図 下植野工区 B地区 祭祀遺構 S X36820実測図及び出土遺物実測図(4)



第120図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(5) S X36820(玉類)

杯・鉢・短頸壺・小形丸底壺・小形平底鉢・甕などがある。

祭祀遺構 S X36844 (図版第77-(2)) 調査地の東よりの溝 S D36827の下層で検出した。南北1.2m・東西0.7mの範囲に据え置かれた土器の広がりを確認した。土師器高杯を主体とした土器で構成されており、S X36820などとは様相が異なる。

旧河道 S R35706 昨年度の調査で検出した旧河道である。今年度の調査でその延長を確認したため、昨年度の遺構番号を踏襲した。幅4~8m・深さ1.5~2.0mを測り、大量の洪水礫で覆われていた。この旧河道は、祭祀遺構と同時期に流れており、同遺構の性格を考えるうえで重要である。

旧河道 S R35707 祭祀遺構(S X36820~22)の東で検出した旧小泉川水系による氾濫性の河道である。古墳時代の遺物が多く出土した。古墳時代前期の布留式土器や6世紀前半までの須恵器を多く含む一群で、河道の西で検出した祭祀遺構と同時期に埋没している。

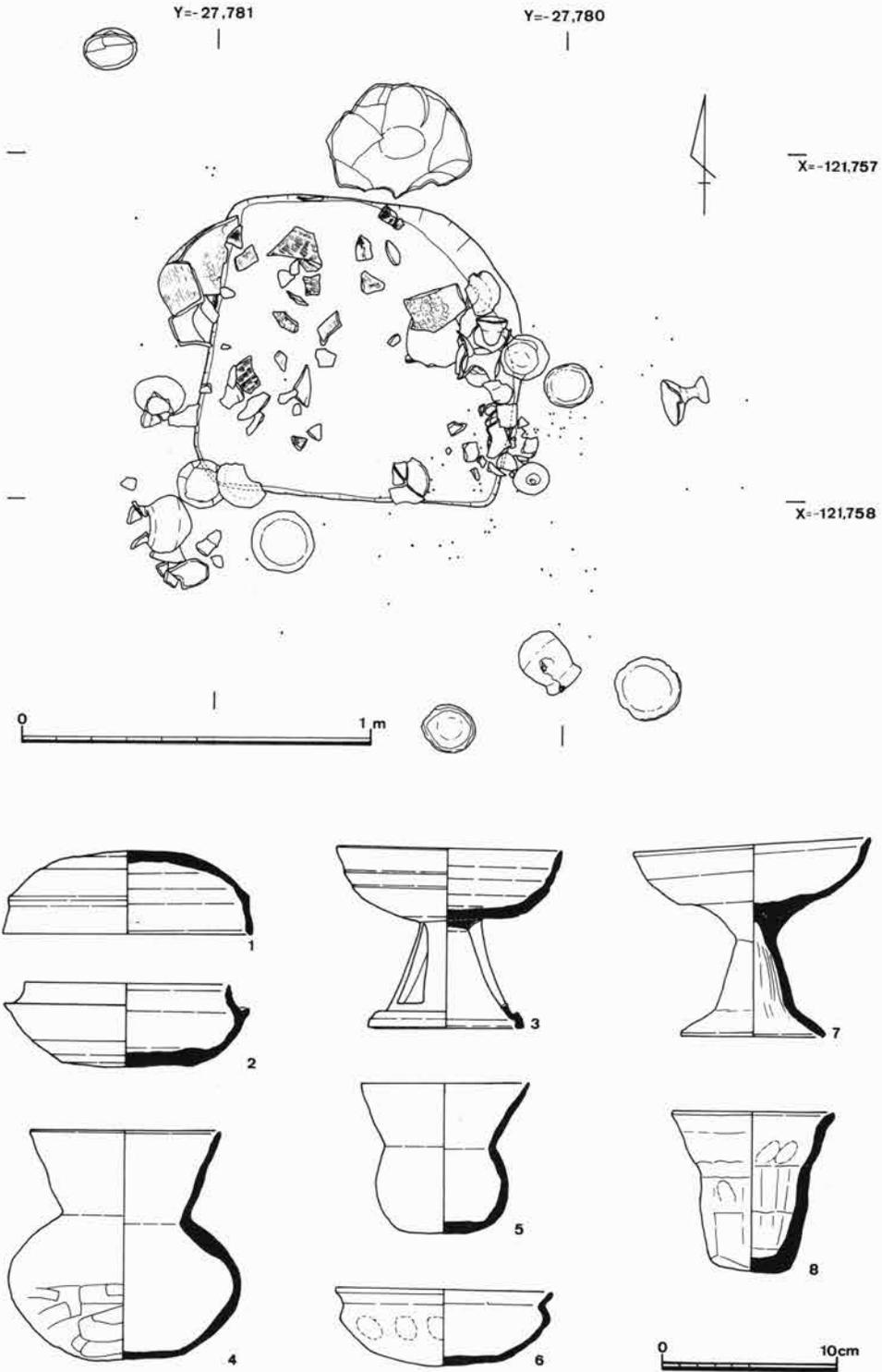
B. 出土遺物(第118~123図、図版第78~80)

第118図1・2は、竪穴式住居跡 S H36835のカマド部から出土した土師器甕である。3は、竪穴式住居跡 S H36843の東側焼土から出土した。4は、小形の銅鏡である。平安時代の井戸跡 S E36823の西壁面内から出土したが、出土状況から竪穴式住居跡 S H36843の床面遺物と判断した。

第119図下段は、同 S X36820から出土した遺物の一部である。須恵器では、杯身(4~6)・杯蓋(1~3)がセットで出土しており、他に甕・壺なども出土している。土師器では、高杯(7)、鉢(8)や、把手付の小形鉢(9)などが出土している。

土師器高杯(7) 口縁部内面に沈線を持ち、ラップ状に開く杯部と、低位で開く脚部からなり、接合部には外面に粘土紐を張り合わせている。

鉢(8) 平底の底部から丸い胴部を持ち、受け口状に立ち上がる口縁部からなる。口縁



第121図 下植野工区 B地区 祭祀遺構 S X36822実測図及び出土遺物実測図(6)

の外面に凹線、内端面に沈線を施す。調整は、外面ではケズリ、内面ではハケ調整を施す。

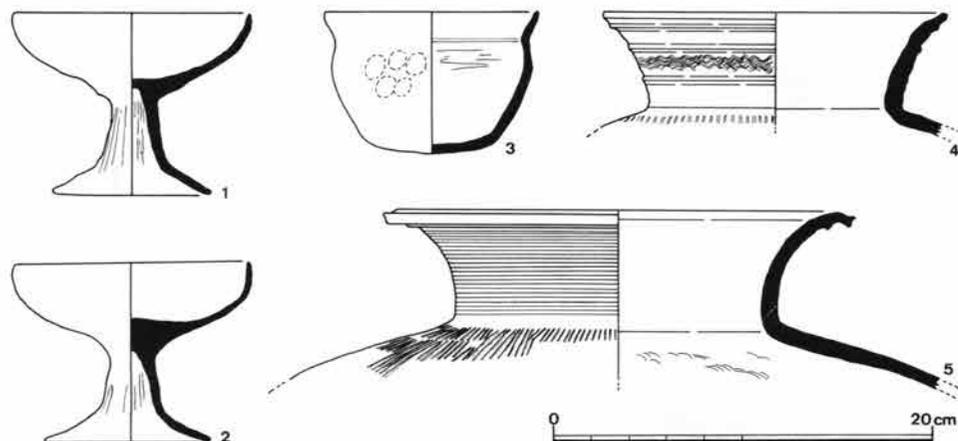
把手付小形鉢(9) 平底の底部に口縁端部まで直線的に開く形状で、側面に穿孔した後、口縁方向に反る把手を挿入している。

滑石製白玉(第120図) 直径4~6mmで、大きさはまばらである。材質については明らかではないが、肉眼観察によると乳白色から、淡緑色までのばらつきがある。遺構内の土を洗い出し中であるが、現在までに130点余り確認している。

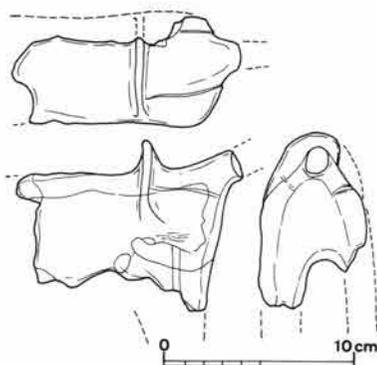
第121図下段は、同S X36822から出土した遺物の一部である。須恵器では、S X36820同様杯身(2)・杯蓋(1)がセットで置かれた状況で出土している。高杯では、脚部に透かしを持つもの(3)と透かしを持たないものがある。このほかに須恵器では、小形の鉢や、甕・壺なども出土している。

土師器では、小形丸底壺(5)や広口壺(4)、鉢(6)などがあり、特徴的な遺物としては、長胴の平底鉢(8)がある。この鉢は2点出土しており、形状では、胴部が円柱状になることや、底部が平底になるなどの特殊性をもち、調整では、4の広口壺などと同じ外面ヘラケズリ調整を施すものの、他の土師器が明るい黄褐色であるのに対し、灰色の強い黄褐色で焼成による色調の違いが認められる。このほかに滑石製の白玉が数十点出土している。

第122図は、S X36844出土遺物の一部である。他の祭祀遺構と離れたところで検出しており、検出した立地も河道の横ではなく、立地も違うことから器種の構成も違う。出土した遺物の大半は土師器の高杯で、須恵器の杯身・杯蓋はほとんど見られない。土師器高杯は、杯部の形状により、緩やかに開くタイプ(1)と内湾するタイプ(2)に大別される。このほかに、土師器では、小形の鉢(3)や甕があり、須恵器では、口縁端部に二段の稜を持つ甕(5)や、一段の波状文を施す甕(4)等がある。



第122図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(7) S X36844

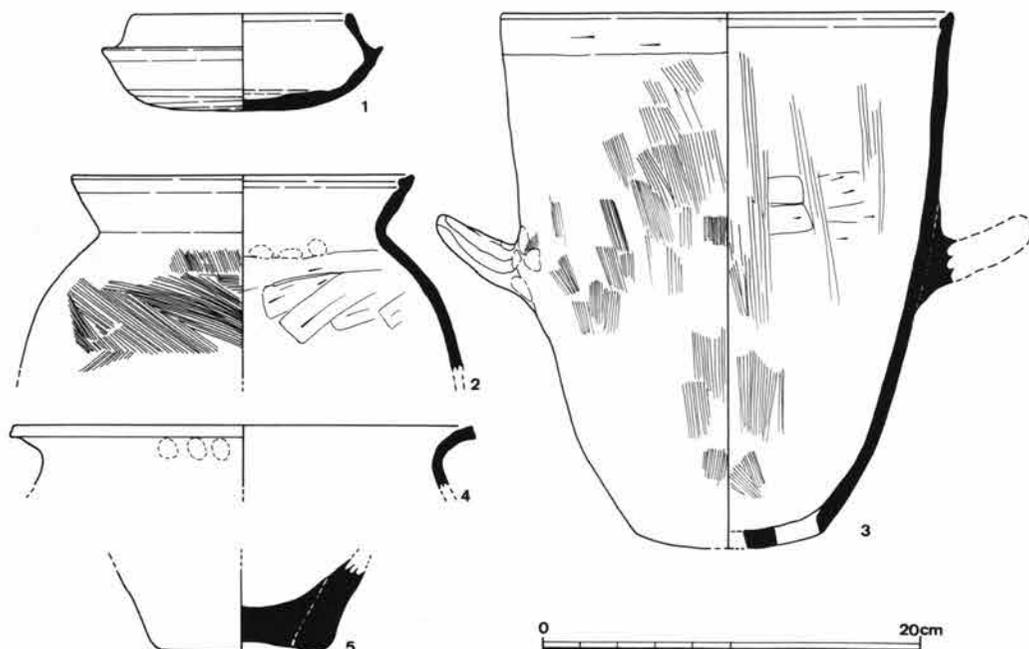


第123図 下植野工区 B地区
出土遺物実測図(8)

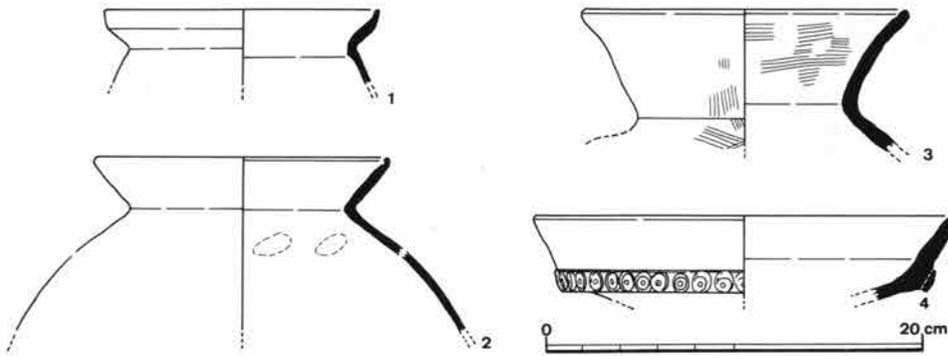
第123図は、B地区包含層出土遺物の中でも特徴的なものである。古墳時代の須恵器・土師器類とともに出土したもので、土製の馬形である。詳細な時期は不明であるが、手づくねにより、鞍部を表現しており、胴部下半から尾までが出土している。一般的な歴史時代の土馬と異なり、胴部を中空に作り上げている。

第124図は、旧河道S R 35707から出土した各層の遺物である。上層(S R 35707a)では、古墳時代の須恵器を主体とした遺物(1)が出土しており、中層(S R 35707b)では、古墳時代の須恵器とともに土師器甕(2)や甌(3)などが出土した。下層(S R 35707c)では、ほとんど出土遺物はなく、わずかに弥生土器甕の口縁部(4)や底部(5)などが出土したのみである。

第125図は、S D 36848の中層から出土した土器の一群である。1は、あまり肩の張らない胴部に受け口状の二重口縁を持つ甕である。2は、口縁端部を折り返し気味につまみ上げる甕で、調整等は不明である。3は、広口壺で、内外面ともハケ調整を施す。4は、加飾の二重口縁壺で、口縁下段には円形浮文を飾り、その上に竹管による文様を施している。



第124図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(9) S R 35707



第125図 下植野工区 B地区 出土遺物実測図(10) S D36848

ハ、下層遺構(第114図、図版第75-(2)) 溝S D36848以外の遺構は、竪穴式住居跡を検出したベースの黒褐色粘質土を取り除いた段階の黄褐色粘質土上面で検出した。いずれの遺構もほとんど遺物が出土しておらず、所属する年代の決め手に欠けるものばかりである。

A. 検出遺構

溝S D36848 溝幅が約2.5~2.6m・深さ1.4~1.6mを測る。溝の断面形は逆台形で、一部「V」字に近い形を呈しており、約15mを検出した。溝は上下2層の砂礫によって埋まっており、中間には比較的安定した粘質土の堆積が認められる。この粘土層中からは、加飾の庄内式の壺などがわずかに出土した。この溝は形態から人工的に開削されたもので、集落を囲むために掘られたものと考えられる。

溝S D36849 幅約1.4m・深さ0.5~1.0mを測る。溝の断面形は、なだらかな「U」字形を呈している。溝内からの出土遺物はなく、時期を確定することはできない。また、埋土の状況から、溝S D36848とは別の時期のものと考えられる。

掘立柱建物跡S B36853 2間×2間の総柱の倉庫棟である。直径0.3~0.5m、検出した深さ0.3mの柱掘形をもち、東西の柱間が1.6~1.7m、南北の柱間が約2.0mを測る東西、南北の柱間に寸法の違いを見せる。

掘立柱建物跡S B36854 桁行3間×梁間2間の南北棟である。径約0.3~0.4mの楕円形の掘形をもち、建物跡の中央には、径0.3m程度の小形のピット1基をもつ。柱間は、桁行1.5~1.6m、梁間約2.1mを測る。

掘立柱建物跡S B36855 桁行2間×梁間2間の東西棟である。直径0.3~0.4m、検出した深さ0.3mを測る。東西の柱間が2.0~2.3m、南北の柱間が1.7~1.8mとなり、S B36855と同様東西の柱間が長く南北の柱間が短いという特徴を持つ。

これらの建物跡群は、溝S D36848や旧河道S R35707とほぼ同じ主軸(N20~22° E)に

沿って立っている。

掘立柱建物跡 S B36856 桁行3間×梁間2間の南北棟である。一辺0.6m、検出した深さ0.2mの柱掘形をもち、東西の柱間が2.1~2.3m、南北の柱間が1.7~1.9mを測る。

掘立柱建物跡 S B36857 2間×2間の総柱の倉庫棟である。一辺0.6m、検出した深さ0.3mの柱掘形をもち、東西の柱間が1.5~1.7m、南北の柱間が1.3~1.7mを測る。

これらの建物跡群はN21~23°Eの主軸に沿って建っている。

(戸原和人・黒坪一樹)

B. 出土遺物(第125図)

柱掘形内より土師器の小片が出土しているものの溝S D36848以外の遺構からは、時期の決め手になる遺物は出土していない。

(黒坪一樹)

②C-1地区(図版第81-(1))

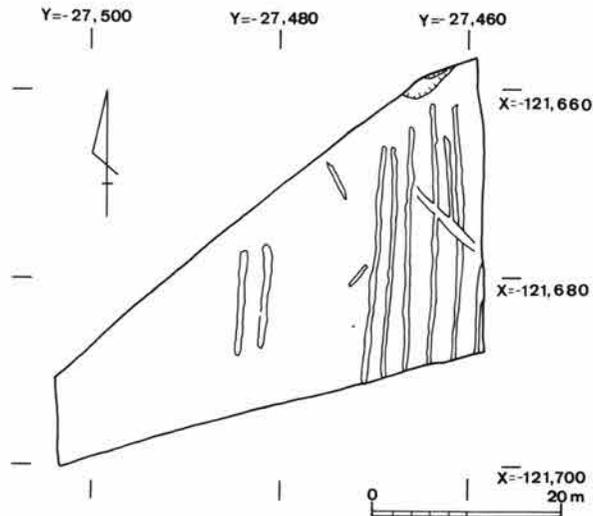
平成2年度に調査を実施したC-1トレンチを東西及び南側に拡幅した調査地区である。機械掘削後、本格的な調査に着手したのが平成4年2月10日であり、そのため、平成3年度の調査は、遺構検出作業と一部の遺構掘削をもって中断した。主な検出遺構は、井戸跡・溝(近世)、竪穴式住居跡(古墳時代)、掘立柱建物跡・土坑・溝(時期不明)である。調査の概要は平成4年度調査分と合わせ、来年度に報告する。

(鍋田 勇)

③C-3地区(第126図、図版第81-(2))

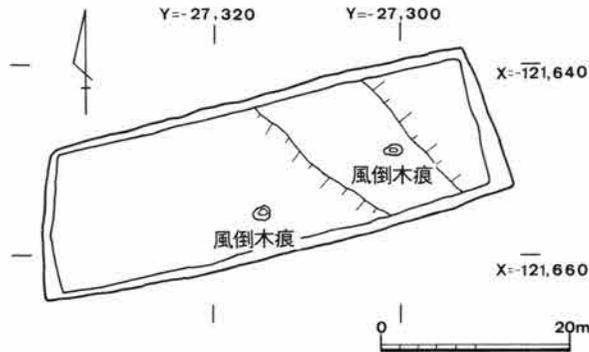
昨年度の試掘調査に引き続き上面での調査を行った。中世の水田耕作に伴う溝や、久我畷に並行すると考えられる溝の一部、土坑等を検出した。

昨年度の試掘調査で確認した久我畷東側溝と考えられた落ち込みは、西に延長されることなく途切れている。一方、水田耕作に伴う溝々は、現在



第126図 下植野工区 C-3地区 遺構平面図

の久我畷から南に約4mでい
ずれも途切れ、あるいはこの
ラインが旧久我畷の施工ライ
ンを示すかもしれない。すな
わち、中世段階の耕作に伴う
溝々の北側に削平された久我
畷東側溝があり、さらにその
北側に路面の盛り土があった
が、後世の水田拡張で削平さ
れたと考えることができる。



第127図 下植野工区 D地区遺構平面図

(戸原和人)

④D地区(第127図、図版第82-(1))

弥生時代～中世の遺物が出土したものの、全体に河川敷のようなところに当たり、明らかな遺構は確認できなかった。

前年度の試掘調査に引き続き、下層の遺構検出を行った。その結果、地表下1.5mで厚く堆積する砂礫層からなる流路と風倒木痕2個を検出した。

流路は、北西から南東方向に流れ、河床は、砂礫によって激しく削られ起伏に富む。西側の流路は、上位では、泥混じりの砂礫が0.2m堆積し、下位ではシルト、砂、礫の互層をなし、厚さ0.3～0.7mを測る。両側の流路は、時期差が若干あるものの同一の流路であり、古墳時代の土師器の破片が出土した。

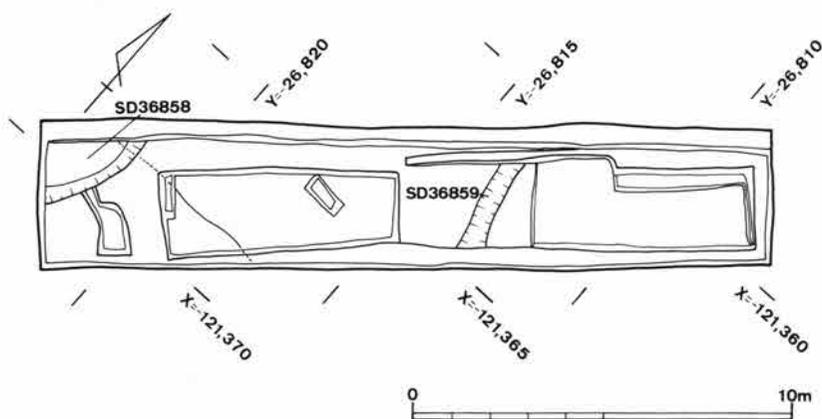
風倒木痕は、不定形な楕円形で長軸1.2m・短軸0.8m・深さ0.5mを測る。断面「V」字状で、腐植した根の痕跡は、暗褐色粘質土に置き換わり、5～6個の小円形を確認した。時期は遺物はないが、砂礫の上層であるので古墳時代以降のものである。

(竹井治雄)

⑤E-2地区(第128図、図版第82-(2))

長岡京跡の中央線とも言える朱雀大路の路面や両側溝が推定される地区である。地表下約8m(標高5.5m)まで調査を行ったが、朱雀大路に関する明確な遺構は確認できなかった。地表下約8mでは、調査地西よりで古墳時代と考えられる沼状の落ち込みSD36858を確認した。また、調査地の中央で検出した幅0.5m・深さ5cmの南北溝SD36859は、朱雀大路東側溝の推定ライン付近で検出しているが、出土遺物もなく、その時期や性格を決めるまでにはいたっていない。

(戸原和人)



第128図 下植野工区 E-2地区 遺構平面図

3. まとめ

①B地区包含層で出土した遺物のなかに長岡京期の時期に比定できるものが若干認められるものの、E-2地区での朱雀大路東側溝を想定した調査をも含め、いずれの地区でも長岡京に関する遺構は確認できなかった。昨年度の調査結果や大山崎工区での調査も含め、九条域での長岡京条坊の施工については、否定的な結果となった。

②平安時代の石敷の道路状遺構と建物跡3棟や井戸跡などを検出したことにより、西国街道沿いの大山崎工区同様、この工区にも平安期の宅地の広がりがあることが明らかとなった。昨年度の調査で出土した石帯や緑釉陶器などから、この集落は一般庶民のそれではなく、官人層の屋敷地と考えるのが妥当である。

③平安京への官道である山陽道の調査は、まだ緒についたばかりであるが、今回の調査では、水田内の溝々の痕跡により、その検討資料を得たといえる。また、この山陽道の西域にひろがる平安期の遺構群との関連については今後の検討課題である。

④旧河道S R 35707の西側には、古墳時代後期の祭祀遺構S X 36820～22が検出され、水辺に近いところで、祭祀を行った状況が明らかとなった。これらの祭祀遺構には特徴がある。1.最初に穴を穿ち一度祭祀を行った後埋め、その後同じ場所で二三次これを繰り返すものと、2.最初から掘形などは設けず、生活面の上で直接数度の祭祀を行うものである。

⑤下層で検出した庄内期の溝や掘立柱建物跡群は、人工の堀による集落の区画を想定することができるが、建物跡は群により主軸の傾きが異なり、今後の検討が必要である。

(戸原和人・黒坪一樹)

(3) 長岡京跡右京第349・367次 大山崎工区
(7ANSDD-4・5、SIR-2地区)

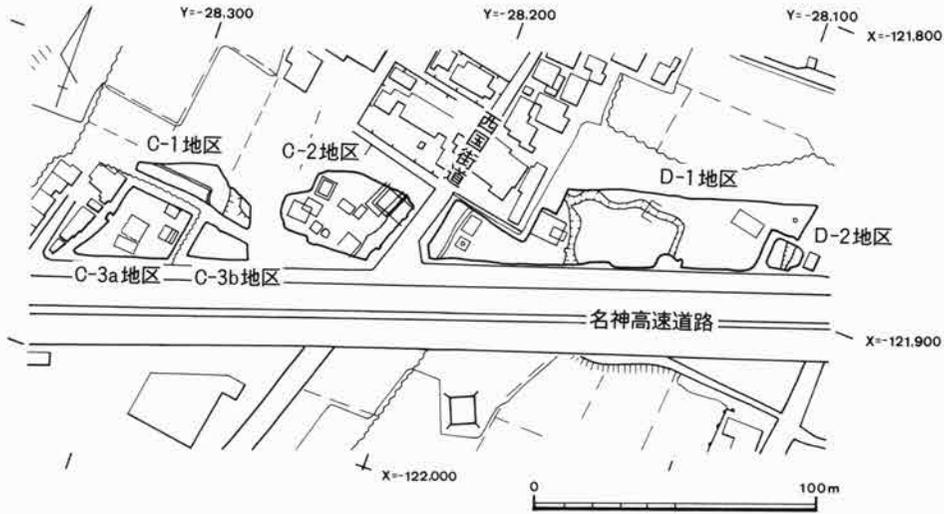
1. はじめに

名神大山崎工区の発掘調査は1989年度から実施しており、同年度には17か所の試掘調査を行い、遺構・遺物の広がりを調査した。その結果、大山崎工区のほぼ全域にわたって遺構・遺物が包蔵されていることが判明した。^(注6)大山崎工区は小泉川から天王山まで、約600mの路線長があるため、便宜上、次のように地区の表示を行うこととした。西から東にA～Eの5地区に分け、A地区は天王山トンネルから阪急電鉄の間の山腹部、B地区は阪急電鉄とJR西日本鉄道の間の丘陵裾部、C地区はJR西日本鉄道以東で府道椋原-高槻線(通称西国街道)以西、D・E地区は西国街道から小泉川の間とした。D地区とE地区の間は、1989年度試掘3トレンチで沼状の地形となって落ち込むことが判明しており、この沼状の落ち込みの西側をD地区、東側をE地区とした(第129図)。

大山崎工区の本格的な発掘調査は1990年度から実施しており、同年度には4地区5トレンチの発掘調査を実施し、D地区で9世紀中頃の西国街道路面、同東側溝、掘立柱建物跡、弥生時代後期の竪穴式住居跡など、C-1地区で中世の流路跡などを確認した。一方、A・B地区では後世の削平のため、顕著な遺構・遺物は認められなかった。1991年度には3地区5トレンチの調査を実施した。C地区では昨年度に引き続いてC-2地区と新たにC-3地区の調査を行った。C-2地区は、西国街道に西に接した地区である。C-3地区は、地区内中央に水路が南北に走り、そのため、この東側と西側で調査トレンチを分け、a・bの枝番号をトレンチ名に付した。D地区では昨年度調査のD-1地区の南東部分をD-2



第129図 大山崎工区 調査地位位置図



第130図 大山崎工区 調査トレンチ配置図

地区として調査を行った(第130図)。また、E地区の調査を今年度から着手したが、この調査トレンチは1992年度に継続して調査を行う予定である。

(岩松 保)

2. 調査の概要

①C-2地区

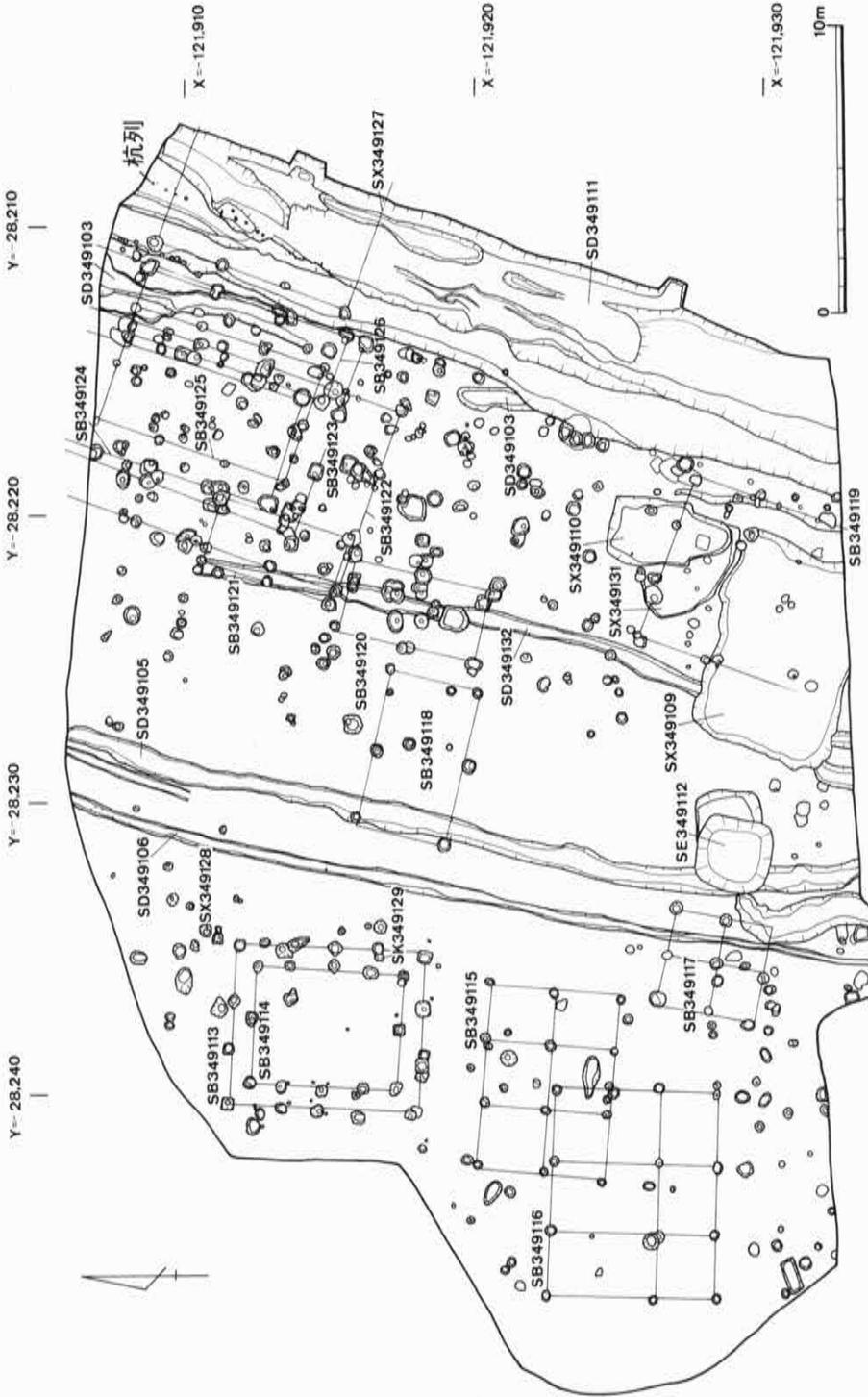
C-2地区は、西国街道の西側に隣接した調査地である。1990年度に調査に着手し、昨年度の概要報告で一部報告した。1991年度に引き続いて調査を行い、中世の掘立柱建物跡群や素掘り溝群、9世紀から10世紀の掘立柱建物跡群・井戸跡・西国街道路面及び西側溝など多くの遺構を検出した。以下、主要な遺構・遺物について概説する。

A. 検出遺構(第131図、図版第83～85)

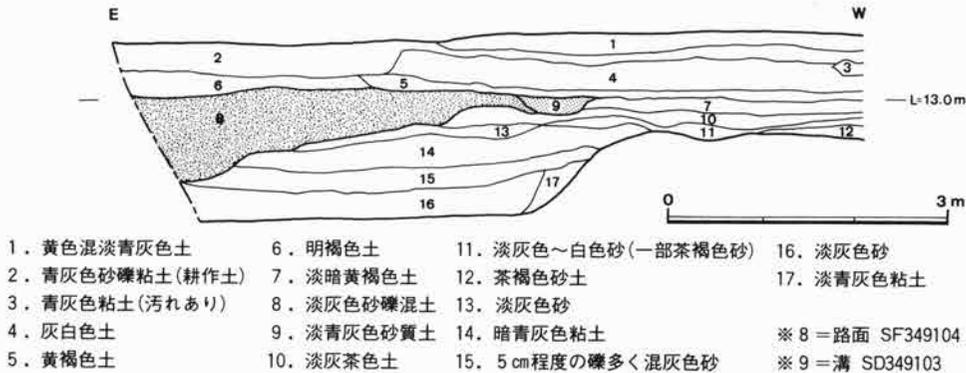
溝 S D 349102 西国街道の西側側溝と推定される南北溝である。南半部は S X 349101 によって削平されており、検出長は9.3mである。幅約80cm・深さ10cm程度の溝である。S D 349103に切り勝っている^(注8)。

溝 S D 349103 西国街道に平行して造られたやや蛇行する南北方向の溝で、S F 349104に対応する側溝と推定される。幅60cm・検出高30cmで、埋土は淡青灰色砂質土である。S D 349102とともに、S D 349111を埋めた土層の上から切り込まれている。

溝 S D 349111(図版第84) 現西国街道に平行して掘削されていることから、旧西国街道西側溝と推定される溝である。溝の幅は4.8m以上、深さ90cmで、西肩は段をつくって



第131図 大山崎工区 C-2地区 遺構平面図



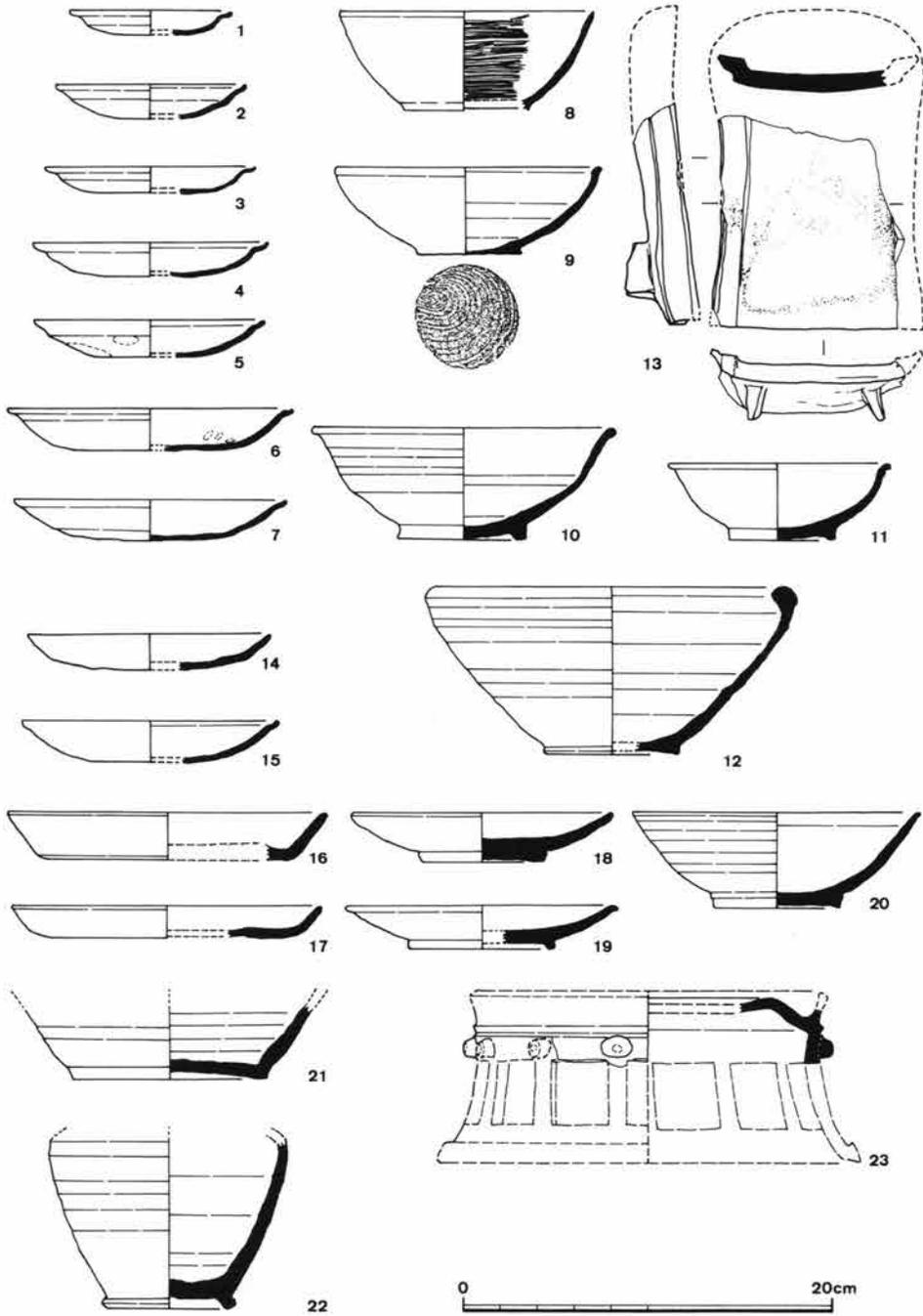
第132図 大山崎工区 C-2地区 西国街道西側溝 S D349111土層断面図

掘削されており、東側の肩は調査地外にある。東側の肩部が西側と同じ二段掘りの構造を有するとすると、溝の復原幅は5.5～7.5mになる。このS D349111に対応する路面は、現在の西国街道の真下に位置していると考えられる。北半部には、テラスの裾部に土止めの杭が打ち込まれている。上半の埋土はS F349104を造成した灰色礫混じり青灰色粘土である(第132図)。埋土中から多量の須恵器・土師器・緑釉陶器が出土した。注目されるものとして、円面硯や須恵器の転用硯・墨書土器などとともに、神功開寶・富寿神寶・承和昌寶及び蛇尾裏金具が出土している。遺物の年代観より、9世紀後半から10世紀前半にかけて埋没したと推定される。

路面 S F 349104 S D349111直上に造成された路面で、幅5.5mにわたって検出したが、東辺は調査地外にあり、確認できていない。S D349111の堆積土の上に最大1.1mの厚さで灰色礫(拳大以下)混じり青灰色粘土を固く敷き詰めている。検出した路面上では轍や足跡は認められなかった。

溝 S D349105・106 田畑の区画溝・水路と判断されるもので、現在の区画溝と一致している。S D349106の西側には土止め用と推定される杭が打たれていた。中世の遺物が出土する。

井戸跡 S E 349112(図版第85) 東西2.6m×南北2.55m・深さ2.3mの掘形内に、横板井籠組(内法1.18m)を有する井戸跡である。底部近くから緑釉陶器2点出土しており、廃棄時の投げ込みと考えられる。これらの土器の年代観より、廃棄は10世紀代中頃であろう。土器の他に貨銭(銭名不明)・櫛・曲物底板が出土した。井戸側は一辺に8段分の横板を確認したが、上2段は井籠組、下段の6枚は片側にのみ加工を行っている。側板の右端部に挟りを入れ、挟り部分に右側にくる板材を「はめ込む」ものである。底面には礫石が敷かれていた。



第133図 大山崎工区 C-2地区 出土遺物実測図(1) 土器

土坑 S X 349109 S E 349112東側で検出した5m×7.5m・検出高約30cmの隅丸方形を呈した土坑である。埋土は暗茶褐色土で、9～10世紀代の土器を含む。S D 349132等の遺構に切り勝っている。石組等は全く認められなかった。

掘立柱建物跡 S B 349113～116 これらの建物跡の柱穴内からは瓦器片が出土することから、中世の段階のものと判断される。真北から4°30′～5°20′東に振れている。

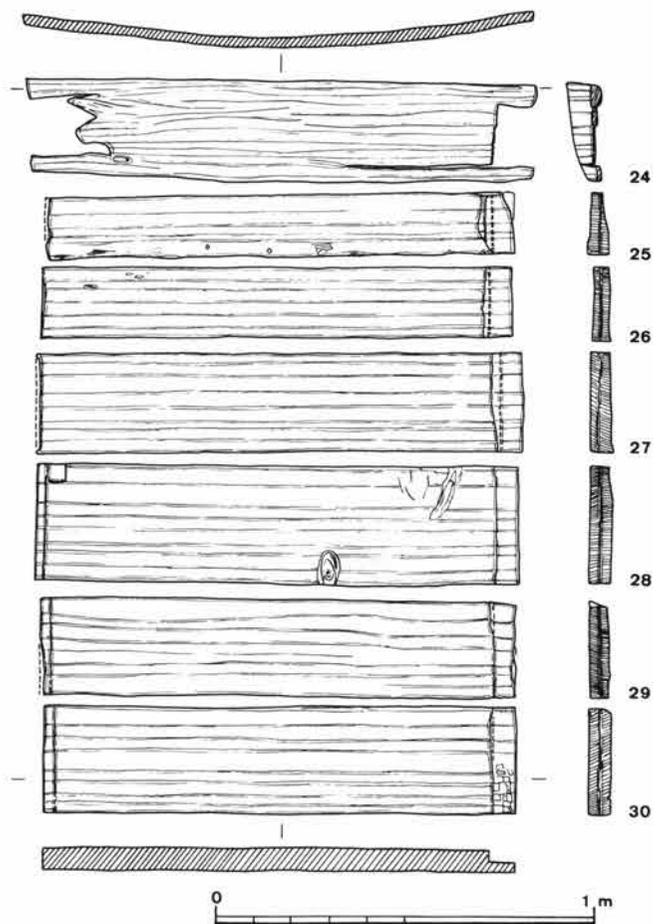
掘立柱建物跡 S B 349117～126 これらの建物跡の柱穴内からは、9世紀後半～10世紀代の土器片が出土し、S D 349111やS F 349104と同時期と判断される。建物跡の方位は西国街道とはほぼ平行しており、真北から10°10′～20°東に振れている。

橋脚跡 S X 349127 S D 349111の北側で検出した柱穴列で、柱間は2.4m、3間分を確認した。他の建物跡とは異なって、S D 349111の掘形内のテラス部で検出した。この柱穴列の東側で、杭列が見つかり、この部分だけS D 349111の掘形が垂直的であった。路面と建物を結ぶ橋脚跡であろう。

B. 出土遺物(第133・134図、図版第88)

この調査地では、古墳時代前期の甕、平安前期の緑釉陶器・土師器・須恵器や中世の瓦器などが出土している。これらのうち、今回はS E 349112とS D 349111から出土した遺物を中心に報告する。

第133図1～13は、S E 349112内から出土した土器である。1～7は土師器皿で、8が黒色土器碗、9が須恵器碗、10・11が緑釉陶器碗である。10・11は、井戸側内



第134図 大山崎工区 C-2地区 出土遺物実測図(2)
S E 349112井戸側

の底面近くで出土した。祭祀に関わるものであろう。12・13は須恵器で、12が鉢、13が風字硯である。14～23はS D349111から出土した土器の実測図である。14～17が土師器皿で、18～20が緑釉陶器で、18・19が皿、20が椀である。21～23は須恵器で、23は円面硯である。第134図24～30は、S E349112の東側の井戸側を構成していた板材である。最下段から七段分が完存しており、24から30へと上部→下部へと配列してある。現地で確認できた最上段の八段目は、やせて原形を留めていなかった。24のみいわゆる井籠組で、中央部分が井戸内に廃棄された岩によって内側に湾曲している。25～30は、向かって右側にのみ「抉り」を入れており、ここに南側の板材を組み合わせる構造である。また、28の横板には、左上部に5cm×6cmの補修材が鉄釘によって打ちつけられており、他辺の板材にも数か所の補修が認められ、これらの板材が転用材であることがうかがわれる。25は短辺16cm・長辺127.5cm・厚さ6cm、28は短辺31cm・長辺130cm・厚さ6.5cmである。

C. 小 結

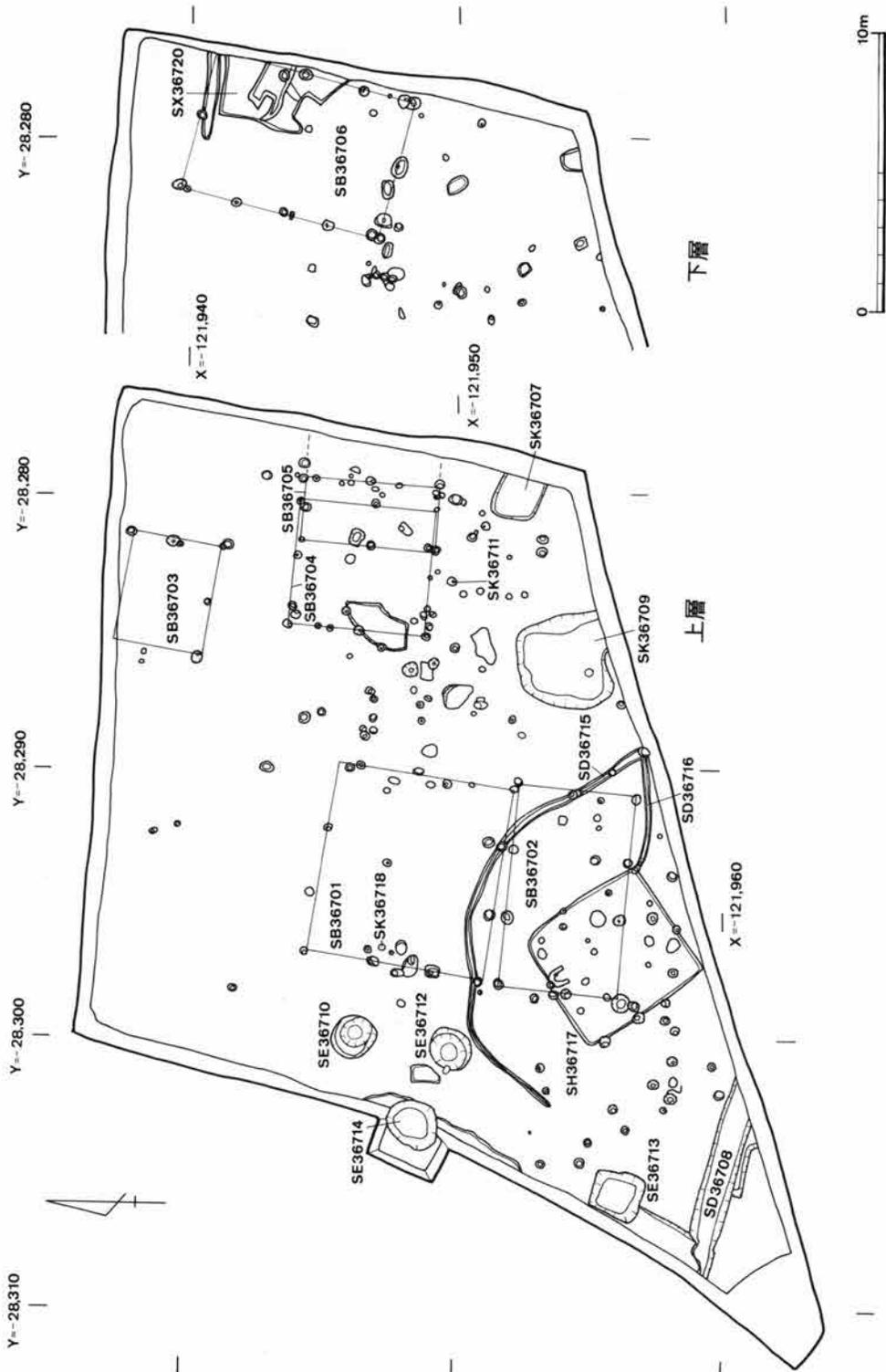
S D349102・103・111は、西国街道西側溝と推定される溝である。S D349102・103は、S D349111内に入り込む土層の上に掘削されており、層位的にS D349111が先行することがわかった。さらに、S D349103→S D349102と新しくなることが遺構の切り合いから確認でき、S D349111→S D349103→S D349102と西国街道の西側溝が東から西に移動しながら造り直されていったことが判明した。昨年度に調査を行ったD-1地区のS F34913は西国街道の東側で検出した路面であるが、この路面や東側溝(S D34914)を切って、平安時代の土坑や中世の井戸跡を検出しており、路面が東から西に移動した状況を示す。

S D349105・106より東側と西側では約60cmの高低差で段をなしているが、これは調査前の田畑の区画に対応する。西側の平坦面では中世の掘立柱建物跡・柱穴・土坑などが分布しており、平安前期にさかのぼる遺構は皆無である。この平坦面で布留期の埋納甕(S X349128)を検出しているのが、後世の削平を受けていたとしても10cm内外しか考えられず、そのため、平安前期の遺構が検出されないのは削平のためではなく、もともとここまで建物が及んでいなかったためと言える。

(岩松 保)

②C-3 a地区

C-3地区は、C-1地区の南側に当たり、a・b地区に分割して調査を行った。C-3 aトレンチでは、古墳時代後期の竪穴式住居跡1基、竪穴式住居跡に伴う排水溝2条、平安時代の井戸跡1基、建物跡1棟、中世の建物跡5棟・井戸跡3基などを検出した。



第135図 大山崎工区 C-3a地区 遺構平面図

A. 検出遺構(第135図、図版第86・87)

溝 S D36708 東西方向の直線的な溝で、埋土は淡青灰色砂混じり粘土である。北側肩部に杭列の残欠が検出された。幅1.2m・検出高25～30cmで、底面は丸底である。近世の染め付け片が出土した。

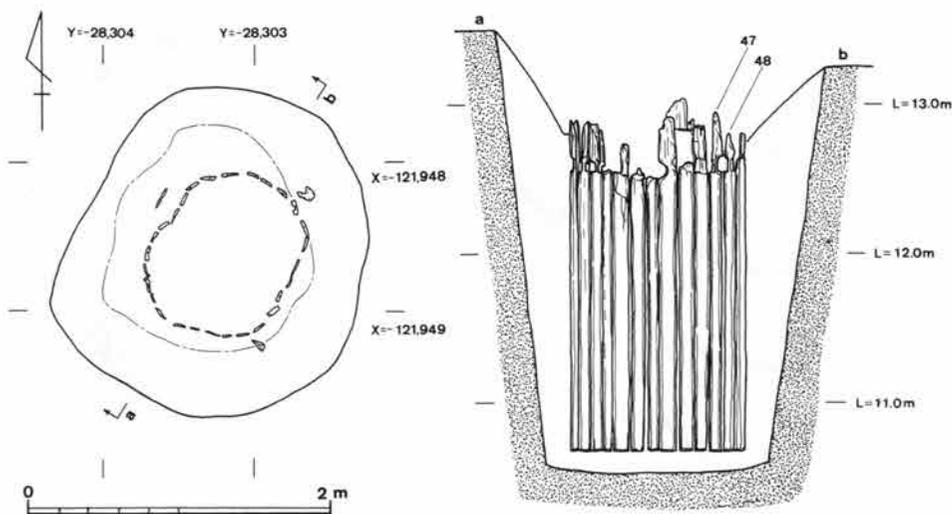
掘立柱建物跡 S B36701・03 真北より約9°東に偏する建物跡群である。S B36701の南西隅の柱穴内には第137図43の土師器皿が埋納されていた。

掘立柱建物跡 S B36702・04・05 真北より約5°40′東に偏する建物跡群である。各柱穴内からは土師器・瓦器小片が出土している。

井戸跡 S E36710・12・13 すべて素掘りの井戸跡で、平面形が隅丸方形の S E36713と円形の S E36710・12とがある。これらの井戸跡からは瓦器や土師器、中国製陶磁器が出土している。S E36713は一辺1.8m・深さ60cmで、S E36710・12は径1.6m・検出高60～90cmである。

掘立柱建物跡 S B36706 調査地東辺部で検出した東西2間×南北4間の掘立柱建物跡である。S B36704・05を検出した層より下層で検出しており、時期的にさかのぼることはまちがいない。この建物跡の東北隅の柱跡は、S X36720の底面で検出した。この S X36720内には瓦器片とともに、平安時代の遺物が出土しているが、S B36706の柱穴内からは中世の遺物を含まず、平安時代の遺物のみが出土している。そして、建物跡の方位が真北より約15°東に偏し、中世の S B36701～05とは方位が異なっており、C-2地区の平安時代建物跡と方位が一致していることなどから、平安時代の建物跡と判断する。

井戸跡 S E36714(第136図、図版第86-(2)) 縦板組ほぞ留めの井戸跡であり、内法の

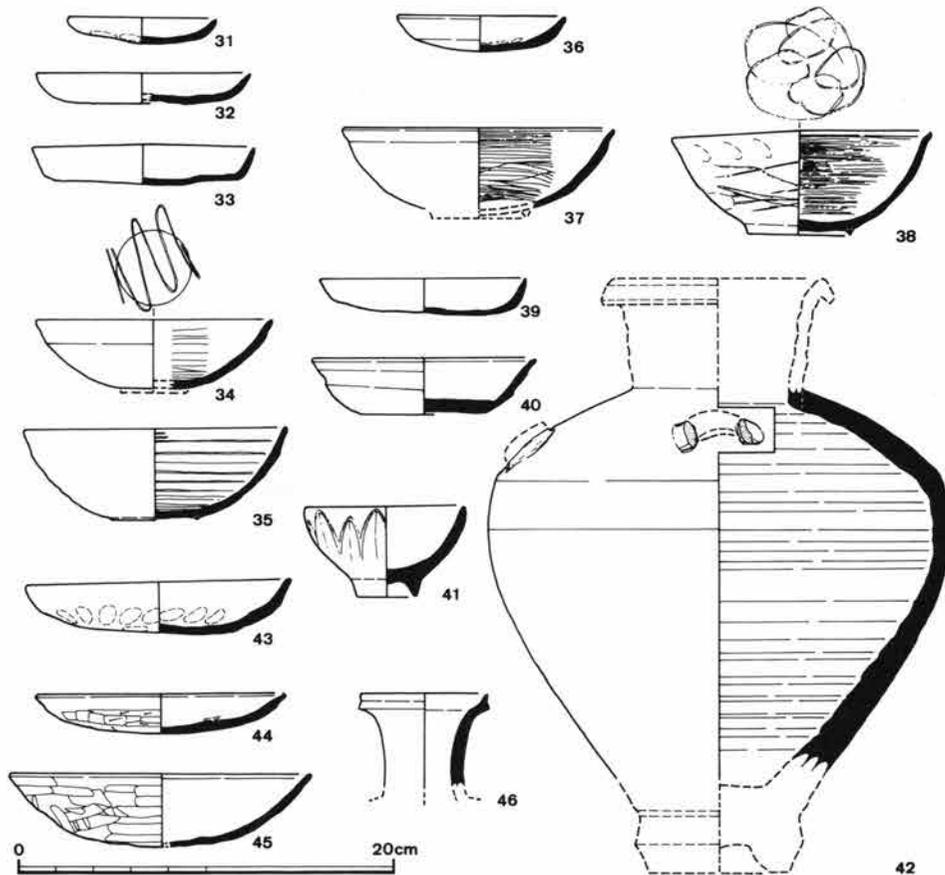


第136図 大山崎工区 C-3a地区 井戸跡 S E36714実測図

長径1.1m×短径0.9mの平面楕円形の井戸側をもつ。掘形は1.6m×2mの隅丸方形を呈している。井戸側は最も残りのよいもので2.26mの縦板の上部と下部にはほぞ穴を設け、ほぞ留めによって井戸側を構築している。この部材を28枚使用している。井戸側内からは9世紀後半から10世紀代の土器が出土する。

竪穴式住居跡 S H36717(図版第87) 4.1m×5.1mの方形の竪穴式住居跡である。検出高は10～15cmを測る。主柱穴は3本検出したが、南東の主柱穴は上層から掘り込まれた土坑のため検出できていない。主柱穴の径は約20cmと比較的小さいが、深さは25～40cmを測る。北辺中央やや東側にカマドを造り付けている。カマドには新旧があり、造り替えが認められた。須恵器杯蓋片がカマド焼土近辺で出土し、7世紀初頭の年代観が与えられる。

溝 S D36716 竪穴式住居跡 S H36717の南東隅から、幅約30cmの溝を東方向に約4.5mにわたって検出した。深さ約10cmで、南に下って掘削されており、竪穴式住居内の水を外部に排水する溝と判断される。



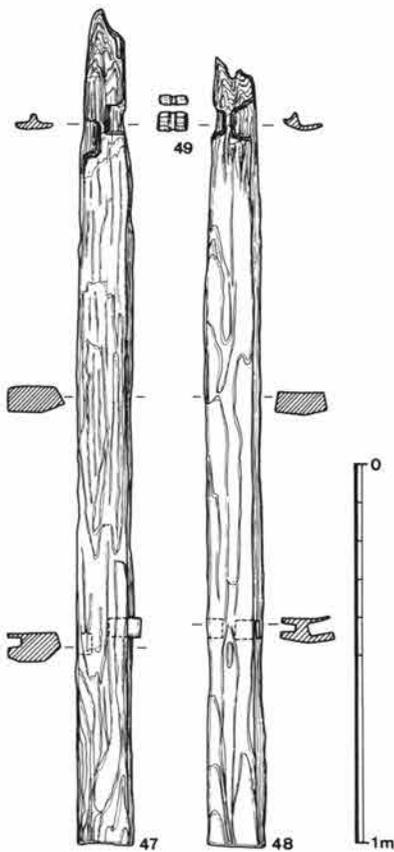
第137図 大山崎工区C-3a地区 出土遺物実測図(1) 土器

溝 S D36715 堅穴式住居跡 S H36717の外側に約3.5mの空地を空けて、堅穴式住居跡の周囲をめぐる径約15mの溝で、約15mにわたって検出した。堅穴式住居内に周囲の雨水が流れ込まないように、S D36715を掘削して排水を行っていたものと推定される。断面は「V」字に近く、鋭角に掘り込まれる。幅20～30cm、検出高は10～20cmを測る。埋土は茶褐色土である。

B. 出土遺物(第137・138図、図版第88)

この調査区では、古墳時代後期、平安時代前期、中世、近世の遺物が出土している。第137・138図は主要な遺構から出土した遺物の実測図である。

第137図31～35はS E36713内より出土しており、31～33は土師器皿、34・35は瓦器碗である。36～38はS E36710内より出土した土器で、36は土師器皿、37・38は瓦器碗である。39～42はS E36712より出土した遺物で、40は白磁皿、41は青磁碗で、42は白磁四耳壺の



第138図 大山崎工区 C-3a地区
出土遺物実測図(2) S E36714井戸側

体部片である。43はS B36701の柱穴より出土した土師器皿である。44～46はS E36714から出土し、44・45は土師器皿、46は須恵器壺の口頸部である。第138図47～49はS E36714の井戸側の縦板材及び「だぼ」の実測図である。47・48の縦板は上部は痩せ細っていて、ほぞ穴も内面が朽ちているが、残りのよい部材は袋状に残存しており、上部にもほぞ穴を設けていたことがわかる。ほぞ穴は板材の左右から穿たれ、そこに「だぼ」をはめ込んで隣り合う縦板を組み合わせている。ほぞ穴の位置は47を見てわかるように、合い対してあけられているのではなく、ややズレているものもあるが、上下のほぞ穴の間は約1.35mで、ほぼ等間隔である。井戸側外面(実測図に表現していない面)が木表にあたり、薄皮がついている。板材は幅10～14.5cm、厚さ7～9cmを測る。47は残存長2.25mで、48は残存長2.13mである。49は、47と48の縦板の上部を連結する「だぼ」である。

C. 小 結

掘立柱建物跡は方位により、S B 36701・03のN9° EとS B 36702・04・05のN5° 40′ Eに二大別でき、それぞれが同時期の建物跡群と推測できる。S B 36706のみ、東辺部の下層遺構として検出でき、平安時代と判断される。S B 36701～05の柱穴のほぼ全部から瓦器片が出土している。これらの建物跡群はS E 36710・12・13と同時期のもので、これらの井戸とともに屋敷地をなしている。

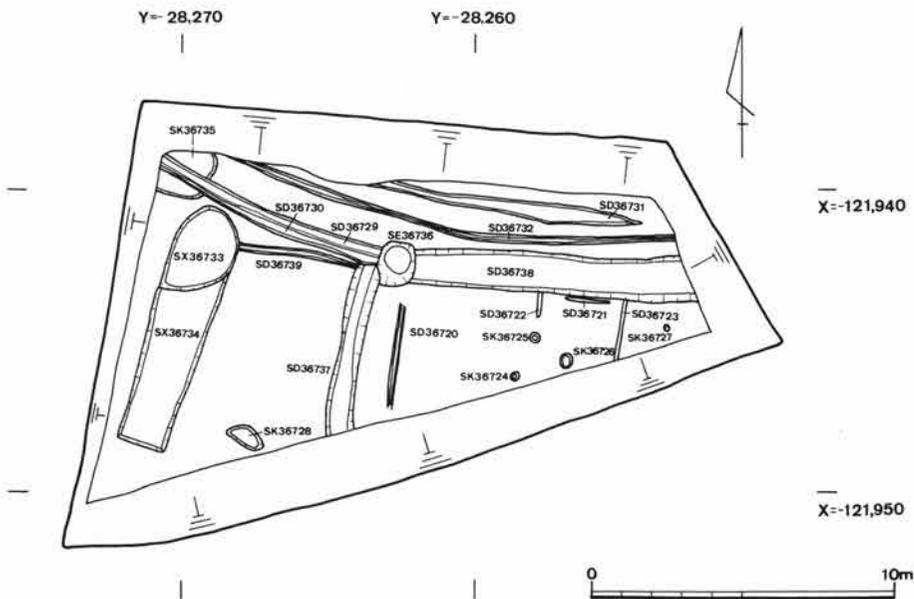
S E 36714と同時期の遺構はS B 36706があげられるが、周辺では、1990年度に調査を行った北側のC-1地区の西端部で平安時代前期の土坑を2基(S K 34909・10)検出しているが、C-3 a地区より約0.4mの比高差を有している。平安時代にも宅地として利用されていたが、中世段階に新たに宅地を設けた際に、緩傾斜地を削平・盛り土して整地を行ったため、平安時代前期の遺構のほとんどが削平されたものと判断される。

中世の遺構は、ほぼ全域で検出できたが、北側中央部から西側においては遺構を検出できなかった。近世以降に新たに地形の改変がなされていないとすれば、この部分は元々遺構が希薄であったと言え、屋敷地内の畑地や園宅地として利用されていたと推測できる。

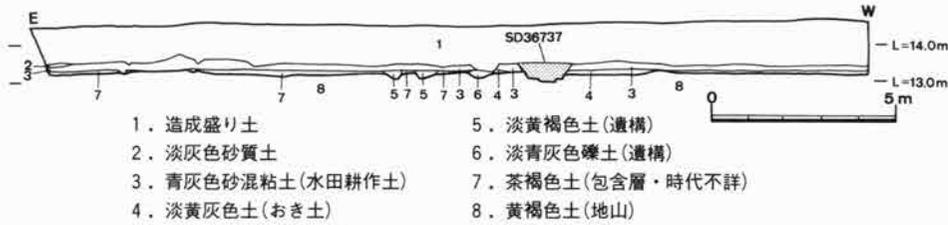
(岩松 保)

③C-3 b トレンチ

地表下約1.2mにまで厚く盛り土がなされていた。全面にわたって削平を受けていたが、



第139図 大山崎工区 C-3b地区 遺構平面図



第140図 大山崎工区 C-3b地区 南壁土層断面図

S D 36737と S D 36738で囲まれた南東部1/4で薄い包含層(時期不明)とその包含層の上より中世素掘り溝・土坑を検出したほかは、大方の遺構は現代の溝・井戸跡等である。

A. 検出遺構(第139図、図版第89-(1))

溝 S D 367320～23 互いに平行・直交する素掘り溝で、瓦器・土師器の小片が出土している。この一角のみ包含層(土師器細片を含むが時期不詳)が残存していた。

土坑 S K 36724～27 遺物の出土はなく、時期不明のピット群である。埋土は S D 36720～23に近似している。

溝 S D 36737 溝内埋土は上半と下半で異なり、上半は瓦等を含む造成の埋土で、下層は黒灰色砂土で、その堆積土から判断して溝内に水流があったようである。この地が宅地に転用される直前のものと判断される。南へ下る傾斜をもち、幅1m・深さ50cmである。

溝 S D 36738 S D 36737とほぼ同一の規模で埋土も近似しており、一連のものとして判断される溝である。幅1.2m・検出高25cmで、溝底は S D 36737より約30cm高い。東へ下る傾斜をもつ。

溝 S D 36729～32・39 内部から須恵器・土師器片が出土するが、埋土は S D 36737・S D 36738の下層分と類似する。

土坑 S X 36733・34 S X 36733は2.3m×3m・検出高10cmで、埋土は暗灰色礫である。内部から遺物の出土はなかった。S X 36734は S X 36733に切り負けている土坑で、2m×6m以上・検出高10cmである。埋土は暗褐色礫で、内部から遺物の出土はなかった。

土坑 S X 36735 S D 36729・30に切り負けている土坑である。検出高は約20cmで、遺物の出土はなかった。

これらの遺構は、遺物の出土がなく、時期の決め手に欠けるが、前述の S D 36720～23・S K 36724～27とは明らかに土色・土質が異なり、中世以後、おそらく近代のものとして推測される。

土坑 S K 36728 内部には釘・ガラスが混じっていた。

井戸跡 S E 36736 コンクリート製の井戸で、扇風機や瓦が廃棄されていた。

B. 出土遺物

出土遺物には9世紀代の須恵器・土師器から現代までのものがあるが、細片のみで実測しうるものはない。

C. 小 結

C-1 トレンチの東端で検出した南北方向の流路(S R 34901)は、C-3 b トレンチでは検出できなかったので、この地点が削平を受けたのは、少なくとも自然流路の埋没時期—中世よりあとの時代と推測される。しかも、南東1/4には中世段階の遺構が確認されたので、S R 34901はこの北側で流路を東へ大きく変えていたものと考えられる。

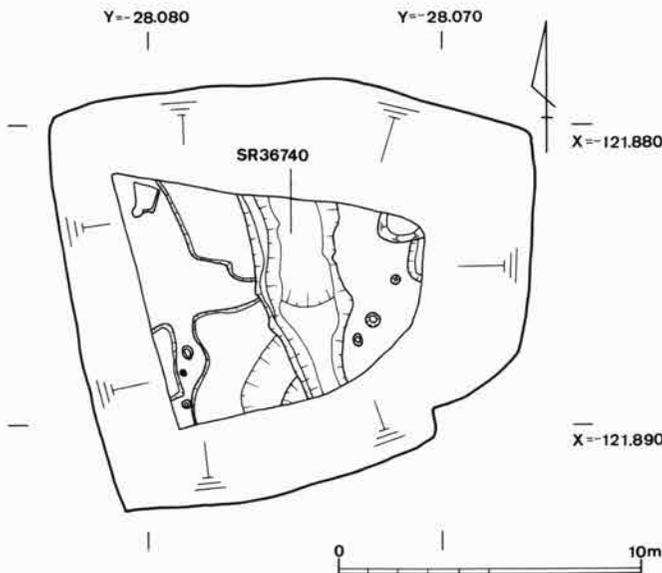
(岩松 保)

④D-2 地区

A. 調査概要(第141・142図、図版第89-(2))

暗灰色砂礫土層までを重機で掘削し、以下手掘りに切り替えて調査を進めた。この暗灰色砂礫土層には弥生時代から平安時代までの遺物が含まれていた。

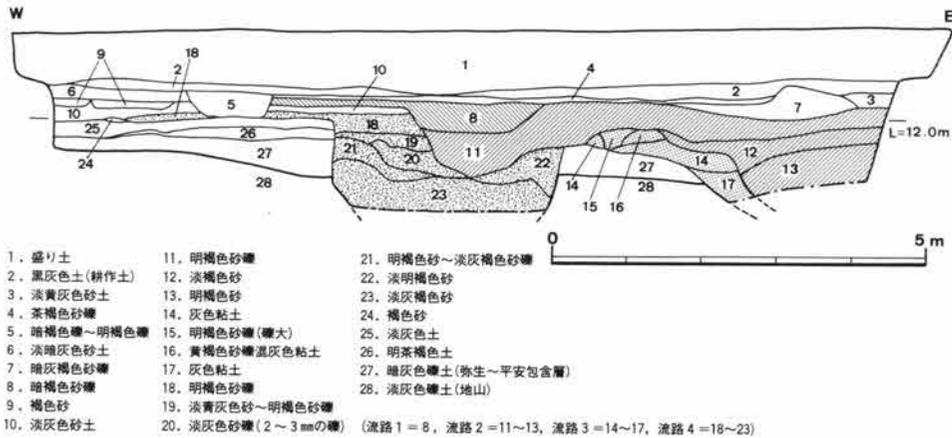
中央部に自然の流路(S R 36740)を検出した。埋土は淡灰色砂で、近世以降の土器を少量ながら含んでいた。土層断面では、耕作土・床土直下からS R 36740が切り込まれ、トレンチ東壁では調査面直上にまで流路内堆積土が覆っていた。近世以降の小泉川の氾濫の



第141図 大山崎工区 D-2地区 遺構平面図

際の部分的な「決れ」がS R 36740として確認できたと判断した。

その他、暗灰色砂礫土層を掘り下げている途中で、杭列を検出したがその時期は不明である。暗灰色砂礫土の下面、淡灰褐色礫土(地山)の上面は西から東に下る地形をなしており、柱穴・土坑はこの地山面で検出した。これらの遺構内から



第142図 大山崎工区 D-2地区 北壁土層断面図

は、平安時代頃の須恵器・土師器及び弥生土器が出土したが、その性格は不明である。

B. 出土遺物

出土した遺物には弥生時代以降の土器があるが、遺構に伴うものはほとんどなく、また実測しうる遺物もほとんど出土していない。

C. 小 結

D-2地区では顕著な遺構は確認できなかった。平安時代の遺物を含む包含層である暗灰色砂礫土層は、洪水による堆積層と判断され、それにより大方の遺構は削平されたようである。D-1地区東辺(D-2地区の北側)では井戸跡S E34958を検出したが、ここでも東に下る地形をなしており、柱穴等は検出されなかったことにD-2地区の状況は対応し、1989年度の試掘3tr.で確認した沼状地形に下っていく緩傾斜地をなしていたようである。

(岩松 保)

⑤ E地区

A. 調査概要(第143図、図版第90)

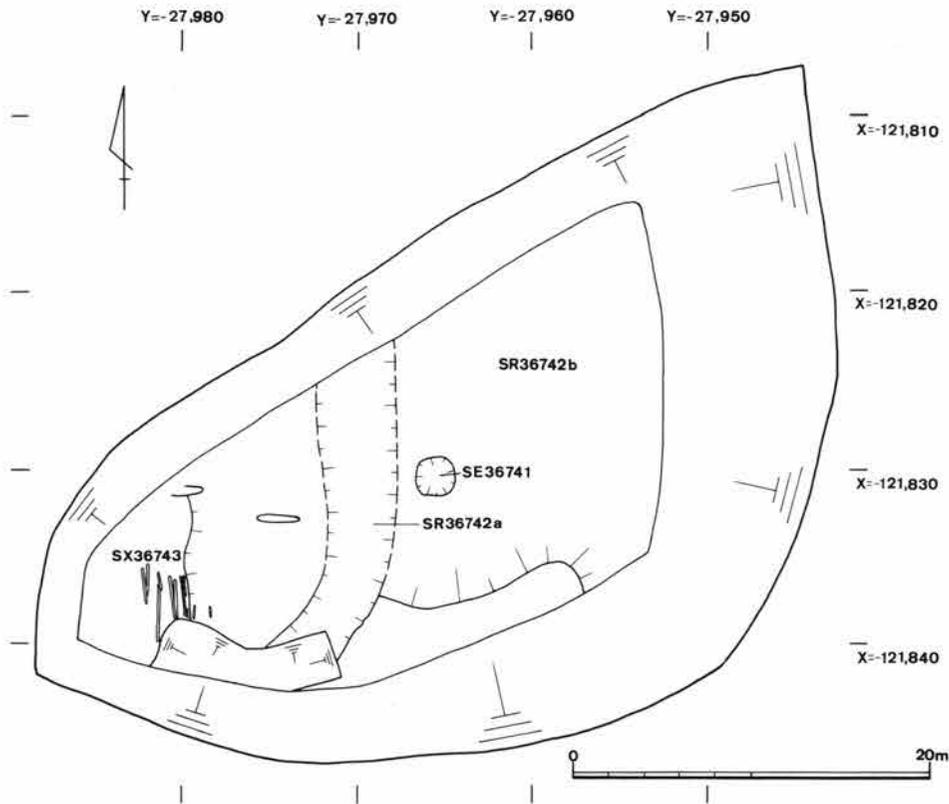
調査は、重機によって地表下約3m程度のL=11.2m近辺で古墳時代後期の須恵器・土師器が出土する包含層まで掘削し、以下手掘り作業に切り替えて調査を進めた。

古墳時代後期の須恵器・土師器を包含する層は、調査面の南と西側の約1/3にわたって広がっており、西側の包含層上で南北方向の轍状遺構S X36743(溝間1.45～1.5m)を検出した。これらはほぼ真北方向を向き、最長の検出長は9mで、検出した深さは3cmで、内

部には砂質土が入り込んでいた。この埋土からの出土遺物は皆無で、時期を決定するには至らなかったが、この遺構が切り込まれている包含層の時期—古墳時代後期より新しく、これを覆っていた土層の時期—平安時代より古い時期のものと言える。この包含層を切って調査面の2/3にわたり、北西から南東方向に流路跡SR36742を検出した。SR36742は上層・下層で堆積土層が異なり、それぞれをa・bとした。上層のSR36742aは時期の判明する遺物の出土はなかった。下層のSR36742bは、その東肩は調査地内では検出されておらず、埋土には平安時代以降の遺物を若干含んでいた。確認できた流路跡の幅は18m以上であり、ある時期の小泉川の流路跡と判断される。この流路跡内埋土上面で井戸跡SE36741を検出した。この井戸跡は隅柱横棧止めで、縦杭を打ち込み、掘形を礫で埋めている。井戸跡内部から漆器碗・棧瓦・陶器(墨書あり)などが出土している。江戸時代末期～明治初期のものとして推定される。

E地区の発掘調査は1992年度に継続して実施する予定であり、調査の終了をまって、来年度以降に、より詳細な報告を行いたい。

(石尾政信)



第143図 大山崎工区 E地区 遺構平面図

3. まとめ

①大山崎工区においては、今年度も長岡京期の遺構は確認できなかった。

②昨年度のD地区の西端においても西国街道の側溝と路面を検出した。その溝(S D 34914)と今回のS D 349111がある時期の西国街道の両側溝とすれば、路面幅は13～13.5m内外に復原できる(南側の大山崎町教育委員会と当センターの調査結果では10～11m程度に復原^(注9)されている)。

③第3次山城国府(797～861)は大山崎工区周辺の百々遺跡に推定されているが、その関連遺構は現在までのところ確認されていない。C・D地区で確認された西国街道や建物跡群の整備は、第4次山城国府がJ R山崎駅付近に移設された時期にほぼ合致する。

④調査地の南約400mには久我畷が平安時代に敷設され、山崎津に向かう幹線道として機能するが、9世紀後半代には西国街道もS D 349111が掘削され、整備される。このS D 349111の規模の大きさは予想をはるかに超えるもので、その後、西国街道西側溝は、S D 349111→S D 349103→S D 349102と小規模なものへと変遷する。西国街道を取りまく歴史的な環境が変化したためであろう。

⑤C-2地区S D 349111より硯転用の須恵器や円面硯・風字硯、蛇尾裏金具が出土し、下級官人層が想定される。

⑥中世の建物跡群が検出され、屋敷地内の建物配置の一端をうかがえる資料が得られた。

⑦時代が下るとともに建物の方向がやや東→真北へと変遷し、周辺に残る地割りを考える資料となる。

(岩松 保)

おわりに

今年度で名神高速道路各幅工事に係わる調査は4年度目となる。昨年度までに長岡京工区での調査を終了し、向日工区では、一部を残しほぼ終了のめどが立っている。大山崎工区では、本格的な調査も2年目となり、全体の約7割の調査を終了した。下植野工区では本年より面的な調査を開始した。

調査面積も平成2年度の9,730㎡から10,220㎡となり、調査全体の約8割以上が大山崎町内となっている。調査が複数の市町にわたるため、従来以上に各関係機関の協力を仰ぐこととなった。

今回の向日工区の調査地は、長岡京の東西の条坊では、二条第一小路から四条第一小路、また南北の条坊では、東二坊大路と東三坊第二小路が想定される地区の調査を行った。調査の結果、長岡京の条坊では、二条第一小路の南北両側溝・二条条間大路の北側溝と、東三坊第二小路両側溝を検出した。

とりわけ、二条条間大路北側溝の検出は、近年検討されている長岡京条坊の施工計画について大きな検討資料を提出することとなった。すなわち、検出した二条条間大路北側溝S D26703と左京第162次調査で検出した二条条間大路南側溝S D16202の溝心間の距離が37.4mを測り、右京第285次調査で検出した二条条間大路南側溝S D28502との溝心間距離でも34.4mを測ることとなり、通常の大路幅をはるかに上回る二条大路級の道路幅を有することが判明したことである。

この調査の結果は、長岡京条坊復原案のうちでも、条を二町北に上げる復原案を補強するものとなっている。今回の調査では、南北両側溝を同時に確認しておらず、早急に断定することはできないが、溝S D26703の南約32m以内には同時期の遺構を検出していない。

下植野工区では、5か所の調査を行った。長岡京復原案によると、左京九条一坊二町の朱雀大路東側溝推定地と、右京九条一坊・二坊に当たり、松田遺跡と下植野南遺跡も含まれる。調査の結果、いずれの地区でも長岡京の遺構を確認することはできなかったが、平安京遷都後に施工された道路と考えられる石敷き遺構や井戸・掘立柱建物跡などを検出した。これらの遺構群の時期については、詳細な検討がなされていない現段階では明らかではないが、おおむね大山崎工区で検出した平安期の遺構群に近い9世紀中頃から10世紀中頃の時期と考えられる。

B地区の中層及び下層・C地区やD地区で検出した古墳時代の旧河道・竪穴式住居跡・祭祀遺構群は、同時代の自然環境や、土地利用の状況を把握できる資料である。調査地の西よりでは、6世紀後半に洪水によって埋没した河道があり、その両岸には、洪水によって埋まった竪穴式住居跡や祭祀遺構が営まれている。河道の東には、5世紀から6世紀ま

での時期に営まれた広範囲な集落が想定され、さらに東の微高地上には昨年度の試掘によって出土した埴輪から古墳の造営が想定される状況である。

大山崎工区では、西国街道の路面と西側溝、掘立柱建物跡や井戸などを検出した。昨年度の調査では、西国街道の東側で、同東側溝 S D 34914 と路面の一部やこれに並行する掘立柱建物跡を検出している。今回の調査で検出した西側溝 S D 349111 は 9 世紀中頃から 10 世紀中頃のものであり、周辺で検出した建物跡はすべて西国街道に平行していた。これらの遺構により、平安時代前期の宅地割りと西国街道の敷設時期や、その構造の一端が明らかになった。

しかし、第 3 次山城国府については、その存在を示す資料は現在までに確認されていない。この地区周辺では、第 4 次山城国府が J R 山崎駅付近に移設されたのちに、西国街道が整備され、これに沿って建物群が建てられている状況である。長岡京期の遺構も検出されておらず、この時期の周辺での土地利用については否定的な結果となっている。

(戸原和人)

注 1 調査参加者 現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

阿部真生・赤池学博・赤尾 健・赤木 香・綾部弥奈子・岩佐聖子・江口正孝・小倉紀子・大倉英士・小笠原健二・小島真木子・尾関真二・柿原 実・北岡里絵・久保博昭・小島孝修・小牧 勲・小村美香・迫田友子・迫田伸子・澤田昌子・島田加奈・島田豊章・首藤有里・進木和美・高尾恵子・寺本知佐子・飛田浩一・鳥井田かおり・中川千秋・中村祐子・西田良平・野田雅美・林 美希・針尾有章子・廣末貴子・広瀬時習・前田暁宏・前田起世江・松井真美・松本とも子・丸尾 晋(故人)・溝口博士・宮本純二・森 暢子・森 喜子・山門芳江・山本恵子・山本憲作・梁井 裕・吉田絵里・芳谷一郎・四塚笑子・若松幹郎・青山恵子・小野山信子・鈴木まり子・高山英美・竹内千賀子・田村重野・内藤チエ・西村敏子・久平喜美子・若林照子。

注 2 渡辺 博・清水みき「長岡京跡左京第162次(7ANEKD地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告』第27集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1989

注 3 小山雅人・石尾政信ほか「長岡京跡右京第285・310・335次調査(7ANITT・GSN地区)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注 4 長谷川浩一・國下多美樹ほか「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告』第10集 向日市教育委員会) 1983

注 5 百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一「長岡京左京四三条三坊(左京第177次調査)」(『昭和62年度京都府埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1991

注 6 戸原和人・三好博喜ほか「長岡京跡左京第216・右京第343次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注 7 戸原和人・岩松 保ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」

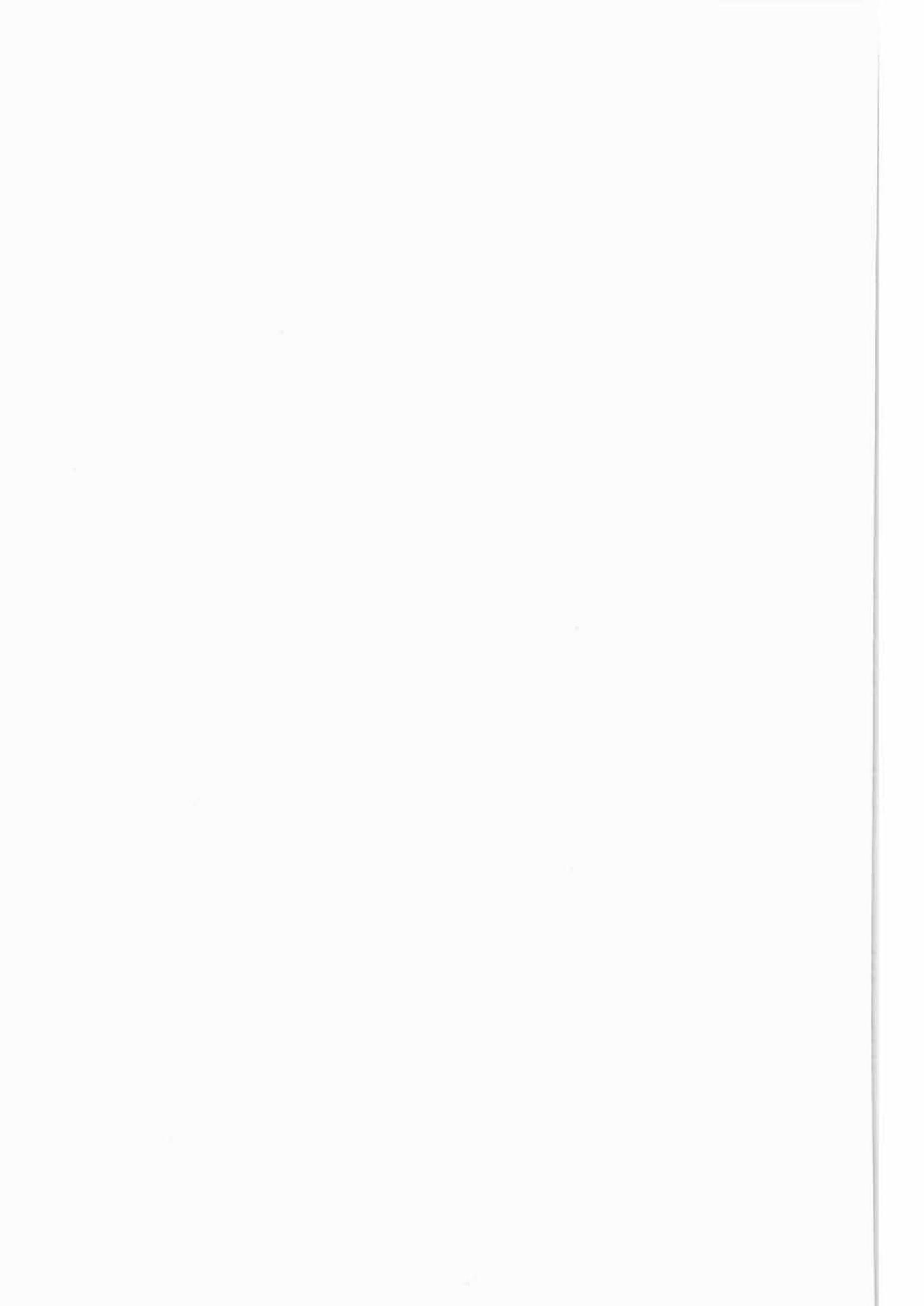
(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注8 昨年度報告(注7文献)で検出しており、調査の進展により、遺構面を掘り下げ、今回S X34901・S X349102の遺構平面図には図示していない。

注9 戸原和人・黒坪一樹ほか「百々遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

林 亨「山陽道の検出 最近の調査成果から」(『大山崎町の発掘 大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第10集 大山崎町教育委員会) 1991

圖 版





(1) 調査前墳丘（南から）



(2) 石室石材検出状況（南から）



(1) 石室石材検出状況（東から）



(2) 調査再開時状況（東から）



(1) 遺物出土状況（東から）



(2) 遺物出土状況（南から）



(1) 石室北東区遺物出土状況（南から）



(2) 石室北東区玉類出土状況（南から）



(1) 石室南東区遺物出土状況（北から）



(2) 石室南西区遺物出土状況（北から）



(1) 石室北東区馬具出土状況 (南から)



(2) 墳丘全景 (南から)



(1) 墳丘断割状況 (東から)



(2) 閉塞石検出状況 (南から)



(3) 玄室東壁 (西から)



(4) 羨道から玄室をのぞむ



(1) 玄室前壁 (南から)



(2) 玄室奥壁 (北から) 石室石積み状況



(1) 墳丘西側南壁盛り土状況



(2) 墳丘東側南壁盛り土状況



(1) 墳丘北側東壁盛り土状況



(2) 墳丘南側西壁盛り土状況





11



12



13



14



15



16



17



19



18



20



21



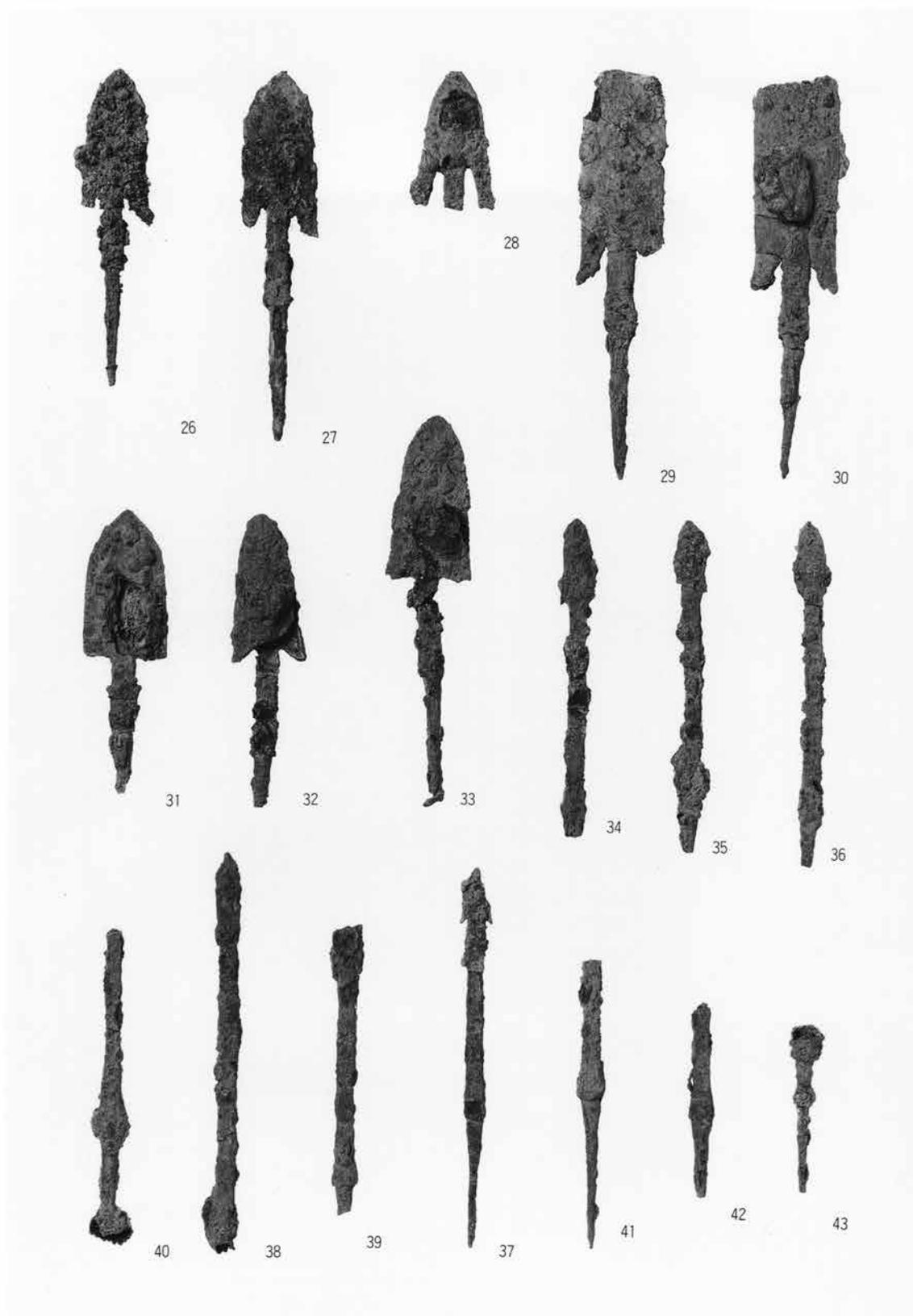
22

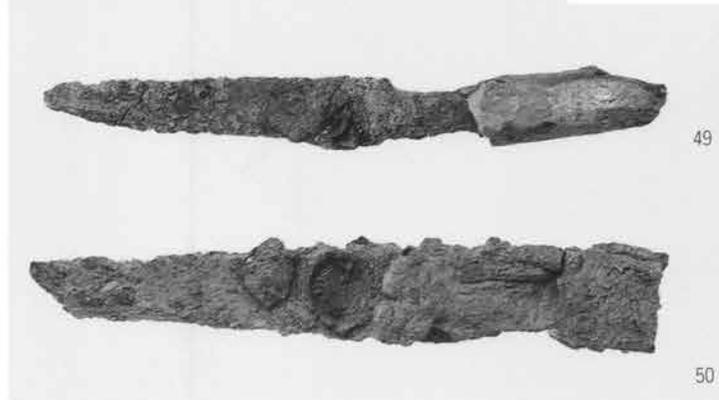
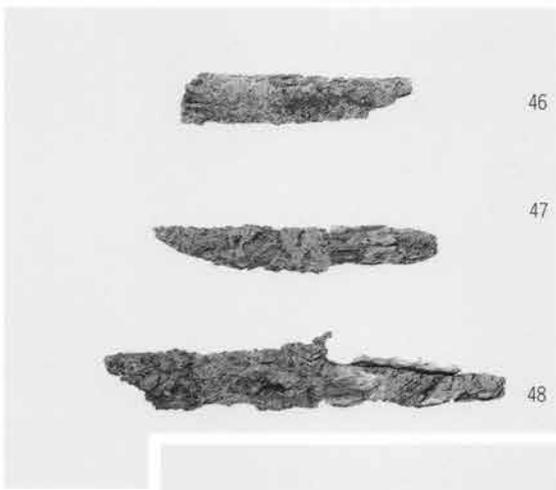


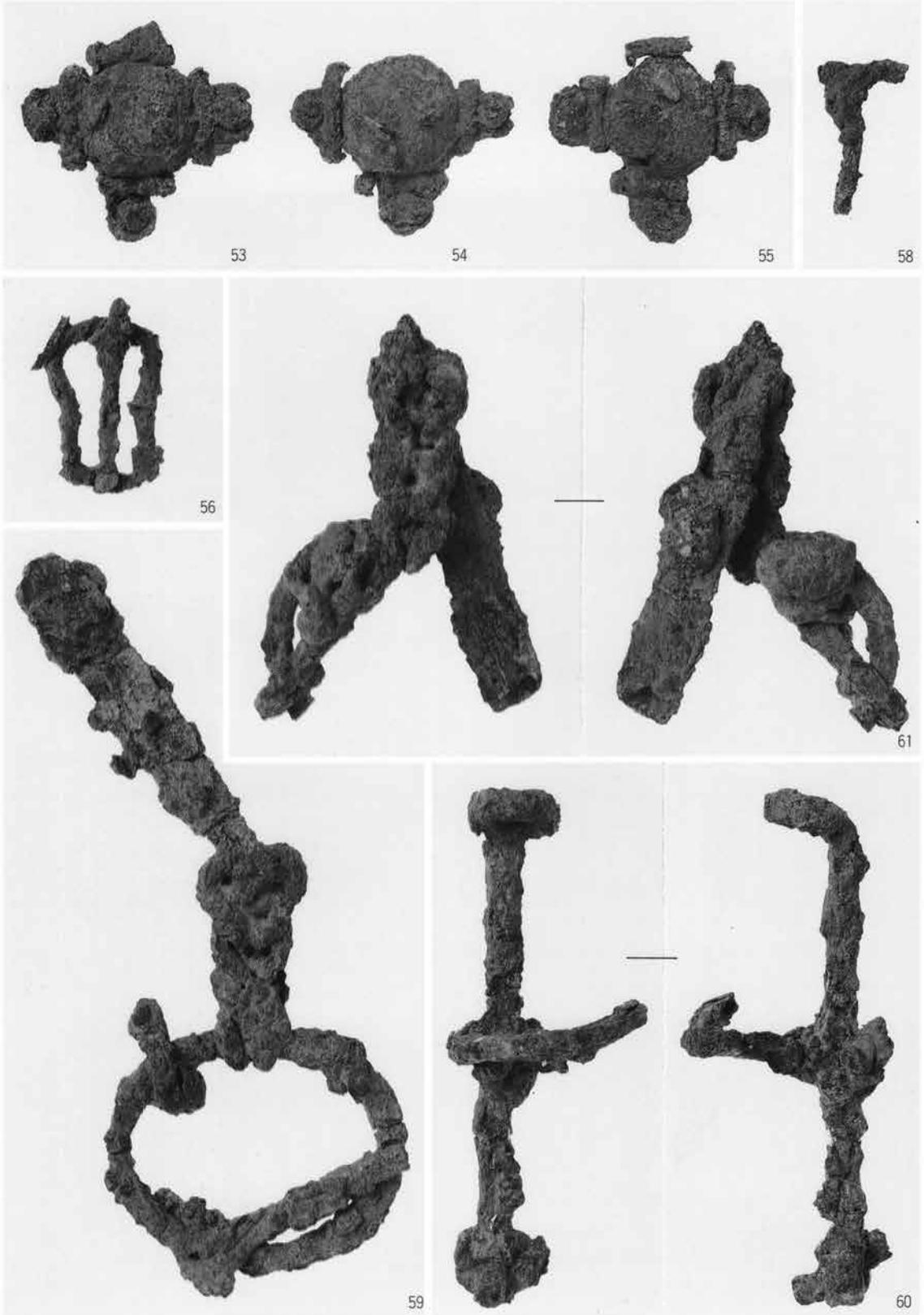
23



23









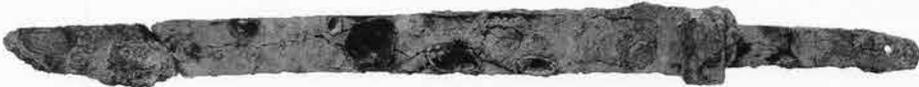
45



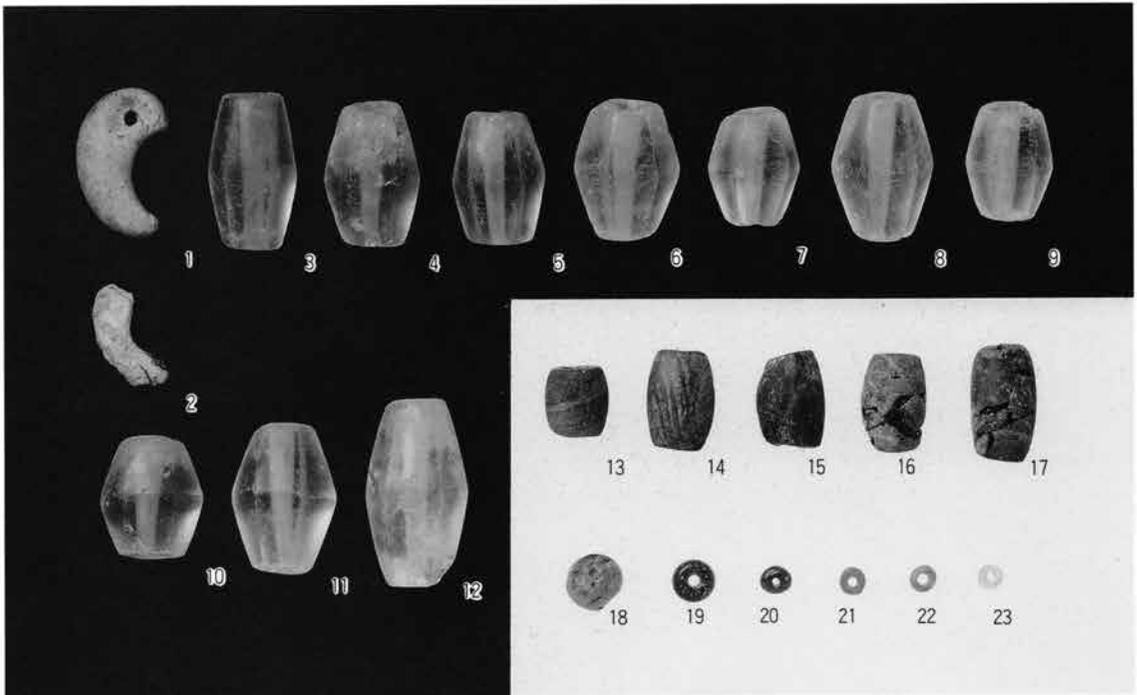
61



51



52



出土遺物 (7)



(1) 墳丘全景 (西から)



(2) 墳丘全景 (南から)



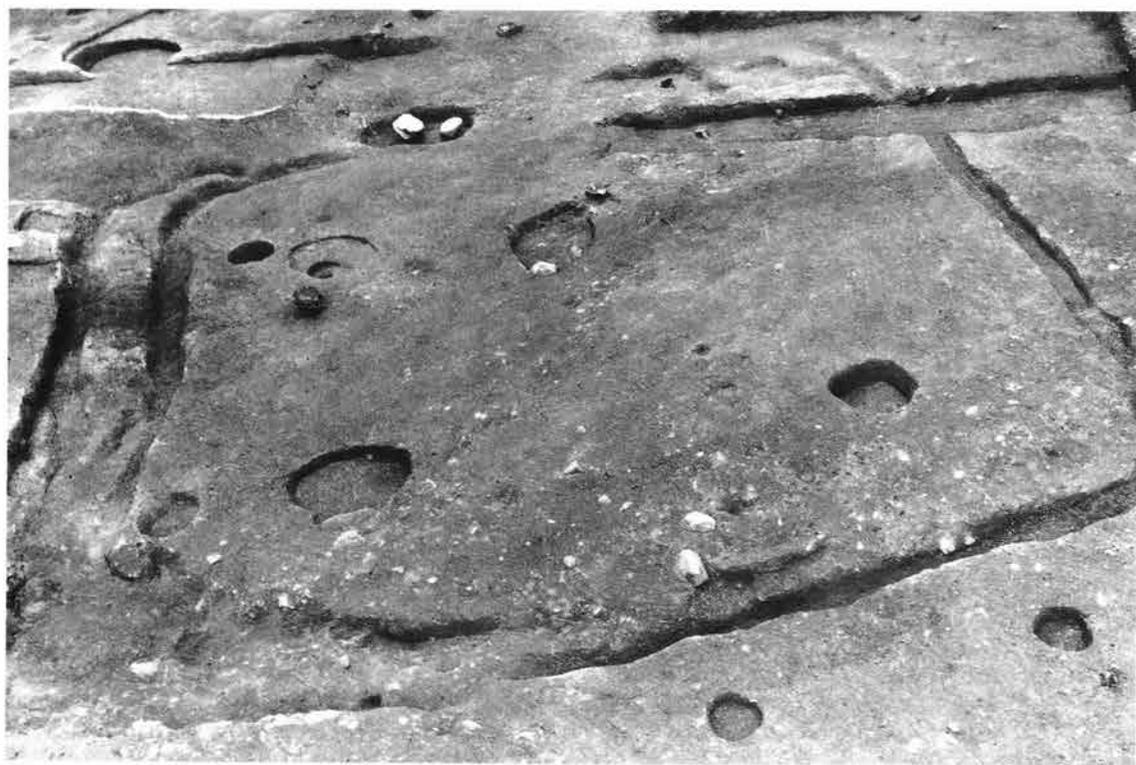
(1) 袖部遺物出土状況（北から）



(2) 袖部遺物出土状況（北西から）



(1) 下層遺構検出状況 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡SH01 (北から)









29



31



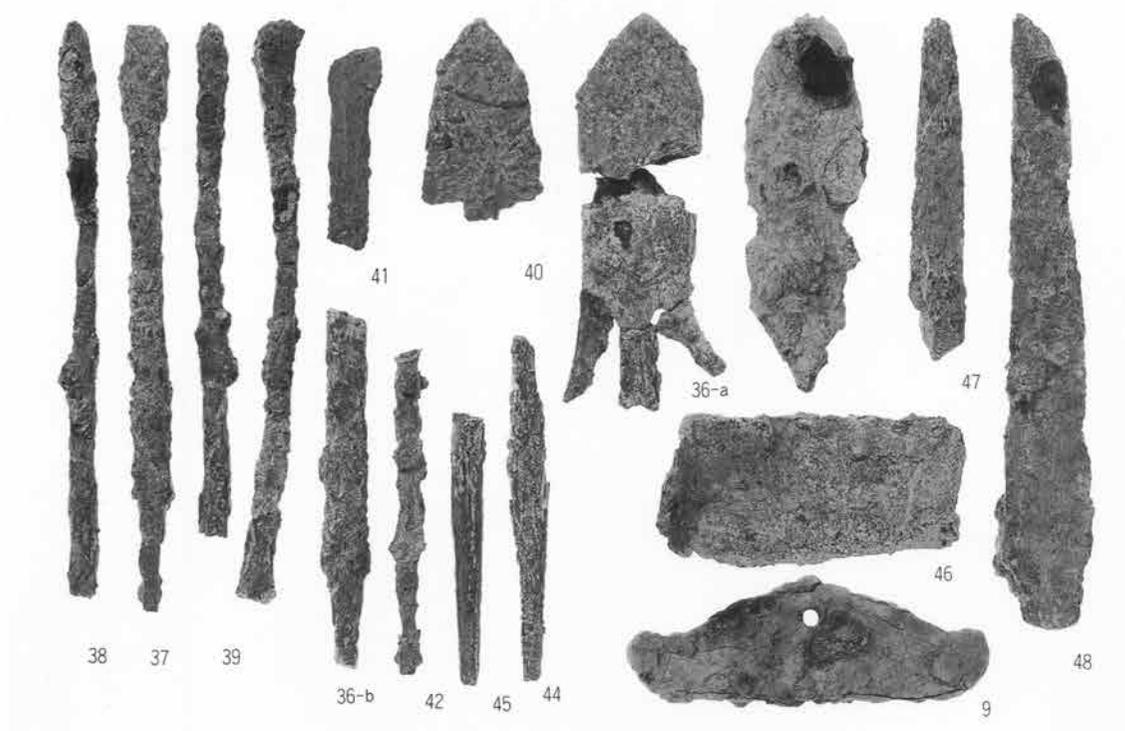
33



25



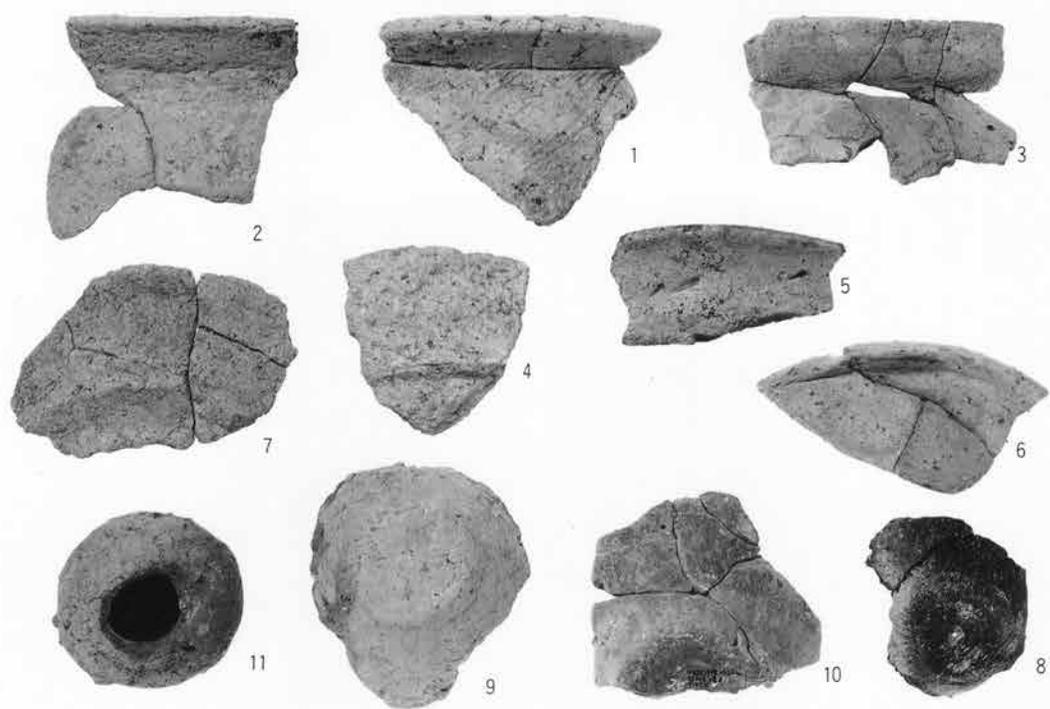
26



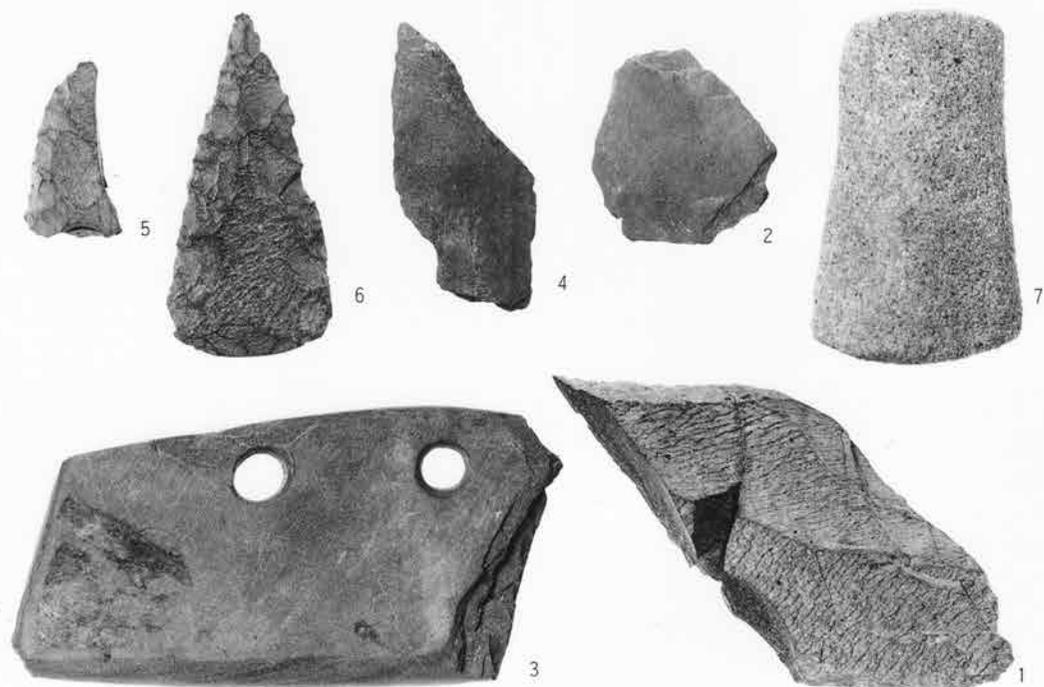
(1) 川向北1号墳・川向北遺跡 出土鉄製品



(2) 川向北遺跡 出土石製品



(1) 川向北遺跡 出土遺物 (土器)



(2) 川向北遺跡 出土遺物 (石器)



(1) 1トレンチ近景（北西から）



(2) 4トレンチ溝1（北東から）



(1) 第4層遺構全景（北から）



(2) 10トレンチ近景（北東から）



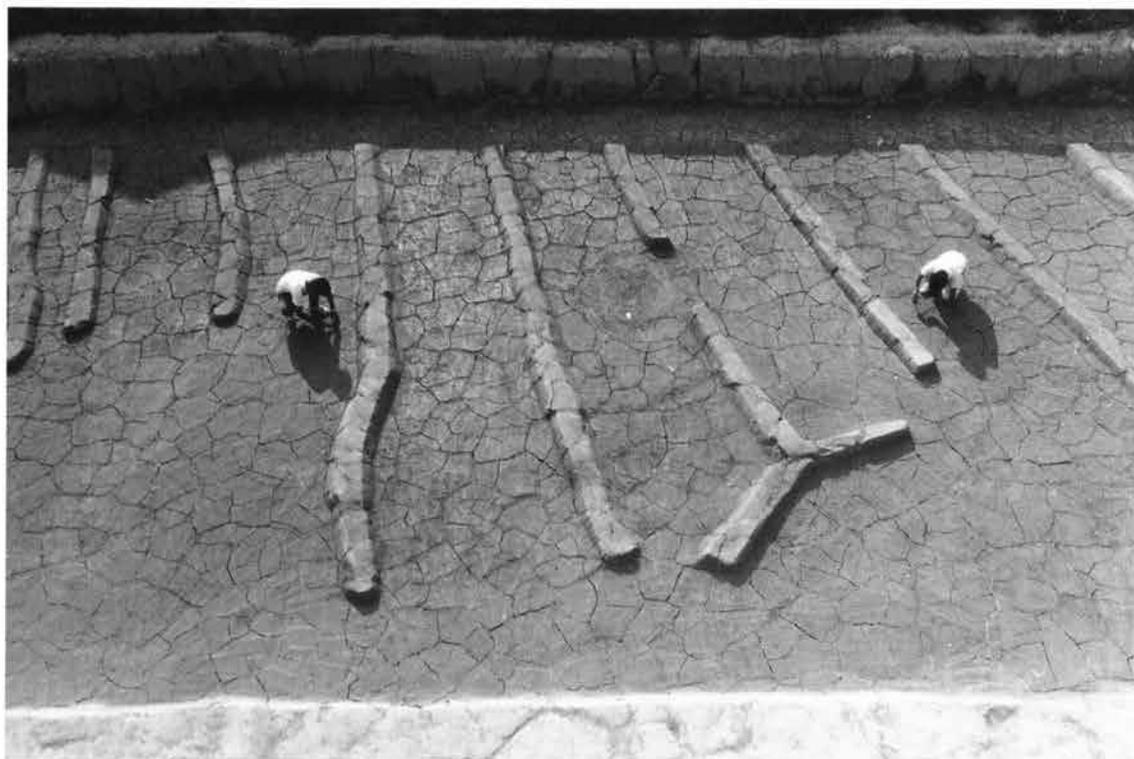
(1) A地区第3遺構面(南から)



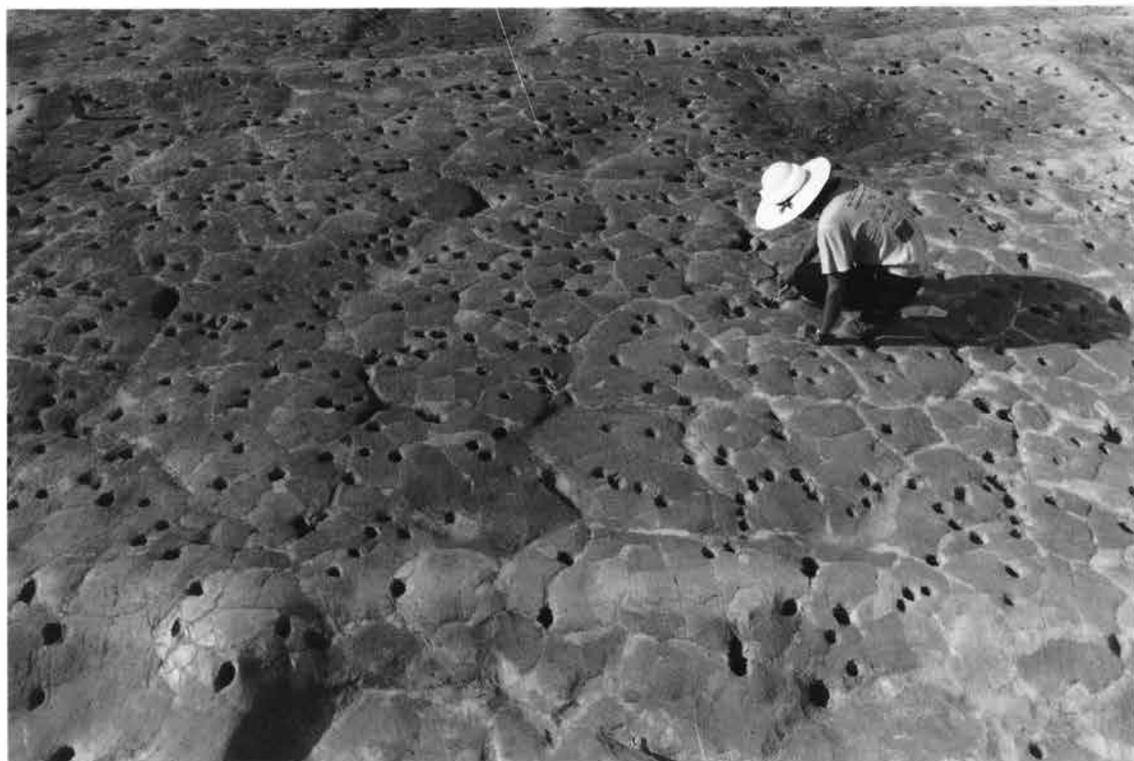
(2) A地区第4遺構面(東南から)



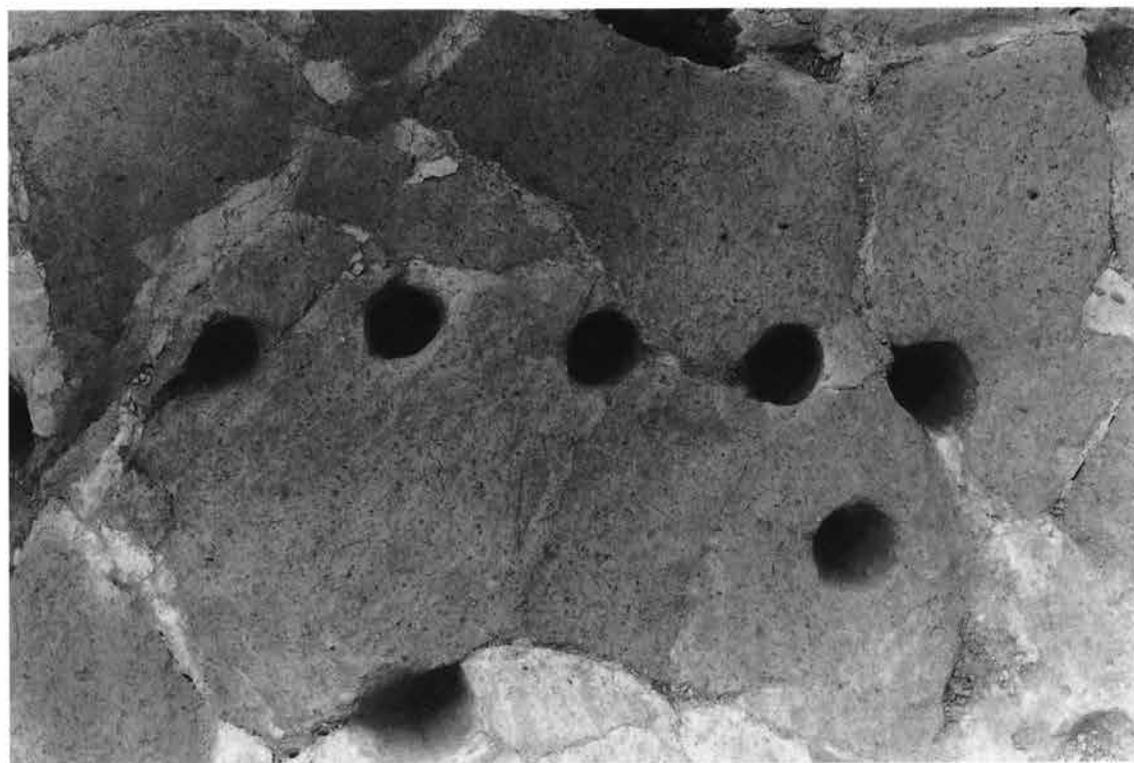
(1) A地区第4遺構面（西北から）



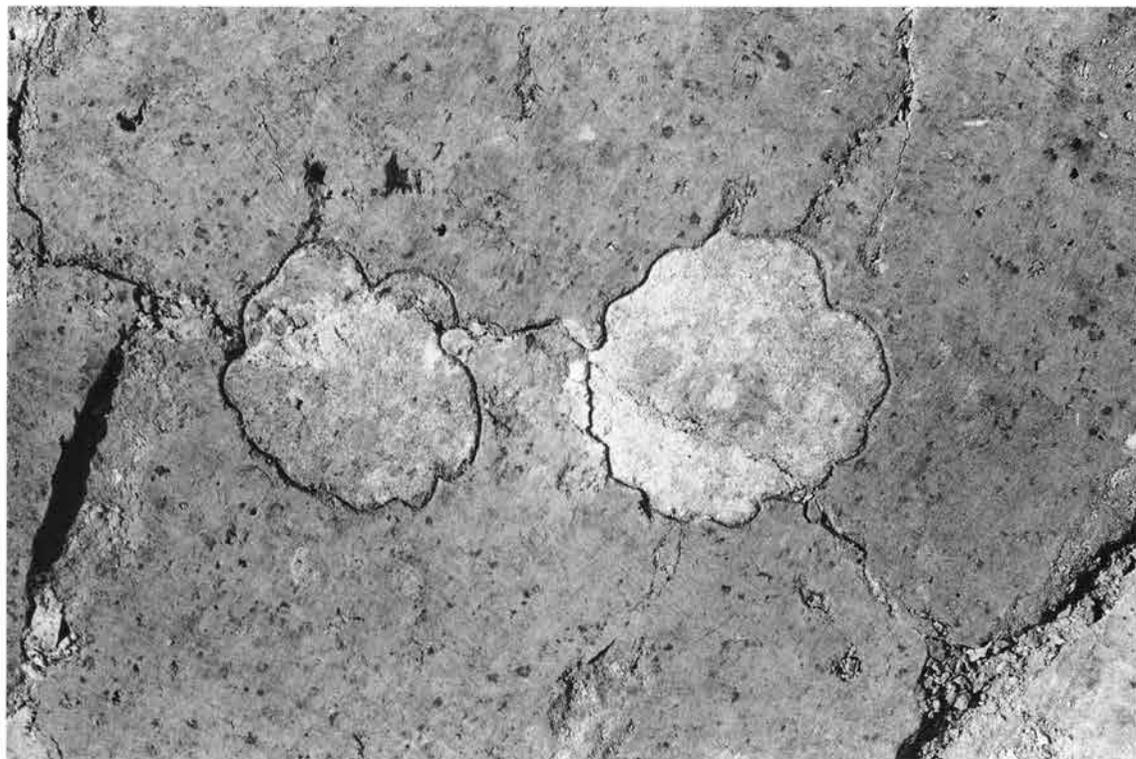
(2) 西南部下層水田跡（東から）



(1) 上層水田面に残る稲株痕跡



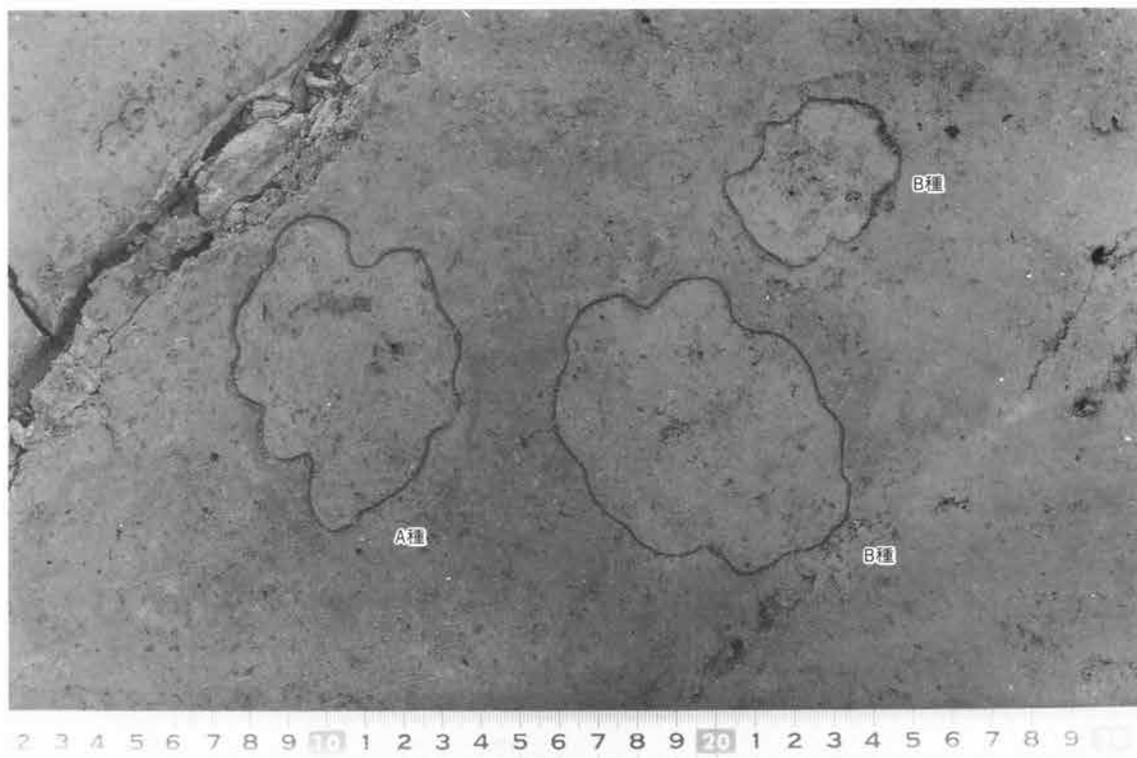
(2) 稲株移植列



(1) 上層水田稻株痕跡 (右—A種・左—B種)



(2) 同稻株痕跡断面



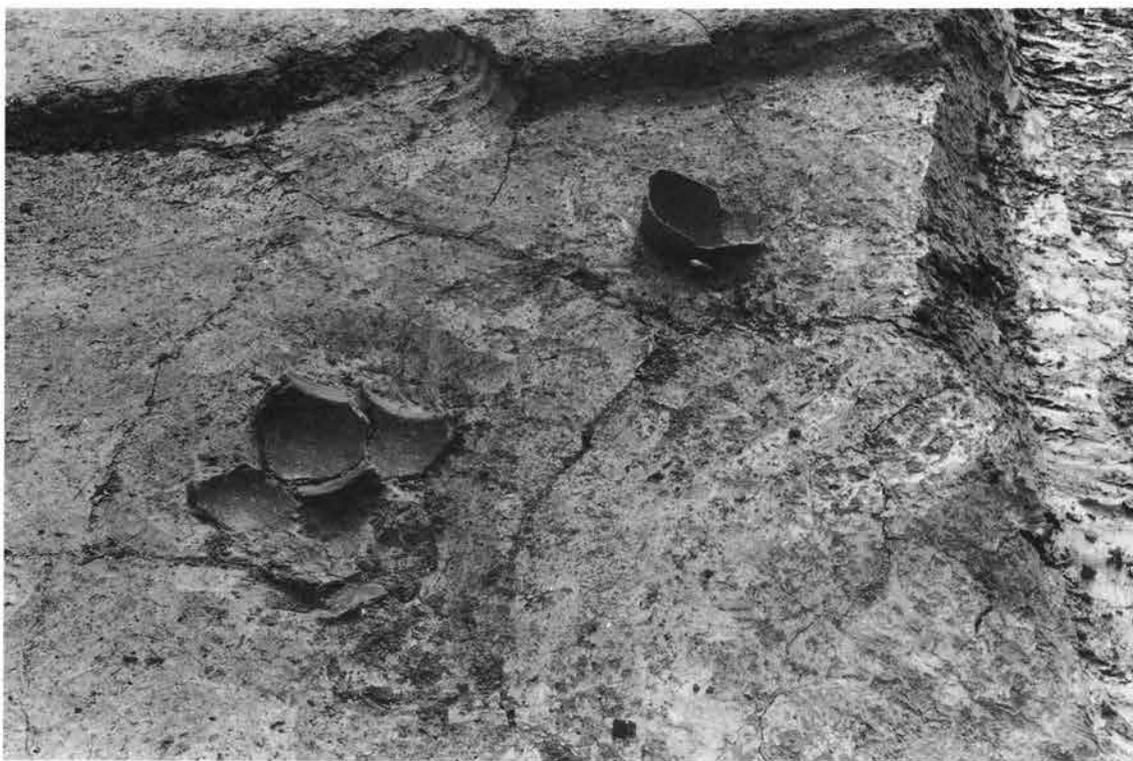
(1) 稻株痕跡



(2) A種稻株痕跡断面



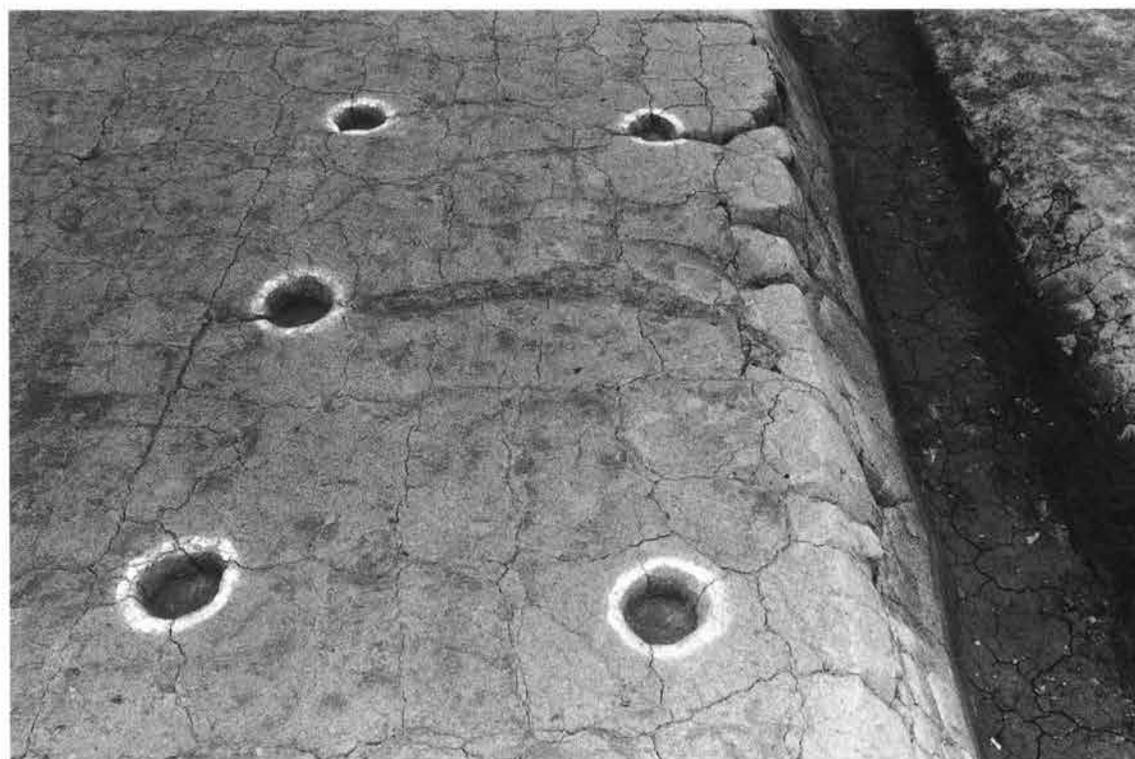
(1) 足跡



(2) 遺物出土状況



(1) B地区第1遺構面（南から）



(2) SB01（南から）



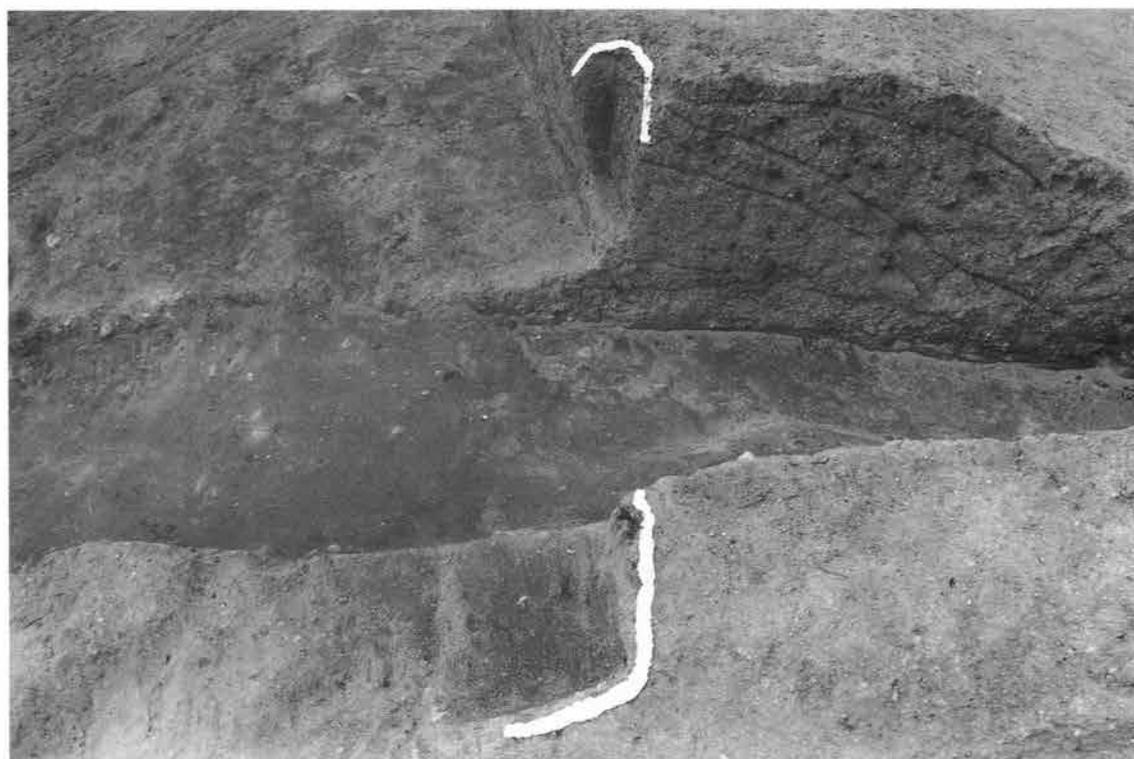
(1) 口仲谷古墳群遠景（西から）



(2) 調査前風景（東から）



(1) 5号墳全景（北から）



(2) 5号墳埋葬主体部（南から）



(1) 5号墳陸橋部（東から）



(2) 7号墳全景（西から）



(1) 調査地遠景 (北から)



(2) 調査地全景 (北東から)



(1) 3号窯体内堆積状態（南から）



(2) 3号窯完掘状態（北から）



(1) 3号窯窯体内遺物出土状態（南から）



(2) 3号窯前庭部遺物出土状態（南から）



(1) 4・5号窯灰原 遺物出土状態（南から）



(2) 4号窯灰原 土製塔出土状態（南から）



(1) 2号窯灰原 遺物出土状態（北から）

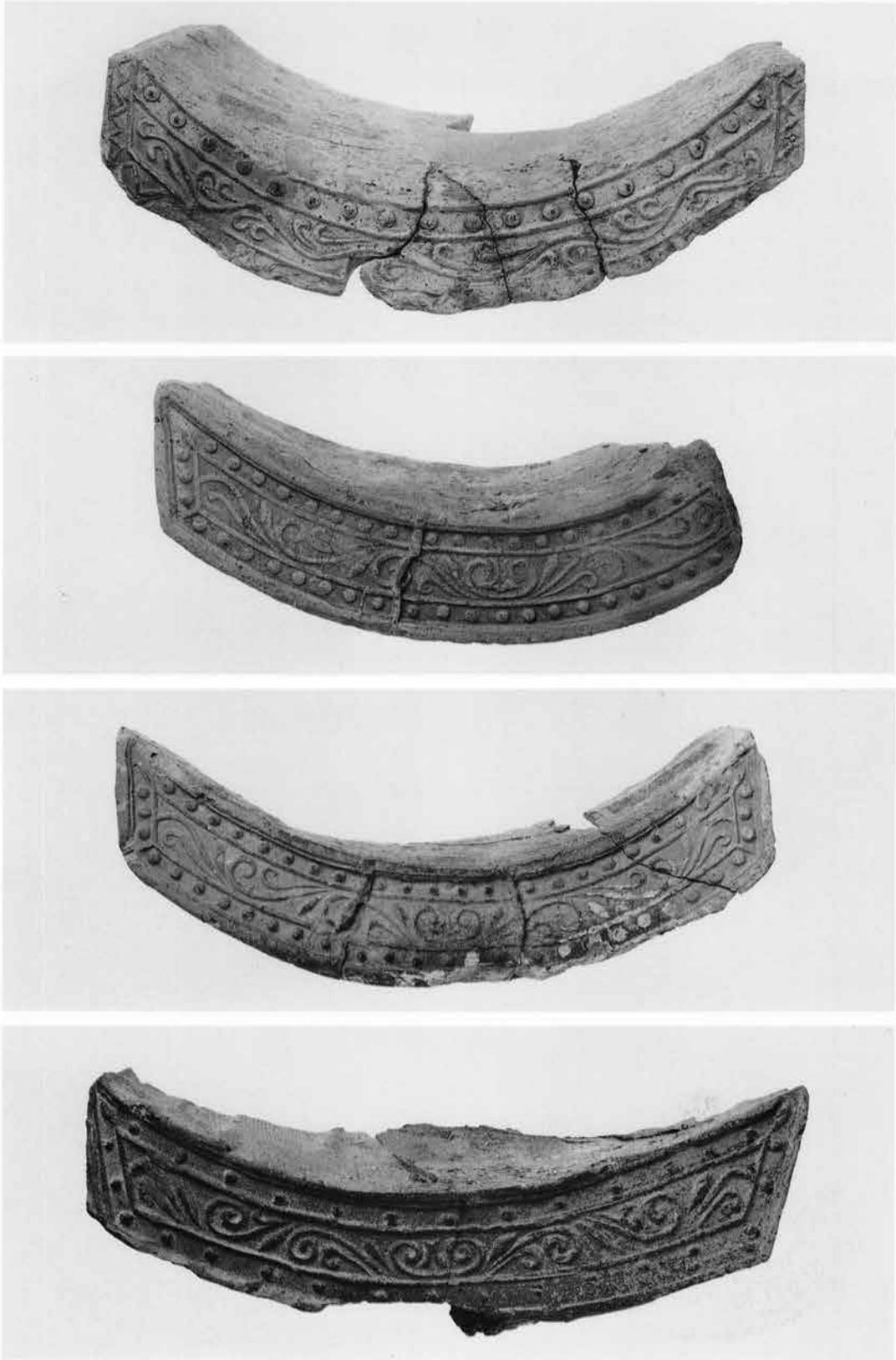


(2) 2号窯灰原 遺物出土状態（南から）

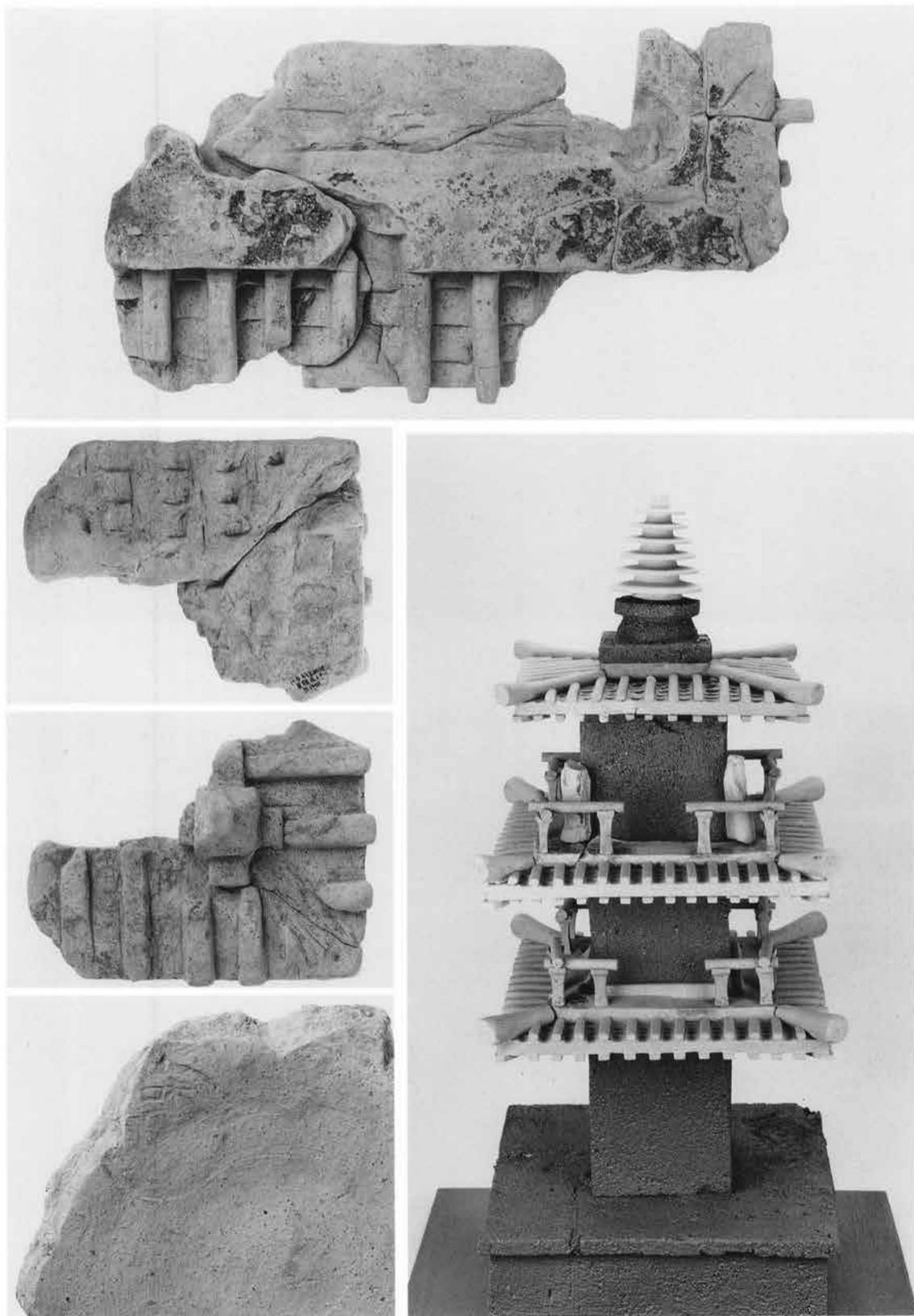


出土遺物 (1)





出土遺物 (3)



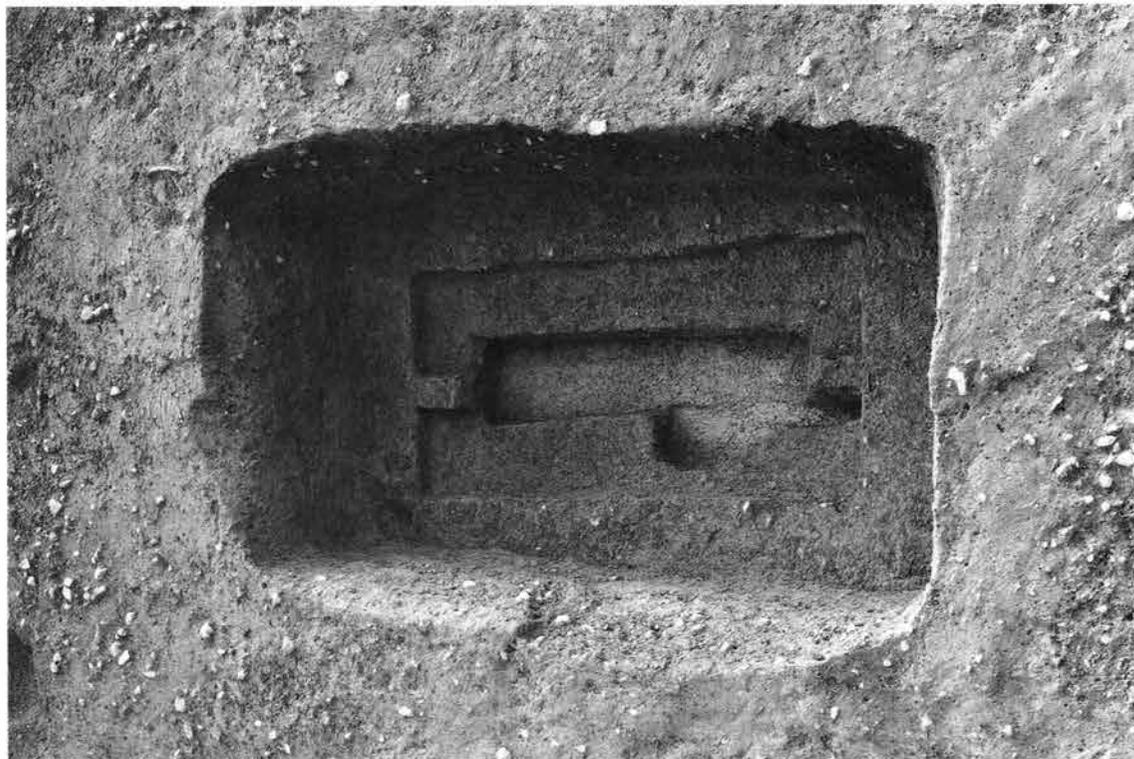
出土遺物 (4)



(1) 調査地遠景 (航空写真 北西から)



(2) 調査地全景 (航空写真 北から)



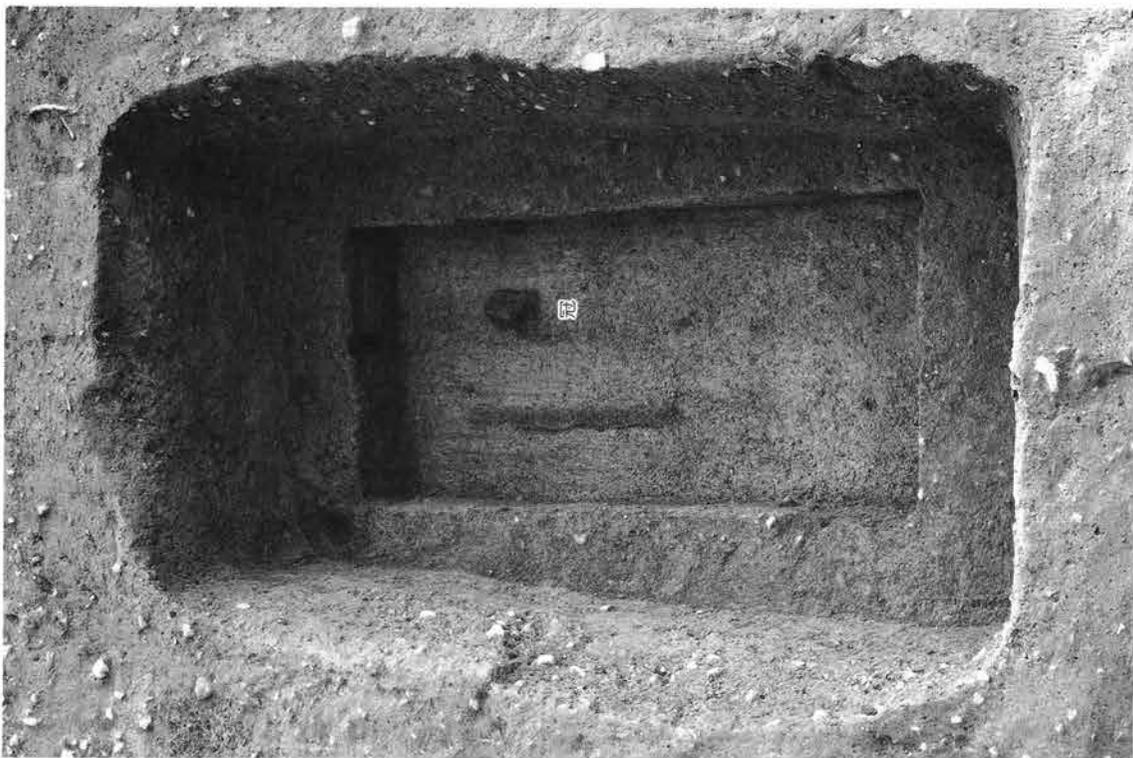
(2) 西山古墓 木棺内埋土除去状態 (北から)



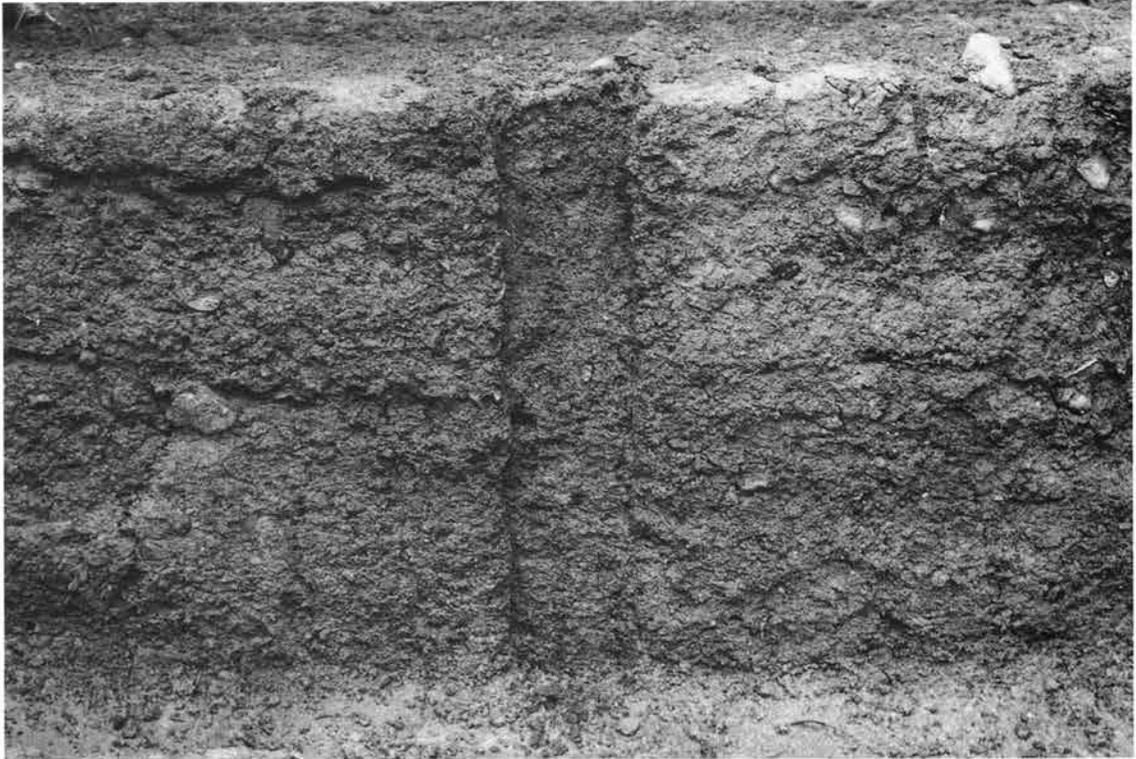
(1) 西山古墓 木槨検出状態 (北から)



(2) 西山古墓 木槨完掘状態 (北から)



(1) 西山古墓 木槨掘削前 北から



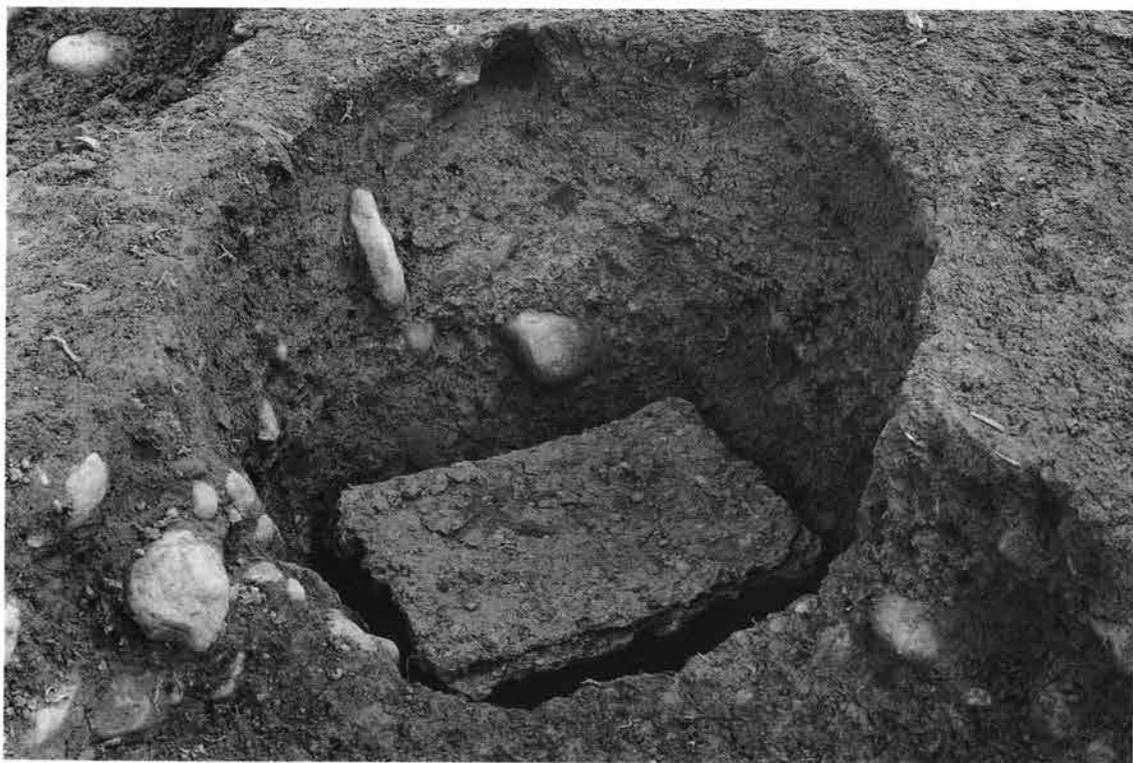
(1) 西山古墓 木槨縦棧（南短側）検出状態（北から）



(2) 西山古墓 棺・槨の復原状態（左下は鉄板埋納土坑 北から）



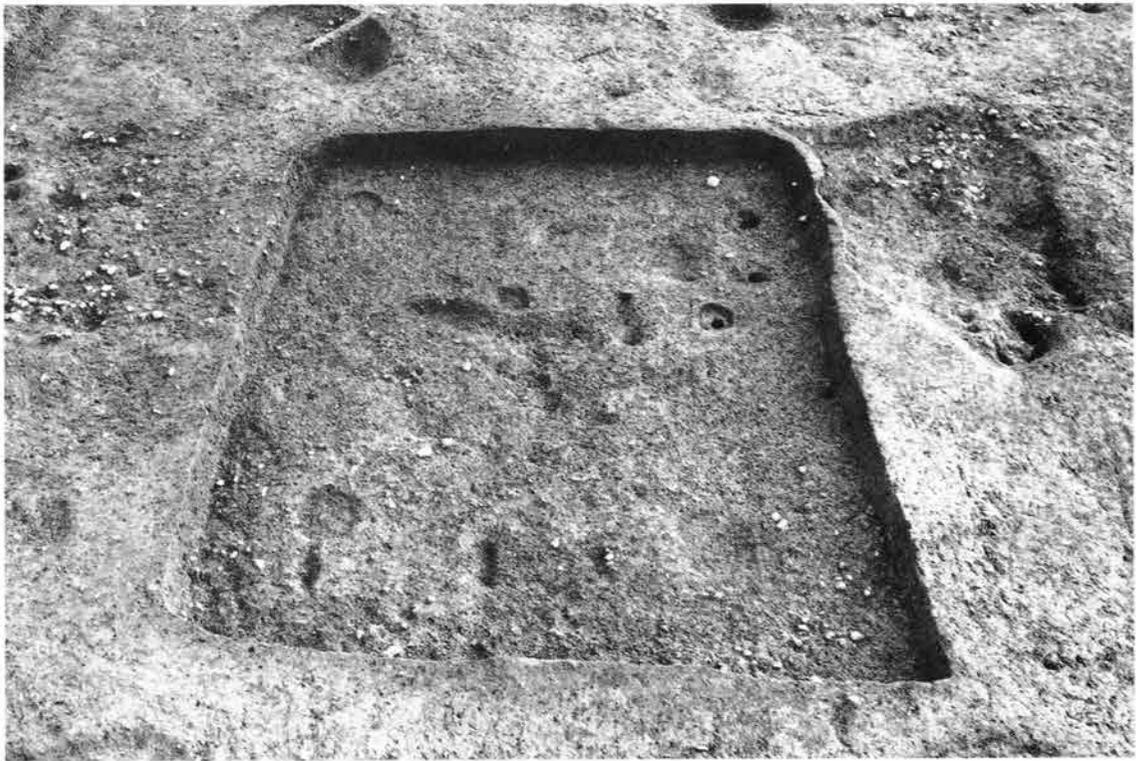
(1) SX9124 鉄板出土状態（北西から）



(2) SX9124 鉄板出土状態（西から）



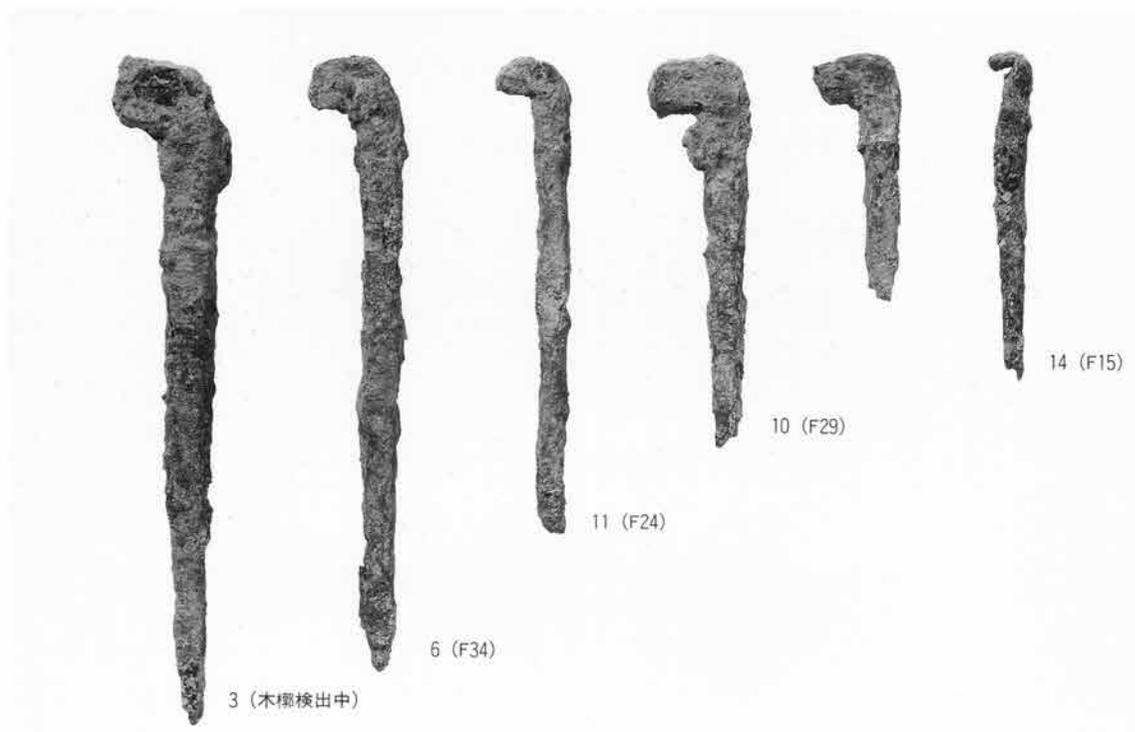
(1) SB9101検出状態（西から）



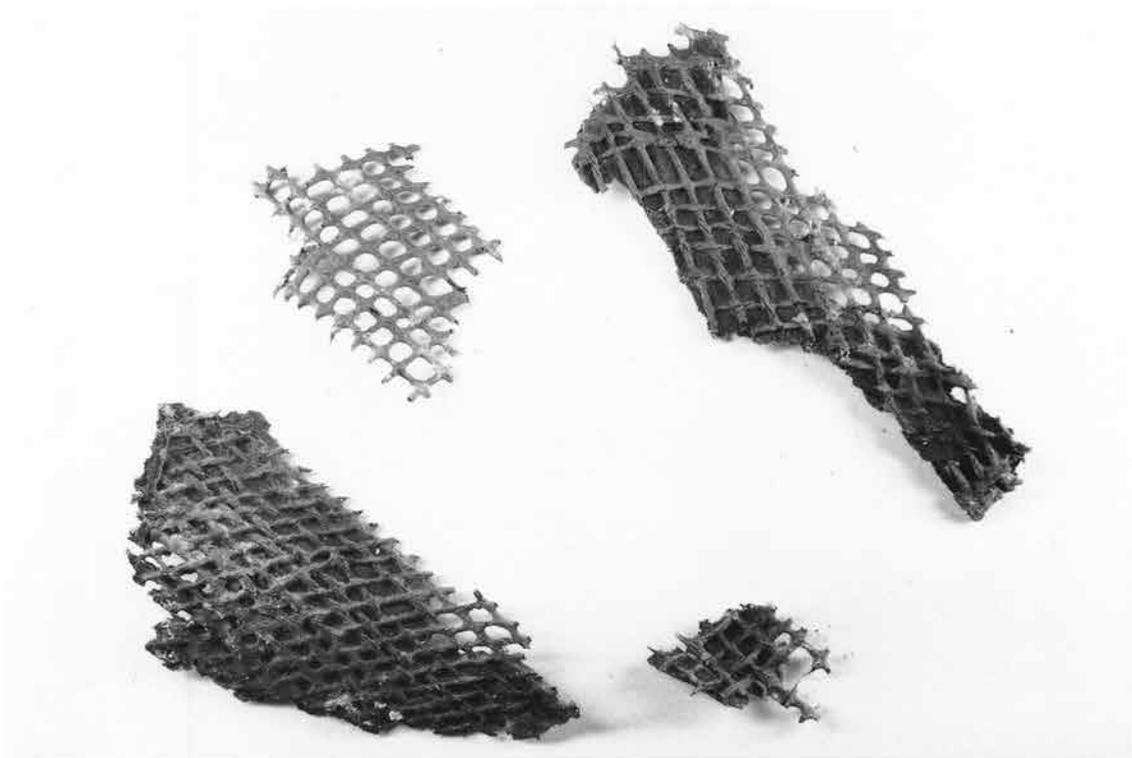
(2) SB9115全景（北から）



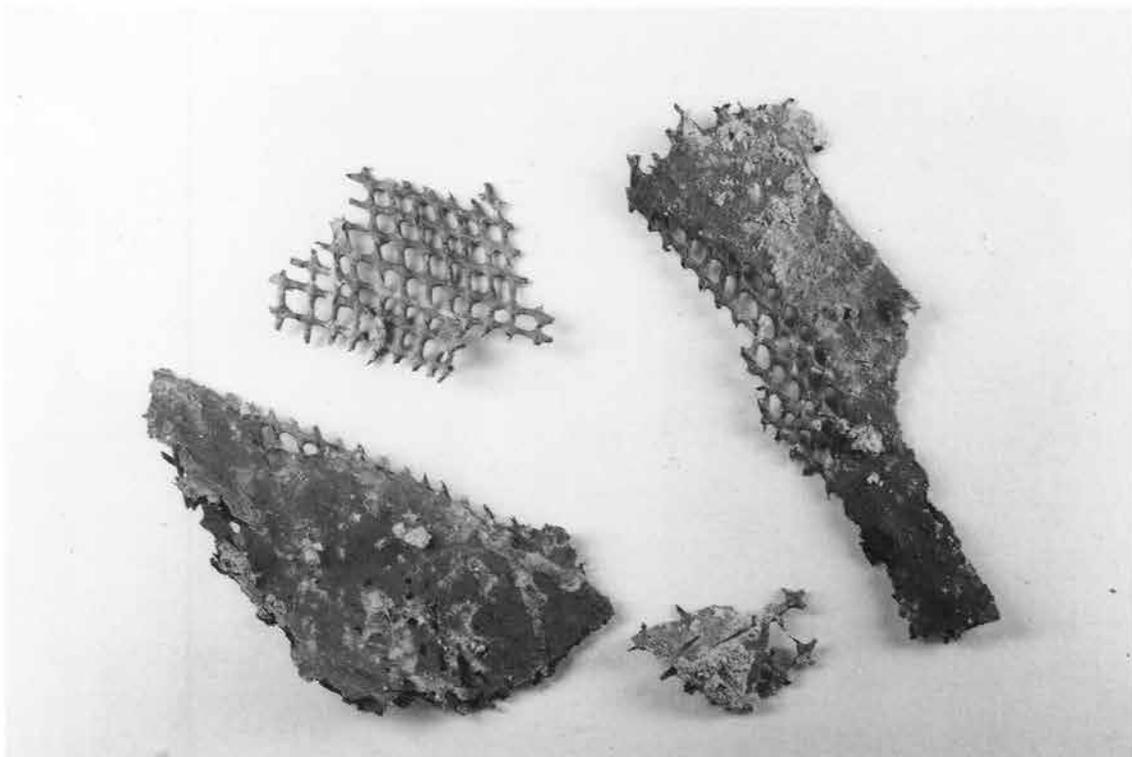
(1) 西山古墳 冠出土状態（東から）



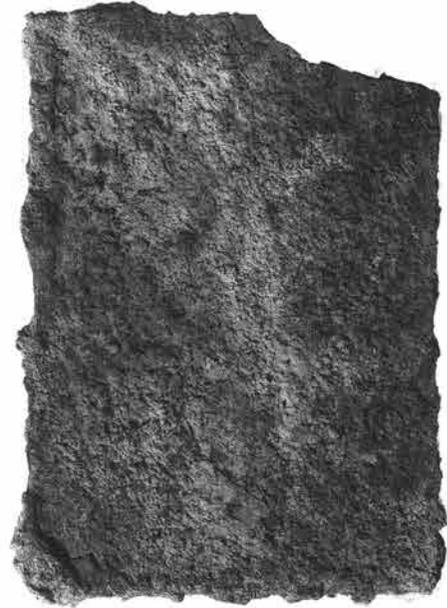
(2) 西山古墳 出土鉄釘



(1) 西山古墓 出土冠断片（裏面）

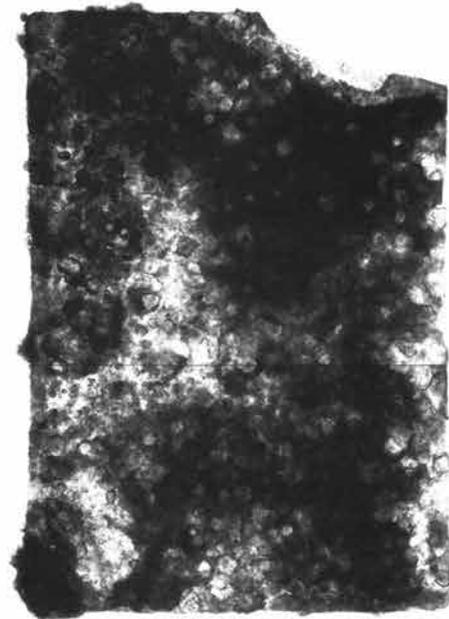
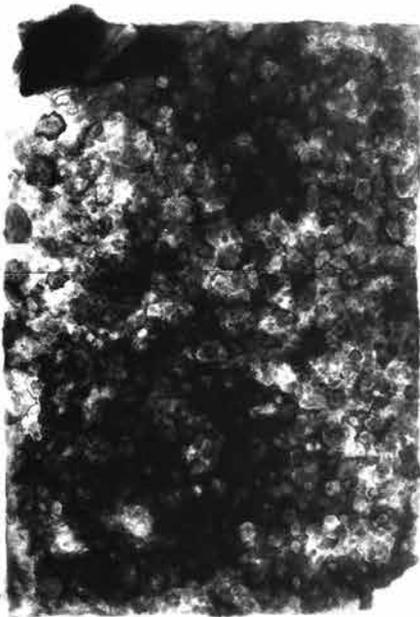


(2) 西山古墓 出土冠断片（表面）



(1) 西山古墳 出土時の上側の鉄板（接合面）

(2) 西山古墳 出土時の下側の鉄板（接合面）



(3) 西山古墳 出土時の上側の鉄板のX線写真

(4) 西山古墳 出土時の下側の鉄板のX線写真



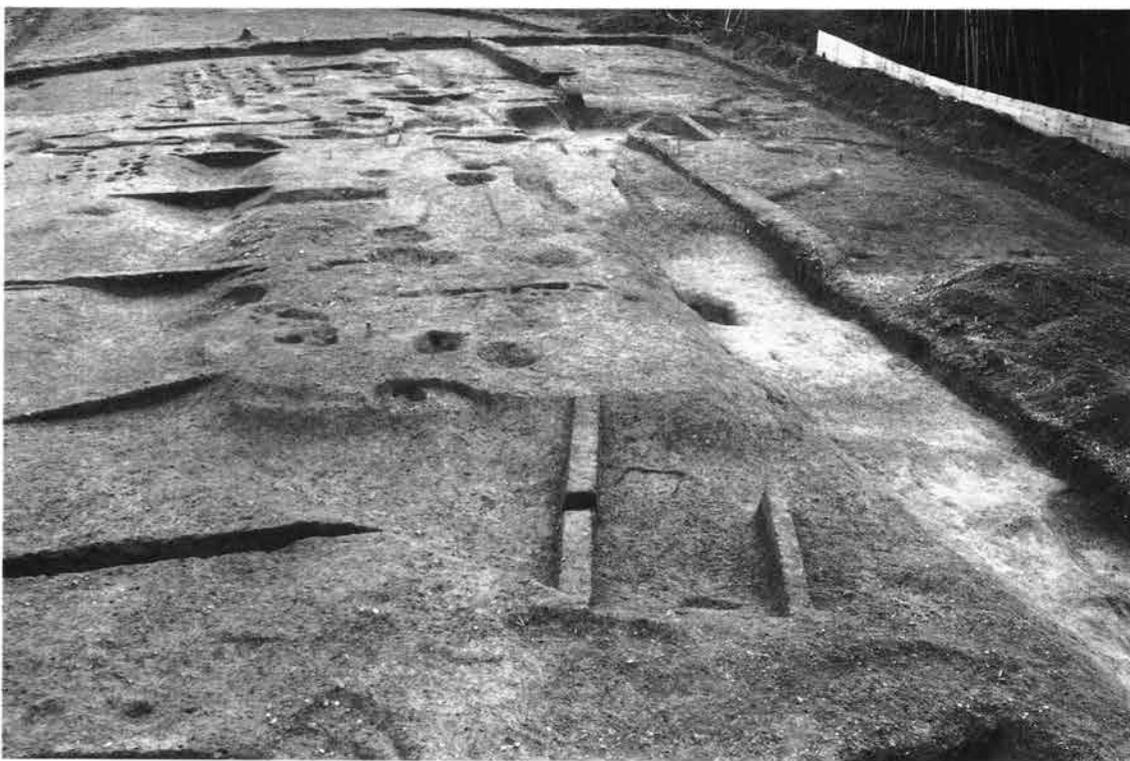
(1) 調査前全景（南から）



(2) トレンチ全景（南から）



(1) 掘立柱建物跡SB01 (東から)



(2) 溝SX01 (北から)



(1) 溝SX02 (南から)



(2) SX02溝内、家形埴輪 (北から)



(1) 祭祀遺構SX03玉類 (北から)



(2) 祭祀遺構SX03完掘状況 (東から)



(1) 4BL, 第16t r, SD26803・26804（北東から）



(2) 4BL, 第16t r, SD26801・26803土層断面図（北西から）



(3) 4BL, 第16t r. SD26804 (西から)



(4) 4BL, 第16t r. SD26805 (南から)



(1) 4BL, 第16t r. SD26801 (北西から)



(2) 4BL, 第16t r. SD26802 (西から)



28



32



21



26



27



24



30



(1) 4BL, 第17-1t r, 上層全景・中世素掘り溝群(北方から)



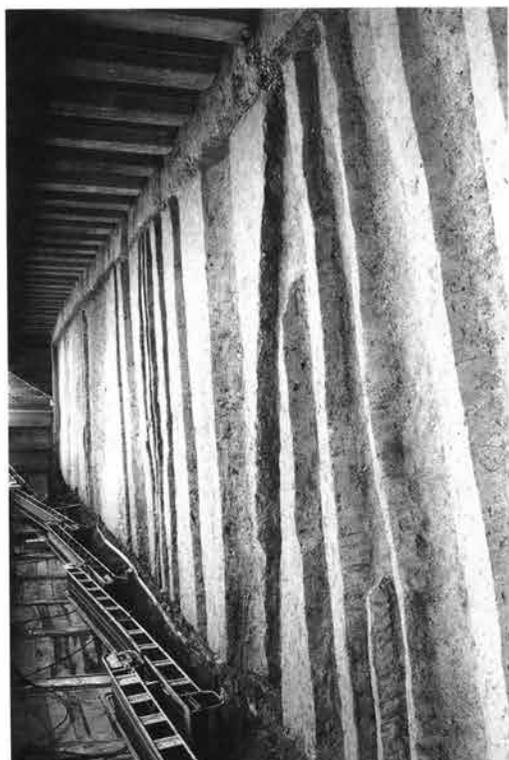
(2) 4BL, 第17-1t r, 中層土坑SK26701(南方から)



(3) 4BL, 第17-1t r, 下層全景・旧流路跡(北方から)



(4) 4BL, 第17-1t r, 下層・旧流路跡東壁断面



(1) 5BL, 第17-2t r, 上層全景・中世素掘り溝群(南方から)



(2) 5BL, 第17-2t r, 上層全景・中世素掘り溝群(北方から)



(3) 5BL, 第17-2t r, 中層及び断割(南方から)



(4) 5BL, 第17-2t r, 北側断割東壁断面



(1) I1BL, 第22t r, 上層全景・中世素掘り溝群(南西から)



(2) I1BL, 第22t r, 中世素掘り溝群及び断割(北東から)



(3) I1BL, 第22t r, 二条条間大路北側溝SD26703(南から)



(4) I1BL, 第22t r, 二条条間大路北側溝SD26703(東から)



(1) 12BL, 第13t r. 上層中世素掘り溝群(北東から)



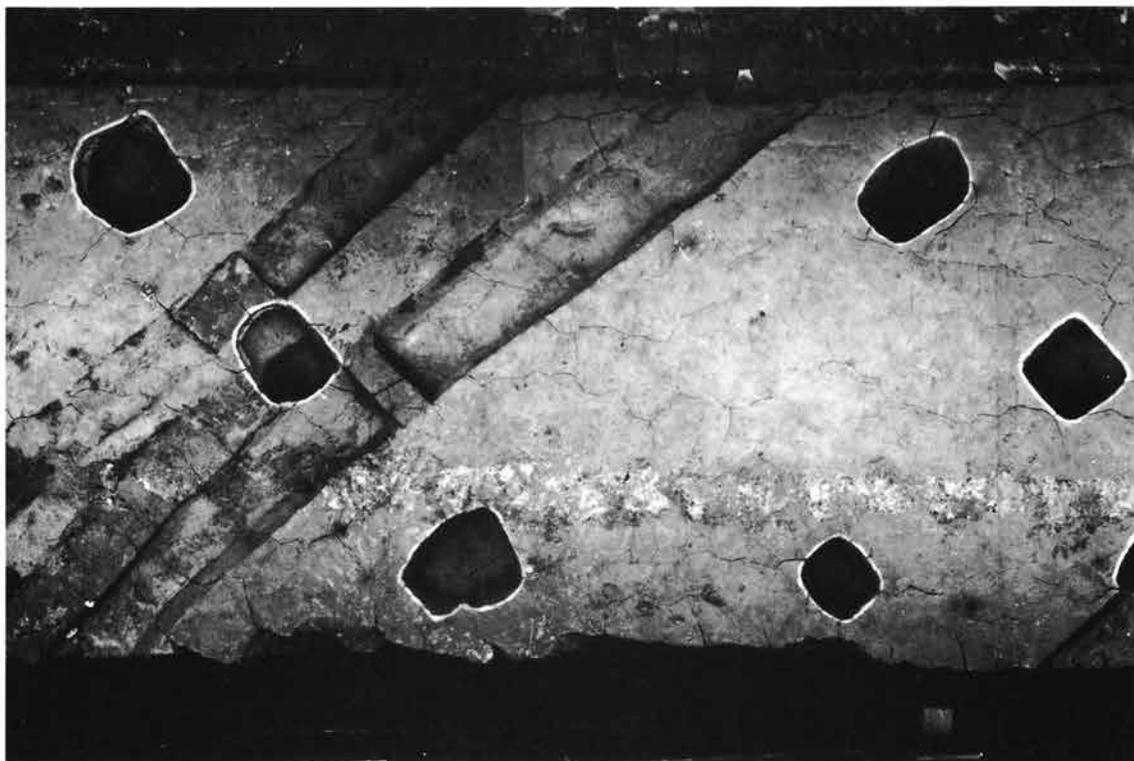
(2) 12BL, 第13t r. 上層中世素掘り溝群(東から)



(3) 12BL, 第13t r. 井戸跡SE26706 (南から)



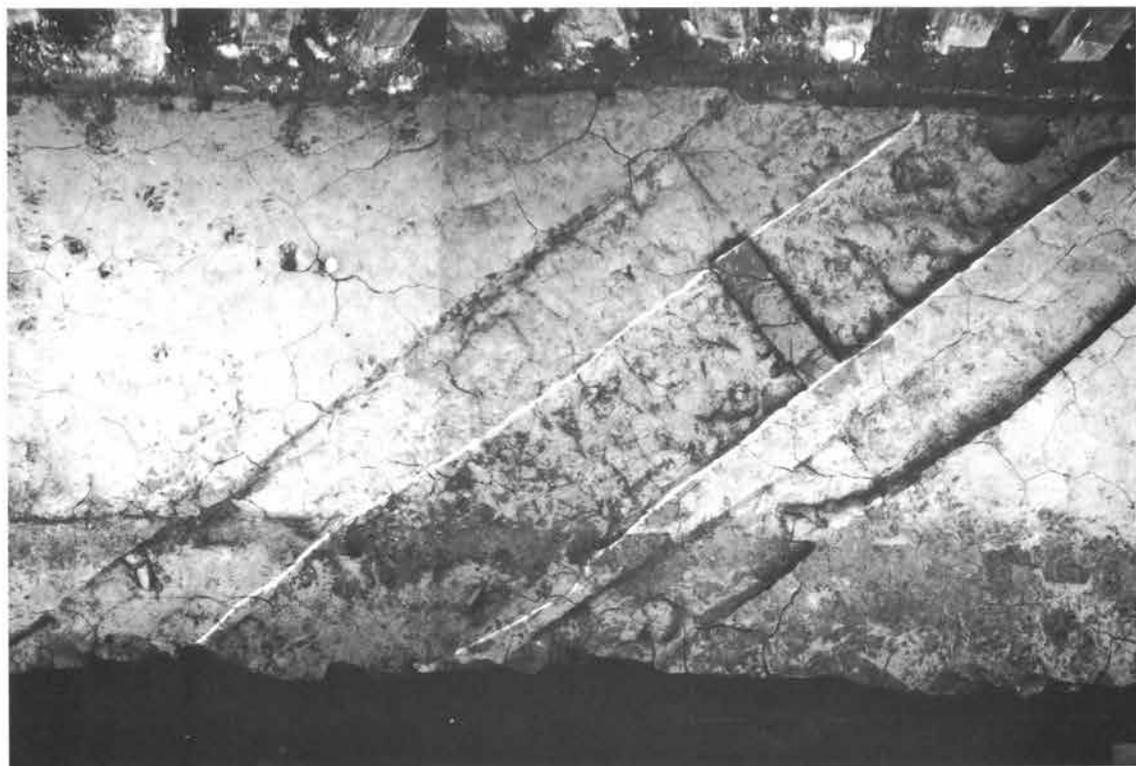
(4) 12BL, 第13t r. 北端湿地位状堆積の倒木の(北東から)



(1) 12BL, 第13t r, 掘立柱建物跡SB26704



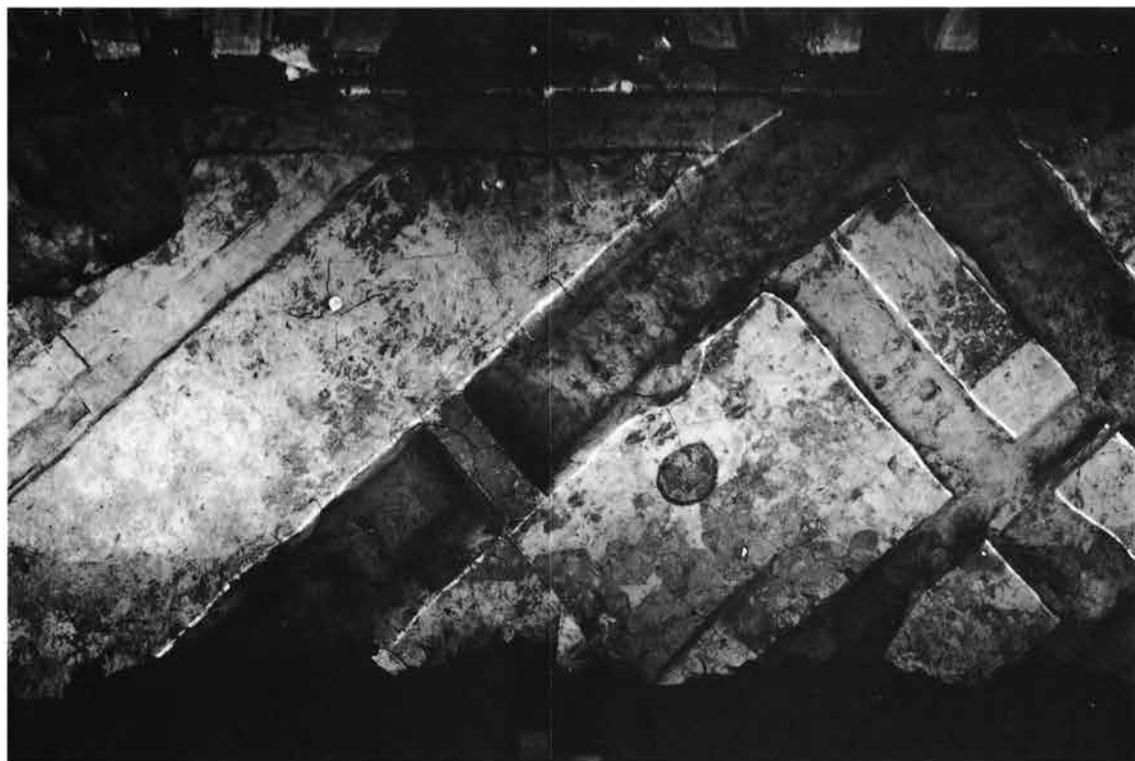
(2) 12BL, 第13t r, 溝SD26705・井戸跡SE26706



(1) 12BL. 第13t r. 溝SD26707



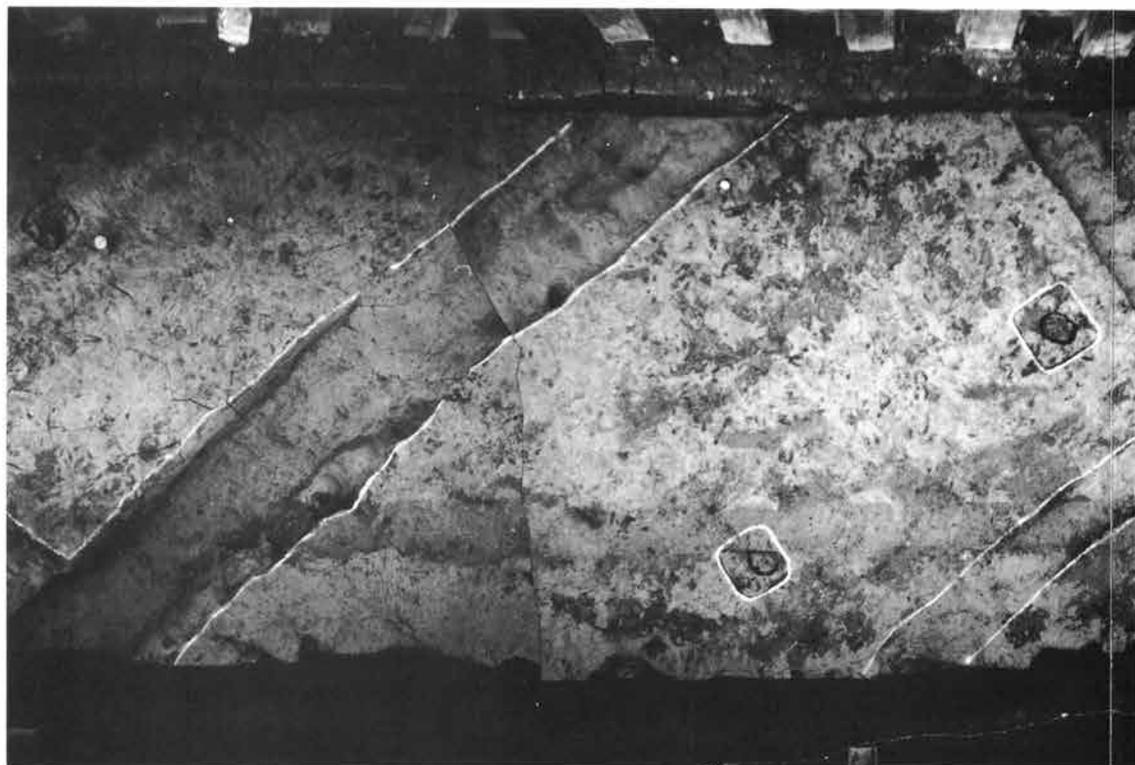
(2) 12BL. 第13t r. 溝SD26710・11



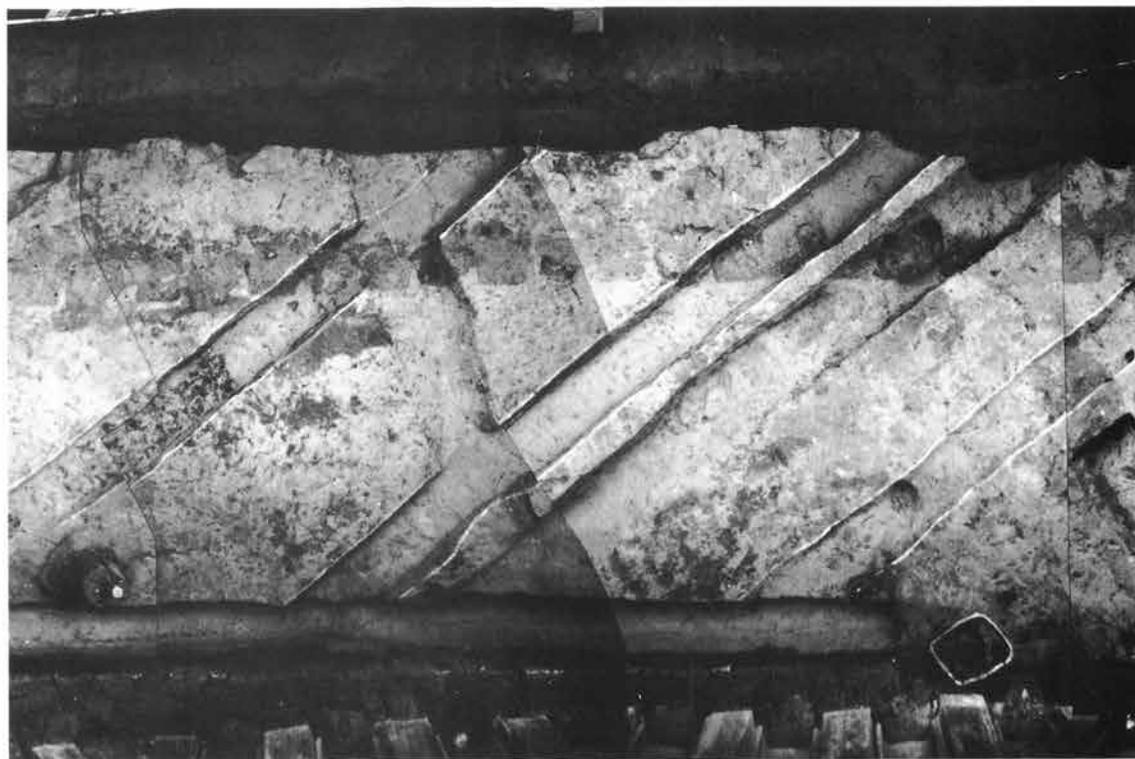
(1) 12BL. 第13t r. 溝SD26708・12・13



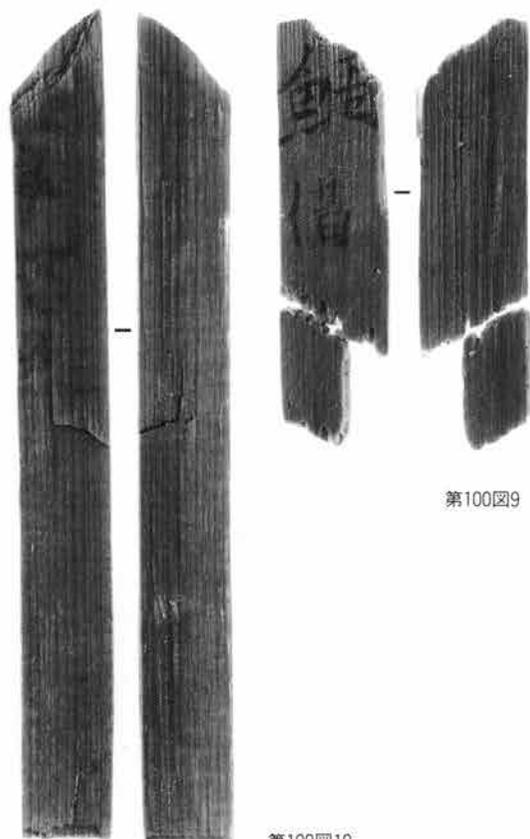
(2) 12BL. 第13t r. 溝SD26712・13・14・15



(1) 12BL. 第13t r. 溝SD26709・柵列跡SA26716・溝SD26717



(2) 12BL. 第13t r. 柵列跡SA26716・溝SD26717・18・19

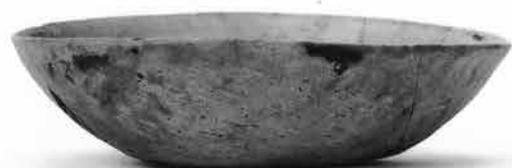


第100図9

第100図10



第100図7



第108図7



第108図7



第109図13



第110図5



第108図11



第109図10



第109図14



第109図16



第108図6



第109図19



第108図8



第108図9



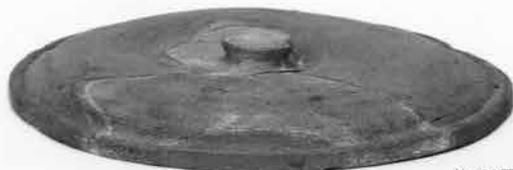
第109図22



第109図23



第110図6



第109図1



第109図5



第109図7



第109図11



(1) 下植野工区全景（西から）



(2) B地区中層遺構全景（南西から）



(1) B地区 上層検出建物跡群（北から）



(2) B地区 下層検出建物跡群（南から）



(1) B地区 SX36820遺物出土状況（北から）



(2) B地区 SX36822遺物出土状況（南東から）



(1) B地区 SH36835全景（南から）



(2) B地区 SX36844土器出土状況（南から）



B地区出土遺物(1) SX36820内出土
番号は第119図に一致



B地区出土遺物(2) SX36822内出土
番号は第121図に一致



第118図4



第124図3



第122図2



a



b



(2)C-3地区全景（南西から）



(1)C-1地区全景（南西から）



(1) D地区全景（北東から）



(2) E地区全景（北東から）



(1) C-2地区全景（東から）



(2) C-2地区全景（西から）



(1) C-2地区SD349111（西国街道西側溝）全景（南から）



(2) C-2地区SD349111（西国街道西側溝）内杭列検出状況（北東から）



(1) C—2地区SE349112検出状況（北から）



(2) C—2地区SE349112全景（東から）



(1) C-3a地区全景（東から）



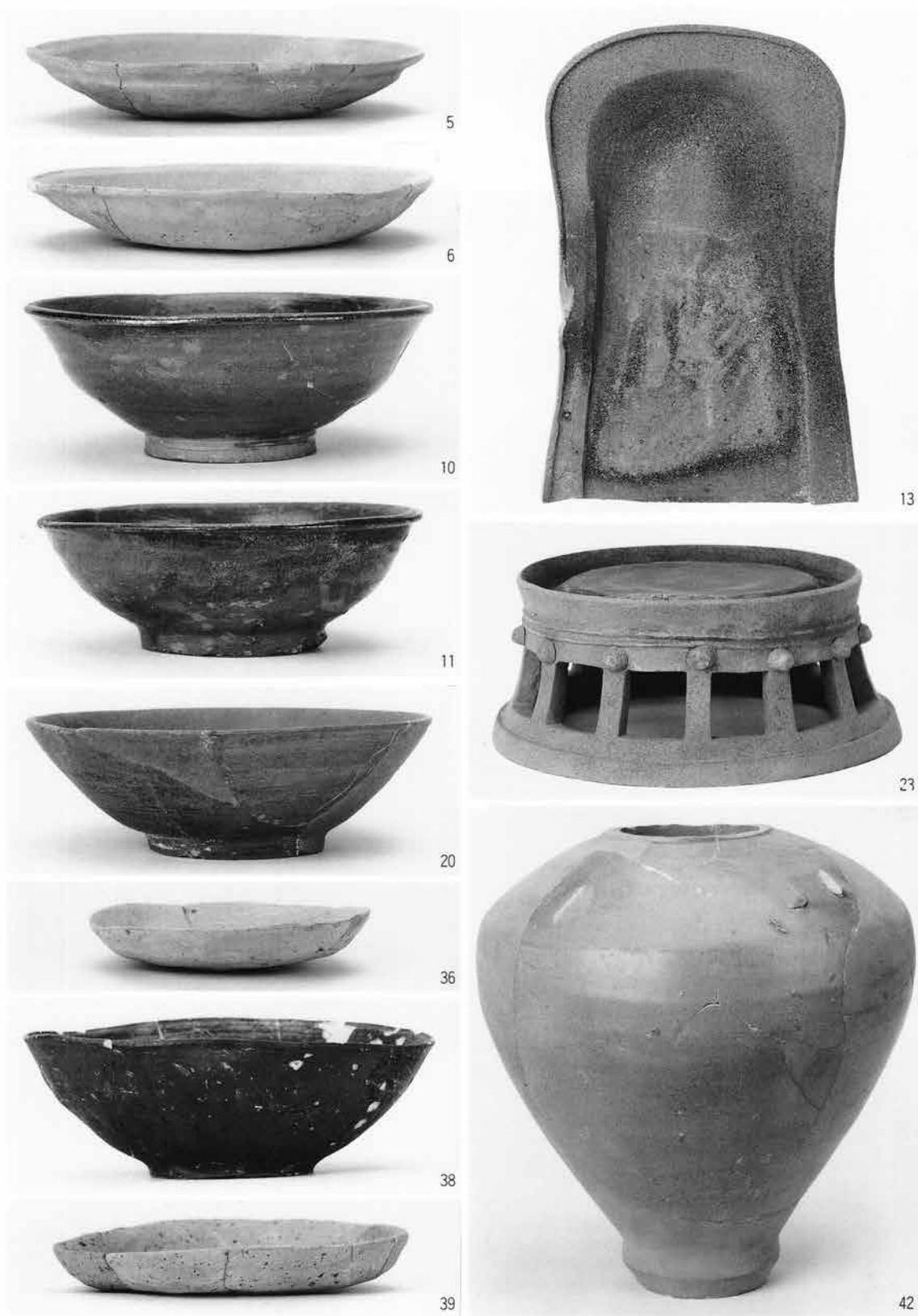
(2) C-3a地区SE36714全景（西から）



(1) C-3a地区SH36717・SD36715検出状況（北西から）



(2) C-3a地区SH36717内カマド検出状況（南東から）



C-2、C-3a地区出土遺物（番号は実測番号に一致）



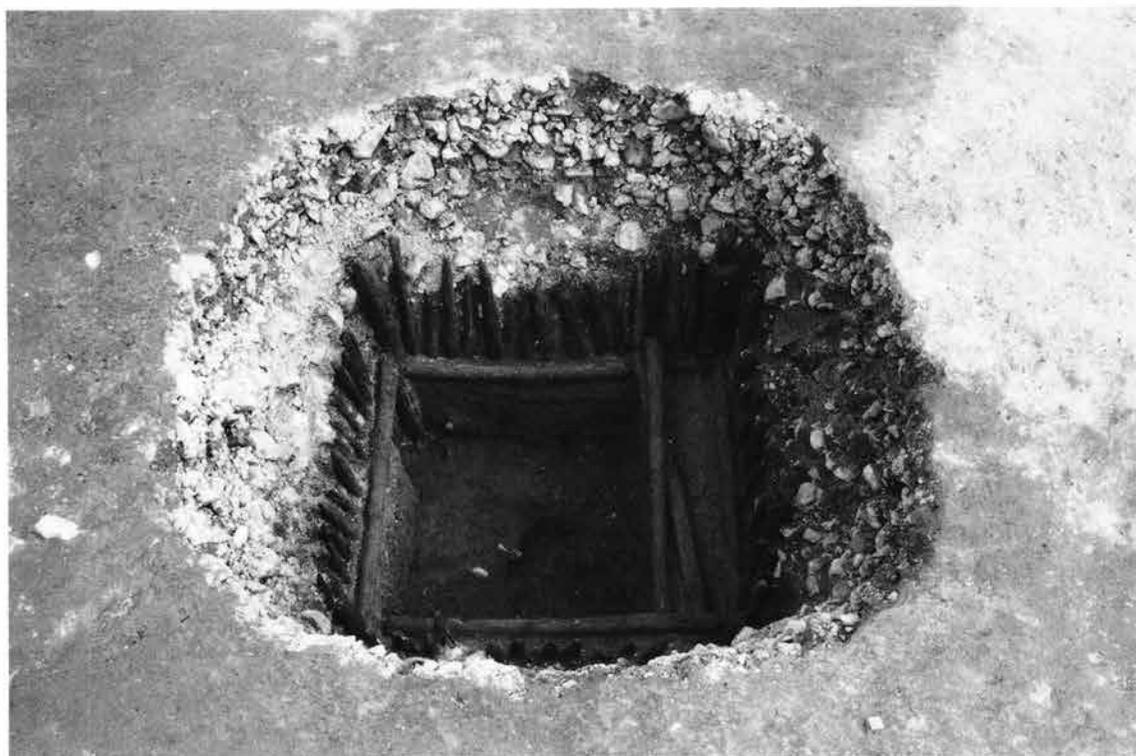
(1) C-3b地区全景（東から）



(2) D-2地区全景（南から）



(1) E地区全景（北東から）



(2) E地区SE36741全景（西から）

京都府遺跡調査概報 第51冊

平成4年12月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel(075)441-3155 (代)